

平成14年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書

授業科目名「社会体験実習」

平成14年度信州大学学長裁量経費による研究報告書

第2期「信大YOU遊広場」の^{プラザ}実践
——“臨床の知”を求めて——

The First Annual Report of "Shinshu University Students' Project
'YOU-Yu Plaza' in Practice" (2001)

——In Search of "Experience-based Teacher Education"——

2003 (平成15)年3月
信州大学教育学部

平成14年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書：授業科目名「社会体験実習」
平成14年度信州大学学長裁量経費による研究報告書

第2期「信大YOU遊広場(プラザ)」の実践 ～“臨床の知”を求めて～

The First Annual Report of
"Shinshu University Students' Project 'You-yu Plaza' in Practice" (2001)
-In Search of "Experience-based Teacher Education"-



2003 (平成15) 年3月
信州大学教育学部

「信大YOU遊広場」シンボルマーク（美術専攻4年 中澤紗江子制作）

まえがき

教育学部長 藤 沢 謙一郎

「信大YOU遊広場」の実践記録が刊行されることになりました。関係者のご労苦に敬意を表すとともに、心からお祝いを申し上げます。

これは、7年間続いた「信大YOU遊サタデー」を発展させ、昨年度装いを新たにスタートした「信大YOU遊広場」の2年目の活動記録です。

さて、本学部では平成14年12月に「市民と語る教育の集い」を開催しました。教員養成学部として一層充実・発展していくために、広く市民や各界の方々からご意見やご批判をいただき、今後の学部運営に活かそうと企画したものです。

パネルディスカッション「21世紀の教員養成に求めるもの—信州大学教育学部への提言—」では、パネラーや参加された市民から、以下のような貴重なご意見をいただきました。

『若い先生は、学校という限られた環境の中で育ち、現実の社会を知らないまま、教員資格を得て教育現場に立つ。子ども以外の社会人を知らない人が先生になると、複雑多様化している現実社会で次々に生じる問題に対応できず不適応となる。多様な他者に触れて、様々な経験を積むことが大切である。机上の理論だけでなく、実践的体験を積んだ教員の養成を求めたい。』

『不登校の子どもをもった親として思うことは、子どもたちのために学校があるのだから、子どもたちが行きたくなるような学校をつくってほしい。そのためにも、子どもたちの声に耳を傾け、子どもの立場になって考え、行動、発言できる教員を養成してほしい』

『基礎学力は勿論であるが、臨床経験科目を一層充実してほしい。教職への強い使命感をもってほしい。情熱のない学生は教職に就いても不幸である』

『後輩の学生たちには、大学の授業とは別に、子どもと本気で夢中になって遊ぶ経験をしてほしい。その中からたくさんを学んだ。大学以外の場で、多くの体験をすることが大切だと痛感した』

以上は、ほんの一例ですが、これらの指摘は、本学部の臨床経験を重視したカリキュラム編成により、実践的指導力を身につけた、得意分野をもつ教員養成を目指す方向と重なるもので、意を強くするとともに、改めて「臨床経験」の場の大切さを痛感しました。

こうした中で、学生の自主的活動である「YOU遊広場」に参画されている皆さんが、戸惑いや悩みの中から得るものは、計り知れなく貴重なもので、実践的指導力につながるはずで、実践的指導力は、試行錯誤のプロセスから、また、牛歩のように一步一步の確かな積み重ねの中に育まれます。

学生の皆さんの自主的活動としての「YOU遊広場」が、地道な積み重ねによって充実していくことを期待するとともに、この活動にご理解とご支援を賜っている教職員及び多くの関係者の皆様から感謝とお礼を申し上げます。

目次

			Page
まえがき	藤沢 謙一郎	信州大学教育学部長	1
目次			2
I. 第2期「信大YOU遊広場」への寄稿			
「信大YOU遊」9年目にして			
初めて生まれた成果	土井 進	信州大学教育学部教授	4
出会い	山本 公三	「第2期信大YOU遊広場」運営委員長	6
2つの役割	町田 竜太	「第1期信大YOU遊広場」運営委員長	7
進化	西澤 俊輔	「信大YOU遊広場」研究主任	8
感謝	清水 美香	教育実践科学専攻4年	9
食と教育のかかわり	大内 清	(財)長野県農業開発公社 JAながの	10
「信大茂菅ふるさと農場」が与えるもの	林部 信造	農業	11
ありがとう! YOU遊広場	中野 孝之	下諏訪町立下諏訪中学校教諭	13
II. 第2期「信大YOU遊広場」の概要			
信大YOU遊広場の概念図			15
信大YOU遊広場の内容			16
年間活動報告			17
III. 0プラザから7プラザの実践記録			
0プラザ 「興譲館」			20
1プラザ 「信大牟礼ふるさと農場」			31
2プラザ 「信大茂菅ふるさと農場」			37
3プラザ 「鉄腕アトム」			43
4プラザ 「キャンパスプレーパーク」			49
5プラザ 「ふれあい」			55
6プラザ 「お出かけ」			61
7プラザ 「イベント」			67
IV. 第2回YOU遊フェスティバルの実践記録			
YOU遊フェスティバル本部			
— ぬくぬく ほか気分でワッショイショイ —			72
みんなで運動会			
— 「思いやる」こと・「思いを伝える」こと —	北川 伸尚 (障2)		78
羊毛生まれ! フェルト玉星人バクバくん			
— カラフル羊毛でフェルト作り —	田中 慶子 (生3)		81
Let's DanceSing!			
— BOYもGIRLもみんなモー娘。 —	田中 裕次郎 (言2)		84
さんすう村のコンサート			
— 学生の力でどこまで「数学」を教えられるか —	小川 敦嗣 (理3)		87
人との出会い	岩脇 悟子 (理3)		90
すきすき紙すき	増田 美和 (障3)、藤岡 恵美 (生3)		93
第一回 わんぱく子どもドッチボール大会	前崎 伸周 (実2)		97
気球よ・・・飛べ!			
— 悪戦苦闘の17日間 —	幸阪 創平 (実3)		100
プラスチック?! に宝物をとじこめちゃおう!			
— 子どもの想像力と創造力 —	石関 千絵 (社2)		104
海の牧場	夏井 一智 (野2)		107
とろ〜りとかしてペットボトルキーホルダー	藤田 優子 (生2)		110

V. 「信大YOU遊広場」と実践的指導力に関する考察

変わりゆく自分

— 「信大YOU遊広場」の継続的な活動			
・人間関係を通して —	山本 公三 (実3)		113
人づくりのための土づくり			
— 「第2期信大YOU遊広場」の活動を通して —	山本 真望 (実3)		118
興譲館に残された message	原山 美樹 (生3)		123
メンタルサポーターとして	石井 里佳 (実3)		128
みんなから学んだこと			
— 「信大YOU遊広場」での活動を通して —	増田 美和 (障3)		133
農業体験から学んだこと			
— 子どもたちとのコミュニケーション —	高橋 和之 (理3)		138
教材としての農業	那須 紋子 (生3)		143
実践から学び得たもの			
— 子ども達と向き合うことを通して —	小島 澄 (障3)		148
変化	蓼沼 夏子 (生3)		153
経験からの「知」と「とらえなおし」の重要性			
— 実際の子どもの関わりを通して —	山口 真史 (実3)		158
大きな街の小さな村づくり			
— 身体活動を通して —	藤本 晃子 (地3)		163
世代間交流の実践			
— スポーツを通して —	西 絢平 (実3)		168
おでかけプラザが教えてくれたもの	藤岡 恵美 (生3)		173
YOU遊プラザを通して見つけた楽しさと自分の成長			
— 「イベントプラザ」の実践の分析 —	西村 崇 (実3)		178
イベントプラザが教えてくれたこと			
— イベントプラザを通して —	森田 美保 (保3)		183
興譲館の活動を振り返って			
— 興譲館の精神と具体的な学びの成果について —	小林 則雄 (地4)		188
完全学校週5日制における地域教育のあり方			
— 「信大YOU遊広場」の持つ可能性 —	町田 竜太 (社4)		193
農業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力			
— 「信大茂菅ふるさと農場」の実践分析	鹿子木 愛 (実4)		198
キャンパスプレーパークにおける刃物の使用の意義			
— 子どもは刃物を使うことから何を学ぶのか —	小黑 あかり (実4)		203
保護者の視点で捉えるキャンパスプレーパーク			
— 子どもの放課後遊びに関するアンケート調査			
自由記述の分析から —	岡部 桂子 (実4)		208
「信大YOU遊サタデー」から			
「信大YOU遊広場」への進化	那須 良寛 (院2)		213
「ものづくり」で拓くフレンドシップ事業の実践			
— 「小学生のための技術教室」1999～2002			
の取り組みを振り返って —	森山 潤 (信州大学教育学部助教授)		218
「臨床の知」と「臨床経験」			
— 「臨床経験」を「知」に高めるには —	山口 恒夫 (信州大学教育学部教授)		228

VI. 新聞記事と第2期「信大YOU遊広場」スタッフ名簿

新聞記事			235
信大YOU遊広場参加者名簿			238
あとがき・編集後記	土井 進 (信州大学教育学部教授)		242
	花村 尚美 (理3)、池田 明子 (社2)		

I. 第2期「信大YOU遊広場」への寄稿

「信大YOU遊」9年目にして初めて生まれた成果

信州大学教育学部教育科学講座教授 土井進

「臨床の知」と言われる智慧は、我々が人間と人間、人間と自然との関わりあいの真只中において、一つひとつ体験的に身につけていく以外に修得の方法はない。また、実践的指導力と言われる実践力も、我々は実践の真只中において、汗と涙とともに一つひとつ体験的に修得していく以外に身につかないものである、と私は考えている。このような智慧や実践力を錬磨し、教師となるための資質能力の向上を目ざしているのが「信大YOU遊」の活動である。

今年度の活動が皆様のお力によって無事終了し、子どもたちの輝く笑顔と達成感と充実感に満ちた学生の皆さんの明るい表情に接することができたことは、私にとってこの上ない喜びである。一年間、本当にご苦勞様でしたと申し上げたい。また、陰に陽にご支援を賜った皆様に、心から感謝申し上げたい。

さて、発足当初から「信大YOU遊」に関わってきた教官の一人として、私は継続のもつ重みを、今ひしひしとかみしめている。9年間の積み重ねがあったからこそ生まれてきたと考えられる2つの成果について、次に述べたいと思う。

まず第一は、「信大YOU遊」での教育実践をもとにした卒業論文と修士論文が、初めて誕生したことである。これらの論文の概要は、本報告書に掲載されているのでご参照願いたい。これまでの8年間、「体験」や「イベント」や「実践」はたくさん生まれたが、それを「学術論文」として残してくることはできなかった。この壁を打ち破ってくれたのが、平成11年度の学部改組による「臨床の知」の理念のもとに4年間学んできた学生たちであった。彼らは、「信大YOU遊サタデー」を閉幕し、21世紀の幕開けとともに「信大YOU遊広場」を実践してきた学生・院生であった。

教育実践を単なる「教育実践」として看過せず、そこに「教育実践学」の光をあて、忍耐強く理論化していくことは極めて重要である。「信大YOU遊」9年目にして初めて産み出された4本の卒業論文と1本の修士論文を嚆矢として、今後、優れた教育実践科学研究を創造していくことは、信州大学教育学部における臨床経験カリキュラムの充実発展にとって、貴重な貢献となるに違いない。

第二の成果は、「信大YOU遊」によって発信された Friendship (友情) の波が、全国を超えて中国にも及び始めたことである。まず国内では、平成15年3月6日～10日、国立妙高少年自然の家において、信州大学と上越教育大学の学生が中心となって、7大学が連携した第3回全国フレンドシップ活動「妙高ゆきんこフェスティバル」が開催された。この事業を担ったのは次の9名の学生であった。岡部桂子・那須良寛・西澤俊輔・蓼沼夏子・那須紋子・藤岡恵美・山本真望・石関千絵・岩堀耕平。

また、平成15年3月2日～4日の熊本大学のフレンドシップ事業シンポジウムには、信州大学から増田美和・小川敦嗣の二名が出席して、実践報告を行った。一方、平成15年2月18日～21日には、愛媛大学の3年生、植田幸司・濱田有里の二名が信大の活動状況を視察された。

第1回目の「信大YOU遊広場」訪中団は、平成15年2月28日～3月4日、中国四川省成都市の小学校・中学校を訪問し、子どもたちと交流することができた。今回の訪中が実現したのは、「信大卒礼ふるさと農場」の活動に、中国からの留学生張薇さんが参加しており、「土づくり」による「人づくり」の重要性を日中両国において確認したいと願ったからである。参加者は次の12名であった。山崎保寿教授、岡野雅子教授、張薇・高橋朋子・山本公三・那須紋子・原山美樹・藤岡恵美・佐志田英和・田中千尋・北村萌・宇良知子。



出会い

「第二期信大YOU遊広場」運営委員長 教育実践科学専攻 3年 山本公三

この信大YOU遊広場ではたくさんの方と出会えることができます。昨年四月の段階で111名の方がここに参加しています。人との出会いは自分を変えるきっかけを与えてくれます。それは人と会うと「私は何である人のようにうまく話ができないのだろう」「行動力が私にはないなあ」や、反対に「どうして余計なことまで言ってしまうのだろう」「私はでしゃばりだ」などと思うからです。こうして周りの人と自分を比べていくことで、自分の欠点ばかりが自分の中で浮き彫りにされていくのです。しかしそういった自分に会えることが非常に大切なことだと思います。教育実習の先生が最後におっしゃってくださった言葉の中に「子どもの前に立ち、本当に自分は変わらなければいけないなと思ったのなら、私はこの実習は成功に終わったと思う。」というのがありました。「自分が変わろうと思うこと」それが自分の成長につながるのだと思います。その中で自分の長所というものを感じてくると思います。また短所というものも感じてくると思います。自分を知ること「自分を周囲に発信する力」が身についていくことができます。

またこの活動は人とのつながりがとても大切になってきます。一人で活動することはできません。あるプラザ長は人手不足だと感じるとYOU遊広場には参加していない友達に電話をしたり直接会って話したりと、是非とも活動を成功させようという思いを伝え、多くの学生が参加をしてくれたときもあった。その後もその学生たちは「なにかあったらまた呼んでね」と活動に参加をしてくれた。このプラザ長は自分のつながりをさらに太くしていったと思います。

出会いは学生だけではなくありません。参加する子どもやその親、協力していただいた地域の方、教官の方などたくさんの方との出会いがあります。多くの方と出会うと、キャンパス内や帰り道などで挨拶されるときがあります。挨拶されるととても嬉しい気持ちになります。そこから挨拶の気持ちよさ、大切さに気づくことができます。たった一つの行為だけれども、そこから信頼関係も生まれてくると思います。

また子ども達と継続的に出会っていくことで嫌なこともあるはずですが、「全然話を聞いてくれない」など勝手なことばかりされてしまい、気づくと子どもの前に立つことが楽しいと感じられない時もあるでしょう。でもなんでそういう状況になってしまったのかということ冷静にふりかえると何かが見えてくると思います。それを乗り越えて一年間活動をしてきたプラザ長もいます。ふりかえる大切さ・難しさは体験してみないと分からないことだと思います。

YOU遊広場で多くのことを学び、多くの友達ができ、有意義な時間を過ごせたと思います。これから先、時代や環境によって学生に求められるニーズが変わってくることにもなって活動の形も変わってくると思います。ですが、人との出会いはどのような活動にもあることだと思います。これからも多くの出会いが、この活動から生まれることを願っています。

2つの役割

第1期信大YOU遊広場 運営委員長 町田竜太

第3期の立ち上げについて土井先生とお話をしていた時、先生から1枚の紙をいただいた。そこには第2期「信大YOU遊サタデー」の実行委員長をされた渡辺一博さんの『「進化」のとき』という題で書かれた文章があり、その中には『地域社会に地域教育の必要性を浸透させることができたとき、「ゆうサタ」はその役目を終える。むしろ、1日も早くそれがなくなることが地域にとってはよいことなのだ。』と書かれていた。

私はこの文章を読んだ時に衝撃が走った。渡辺さんは今から約10年も前に、今生まれ変わろうとしている「信大YOU遊広場」の向かうべき道を書き記していたのだ。新しく活動を立ち上げる時に「進化」や「発展」などの言葉を使って表すことは容易であるが、実際にどのように進化していかなければならないのかということまで考えられることは難しいことである。しかし、渡辺さんのおかげで私もこれからの「YOU遊広場」がどのように進化していけばよいのか少しずつではあるが見えてきたように思える。

「信大YOU遊サタデー」「信大YOU遊広場」には2つの役割が常に存在していたと私は考える。その2つとは、①学生の思いを実現できる場であること。②地域の広告塔としての役割を果たすこと。である。「信大YOU遊サタデー」のときは、子どもたちと関わる場所を教育実習以外にも作りたいなどの思いと、学校週5日制の導入に向けての地域の受け皿として楽しい遊びと学びの場を提供する役割があった。それが「信大YOU遊広場」では、学生のやりたいという思いを実現できる場を作ること、そして完全学校週5日制の中で単発的な活動から年間を通して活動する休日の使い方の形を地域に示した。では、来年度からはどのような役割があるのかといえば、1つは教育実践力を身につける学生にとってやりたいと思うことが実現できる場であることはもちろんであるが、先ほど述べた渡辺さんが言うように、地域社会に地域教育の必要性を浸透させ、活動拠点を地域に渡していくことがこれからの役割であると私は考える。

サタデーから数えて今年で10年目になるこの年に、私たちが今挙げた2つの役割を果たしていくことが、信州大学教育学部としての特色を出すことはもちろん、完全学校週5日制における地域教育のモデルを全国に先駆けて示し、ここから発信した実践方法により地域の教育力が向上していくことになると私は確信している。

これから「信大YOU遊広場」の活動をしていく後輩たちにとっては、この活動をすることで自分自身の力をさらに高め、教育現場に求められるような教員がこの「信大YOU遊広場」から出てくることを私は望みたい。

最後に私が運営委員長の時によく言った言葉をみなさんに贈りたいと思います。何かにつづって迷った時には効果あります。

「やってみなきゃ何も始まらない」

進化

理数科学教育専攻 4年 西澤俊輔

2年前、7年間続いてきたYOU遊サタデーが突然の閉幕を迎えた。「YOU遊サタデーが終わってしまったらどうしたらよいのだろう」、と多くの学生が困惑していた。当然私もその一人だった。しかし、それはただの終わりではなく、次の新しい活動への第一歩だったのである。何か新しいことをはじめようといういろいろ試行錯誤した結果、みんなのやりたいことをやれるような活動を、という願いから今のYOU遊プラザという形が出来上がったのである。たくさんのドキドキと、少しの不安を自分たちのやる気に乗せて、第一期YOU遊広場は平成12年12月12日に動きだした。

そして、初めてだらけで戸惑いながらではあったけれどもなんとか大一期のYOU遊プラザを無事に終わらせることはできた。しかし、終わると同時に新たな不安が生まれてきた。みんなが自分のやりたいことをやれるようにという思いから、次の代の学生が今までのプラザを続けたいといわない限り次の年にはそのプラザはなくなってしまう事になり、どんどん活動が小さくなってしまわないだろうか、ということだった。しかし、全くその心配の必要もなく、むしろ、今までのものは引き継がれる形でさらに新しい物がいくつも出てきた。今までに考えもしなかったような画期的なプラザも出てきて、今まで以上に魅力的なYOU遊プラザへと変わっていった。

しかし、それとは別に、これは自分自身の課題でもあったのだが、それまでやっていたものを引き継ぐ場合、それと同じ物を次の年にもやったのでは全く意味がない。何か売りとなるような新しいものをやらなくては参加者の興味もどんどんと薄れてしまうということである。私が第一期のときに農場長をやっていたときにも、田んぼと野菜以外、そば以外にも何か違ったことをやろうと思ってはいたのだが、何もできなかった。とても悔しい思いをしたのだ。だが、やっぱり新しい力はすごかった。私のその思いはなんだったのだろうと思うくらいだった。田んぼではしろかきを兼ねてみんなで泥遊びをし、脱穀のときには千歯こきも出てきた。牟礼の畑では一年を通した班というまとまりを持つことで、参加者みんなが今までとは全く違った農作業体験をすることができた。他のプラザの発展もとてもすばらしいものだと思う。ついに今期からYOU遊の輪が国境を越えて世界にまで広がるようになったのだ。そのことに対して、とても多くの学生が興味を示している。たとえ世界が相手であったとしても、YOU遊プラザは立派に渡り合っていると知っている。このような活動の第一期生として立ち上げに関われたこと、そしてそれを多くのすばらしい仲間達とやってこられたことを心から喜ばしく思う。

今後、大きな志を持った多くの学生たちがこの活動に興味を持ち、そして行動することの楽しさ、喜びを感じ、たくさんの仲間たちとそれを共有することのすばらしさを知って行くだらう。そして、その度に新たな進化をとげながら、大きく羽ばたいて行くのだらう。これからも自分達の大きな可能性を活かして頑張っていってほしい。どんな困難も、これだけたくさんの仲間がいれば必ず乗り越えられるのだから。

最後に、この活動は土井先生を始め、多くの教官方、そして林部さんといった地域の方々の支えがあるからこそ、成り立っているのである。本当にありがとうございました。

感謝

教育実践科学専攻 4年 清水美香

信大YOU遊広場で活動したこの2年間は、私を大きく変えるものであった。

このYOU遊広場で私に芽生えたものは、「感謝の気持ち」であると思う。農場で育てた稲や野菜は、お店に売っているものに比べれば小さいし、形も悪い。しかし、その一つひとつが私にとっては宝物に見える。この小さなお米の一粒が成長するまでに、子どもたちと共にした作業が何回もあったこと、沢山の方の協力があったこと。何人もの想いが詰まった一粒なのである。そして、こうした子どもたちとの活動の一つひとつも私にとっては貴重な時間であり、必要な時間であった。そう考えると、お米の一粒一粒や、協力してくださった方一人ひとりに感謝せずにはいられないのである。

そして、もう一つ、地域に対する感謝の気持ちがある。YOU遊広場を始める前の私は、大空を飛ぶ「とんび」のような目で地域を見ていたように思う。しかし、地域の子もたちや地域の方々とかかわりながら活動をしたことによって、地を這う「蟻」の目で地域を見るようになった。地域の中で生活している自分に気付いたのである。そして小さなつながりが大きな社会をつくっているということを実感した。地域に生かされていることに感謝し、これからも地域を大切にしていきたい。

このYOU遊広場では、多くの子どもたちとかかわった。その中で、子どもたちに対する考え方が変わった。ありのままの自分で子どもたちと向き合うようになった。嫌なことは嫌と言う。楽しい時はそれを思い切り表現する。その中で見えてきた子どもたちの姿を見て、私は今まで子どもたちを信じていなくていいなことに気付いた。世間と言われる子どもたちの現状に振り回されていたのである。自分の目で子どもたちを見ていなかった。ところが今は、子どもたちの可能性を信じていける。私が思っている以上に子どもたちはたくましいし、自分らしく生きる力を持っている。子どもを信じている目を持たない大人が、「子ども」という形と現状を作ってしまったように見えてならない。

このようにして私にたくさんのものを残したYOU遊広場の活動であったが、YOU遊広場はこのままのYOU遊広場であり続ける必要はない。もともと学生一人ひとりの願いで成立している活動であるから、変化して当然である。むしろ変わらなくてはならないと思う。周囲の状況と共に変化し続けなければ、学生のためだけの活動になってしまう。毎期が始まりであり、毎期が終わりである。一人ひとりの個性を尊重するということは、それだけの勇気と気力が必要である。YOU遊広場を立ち上げてそれを実感した。

大学を卒業する私が、今後YOU遊広場のためにできることは、私が大学時代に経験したことや感じたことを忘れず、社会の中で生かしていくことだと考えている。それがYOU遊広場で活動する後輩や、お世話になった方々への恩返しだと思う。後輩たちには、自らの願いを自らの力で実現させるだけの力がある。ぜひ頑張ってください。

最後に、私たちの願いを形にしようとしてご指導をいただきました土井先生、また、活動に対してご理解と暖かい励ましをいただきました保護者の方々、地域の方々、そして活動を共にした仲間と、私を大きく変えてくれた子どもたちに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。今後もYOU遊広場を暖かく見守っててください。

食と教育のかかわり

(財) 長野県農業開発公社 J Aながの営農指導部駐在 大内清

信大YOU遊広場の活動に地元J Aとして参加する事3年目、私としても昨年に引続きでありましたが、この活動の日常的行動のなかで、J Aができない部分を、地元協力者の林部さんに補っていただき大変お世話になりました。

地域の歴史と文化、伝統と食とのかかわり、又季節に合わせて行われる行事、次代を担う、子供達を地域でどう育てるか、J Aとしても日常業務とは別に長期的観点から大きな課題でもあります。本年J Aながの管内(1市3町6村)の小学校などが、米づくりや地元主産のりんご栽培をどの位、学校教育に取り入れているか又J Aの職員(技術員)がどの程度かかわっているか調査したところ中山間地域ほど行政、J A、住民が一体となり多くかかわっている実態がありました。J Aではスローフード運動(地産地消)を推進しています。

信大YOU遊広場の活動も、多くのプラザ活動があり、それぞれ特徴ある活動をされていますが「茂菅ふるさと農場」の取組みも定着と同時に、新鮮な活動も提案され、今年度は田植え前のドロンコ遊び、フナの放流による雑草退治、千歯こき、による脱穀作業など、これら田起こしから始まる、一連の体験に汗を流し、自らが作る意義、食糧問題を理解する貴重な取組みだとおもいます。

今年の第2回YOU遊広場では、農場長的那須さん達が初から、ごはんになる行程を、集まった児童に初3粒ずつ配り白米になるまでを、ペットボトルと箸を使い初摺りの体験をさせ、わかりやすく説明していました、教職を旨とする学生の皆さんは、まさしく実践的指導力が養われたと思えました。

また今年は付き添い参加された親達も児童との体験共有が進んだ様にも思われました。ここで作ったお米の一部は国際援助米として発送されました、1月14日、学生代表の大黒さん、林部さん、大内の3人で立会い、発送式に参加しました。長野県下で12.7トン、集まり西アフリカ内陸部の国マリ共和国へ今年も送られました。マリ共和国の大使の方のお話では日本の3.3倍の面積があるが旱魃やイナゴ等害虫被害で恒常的食糧不足で飢餓に苦しんでいる様です。主婦達のNGO団体マザーランド、アカデミーの協力を得て海上輸送で届けられます。参加した皆さんの汗がこんな支援活動にもつながっています。世界には食糧に苦しむ国が多くあり、今後地球規模での人口増加が見込まれ、食糧の偏りが解消されません、我国も食糧自給率40%と教育と食の問題は長い道のりでもあります。12月7日、市民と語る教育の集いに参加させていただきました、学校の社会力を高める、こどもの社会力育成と大人の責任など、について筑波大門脇先生のお話があり、信大教育学部が地域に向け、教育現場にむけ発信する原点があった様におもいました。土井先生の献身的な指導のもとに、プラザに結集する学生の皆さん、一年間の活動、大変ご苦労様でした。これらの活動をつうじた体験は必ずや血となり力となると思えます。

「信大茂菅ふるさと農場」が与えるもの

長野市茂菅 農業 林部信造

新しい農場長が決まり、今年はどのような企画により「信大茂菅ふるさと農場」が管理、運営されるのか大変関心を寄せていました。未経験の皆さんが「人づくり」「土づくり」を通じて自ら学び、律し、子ども達とのふれあい方、父母との接し方、地域とのかかわりなど、その目的を具体的にどう取り組むのか期待されるのかで、過去にとらわれず三年目にふさわしい立派な計画が立案されました。

1. 代掻きの後子ども達とのドロンコ遊び。

- ① ヌルツとした土の感触、体験。
- ② お兄さん、お姉さん達との土を通じた裸のふれあい、接し方。

2. 田植え時のフナの放流

- ① 無農薬栽培による除草効果と生育観察。
- ② 稲刈り時に子ども達に配り自然の中で自由に生きた事実の確認。

3. 千刃穀という古代農具による収穫体験。

- ① 古代人の農具と近代化された農業機械の実体験。

4. 玄米、発芽米等、食変化の体験。

- ① 粳、玄米、白米の違いの実体験。
- ② 玄米食の試食体験と食に対する感謝。

いずれも初めての取り組みとなり、いくつかの課題を乗り越え、新しいものに敢えて挑戦する勇気と積極性に感銘を受けました。無から有を生むロマンを求め、実体験に全力投球出来る学生時代の良き思い出になるよう、その成功を願いました。

脱穀、収穫が終わり一年を振り返った時、今年もまた幾つかの感動を与えてくれました。

イ) 稲の栽培行程の中に、中干しと言って（稲体の健全化を計る目的）田の水を全面的に放出し、7~10日間水無し状態にします。従って放流したフナを稲刈りの当日、子ども達に配るために学生の皆さんが数日にわたり、田んぼから掬いあげ一時的に我が家の池で飼育しました。稲刈りが始まり田んぼにいないはずのフナが数匹生きていたのです、足跡のわずかな窪地の泥水の中に重なり合う姿で。その痛ましい姿から生に対する執念、自然の対応力に感動し、学生の皆さんが温かい手を差し伸べてやりました。

人も自然の大地に接することにより、計り知れない生きる力と英智を与えてくれます。多元的な視点で物事を考え、未知の事態や新しい状況に対応する判断力等、今年もまた「信大ふるさと農場」は教えてくれました。

ロ) 今年の集大成として各プラザの活動を通じた「YOU遊フェスティバル」が12月7日に行われ、私も「こりゃうまい感謝をコメントいただくベェー♪」の講座に参加しました。粳から玄米、白米とその試食用の精米にたずさわった関係から関心を持っていました。会場には子ども達をはじめ50人余りが参加し、食に対する関心の深さが感じられました。

先ず、キャプテンの発声でタイトルと全員で合唱し、実演に入る。新聞紙大の紙を着色し3枚重ねにして粳の模型を作り、先ず1枚剥いで玄米、また1枚剥いで白米になる

過程を非常にわかり易く説明し、一人に3粒の粳を配り、1粒はそのまま、2粒は柄を取りこれが玄米だという。更にその1粒を爪で表面を削り白くして「皆さんが日常食べているお米です」と説明した。この3粒をセロハンテープで押え自宅に持ち帰り、本日の勉強の成果として家族と語り合えることが、きづなを一層深めるのではないのでしょうか。教科書にない教材を与えることのすばらしい発想は「ふるさと農場」で活躍したプラザの人達だけが出来得る業であると思います。

世界には食に飢え、苦しむ多くの子ども達がいることを忘れてはならない。国際協力田の収穫米も救援米をしてマリ共和国に発送されその役割を果たしました。

土井先生の「臨床の知」の基本理念に基づく「人づくり」のための「土づくり」、自ら実践して来た姿を見ると人々に与えた影響は大きい。教育誌に寄せられた授業科目を中心とした人間教育の10ヶ条、社会の実体験を通じ、実践的指導力の向上を計る10ヶ条、いずれも強い意志と一貫した理念が貫かれており、深い感銘を受けました。毎年プラザに参加している学生の皆さんとのおつき合いの中から、先生の理念が立派に伝授され、21世紀のたくましい教員像を想像しました。

農業が大好きです。健康である限り「信大茂菅ふるさと農場」で、夢多いプラザの皆さんと力を合わせ共に頑張りたいと思います。



ありがとう!YOU遊広場

—「-1」の実践を通して私が得たもの—

下諏訪町立下諏訪中学校教諭 中野考之

—昨年10月に教員採用選考の二次試験に不合格となった私は、灰谷健次郎の「天の瞳」にあるように「何かしなければ何も変わらない」という心境になった。今まで仕事を理由にして思うような勉強もしないままで受験していた、甘えていた自分自身を変えたい、という思いが生まれたのもこの頃だった。そんな中で私が頼れる所は大学時代に教育学部でお世話になった土井先生と渡邊先生であった。そして先生方が開講され、教師を目指している学生が参加している「現代教師学演習」というものがあることを聞いた。これは是非でも、そこに週1回でもいいから通わなければと思ったのが始まりだった。

その当時駒ヶ根に住んでいて、塾の講師の仕事をやっていた私は、仕事に影響しないように大学で朝8時に始まる演習にどういった手段で通うことができるかを考えた。一番よい方法は、駒ヶ根を午前5時頃、車で出発して岡谷駅まで行き、岡谷発5:56の電車に乗り、松本に6:27着、乗り換えをして長野行きに乗車して7:40に長野駅に着く。そしてバスで善光寺近くまでたどり着いたら、ダッシュで信大まで、というものであった。それで8時ぎりぎり武道場に足を運ぶことができた。着いたらすぐに朝の冷たい曇を冷たい水で雑巾がけする。そして時間になると渡邊先生の「始めます。」の音がする。そうやって、この演習は始まるのである。

現代教師学演習は教師を目指している学生が教師になるための鍛錬の場として土井先生、渡邊先生を中心に開いている講座である。単位の修得もでき、採用選考に向けての対策もできるとあって本気で教師になりたいと考えている学生たちの真剣さが私にとって驚異であり、そして脅威でもあった。自分が今までやってきたことではとても通用するものではないのだということに気づかされたのであった。自分の中で自分自身を0(原点)に戻す必要があると思った私は、4月から仕事を辞め、長野に住まいを移し、試験のための土台づくりをしようと決めた。演習に参加して気づいたことは、この演習で行うことは、体育館周辺の清掃、挨拶の仕方、土井先生の合気道の指導、渡邊先生の器械運動の指導、そして集団面接風のディスカッションとバリエーションに富んでいたのに、そこでの教職教養や専門教科などのいわゆる、「学習」のような時間はほとんど無かったことだ。最初はあっけにとられていた私だが、後々その意味というか本質を知ることになった。

私が初めに立てた計画は、教職教養や専門科目の学習を初めからやり直していくことと、面接において自分の意見がしっかりとと言えるように何度も練習を繰り返すことであった。しかし、土井先生はこうおっしゃった。「専門教科の参考書などは1冊か2冊に決めてそれを何度も繰り返すこと。それと採用選考までに何度か模試をやるからそれを受ければいい。」計画は白紙に戻された。本当にそれだけでいいのかと思ったが、今までのやり方を変えるためには、自分にはそのようにしていくことが必要だったのである。

これまでのところで何がプラザの実践と関係あるのだろうかと思われた方もいらっしゃるだろう。しかし、私にとってこの採用選考にむけた土台作りとYOU遊広場との関わり、それに伴う学生スタッフ、子ども達、保護者の皆様方、先生方との出会いそのものが、私が教師というものに近づくための大きなステップアップだったと考えている。

私はYOU遊広場の茂菅の田んぼや牟礼の畑の活動などに参加させてもらった。プラザのスタッフの話し合いに参加させてもらって計画段階から関わることもできたのも、土井

先生のお計らいや学生スタッフの方々の心遣いのおかげであった。久しぶりに「土」に関わって、小学校の講師時代に子どもたちと畑作りをしていたことなどが思い出されたが、0 から出直したと考えていた自分には、新鮮な気持ちをもって取り組めた。茂菅の田んぼでお世話になった林部さんや大内さん、牟礼の畑でいろいろ教えてくださった竹元さんなど、多くの人たちに支えられてこのプラザは成り立っていた。そして、学生達の姿もすばらしかった。手探りで子どもと接している者や、活動自体にもはや慣れ親しんで、運営面で活躍している者など、動きや考え方はいい意味で個性的で、自由な発想でプラザに参加して子ども達と接していた。その姿にまたしても驚異と脅威を感じたのを忘れない。

その頃、土井先生から「実践から理論へ」という言葉を聞いた。このプラザの活動に非常にマッチしていて本質を突いていると感じた。自分が動いてみて、見たり感じたりしたことについて考えを深める。教室の講義では体得づきないことをこのプラザの運営に関わることで知ることができるだろうと思った。今現在のスタッフの皆さんのプラザの実践と私の大学生時代とを比べたら、なんと自分の学生時代にやってきたことが薄っぺらかったか、大学を卒業して初めて中学で講師をした際にも、大学で学んだことがどれほど生かされていなかったか、自分が恥ずかしく思えた。しかし、そんなことは言っていられず、今やるべきことを、恥もかなぐり捨ててとにかく一生懸命やることしかできなかった。

試験が近づくにつれて、今までの自分はひどく緊張するタイプの間人であったのだが、今回はいつもと違うと感じた。なんだか自分のやるべきことをやった充実感みたいなものがあった。試験の前には茂菅の田んぼで草抜きをやったし、一次試験当日もやるだけのことはやった。二次試験に関わる練習などについては学生達との、ここには書ききれないほどの、思い出や達成感でいっぱいであるし、二次試験当日の弾き歌い「ふじ山」は自分の見てきた富士山の光景が目の前に浮かび上がってくるほどの出来だった。そして、私はとうとう教員採用選考の二次試験の合格通知を手にすることができた。それは学生時代から数えて7度目の受験でのことであった。感慨も一入りであった。

最後になるが、土井先生は常日頃、「土づくりは人づくり」ということを私達に身をもって証明してくれている。私はプラザの夏の親子キャンプで、土井先生が附属松本小学校へ行かれる用ができた際の代役を仰せつかった。土井先生がいつも五左衛門と名乗っているのを聞き、「私は先生の弟子で彦左衛門です。」と自己紹介した。そんな思い出を胸に、私は新たに教師として生きていく責任の重大さや「実践から理論へ」の精神を受け継ぎ、教育に、そして子ども達と関わっていきたい。土は長い年月をかけて積み重なり、土壌を形成していく。子ども達との関わりというプラザの実践の積み重ね、それこそがそこに関わった人間を創り上げることになると考える。私が教師になることを諦めず試験を受け続けたことは、恥ずかしいことでも何でもなく、今の自分自身を創り上げてくれたのだと自負している。

土井先生は私にこうも言ってくれた。「中野さん、-1000 にいくらプラスをかけてもマイナスのままだけれど、たった-1 をかけるだけで1000 になるんですよ。」と。私は当初0(原点)に戻ることを考えていた。しかし私が教師になるためには、さらに進んで「-1」の実践が必要だったのである。この短い期間に私自身の「-1」を見つけることができよかつと思うし、それを実践できたことは私の一生の宝物になるだろう。この場を借りて土井先生、渡邊先生をはじめとする諸先生方、そして多くの刺激をくれた学生の皆さん、いろいろ教えてくださった地域の方々、そして今後またどこかで出会うことができるかもしれない子ども達に感謝の気持ちを込めて、私の実践記録としたいと思う。

II. 第2期「信大YOU遊広場」の概要

信州大学教育学部

第二期

人がりのためのエゴリ
信大YOU遊広場
 フラサ

文部科学省

フレンドシップ事業

授業科目名「社会体験実習」

活動の目的

“臨床の知”を求めて

- ① 自分らしさを創造し、周囲に発信していく力量の形成
- ② 自然体験・社会体験を媒介とした人間性への洞察力の錬磨
- ③ 地域に「公」の場を創出する実践による社会力の向上
- ④ 継続的な体験活動と学術研究の統合による教育者としての実践的指導力の肉化



内容紹介

- 0 プラザ 興譲館 原山美樹 (生活 3年)
興譲館 (平日 3日、土曜日)、メンタルフレンド、心の教室相談員を年間を通して行う。
- 1 プラザ 牟礼ふるさと農場 増田美和 (障害 3年)
そば、ジャガイモ、サツマイモ、地豆、とうもろこし、ブルーベリーを 4月下旬から 10月中旬までかけて作る。収穫したあとは、みんなで料理を作って食べる。
- 2 プラザ 茂菅ふるさと農場 那須紋子 (生活 3年)
米、ヘチマ、ケナフ、トマト、ナス、キュウリ、ネギ、ハクサイ、ダイコン、野沢菜、カボチャ、タマネギ、ジャガイモ、イチゴ、メロン、ウリ、スイカを 4月から植える。野菜は自分たちでとって食べる。夏にヘチマを子どもたちと食べたり、ケナフを秋に収穫して遊びたい。
- 3 プラザ 鉄腕アトム 増田美和 (障害 3年)
長野養護学校の楽しい放課後クラブ「にこにこ」へ行き、障害をもった子どもと放課後の時間をいっしょに過ごす。
- 4 プラザ キャンパスプレーパーク 蓼沼夏子 (生活 3年)
毎週木曜日の 15:00~17:00、土曜日の 10:00~17:00、キャンパス内のグラウンドで遊ぶ。泥遊び、焚き火、野外料理、のこぎり工作、基地作り、ペーゴマ、何でもござれ。
- 5 プラザ ふれあいプラザ 藤本晃子 (地スポ 3年)
第 2、4 金曜日 19:30~21:00 にスポーツ教室を行う。子どもや親、そしてお年寄りなど幅広い年齢層の人たちとスポーツなど身体活動を通して一緒に汗を流す。
- 6 プラザ お出かけプラザ 藤岡恵美 (生活 3年)
年間を通して、湯谷子どもランド (毎月第 2 土曜日 9:00~12:00) や児童館訪問、遠足、また県外に出動する。
- 7 プラザ イベントプラザ 西村 崇 (実践 3年)
春、夏、秋、冬に季節にあったイベントを企画し、プラザの枠を超えた多世代交流を行う。

年間活動報告

	2月	3月	4月	5月
0 プラザ		茂菅の畑おこし	薪割り、やきいも、旗あげ(木にロープをひっかける)竹細工(竹とんぼづくり、コマづくり)、プレイ参加、茂菅参加 運動(野球、サッカー、バスケ)勉強(論語の朗読、数学)	折り紙、お茶、りんごの葉つみ、 22日…小学校の二人の子どもが学校に行き始める。
1 プラザ			27日ジャガイモ、トウモロコシ種まき(子ども36名、保護者9名、学生15名)	25日サマイ苗植え落花生種まき(子ども52名、保護者21名、学生20名)
2 プラザ				18日田おこし→雨天のため中止 17日ベニ種植え 21日マカブチ種植え 22日トマト、ナス、ピーマン、スイカ、メロン苗植え
3 プラザ (※1)		22日中野公園へ(子ども10名、親8名、学生4名)29日サンプラザ(学生3名)	19日ダンス(子ども10名、親8名、学生11名)	24日卓球、小麦粘土(子ども11名、親9名、学生13名)
4 プラザ	キャンパスアレーナ 毎週木曜日 15:00~17:00 (夏休みは10:00~17:00)、毎週土曜日 10:00~ 雪遊び、ベーゴマ、たき火、アーン体操、凧揚げ、お手玉、タケつみ、紙皿カスネ、野合炊飯、ジャンクゲーム、たこあげ、川遊び、畑仕事、竹とんぼ、ドラム缶遊び、マラソン、ドロ遊び、草遊び、野球、焼き板、等等 1/26 野焼き 27日プレイスター			
5 プラザ				24日スポーツ(参加者19名、スタッフ18名)
6 プラザ (※2)				11日湯子ランドレクレーション(子ども約40名、スタッフ5名) 12日こどもまつり(子ども500名以上スタッフ7名) 25日湯親竹の子汁作り(子ども約40名、スタッフ10名)
7 プラザ				12日春イベント(参加者58名、スタッフ20名)

※1 中ア…中学生プール

※2 湯子…湯谷小子どもランド、湯親…湯谷小親子ランド、浅…浅川育成会遊び広場

6月	7月	8月	9月
6/13…梅づけ ドッチボール	梅干しづくり 一日の予定表 100マス計算	休み	週1。一日遊ぶ
	→		
15日ブルーベリー苗植え、土寄せ、草取り(子ども36名、保護者12名、学生16名)	13日そばまき、草取り(子ども32名、保護者8名、学生11名)	24日ジャガイロ掘り、モロこしと、草取り(子ども57名、保護者26名、学生11名)	9/29ジャガイロ掘り、もろこし抜き、焼き芋(子ども20名、保護者11名、学生9名)
2日田植え&どろんこ(子ども32名、親1名、学生11名)	7日草取り	3日虫除けネットはり(学生11名)	22日稲刈り(子ども24人、学生8名)
上旬畑を耕す 19日ヘチ、刈の植え替える 24日ケス植える	草取り	7日かかしづくり(子ども14名、親3名、学生7名)	23日残りを学生で稲刈り(学生8名)
28日ムブメント(子11名、親9名、学生11名) 14日わかしづくり(子13名、親11名、学生16名)	19日七夕作り(子ども8名、親6名、学生5名)	29日ダンス(子ども9人、親7名、学生0名)	27日昭和公園へ(子ども3名、親3名、学生5名)
17:00(雨天時と大学の都合で使えない日を除きオープン)			
水かけ、テントたて、野合炊飯、草取り、プール作り、七夕かざりづくり、一厘社、とかげさがし、アルミ鑄造、工作、バッタ、蟬取り、ドラム缶風呂、おままごと、竹馬、スライムづくり、楽器づくり、犬と遊ぶ、ケント、おひるね、等等			
14日スポーツ(参加者21名、スタッフ19名) 28日スポーツ(参加者20名、スタッフ18名)	17日スポーツ(参加者17名、スタッフ15名) 26日スポーツ(参加者19名、スタッフ13名)	16~18日キャンプ(参加者20名、スタッフ22名)	
1日湯親カーニバル(子ども約40名、スタッフ10名) 山辺リム大学 8日うどんづくり(40名、スタッフ8名) 22日小市育成会親子レクリエーション(子約100名、スタッフ7名) 29日浅レクリエーション(子約50名、スタッフ7名)	6日山辺リム大学 13-14日キャンプ(子約40名、スタッフ5名) 19日花火大会(スタッフ4名) 27日びんずる出場 27日湯子びんずる出場(子約20名、スタッフ3名)	24日湯親魚釣りとおままごと(子ども約30名、スタッフ2名)	28日湯親カーニバル(子ども約40名、スタッフ2名)
	20日夏イベント(参加者30名、スタッフ24名)		

10月	11月	12月	1月	2月
10/12…調理実習開始、絵、卓球 勉強（朗読、漢字）、調理実習、サッカー、バスケット				
12日そば刈り、落花生収穫（子ども35名、保護者7名、学生9名）	16日そば団子、すいとん作り（子ども37名、保護者16名、学生12名）	14日そば打ち（子ども38名、保護者18名、学生12名）		
13日脱穀（子ども29名、学生16名、親8名） 午前中ネットはずし（学生18名）		7日精米（子ども17名、親6名、学生12名）		もちつき
11日ひまわり公園（子5名、親5名、学生7名）中ア（子7名、親6名、学生3名） 25日ゼリー作り（子ども7名、親7名、学生8名）中ア（子7名、親6名、学生3名）	ゴム版づくり（子6名、親4名、学生3名） 15日やきいも（子5名、親5名、学生2名）中ア（子7名、親6名、学生3名）	13日クリスマス会（子ども4名、親4名、学生7名）中ア（子7名、親7名、学生3名）	おもちつき	節分 3月ひなまつり
看板作り、ジャック・オムにごっこ、おしゃべり会、ハインの衣装・かざりづくり、ボール投げ、テニス、折り紙、こおりおに、火おこし、焼き芋、ギター、ドム缶サッカー、砂遊び、キャッチボール、空気でっぼう、リースづくり、雪で野球、等等				
26日あそぼうパン	1日ハインパーティー 30日焼き芋大会			
11日スポーツ（参加者14名、スタッフ13名）25日スポーツ（参加者17名、スタッフ12名）	8日スポーツ（参加者17名、スタッフ10名）22日スポーツ（参加者19名、スタッフ13名）	13日クリスマス会（参加者25名、スタッフ16名）		
12日湯子ハキキ（子約40名、スタッフ4名）26日湯親縄文式パンとやきいも大会（子約40名、スタッフ4名）27日浅豚汁とおにぎり作り（子約20名、スタッフ12名）	9日湯子ホエテリング（子ども約40名、スタッフ2名） 16日湯親手品を教してもらおう（子ども約30名、スタッフ2名）	14日湯子クリスマス会（子ども約30名、スタッフ2名） 21日浅クリスマス会（子ども約30名、スタッフ2名）		
		7日YOU遊フェスティバル（参加者150名、スタッフ130名）		22日冬イベント

Ⅲ. 0 プラザから 7 プラザの実践記録

0 プラザ 興讓館

1. 0 プラザ 「興讓館」とは？

「興讓」とは、「奪うに益なく讓るに益あり、讓る心こそ一國をも興隆させゆく根本精神である」という意味で、中国の古典大学に意味する。

今日教育現場では、教師たちが「不登校」問題に頭を抱えている。長野県内の今年度上半期（4月～9月）の不登校の小学生は438人、中学生は1432人で、いずれも過去最高になっている。そこで、「信大YOU遊広場」の学生で、何とかこの問題に対応したいという学生が集まり、不登校の子どもの居場所をキャンパス内に作ることを考えた。様々な事情で学校に行けない子どもたちが、学校にいつている状態と全く同じ学びはできなくても、また違った道を歩んだ子どもには、人への思いやり、讓る心など今日の社会にかけるとても大切なものが育つに違いないと考えたからだ。

さらに、長野県教育委員会、長野市教育委員会と連携して、中間教室や中学校に出向き、悩みを抱える子どもと関わる「心の教室相談員」「メンタルフレンド」も継続して行うことにした。不登校の子どもの心を癒し、体験活動を織り交ぜた学びを創造する0プラザ「興讓館」は、信州大学教育学部初めての取り組みとして2002年3月28日に幕をきった。

2. 興讓館ができるまで

話し合いは、計6回行われた。学生の中での願いは熱いものであった。共通して聞かれた意見としては、「一回だけでなく、継続して子ども達と関わりたい。」「限られた学生だけでなく、誰でも制限なく参加できるようにしたい。」「子どもが変わっていく変化を見たい。」などが多かった。これは、子どもを受け入れると同時に、自分も関わりながら学んでいく“臨床の知”を求めているようであった。ただ、一から「興讓館」を設立するのは、並大抵のことではなかった。設立前に特論が交わされた2点を紹介する。

（目的をどうするか）まずは、「興讓館」の位置付けについて迷った。目的を子どもが「興讓館に来る」ことに置くのか、“興讓館は通過点で、学校復帰を目的にする”のかということだ。結局、「興讓館」は“エネルギー充電機関”として、傷ついた子どもが、自己肯定力を養うところに置き、活動内容も、「体験だけ」という子どもが出ても「来るだけで凄いことなのだから」ということで、良しとした。2年目3年目と続ける中で、「中間教室」のような位置付けを目指したいと思い、長野県、長野市の教育委員会にも応援をお願いさせていただきに行った。

（活動内容と時間）活動内容は、農作業、体育などの体験活動と主要教科の学習に的を絞り、子どもたちには、毎日自分なりのスケジュールを立ててそれを実行して貰うこととした。子どもによって違うスケジュールにスタッフが対応していこうというわけである。

また、時間は、「学校に行く子どもと接触を好まない子が多いのではないか」という予想のもと、水木金の9:00-19:00とすることに決定し、フレックスタイム制にした。更に、土曜も他プラザの行事に参加することを促すことにした。

(興譲館の概要)

開設時間：水木金 9：00－19：00

開設場所：旧附属小学校「松」の部屋

昼食：お弁当か生協

3. 今年度の活動報告

1) 参加した学生（前期または後期ほぼ毎週参加した学生には を付けて示す。）

2年生	石関千絵 五味湖嘉 丸山大輔 (社会科学教育) 勝崎彩子 仲島光比古 新谷雅人 濱口真由美 三島宏典 (心理臨床) 木村由香 (教育実践科学) 北川伸尚 熊田賢人 (障害児教育) 夏井一智 (野外教育)
3年生	石井里佳 山本真望 山本公三 (教育実践科学) 小川敦嗣 高橋和之 花村尚美 (理数科学) 小島滯 増田美和 (障害児教育) 塩川順子 島田綾香 坪野さやか (社会科学教育) 那須紋子 原山美樹 (生活科学教育) 平山司 (心理臨床) 森田美保 (保健体育)
4年生	岡部桂子 小黒あかり 鹿子木愛 (教育実践科学) 富山裕子 (障害児教育) 西澤俊輔 (理数科学) 小島真知子 小林則雄 (地域スポーツ) 町田竜太 (社会科学教育)
大学院	那須良寛 大澤安貴子

2) 来館した子どもの数

開館回数 91 回

見学者 25 名

①定期的に通ってきた子ども 10名の来館回数 (12月27日現在)

小学校3年	Aさん→10回 (4月10日－5月30日)
小学校5年	B君→8回 (4月10日－5月30日)
中学校1年	C君→52回 (5月17日－)
中学校2年	D君→63回 (4月18日－) E君→29回 (4月4日－12月27日) Fさん→22回 (10月9日－12月27日) Gさん→18回 (10月9日－12月20日)
中学校3年	H君→71回 (3月28日－12月27日) I君→35回 (4月10日－12月20日) J君→34回 (4月10日－)

(活動内容)

論語の音読、漢字練習、書き取り、百マス計算、英語、数学、地理、図工、美術、体育、理科など教科の学習の一部、受験勉強、調理実習、畑作業、竹細工、カードゲーム、写生、裁縫、塩の結晶、サッカー、百人一首、アクセサリーの製作、ジャック・オー・ランタンの製作、卓球、バスケットボール、ドッチボール、歌の練習、ポットラックパーティーへの参加、農家の林部さん宅でのりんごの葉摘みとりんご狩り、コマ遊び、折り紙、縄跳び、読書、雑談、書初め、ベルを使っの合奏など。

②見学と数回の来館のみの子ども 15名の配属と相談事項。(母親のみを含む)

小学校2年生 K君と4年生の L君母のみ、小学校2年生 Mさんと6年生 Nさんの姉妹、小学校2年生 O君、小学校4年生 Pさん、小学校4年生 Q君、小学校5年生 Rさん、中

学校1年生S君、中学校1年生T君の母のみ、中学校1年生U君、中学校2年生V君、中学校2年生のW君の母のみ、中学校2年生X君、高校1年生Y君。

(相談事項と対応策)

- ・ 聾学校や特殊学級に通っているが友達を作りたい。→プレーパークに参加することに。
- ・ ADHDを持ち合わせている。農業体験をしたい。→牟礼、茂菅の案内。
- ・ いじめが原因で引きこもっている。→数ヶ月に一度母や本人に電話。様子を聞く。
- ・ 学校に通い始めているが遊び場として活用させて貰いたい。→通っていただく。
- ・ 男の子や中学生が多くて興譲館には通いにくい。→年賀状や手紙を出す。
- ・ 家から出るのが億劫。→数ヶ月に一度母や本人に電話。様子を聞く。

4. 今年度の成果と反省

①学校復帰 人数10名中7名(全員相談室へ復帰)

(理由)

- ・ 興譲館で自分を見つめなおす時間が取れ、もう一度学校でがんばろうと決意したため。
- ・ 受験勉強をし、高校進学という目標に向かうため。(3名)
- ・ 通い始め当初からの親との約束で期限をきめて臨んだため。
- ・ 担任の先生が変わり積極的に誘ってくれたため。(2名)

②反省会 実施 27回(不実施 1回)

毎週金曜日7:00から、もしくは、7:30から「興譲館」反省会は行われた。毎週10:30もしくは、11:00位まで、議論は長引いた。興譲館には課題がたくさんあった。しかし、一つ一つの課題を乗り越えてこそよいものが出る。教育活動に課題は付き物である。

(反省会の軌跡)

月	話し合われた内容と反省会で出た興譲館の課題	改善したところ
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 興譲館の外への説明をどうやってするか? ・ 子どもたちに何か言うと「嫌だ」と言う反応が返ってくる。 ・ 個々の子どもが一週間どんな様子だったか? ・ スタッフが足りないときの対応策。 ・ 子どもに過干渉ではないかという指摘。 ・ 子どもが何をやりたいのか分からないという悩みのシェア→メニューを与えるべきだ。 ・ 進路についてどこまで介入するべきか? ・ 部屋の使いかた。 ・ やって終わりになっていないか? ・ 金曜日2限は「体育」に固定。 ・ 叱るときは叱る。 ・ おやつを買いに言うてしまうことへの対応。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個々の子どもに「もっとメニューを与えよう」と言うことは決まったが、次の週から、各スタッフが具体的にどうすればよいかまでは、話が煮詰まらずに終わってしまった。 ・ 「ゲームセンターのようだ」という指摘があったが、具体的にどのようにすればよいのかまでは考えられなかった。 ・ おやつは、昼以外に買わせないようにした。

6月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個々について何をしていたか？どう変化したか？ ・ 携帯電話を使用することについて→携帯電話は使用させない。使用しない。 ・ 百マス計算の導入と教材の必要性。 ・ 予定を書かせよう ・ 漫画を買うことについて→漫画は買わせない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体について話し合う機会が多くなった。
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個々が何をしたか？ ・ どうやって対応したか？ ・ 朝の勉強について ・ 勉強をやる意義と内容についての検討。 ・ 時間のリズムを作ったらどうか？ 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間間隔の重要性を伝えよう。 ・ 調理実習を週1で入れていこう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間のリズムを40分単位に区切った。 ・ 自分たちのあり方について検討されるようになった。
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校・教育委員会との連携について。 ・ 来年度について。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 左記のことについてスタッフ自身がどうしていくべきかを話し合うようになった。 ・ どのスタッフがいつ来るかを web で共有できるようにした。
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材研究の必要性について。 ・ 卒業していった子どもたちの最初の様子と今の様子の变化について。 ・ 今年いつまでひらくか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分たちが子どもたちにできることについて話し合われるようになった。
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材研究の反省と振り返り。 ・ 次回の教材研究。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材研究まで出来るようになった。

(個々の子供についてのシェアの時期) (学生の接し方についての迷いの時期)

4月～9月は「個々の子どもがどんな様子か」話し合っていた。子どもの様子を理解しようとする「子ども理解の時期」であったと思う。また自分たちの接し方、対応の仕方をシェアした時期であった。

(教材についての考察の時期)

10月～1月になると子どもと学生も随分打ち解け、ただ会って遊ぶだけでは、満足しなくなってきた。よって、今まで「あの子どもはああだった」と言う反省会が「あの子どもにはどういう教材が必要か」という観点に変わってきていった。さらに、12月になると教材をただ単にぶつけるその場限りの学習だけでなくその継続の大事さも考えるようになった。

(社会科学教育専攻 2年 五味潤嘉)

5. 来年度への展望

今年度やってきたことをベースに、来年度は「エネルギー充電機関」プラス学びのある“興譲館”を作っていきたいと考えている。

そのためには、大きく二つのことが必要になる。

第1に、教材・題材をたくさん考え得る menu を増やすことである。もちろん教材研究は、対象となる子どもがいて成り立つものではあるが、たくさんの媒体がないと、成立し得ない状況にある。

第2に、他機関との協力である。今年は“興譲館”は他機関と連携することなしにやってきたが、不登校の親の会やフリースクールなどと連携して自分たちの活動を見直すことが大切である。

6. 参加した学生の感想

私が一年間興譲館の活動に参加してきて、一番印象に残っていることはサッカーです。興譲館の目標である「エネルギー充電」と、自分と子どもたちの現状を考えたときに、まず頭に浮かんだのが、“サッカーをしたい”ということでした。

実際サッカーを行った中でのある子の変化には驚かされました。最初は夏休みのときで、決して自分から勝負を挑んでくるような子ではないと思っていたのですが、その子の方から私に対してドリブルの1対1を仕掛けてきました。次は10月の頃で、興譲館にきた当初の物静かな印象からはまるで想像できないことなのですが、一緒にやっていた子に対して、「パスくれっつーの!!!」と大声で叫んで意思表示しました。最後は12月の頃で、サッカーをやり始めた当初は、自分で蹴って外してしまったボールを取りに行くのも渋っていたその子が、他の子がシュートして外してしまったボールを当然のように何の苦もなさそうに走って取りに行きました。

これらの変化は、サッカーというもののおもしろさを知らず知らずのうちに学んでくれたことの結果だと思います。サッカーを本当に好きになってくれた子はいないと思うのですが、少なからずサッカーを好きになってくれた子はいると感じるので、年間をとおしてやってきて良かったと思います。興譲館でサッカーをやる上で大切なことは、人数やレベルの差などの状況を考慮して、全体にとって一番楽しい形をみんなで作っていくことだと思います。そして、すぐに成果を求めずに、少しずつでもサッカーのおもしろさ・楽しさ・厳しさ・難しさがわかってもらえるように、子どもたちに精一杯表現して、それらを忍耐強く伝えていこうとすることが大事なのではないかと思いました。

(社会科学教育専攻 2年 五味潤嘉)

興譲館に関わり始めた頃、私は「どうやって彼らを励まして、学校にいけるように援助したらいいのだろう」ということばかり考えていた。というか、それしか頭に浮かばなかった。「不登校」という言葉に先入観を持っていたせいもあるだろう。今考えるとかなり浅はかで、傲慢だったと思う。この一年間、何度となく「自分は興譲館で子どもと関わるのにふさわしいのか」「もう通うのやめようかな」などと悩んだりした。それでもこの活動を続けられたのは、興譲館の作り出す雰囲気子どもにだけでなく、私にとっても温かく、心地よいものだったからだ。そして、それはけして学生だけで作りあげたのではない、子どもと一体になってゆっくり時間をかけながら生み出されていったものだと思う。私自身

は、この雰囲気を作り出せたことが今年一番の成果だと考えている。

私が来年度の興譲館で特にこだわっていききたいのが、この空間作りだ。最近、館長から保護者の方が「不登校になると学校からの情報が全くない。プリントもない。学校が何をやっているのかも分からない。疎外感を味わっている」とおっしゃったという話を聞いた。通ってきている子どもの中から「10月になってやっと教科書が届いた」という話もあった。本来学校はそうであってはいけないと思う。でも、実際は学校の手が行き届いていないのが現状である。

誰にでも安心できる場所が必要だ。気を許せる人間が必要だ。疎外感を感じることなく、無理せず自分のペースで通って来られる場所。自分の居場所を確認できる場所。不登校に悩む子どもたちにとって興譲館がそんな場所になればとても嬉しい。

(社会科学教育専攻 2年 石関千絵)

私が一番印象に残っているのは、12月20日の卒業式です。クリスマスパーティーが開かれ、その後に卒業式という形がとられました。

館長である、原山美樹さんから今日で3人の子どもが卒業ということで、それぞれの道に向かって頑張るということが全員に伝えられ、スタッフ、そして、興譲館に残る4人から3人に一言ずつ送る言葉を言いました。最後に3人からそれぞれ一言ずつ言ってもらい、見送りという形になりました。涙の卒業式でした。

残る4人の子は、興譲館から学校、あるいは相談室などの新しい環境に飛び込んでみよう、という仲間を自分なりに、自分の言葉で送り出すことができました。そして、卒業していく3人から同じ時間を過ごした仲間と、スタッフへの感謝の言葉がありました。自分なりに、自分の言葉で自分の気持ちや願い、感謝を表現できる子どもたちは大きく成長しました。

自分には何ができるのか、何をすべきなのか、自分が興譲館にいることは子どもたちにとって有益なことなのか、いつも不安で、わからなくて、それでも子どもたちと関わっていききたい、という個人的な感情で1年間活動をしてきました。しかし、この卒業式で子どもが泣きながら卒業をしていった姿を見て、こんな自分でも少しは役に立ったのかな、と勝手ですが感じました。常に悩みながら手探りの活動でしたが、そんな中でも仲間から、そしてスタッフから何かを得たからこそその涙だったと思います。子どもたちのため、とスタッフ同士や自分で考え、実行すればその思いは必ず伝わるのだと初めて実感できた1日でした。

(社会科学教育専攻 2年 丸山大輔)

7. メンタルフレンド、心の教室相談員を経験した学生へのアンケート結果

1) 参加した学生

心の教室相談員

西部中学校	南波朋美 (心理臨床 3年)
三陽中学校	小黑あかり (教育実践科学 4年)
裾花中学校	永井小百合 (心理臨床 4年) 上田暁子 (言語教育 4年)
川中島中学校	山本真望 (教育実践科学 3年)
更北中学校	小林則雄 (地域スポーツ 4年)

メンタルフレンド

ふれあい学級	鹿子木愛（教育実践科学 4年） 町田竜太（社会科学教育 4年） 勝崎彩子（心理臨床 2年）
城山中間教室	小島真知子（地域スポーツ 4年） 西澤俊輔（理数科学教育 4年）
東北中間教室	松田博美（生活科学教育 3年）
南部中間教室	増田美和（障害児教育 3年）
松代中間教室	安里勝人（大学院 2年）
犀南中間教室	山口真史（教育実践科学 3年）

2) 心の教室相談員・メンタルフレンドの実際

心の教室相談員・メンタルフレンドに対してアンケートを実施した。

質問事項	メンタルフレンド	心の教室相談員
1. 活動時間	週一回	週一回
2. 活動内容	トランプ、卓球、バトミントン、手品、パソコン、動物園に行く、少年科学センターに行く、善光寺へ行く、勉強、ドッチボール、遊び、おしゃべり、図工、棚作り、散歩、掃除、川遊び、ゲーム、調理実習、工作、バレーボール、手品	用意されたクラスへ行き、不登校の子や、情緒障害の子と話す。相談室に来る子と話す、ゲームをする。部活に誘われ、参加する。朝の学活や、キャンプに参加し、絵本の読み聞かせ。他の相談室の先生と話し合い。放課後クラスをまわり、生徒との交流。掲示板作り、来室者の相手、生徒とともに清掃。相談室だより発行。
3. 相談事例	将来のこと、家族のこと、恋愛のこと、勉強のこと、進路のこと、「学校へ行かなくて大丈夫か」ということ。「〇〇が嫌だ」という文句。親のことでの相談。	教室に行けない。友達付き合いについて。親や、先生への不満。いじめの悩み。学校にあまり行きたくない。家庭の事情。女の子特有の悩み。先生への相談がしにくい。卒業した子の相談。
4. 部屋の様子	大きな教室が一つ丸く机を向き合わせている。アットホームな感じ。相談はまた別の部屋が在る。楽しく明るい雰囲気。勉強が嫌いな子が多いのでカードゲームやテレビゲームをすることもある。生徒は3人だが自分の進路に向かって頑張っている。学校のにおいがしない。和気藹々。	相談室は2つあり、1つは心の教室で、もう1つは勉強をするところ。担任の許可がないと来ることはできない。落ち着いた学校。落ち着いたが、元気がない。授業にあまり出ずに、行き場のない子達複数いる。見た目は落ち着いた雰囲気。先生のチェックが厳しい。

5. 自分の居場所	所定の机部屋のあちこち。 体育館や外など子どもと一緒にの場所。生徒とは必ず一緒。	原則相談室、廊下や他の相談室。
6. 教師との連携	行ってから子どもの様子を聞く。 中学校の校長先生と一回挨拶をした。中間教室の先生には、報告して帰る。活動中は任されている。学校の先生が中間教室に来ることもある。中間教室の先生への連絡。	給食の時、一緒に食べ、そこでの会話。あまりなかった。先生のほうからアプローチがなければ特に話すことはなかった。保健室、図書館の先生、ふれあい学級の先生とは時々話し合った。全くなかった。先生に任されて以降は接触なし。
7. 学校側の子どもたちへの対応	中間教室の先生と担任の先生が会ったり電話したりしていた。完全に切り離されているように思える。プリントを月に何回か担任が渡していたが、学校によって差があった。特に見られなかった。何度か担任の先生が中間教室に来た。子どもたちは何度か学校に行き、担任と話している様子。毎日他の子が帰ってから学校に行っている子もいた。	全体として無関心。 特別学級の先生は声をかけてくれる。基本的に教室への囲い込みがある。遅刻すると廊下に正座をさせる。問題点には触れないよう、真剣な話の間には、楽しい話をする。
(活動の中で感じたこと)		
8. 行ってよかったこと	悩みが聞けた。笑顔が見られた。先生の話が聞けた。子どもが誕生日プレゼントをくれた。仲良くなった。現場を見られた。不登校の生徒と「壁」を感じなかった。子どもの変化が見られた。	現場の姿を垣間見ることができ、具体的な問題意識を感じることもできた。校長先生のお話が良かった。先生の実態を知ることができた。子どもと接することができた。中学生の考えていることが聞けた。先生がいるときと、いない時の子ども達の違いを見ることができた。様々な中学生と触れ合うことができた。
9. 困ったこと	接し方。話す内容。わがままへの対応。勉強の動機付け。 場所が遠かった。自分の立場（携帯番号を聞かれてしまった）が曖昧だった。男子中学生という思春期な時期の子どもとの接し方。	心の教室相談員をすることが具体的には決まっていなくて、戸惑った。相談室がにぎやかになり、相談したい子が話しにくい雰囲気になってしまった。自分の時間が取れなくて十分学校にいけなかった。学校という場では何もできない自分。わがままな子にどう接するか。来る子が決まっていて、新しい子が来ない。

10. 学んだこと	<p>相手を知る前に自分を知って貰うことが大事ということ。</p> <p>学習指導の方法。連携のとり方。</p> <p>生徒が自分のことをしっかり考えていることがわかったこと。中間教室に来ることで生徒が確実に成長していること。実践から自分の足りないところを見つけ、足りないものを補うために書物や授業などで勉強できたこと。不登校といってもいろいろな子どもがいるということ。笑顔を忘れずに、自分から話し掛けることが大事だということ。</p>	<p>指導をしない。自己指導。子どもとどう接するか、頭より体で覚えることが分かった。中学生でもしっかりものを考えることができる。同じ立場で話をすると、いろいろな想いが聞ける。学校の良さと悪さ。</p>
11. 来年の人へのアドバイス	<p>自分を出す。話をしっかり聞く。</p> <p>元気に遊ぶ。友達でいること。子どもに話し掛け、自分から動くこと。不登校という状況を認めること。笑顔を忘れないこと。</p>	<p>充実させるためには、自分でやりたいこと、子どもの為にできることを見つけて実行する。きちんとした姿勢で望むこと。見た目からなど、先入観を持たない。真剣勝負を挑んでみよう。</p> <p>こつこつ熱心に続けていれば、先生方や生徒に必ず伝わる。手を抜かないで。</p>
12. 残り二ヶ月でやりたいこと	<p>楽しみたい。もっと近い存在になりたい。木のうちの製作。居場所を感じて欲しい。笑顔を更に引き出したい。</p>	<p>安心感を子どもに与えられるようにしたい。読み聞かせをやるぞ。できるだけたくさんの子と話がしたい。すこしでも来やすい相談室を作る。</p> <p>中学生でもできるボランティアの紹介。</p>

(社会科学教育専攻 2年 丸山大輔)

心の教室相談員が感じた学校の良いところ

- ・対等な立場で扱ってくれる。
- ・同じ年齢の集団が一番良いところ。
- ・みんなで力を合わせて大きなことができること。
- ・いろいろな子どもがいること。

心の教室相談員が感じた学校の問題点

- ・学校の校則について。
- ・一部の問題のある子を排除する傾向にある。
- ・何の先生なのかがはっきりしない。教科指導のプロとは思えない。

- ・体制がおかしい。
- ・問題が起こってからの対応という態度。
- ・問題に対して目を向けていない。

8. メンタルフレンドを経験して

メンタルフレンドに限らず、YOU遊広場全てにおいてこの活動ではまず参加するところから始まり、そして活動した本人がそこで何を感じるかということが重要になってくる。私はメンタルフレンドをすることで、自分の中の知識として不登校の児童生徒に対する認識が甘かったことが分かった。そこで不登校や障害児教育、そして学習障害など様々な文献を自分で探し、どのように接していけばよいか、どんな言葉をかけてあげたらよいかを活動しながら自分自身のスタイルを確立していった。

実践をすることで問題意識が芽生え、自分を高めようとするこのスタイルは、確実に自分の力になるだけでなく、実際に教育現場に出た時の対応の仕方まで考えられるようになった。今教育現場では、1クラスに1人以上の不登校の子どもがいてもおかしくない現状である。ふれあい学級という実践の場を自らが求めたことで、春からの教員生活において不登校の子どもがいる学級を任されても、必ずこの経験を生かし、子どもにとってよりよい道を作る手伝いが出来ると確信している。

メンタルフレンドの活動を通して、活動の時間だけが学びではない。むしろ自分の足りない部分を知るところから真の学びが始まるのだということを学ぶことが出来たので、現場に出てからも、たくさんの実践を行い、常に研究意識を持って授業等に望んでいきたいと思う。

(社会科学教育専攻 4年 町田竜太)



「信大 YOU 遊広場」興譲館の新設（お知らせ）

主催：「信大 YOU 遊広場」

運営委員長 山本公三（教育実践科学専攻 3 年）
興譲館長 原山典樹（生活科学教育専攻 3 年）
担当教官 土井 達（信州大学教育学部教授）

「興譲」とは、専らに益なく顧るに益あり、顧る心こそ一國をも興隆させゆく根本精神であるという意味で、中国の古典『大学』に由来します。

「信大 YOU 遊広場」興譲館は、いわゆる「勉強」をするための場所ではありません。普段は、外に出向くのが億劫で、登校できなくて困っている皆さんの心を癒すエネルギー充電のための場所でありたいと考えています。旧附属小学校北校舎の「松」の部屋を居場所として、大学生のお兄さん、お姉さんと様々な自然体験や社会体験の活動に取り組み、一緒に「学んで」いく場です。

1. 興譲館設立の目的

私たちが学生は、子どもの気持ちを共感的に理解できる力を身につけたいと考えています。参加して下さる子どもさんには、自己を肯定的にとらえ、自分らしさを発揮できる力を身につけていってもらえるような部屋を作りたいと考えています。

2. 参加できる人：長野県内の小中学生で登校できず困っている方。

3. 場所：信州大学教育学部のグラウンド北側にある旧附属小学校校舎、一階の「松」の部屋が活動場所になります。

4. 開設曜日と時間

水、木、金曜日：9:00-19:00
土曜日：10:00-17:00
上記の曜日、時間内、ご都合のつくところにご参加ください。

5. 興譲館での学びの内容

- ・参加した時間からのスケジュールは、自分で設計し、活動することができます。
- ・水、木、金曜日の学びは、大学生が授業の空いている時間を活用して教えます。毎回、同じ学生と学びたい人は、その学生の参加できる時間にスケジュールを調整すること

ができます。学びの内容には、次のようなものがあります。
国語、算数、数学、理科、社会、英語、ねんど遊び、工作、絵描き、書道、読書、花巻作り、折り紙、読書、音楽、ピョートル作り、スポーツ
上記のほかにも各自のやりたいことを一日のスケジュールに盛り込むことができます。
土曜日の主な体験活動には、次のようなものがあります。

- ① 「信大度賞ふるさと農場」での園作作業
- ② 「信大傘社ふるさと農場」でのそば、じゃがいも、とうもろこしの栽培作業
- ③ 「キャンパス・プレイパーク」での仲間との遊び、ピョートルづくりなどの作業
- ④ 獅子沢川での川遊び、袋を育てる活動

6. 参加費：無料。但し、教材費、傷害保険料は実費を徴収します。

7. 昼食：各自お弁当を用意してください。大学の生協食堂も利用できます。

8. 教官・学生の活動体制

信州大学教育学部教官有志と「信大 YOU 遊広場」の学生が興譲館の活動に参加します。学生という立場上、活動時間に制限があり、未熟な点も出てくることと思いますが、学生ならではの特色ある活動を展開し、参加して下さった皆様に喜んでいただけるように努力していきたいと思えます。

「信大 YOU 遊広場」(7 年間)と「信大 YOU 遊広場」(2 年目)の活動は、平成 14 年度で 9 年目になります。これまでの実績を踏まえて、さらに有意義なものになるよう私たち学生スタッフ一同頑張りますので、安心してご参加ください。

9. お問い合わせ・参加申し込み先：

〒380-8544 長野市西長野 6-1-0
信州大学教育学部土井研究室気付「信大 YOU 遊広場」興譲館係
Tel/Fax:026-228-4300
E-Mail: doiguan@spinnc.shinshu-u.ac.jp

一度、興譲館の様子を見に来ていただき、説明を受けてから、「往復はがき」に氏名、年齢、学校名、学年、住所、電話番号を書いてお申し込み下さい。

興譲館

粗粒夕顔して、みがきおほせて後、担り自由を得、おのづからきどくを得、通力不忠願育る所、
是兵として法をおこなう意也。(信本段誠・丑續書「火之巻」)

平成 年 月 日

興譲館

粗粒夕顔して、みがきおほせて後、担り自由を得、おのづからきどくを得、通力不忠願育る所、
是兵として法をおこなう意也。(信本段誠・丑續書「火之巻」)

平成 年 月 日

Web上では非公開

1 プラザ 牟礼ふるさと農場

1. 牟礼ふるさと農場ができるまで

この牟礼ふるさと農場は平成 12 年度に、「そばを育てて、そば打ち体験をしよう」ということで、牟礼村ふるさと振興公社を通じて 20a という大きさの畑を借りて始まった活動である。

私がこの牟礼ふるさと農場を今年も立ち上げようと思ったのは、昨年第 1 期の活動に参加してみて、子どもたちと共に農作業を行う楽しさを経験し、今年も一緒に活動したい、と思ったからである。

今年度は、茂菅ふるさと農場と共に、

*農作業を媒介とする、人間性の理解

*教材の多面的利用力（教材を育て、有効に利用する力）

を目標とし、活動を始めた。

昨年の活動と変わった点は「班を固定する」ということである。昨年は活動ごと、子どもとスタッフの参加状況を見て班編成をしていた。そのためスタッフは様々な子どもと接する機会を持つことができ、そこから学ぶことも多かった。しかし子ども同士のかかわりが薄くなってしまい、一年間活動を一緒にはしてきたが、顔も名前もわからないということがおきた。そこで今年は、かかわる範囲は狭くなってしまふかもしれないが、班を固定することで、子ども同士のかかわりが深まるようにしよう、また学生は班の子ども一人一人に対する理解を深め、子どもが変化していく様子を追うようにしようということで、班を固定することにした。

もうひとつ変わった点は、午前は農作業、午後はレクリエーションや学習（作物についての豆知識クイズ）というふうにし、昼食をはさんだ一日活動とした点である。子どもと農作業以外の場面でも接したい、また自分の班以外の子どもとかかわる機会をもちたい、自分たちのレクリエーションや学習の企画、進行する力をつけたいなどの理由からこのような形となった。

さらに募集対象学年を小学 6 年生までだったものを中学生 3 年生までに広げる、保護者の方も希望をとり、各班に入り一緒に作業をしていただくようにするなど、より多くの人と共に活動ができるような形にした。

2. 今年度の活動内容

<事前の活動>

*2月16日(土)...第1回話し合い（その後必要に応じて、不定期に開催）

*3月22日(金)...牟礼村ふるさと振興公社、竹元課長さんとの打ち合わせ（借りる畑を 20a にすること、参加費、年間計画の確認など）

*4月8日(月)...昨年参加してくれた子ども宛に、募集要項を発送

*4月12日(金)...県庁で開かれている「表現道場」で発表

*4月15日(月)...新聞社に子ども募集に関する記事掲載のお願いと、活動内容を FAX で送信。

*4月21日(日)...農場へ行き、雨の中畑おこし、区切りのテープはり、ブルーベリーの苗植えをする。畑おこしはその後、振興公社の方が機械で行ってくれた。

<農場での活動>

日時	活動内容(午前)	活動内容(午後)	参加者数	スタッフ
4月27日(土)	ジャガイモ植え トウモロコシ種まき	レク・学習(トウモロコシ、ブルーベリー)	子ども...36 保護者...9	15
5月25日(土)	サツマイモの苗植え 落花生種まき	レク・学習(落花生)	子ども...52 保護者...21	20
6月15日(土)	ブルーベリー苗植え 土寄せ・草取り	各班ごと看板作り	子ども...36 保護者...12	16
7月13日(土)	そばまき 草取り	草取り 学習(そば)	子ども...32 保護者...8	11
8月24日(土)	ジャガイモ掘り トウモロコシ収穫 草取り	午後はなし	子ども...55 保護者...26	11
9月29日(日)	サツマイモ掘り もろこしの片付け	午後はなし	子ども...20 保護者...11	9
10月12日(土)	そば収穫 落花生収穫	3グループに分かれレク	子ども...35 保護者...7	9
11月16日(土)	お昼作り	レク	子ども...37 保護者...16	12
12月14日(土)	そば打ち	思い出写真返却	子ども...38 保護者...18	12

・この他、参加者のきょうだい(幼児)が参加したり、作業には参加しないが、外から見守ってくださる保護者の方がいた。

・表中、レクリエーションは文字数の都合で「レク」と略した。

3. 活動の流れ

1回の活動の流れを、簡単に紹介する。

・活動1~2週間前...農場パスポート発送、スタッフ募集、活動内容の確認、係決め

・活動前日 ...持ち物等準備

・活動当日

7:30 Cooking 隊集合。昼食作り
8:10 スタッフ集合。荷物積み込み。朝の会
8:30 学部出発
9:00 牟礼到着。準備。ミーティング
9:30~10:00 受け付け

10:00~10:40	開会式	はじめの言葉 農場長あいさつ 土井先生のお話 竹元さんのお話 諸連絡・アイスブレイク
10:45~12:30	農作業(途中休憩)	
12:30~1:15	昼食	
1:20~2:40	レクリエーション、学習	
2:40~3:00	閉会式	
		思いで写真を描く 土井先生のお話 竹元さんのお話 おわりの言葉
3:00~3:30	片付け。出発→学部到着後、反省会	解散 5:00頃解散 (障害児教育専攻 3年 増田美和)

4. 活動に参加しての考察

牟礼の農業体験について

1. 動機に関して

参加の動機は立派なものではない。友達が昨年参加してそばを打って、おいしかったというのを聞いたからだ。主として自分がそばを打ちたいという目的があった。正直に言うと、子どもと共に農作業をするという目的より自分が農作業をしたかった。

私が幼い頃家で畑仕事をしたせいもあり、農作業は楽しみだった。「楽しみ」と言えるのは今だからだと思う。小さい頃は、収穫以外の畑仕事は嫌いだった。そんな私も成長し、一連の農作業のおかげで収穫の喜びが味わえるということがわかってきたのだと思う。

2. 子どもと農作業について

自分が農作業をやってみたいという一方で、今の子どもたちはどのくらい農作業をやるのだろうかという疑問があった。草むしりなんてやらないのではないか、友達と遊んでばかりだったらどうしようと思っていた。しかし、その危惧が無意味であるということはすぐにわかった。

6月か7月ぐらいの活動のときだったと思う。その時は班の畑の草むしりをしていた。みんな言葉も少なく真剣にやっていた。そして、休憩を挟み、草むしりを終わりにしようかとスタッフが決めたところ、予想外の答えが返ってきた。子どもたちは草むしりを続けたいというのである。私はこのできごとに驚くとともに嬉しい気持ちになった。子どもたちは農作業を嫌ってはいないということがはっきりわかった。

3. 班での活動

今年は班を固定して活動してきたが、このおかげでは私は安心して活動することができた。毎月同じメンバーでやっていくうちに、自分の居場所とでもいうか活動の拠点ができたように思う。私は実際には人数の関係で、他の班に行って活動するという事も多かったが、やはり自分の班のことが気になったし、自分の班にいた方がより安心できた。

子どもたちは全員が毎月来るわけではないので、同じ班でもあまり顔をあわせなかった子もいるが、1回でも会って一緒に活動できたことはとてもよかったと思う。

最後のそば打ちは自分の班でやったが、初めて会ったときとはだいぶ変わり、子どもたち同士も打ち解けていた。そのためそば打ちはとてもにぎやかだった。これも毎月同じ班でやっていたからだと思う。

4. 最後に

来年度の要望というか、欲を言えば、私はもっと自分の班で活動したかった。いろいろな班で作業をするメリットはもちろんある。しかし、もっと自分の班と一緒に活動した子どもたちのことを知りたかったとも思う。

また、子どもにとってもスタッフにとっても保護者にとっても、牟礼の農業体験が、安心して農作業体験ができる場所であってほしいと思う。

(教育実践科学専攻 3年 石井里佳)

牟礼は長野市とは異世界のように、夏は涼しく、冬は動いていないと外にいられないくらい寒かった。そんな気候なのに、作物はとっても元気に育ってくれたので、つい私も薄着でもへっちゃらさ！みたいな格好をしていくと、その度に自分の浅はかさを感じさせられていた。でも、気候は寒くても、牟礼での一年間はとてもアツカッタ！

私はもともと田舎育ちなので、とうもろこしやサツマイモを育てることはそんなに珍しいことではなかったのだけど、牟礼農場に初めて行ったとき、その広さと日当たりの良さにたいそう感動した。これから一年間、畑と山以外何にもないところで活動するんだ、と思うと、ようやくこれからやる牟礼での活動が理解できるようになってきた。そんな感じで始まった私にとってのYOU遊広場は、今では本当に尊敬のまなざし以外では見られないものとなっている。

畑仕事と言ってもただ作物を育てるのではない。あくまでも子ども中心にやらなくちゃいけない。これがとても難しかった。子どもたちがどうやったら興味をもってくれるか、最後まで来てくれるか、楽しかったといって帰ってくれるか、そして何より作物がうまく育つか。いくら楽しくわいわいガヤガヤやれたとしても、秋に作物が獲れなかったらせっかく寒い中、外に集まって牟礼の畑で活動してきたのに、子どもたちはなんの満足感も得られなくなってしまう。そうやって色々なところに気を配りながらうまくみんなを引っ張っていくということは、本当に忍耐や根性があることだ。私なんかレク係になっただけでこんな風にとてつもない難しさを感じたのに、一年間「農場長」としてみんなを引っ張ってきた美和さんは本当に偉いと思う。美和さんだけじゃない。YOU遊広場に携わっている人はみんなすごいと思う。

四月、YOU遊広場に入ったばかりの時はYOU遊広場って何なのかも分からないくらいだった。始めてしばらくは、子どもたちが普段できない体験を通して、自分なりに何かを学ぶ。私たちはその手伝いをするんだ、と思っていたけれど、牟礼プラザに参加することを決めて、毎月一回牟礼村の畑で子どもたちと一緒に畑仕事をしていく中で、YOU遊広場は自分自身が今の子どもたちから一番大切なことを学べるチャンスなのではないか、と考えるようになった。私たちは普段「大学」という建物の中だけで教育というものについて学んでいるが、学校の先生になって一番大切なものというのは、実際に子ども達と触

れ合わないと思えないのではないか、ということを感じた。

昔、私の大好きな先生に「教師なんて神様じゃあないんだから全部わかんなくていい。所詮、人と人の付き合いに変わらぬんだからみんなおんなじ人間なんだ。」と言われたことがある。今、自分が先生を目指す立場になってこの言葉を思い返すと、幾度となくこの言葉が当てはまることがあることに気付かされる。私たちは人生生きていく中で、いろいろなことを学び、難しい知識や技術を身に付け、「すごい」と思った人を尊敬し、自分も夢や希望を持って生きていこうとするけれども、どんなに偉い人でも、すごいことをした人でも、「感謝」の気持ちを持ってなければ、本当の偉さには辿りつけないと思う。

私は、この一年間、牟礼村の自然、子どもたち、YOU遊プラザに関わったすべての人に、自分を学ばせていただいたことを感謝したい。

「ありがとうございました。」

(教育実践科学専攻 2年 高橋朋子)

5. 今年度の活動の反省

*農場パスポートの活用

毎回活動の出欠を確認するために、農場パスポートを発送し、返信してもらっていた。そこにはスタッフへのメッセージを書く欄が設けられており、子どもたちは様々な内容を書いて送ってくれた。しかしそれを各スタッフが読んだことは非常に少なかったと思われる。原因としては、「返信がきている」というアピールが少なかったことと、パスポート製作が係の都合などにより、どうしても決まった一部のスタッフにより行われていたためであると思う。子どもたちが心をこめて書いてくれた文章は、様子を知り、話をするきっかけにもなるので、もっと活用すべきであったと思う。

☆のうじょうパスポート☆ 

こんにちは！ すずしくなるといいけど、カマなど
ひいてないかな？ こんにちは、サツマイモほり
するよ！ せわいしく大きくなつたかな？ だいじにね☆

★おもしろ☆ ★おもしろ☆ 

・長い道 ・ぼろい ・ぐんぐん ・水(水)日

のうじょうパスポート

★日(日) → 9月29日(日) 信ス学礼ふるさと農場 

・9:30 ~ うけつけ

・10:00 ~ 12:30

★お話し合わせ 

・026. 279- 2260 (土曜) 


★当日★ 


・070- 


(農場長・二田美希) 


★4年時★ 


★ヤキイモもあるよ★ 


★9月29日(日)の作業に 


出席、欠席 


★出席★ 


★欠席★ 


★出席★ 


★欠席★ 


★出席★ 

★欠席★ 

★出席★ 

★欠席★ 

★出席★ 

★欠席★ 

*保護者とのかわり

今年は農場パスポートに保護者の作業出欠の確認欄を設けた。希望のあった保護者には班に入ってもらい、一緒に活動をしてもらった。スタッフの間からは「保護者の方がいてくれたおかげで、スムーズに進んだ」「自分の子ども以外の子どもにも声をかけてくれる姿

が見られ、とてもよかった」といった意見が出された。また、作業には参加しなくても、持ち帰り用の野菜分けや料理の味付けなどを手伝ってくださる方もいて、たくさんの交流がもてたと思う。また「もっとレクリエーションにも参加してほしい」という意見もあった。

*作物の様子

牟礼ふるさと農場へは学部から車で30分以上かかるため、「作物の様子を見にちょっと」という感覚で行くには遠く、車がないとなかなか難しい。そのため細かな作業ができず、植えたあとは振興公社にお願いするという形になってしまう。なるべく手入れがなくても育つ作物を育てるようにしたが、そうするとスタッフの中にも「育てている」という感覚が薄れてしまう。全体的に作物のことを気にかけるという姿勢が乏しかったことは、大きな反省点である。

*班の固定について

班を固定にし、一応は決まった班で活動できるようにしたが、スタッフは人数の都合上どうしても他の班で活動することが多くなってしまった。また、子どもの人数も3人しかない班もあればほぼ全員参加していて、道具が足りない班もあるといった、人数のばらつきが目立った。しかし回を追うごとに仲良くなっていく班の様子を見ることもでき、固定したことによるメリットも感じられた。どちらがいいとは一概には言えないが、ひとつの試みとして意味あるものになったと思われる。ただ、「班を固定していることの意味」を考える場面が少なく、反省会のときなど、もう少し「子どもたちの成長」に目を向けられるように意識すべきであったと思う。

(障害児教育専攻 3年 増田美和)

2 プラザ 信大茂菅ふるさと農場

1. 茂菅ふるさと農場とは

茂菅ふるさと農場は平成 12 年度に、子どもたちと農業体験をすることを目的として始まった。この農場は子どもたちと共に土を耕し、自然と触れ合うことを通して、子どもたちと学びたいという考えを持って生まれた。そのために JA を通じて当時休耕田だった土地を借りた。今年度は昨年度まで畑として使用していた土地を田んぼに変え、計 6a の田んぼでお米作りを行った。

茂菅ふるさと農場の場所は、裾花川沿いの長野商業高校のグラウンドをさらに川上へ 300 m ほどのぼったところにある。旭山のふもとにあり日当たりの問題があるが、秋には紅葉がとてもきれいに見える所である。川が近くにあるため、使った道具を洗ったり、長靴を洗ったりすることができ、とても便利である。

この田んぼは国際協力田にもなっていて、採れたうるち米をアフリカにあるマリ共和国へと送っている。今年度は 100 kg のうるち米を送る。このお米は飢えに苦しむ人々を助けるために利用されている。子どもたちにはそのことを知ってもらい、自分たちがしっかりと国際協力をしているということを理解している。

(理数科学教育専攻 3 年 高橋和之)

2. 活動報告

今年度の茂菅ふるさと農場での活動を以下にまとめる。

日時	内容	参加者数	スタッフ	備考
3 月下旬～	今年度の活動についての話し合い			
4 月下旬～	大学内の畑を耕す			
5 月 18 日(土)	田おこし(雨天のため中止)	子ども 30 名 保護者 1 名	学生 11 名 先生 1 名	
5 月 20 日(月)	ヘチマ・ウリの種植え			
5 月 22 日(水)	トマト・ナス・かぼちゃ・スイカ・メロンの苗植え			
6 月上旬	畑を耕す			
6 月 2 日(日)	田植えとどろんこ遊び	子ども 41 名 保護者 10 名	学生 32 名 先生 1 名	どろを落とすために水槽を 2 つ用意した。
6 月 19 日(水)	ヘチマ・ウリの苗植え			ひまわり畑の横に植えた。

6月24日(月)	ケナフ植え			ひまわり畑の横に植えた。
7月7日(日)	田んぼの草取り	子ども 32名 保護者 11名	学生 10名 先生 1名	
8月3日(土)	鳥よけネットはり		学生 10名	
8月7日(水)	案山子(かかし)づくり	子ども 14名 保護者 3名	学生 7名 先生 1名	作ったかかしは、その日のうちに田んぼの脇へ設置した。
9月22日(日)	稲刈り	子ども 24名	学生 7名 先生 1名	
9月23日(月)	残った稲の刈り取り		学生 8名 先生 1名	
10月13日(日)	午前…鳥よけネット外し 午後…脱穀	子ども 28名 保護者 8名	学生(午前 18名、午後 16名) 先生 1名	千歯こき 3台と足踏み脱穀機 1台で脱穀をした。
12月7日(日)	精米	子ども 17名 保護者 6名	学生 12名	YOU 遊フェスティバルの一つの講座として行った。

(理数科学教育専攻 3年 高橋和之)

3. 一回の活動の流れと反省

6月2日(日) 晴れ 田植えとどろんこ遊び 一班子ども7~8人の6班編成

9:30 受付

(車が入ってくる入り口、徒歩・自転車の人が入ってくる入り口、駐車場、受付にスタッフを配置し、車は駐車場へまず誘導し、参加者を受付に案内する。受付では名簿にチェックし、参加費をもらった後、ガムテープにこどもの名前と班の番号を書き胸にはる。手の空いているスタッフは、来たこどもたちと遊ぶ。)

10:00 開会式

(開会の言葉、農場長あいさつ、先生のあいさつ)

10:10 田植え

(JAの職員の方に田植えの説明をしてもらった後、二枚の田のうち一枚の田の田植えを行う。はだしになった後、他の半分のラインから右側を1~3班が、左側を4~6班が真ん中から端に向かって一列になって後ろに進みながら苗を植えていく。)

三班の中で二班が苗を植え、一班が苗を渡し、それを三班のなかでローテーションしていく。終わったら学年の大きい子は用水路で、学年の小さい子はビニールプールで足を洗い、手は水道水で洗って坂を登って昼食を食べる広場へ移動する。坂の上から自分たちで植えたばかりの田を一望することができる。)

12:00 学習

(クイズ形式で、米に関する学習をする。うるち米ともち米の違い、昔と今の米の需要の変化、長野県で一番作られている米の品種、米から作られている食品など。)

12:15 昼食

(クイズの影響か、自分の弁当の米に対して「これはコシヒカリかな?」という反応も子どもに見られ、学習が昼食の導入としても働いていた。)

1:00 どろんこ遊び

(二枚の田のうち、田植えをしていない方の田でどろんこ遊びをする。始めは自由に遊ばせて、最終的にどろんに慣れてきたら、班対抗で二人三脚リレーを行う。二人三脚で全速力で走ると、泥が飛び散ったりころんでどろまみれになったりして、本当にみんなどろんこになった。泥が目に入った子もいたが、安全面には十分配慮したので、大きな怪我もなく無事に終わった。)

1:45 どろ落とし

(まだ水は冷たいので、湯をわかして水に混ぜ、ビニールプールやJAの方から借りた大きなプラスチックの容器に入れて、そこで子どもたちに泥を落とさせた。テントの更衣室も男女別に作り、着替えさせた。)

3:00 思い出アルバム作り

(画用紙の表に絵を描き、うらに感想を書く。)

3:20 閉会式

(閉会の言葉、農場長のあいさつ、先生のあいさつ)

3:30 解散

反省

- ・ 田植えのとき後ろ向きに歩くと、土がぼこぼこして植えにくい。
- ・ Aくんは、田植え開始20分でやめてしまったが、ポットを運ぶのを手伝うようになった。
- ・ Bくんは、苗を植えるのに飽きてしまった。声かけをしても遊んでしまった。土が嫌いな様子。子どもが参加しないときにどうすればよいのか難しかった。
- ・ 学習のときCくんとDちゃんが一生懸命きていた。興味があって嬉しかった。
- ・ ヒルが少なくて怪我があまりなくてよかった。
- ・ 日陰を作ればよかった。
- ・ ひざを怪我してどろんこ遊びをできない子がいたが、砂を使って一緒に遊べてよかった。
- ・ 暑かったので休憩を入れればよかった。
- ・ 友達がいなくて途中で帰ってしまった子がいた。田植えは一直線になってするので、友達と話しにくい。田植えに集中している子は、真面目な子に見えるか、実は友達がいなくてさみしいのかもしれない。

- ・レクリエーションがなかったので、交流がしにくかった。
- ・どろんこ遊びのとき、寒く感じている子がいたので、どろんこ遊びのところでも火を炊けばよかった。
- ・こどもが、スタッフとは良く話すが、こども同士で話すことが少なかった。スタッフはひとりのこどもと話すのではなく、複数の子と一緒に話せば、もっとこども同士が仲良くなったのでは。
- ・EくんとFくんは仲が良いようだ。Gくんは始め緊張していたが笑顔が出てきた。昼食のときに屋根がほしかった。
- ・先生の話や説明のときに、学生がきちんと聴く態度をとるべき。学生が話をきかないとこどもたちが聴く態度をとらない。話を聴いているときにこどもが話しかけてきても、こどもの楽しい気持ちを壊さずに注意することが大切。
- ・叱ってもよいが、その後のフォローが大切。
- ・保護者の方たちにも、もっと参加してもらえるようにしたい。
- ・時間にゆとりをもって作業できてよかった。
- ・どろんこ遊びのとき、始め汚れるのを気にしていた子も、すぐに汚れるのを気にしないで楽しく遊ぶことができてよかった。
- ・昼食前に学習をしたので、こどもたちの集中力がいまいち欠けていた。昼食後に学習をした方が良かった。
- ・スタッフが全員、事前に現地を見に行き、活動の流れを把握しておくことが大切。
- ・スタッフで、流れが分からず何をして良いか分からない人がいた。各係で事前にリハーサルしておいた方が良いのでは。
- ・当日のみ参加のスタッフも動きやすいように配慮することが必要。家でできる仕事を与えるなどして、当日他のスタッフに気兼ねなく来れるようにする。

(生活科学教育専攻 3年 那須紋子)

4. 参加した学生の感想

私がこのYOU遊プラザの活動を知ったのは2年になって間もなくでした。昼休みに生協食堂前でピラをもらい、それに書いてあった「子どもと一緒に体験…」という言葉にひかれてそのまま説明会に行き、この活動への参加を決めました。YOU遊プラザの活動を始める前にも私は“子どもキャンプ”や“子どもと農業体験”といった、子どもと関わる活動にボランティアスタッフとして携わってきました。

私が子どもと関わる活動に初めてボランティアとして参加したのは4年前で、それは環境教育を目的としたものでした。その活動に参加した理由は、もともと子どもが好きで子どもと一緒に何かが出来たかと言うわけではなく、どちらかと言うと自然環境に興味があり、子どもたちに自然の大切さをどう伝えていくかと言うことに興味があったからです。しかし私は、この活動に参加するようになって思わぬところで大きな壁にぶつかりました。それが“子どもとのコミュニケーション”です。活動が始まり他のスタッフの人たちがどんどん子どもたちと仲良くなっていく中、私1人だけがなかなか子どもたちと打ち解けられませんでした。「どうしたら子どもたちとうまく接することができるのか」そのとき私が解決策としてやってみたのが、“他の人のマネ”をすることでした。しかし、結果それは自分に合わないことが分かりすぐにやめてしまいました。それをやったことで子どもたちの

方から寄って来てくれるようにはなりませんが、普段の自分が出せなくなったことが精神的苦痛になり「これではこれから先子どもたちとうまく付き合っていけない」と思ったことから、“自分なりの子どもとの付き合い方を確立すること”が大事なんじゃないかとそのとき初めて思いました。私はこの活動を3年間続けたおかげで、徐々に「自分の“子どもとの接し方のスタイル”が本当に必要なのか」が分かってきました。しかしまだまだ、自分の子どもへの接し方が本当に良い接し方なのかは分かりません。このボランティアの他にも、私はこれまで子どもとの活動を通して子どもとのコミュニケーションについて自分なりの答えを出そうと本を読んだり人に聞いたりして学んできました。しかし、結局のところ子どもとのコミュニケーションに関わらず“コミュニケーション”と大きく捉えて考えてみても、本からの知識や人から聞いたことのような“人の真似事”では、1対1で向き合ったときに相手にも自分にも本気になれないような気がします。そうなるとうまくコミュニケーションが伝わりにくかったり間違った気持ちが伝えられてしまったりと、うまくコミュニケーションが取れなくなります。やはりそのためにも、自分でそのスタイルを作っていくことはとても大切なことだと考えます。実際、これまで子どもとの活動を通して様々なことを学びましたが、実際に子どもと一緒に活動することで得たものの方が自分にとって大きな物として残っています。私がYOU遊プラザの活動に参加しようと思ったのも、自分の“子どもとのコミュニケーション”の能力を伸ばすためには子どもとの体験活動でいろいろな人のコミュニケーションの取り方を観察し、それを参考にして子どもとコミュニケーションをとる「実践の場」をここに求めたことがその理由です。

このように私は、YOU遊プラザの活動で多くの“子どもとのコミュニケーションの場”を求めた結果、それを観察し実行することができました。しかし、実際に参加してみても一番考えさせられたことは“学校と地域のかかわり”です。この活動の運営のほとんど全てを学生がやっているため、地域の人たちの協力がとても重要だと言うことが分かりました。特に私が参加した「ふれあい茂菅農場」の活動では、場所を提供してくださる農家の方が作業の仕方や道具の使い方の説明、それに参加者の子どもについての細かいことまで一緒になって考えてくださり、ときには厳しい意見もありましたが、いつも我が子を見るような温かいまなざしで見守ってくださいました。学校と地域のかかわりと言うよりもここでは“個人と地域のかかわり”と言った方が良いのかも知れませんが、私はこの活動を通して、あらためて“地域の人とのかかわり”と言うことにも目を向けていきたいと思いました。「地域の子どもは地域の大人が育てる」と言った標語を以前見たことがありますが、ここではまさにそれを見た気がします。

子どもにとって重要な最初のコミュニケーションの相手は親であり家族ですが、地域の人とのかかわりはその次くらいに重要だと言えるでしょう。現代の子どもたちだけでなく、特に都会に住む人の近所付き合いの無さ、つまり他人とのコミュニケーションの無さが現在様々な問題の原因だと言われています。このような現代に生きる子どもたちは例外なく他人とのコミュニケーションの能力が欠けてきていると言えます。信州大学が行っているこの試みは、そういった意味でも大変重要なことで今後もっと注目されてくると思います。1年間活動してみて、私自身この活動にはまだまだ改善の余地があると強く感じています。「地域の人とかかわりながら、共に体験を通して子どもについて学んでいく」と言うこのYOU遊プラザを、今後も改善を重ねることでさらに良い活動を作っていってほしいと思います。

(野外教育専攻 2年 岩堀耕平)

この一年間、茂菅の田んぼでの活動でたくさんの体験をして、多くのことを学ぶことができたと思います。印象に残っていることは、始めの活動で、先輩方が子どもたちとうまくコミュニケーションがとれて、子どもたちから近づき、一緒になって活動をしている場面でした。私は、教育学部にいるにも関わらず子どもたちと一緒に何かをやったり、話したり、といったことをあまりしてなくて、始めの活動では、何を話せばよいのだろう、と悩む場面もありました。近くにいる先輩をみていると、そばにいる子どもたちと楽しく笑ったり、走り回ったりしていて、すごいなあと思っていました。はじめのうちは小さなことにも頭で考えてばかりで行動に移せませんでした。今振り返れば、子どもたちと接していくうちにだんだんとわかってきて、気軽に思ったように行動ができるようになっていたと思います。茂菅の田んぼでは私自身、すべてが初の体験であったため、稲の収穫までの行程を、子どもたちとふれあいながらでき、また、先輩方の行動をみて学ぶことができました。みんなで一生懸命活動した後はいつも充実感がありました。活動を通して、先輩や子どもたちと接し、間違いや失敗をすることで自分自身の未熟さに気づくことができるのだと思いました。そのため、たくさんの子どもたちと出会い、積極的に行動することが、自分自身を高め、様々な場面に対応できる力を身につけることができるのだと思います。これからも、たくさんの子どもたちとの出会いを大切にして、何度か接することで先輩方のように自然に子どもたちと接することができるようにがんばりたいと思います。

(生活科学教育専攻 2年 宇良知子)



3 プラザ 鉄腕アトム

1. 3 プラザができるまで

このプラザの目標は「障害をもった人たちと、日常的、継続的なかかわりをもつことで、お互いの理解を深める」というものである。そのためどのような団体と連携していくかを決める際には、「お互いの理解を深める」という願いの接点があることはもちろんだったが、

- ・場所が近く(自転車で30分程度)、天候に関係なく参加できるように公共交通機関によって行かれる所〇継続的にかかわれるように
- ・授業の合間に施設などへ行くことは難しいため、放課後・土日に活動できる所〇日常的にかかわれるように

この2点も大きなポイントであった。そのため年齢層は「子ども」に固定するのではなく様々な施設、団体の中から探すことになった。

学務係にある介護等体験の冊子やボランティアセンターの冊子などを見たが、それだけでは各施設の様子がわからず、また私たちは「かかわるだけ」でよいのか、それとも「自分たちで企画をして」活動をしていきたいのかといった点でも様々な意見が出された。さらに「附属養護学校と連携していったほうが、学校の様子も分かりよいのではないか」「地域の施設の方が放課後の活動はしやすいのではないか」などどのような団体と連携していくのがよいのか、全く分からない状態が続き、初めての話し合いから半月ほどは、春からの活動が全く決まらないまま過ぎてしまった。

しかし、3月1日の話し合いで「私たちの探しているような団体があるか、ボランティアセンターに直接電話で聞いてみよう。」ということからかけた電話により、私たちはこれから1年間一緒に活動していくことになる「楽しい放課後クラブ にこ²」を紹介してもらうことができた。この「にこ²」は長野養護学校の保護者の有志がちょうど4月からはじめようとしていた活動で、小学部の子どもの放課後の時間を使った活動にすること、また学校、親、地域が連携して取り組んでいく予定であるということで、「学校の様子もわかり、さらに自分たちで企画も立てられそうだ」という私たちの考えているような形で活動ができるのではないかと、早速連絡をとってみることにした。

そして約2週間後の3月13日、長野養護学校寄宿舎の一室で行われた、にこ²に参加する保護者の方とPTA担当の先生と私たち学生の話し合いの結果、4月から一緒に活動させていただくことが正式に決まった。

2. 今年度の活動内容

活動は毎回子どもとスタッフがペアになり行っている。「お互いの理解を深める」という点から、基本的に固定したペアを決めて活動をしてきた。子どもとペアを組まないスタッフは全体を見てさまざまな子どもとかかわりあいながら活動をした。

また、はじめのうちは名前がわかるようにと名札をつけていた。安全ピンなどは外れると大変危険であり、何度も使用すること、自分で管理できるようにということで、首からつるすタイプの名札を作った。しかし引っ張られたり、どこかに引っかかったりする危険性もあった。どうするべきかと悩んだが、回を追うごとに保護者の方も名前を覚えてい

ただき、自然と名札をつける必要がなくなった。名札をつけている際もこのような事故はおきず、よかったと思っている。

基本的に毎月第2金曜日は学生の企画、第4金曜日に保護者の方の企画で活動を行ってきた。その内容と参加人数は以下の通りである。

<保護者の方の企画> 子...子どもの人数 保...保護者の人数

日時	活動内容	参加人数	スタッフ
3月22日(金)	中野公園で遊ぶ	子: 保:	4
3月29日(金)	サンアップルで泳ぐ	子: 保:	3
4月19日(金)	ダンス	子:10 保:8	11
5月24日(金)	卓球・小麦粘土での工作	子:11 保:9	13
6月28日(金)	ムーブメント	子:11 保:9	11
8月29日(金)	ダンス	子:9 保:7	0
9月27日(金)	公園での遊び	子:3 保:3	5
10月25日(金)	ゼリー作り	子:7 保:	8

- ・顔合わせという意味を含めて、3月に2回ほど活動をおこなった。そこで顔と名前をお互い覚えることができ、4月の正式スタートがスムーズになったと思う。
- ・場所は主に長野養護学校の一室をお借りして行われた。
- ・中学生は10月4日から毎週金曜日にサンアップルで活動を行っている。「鉄腕アトム」からは毎回3名が一緒に活動をしている。

<アトムの企画> 通称「にこ² in 信大」

日時	活動内容	参加人数	スタッフ
6月14日(金)	ホットケーキ作り	子:13 保:10	16
7月19日(金)	七夕飾り作り	子:8 保:6	15
10月11日(金)	ひまわり公園で遊ぶ	子:5 保:5	7
11月15日(金)	やきいも	子:5 保:5	11
12月13日(金)	クリスマス会	子:4 保:4	7
1月10日(金)	おもちつき	子:5 保:5	6

- ・先に書いたとおり、10月から中学生はサンアップルでの活動となったため、にこ² in 信大は小学生のみの活動になっている。
- ・4月からの活動のまとめという意味で、12月26日(木)にしなの木会館で保護者の方との話し合いを2時間ほど行った。参加者は保護者:5名 学生:8名であった。

<にこ² in 信大の活動の流れ>

- ・1:00~ 準備
- ・3:00~ スタッフ集合、ミーティング、駐車場でお出迎え
- ・3:30~ 活動開始

{	ペアごとテーマに沿った活動
	おやつ
- ・4:30ごろ お見送り

(障害児教育専攻 3年 増田美和)

3. 「楽しい放課後クラブ にこ²」での活動を通して

私がYOU遊広場の3プラザ「鉄腕アトム」に参加しようと考えた動機は、自分の経験不足を認識していたからであった。1年生の頃から、軽度発達障害児とかかわるボランティアには継続的に参加していた。しかし、そのボランティア以外は、ほとんど参加していなかった。そこで、2年生になってYOU遊広場の「鉄腕アトム」の存在を知り養護学校の子どもたちとかかわれるということで、参加していくことを決めた。

「鉄腕アトム」では、長野養護学校の子どもと月2回かかわる活動であった。そのうちの1回を長野養護学校で行い、もう一方は信大に子どもたちを招いて行ってきた。

そして、今年から担当する子どもとペアを作り、継続してかかわっていく方針となった。私は、偶然にも夏に行われるキャンプでも担当するS君（小学5年生：自閉症）とペアを組んでいくこととなった。

S君は、発話はないが、言語理解は可能であるとS君のお母さんから知らされた。最初は、発話がないので、うまくかかわっていけるかと不安を覚えていた。そこで、S君のお母さんから最初の助言を受けた。「まずは、あなたの声をSに覚えてもらうように声を出してください。そうすれば、Sはあなたの言葉に耳を傾けるようになります。」S君に私の声を覚えてもらうことから、私とS君との交流が始まっていった。

しかし、最初からうまくはいかなかった。S君は私に興味がないので、自分の興味のあることに没頭したり、S君が走り回っている後ろを、私が追いかけていくことがほとんどであった。それでも、なんとか私の声や顔を覚えてもらおうと思ってかかわっていくうちに、S君の態度が変わってきていることを実感してきた。それは、S君の方から私の手を取って、手をつないでくれるようになったことであった。S君の中で私の存在が認められてきていることが、とても嬉しく思えた。

S君とかかわっていくうちに、私は1つ気になっていることがあった。それは、S君が靴を履かずに、また、靴のかかとを踏んだまま走り出していく場面が何度もあったことであった。その行為は、けがをする可能性があるので、私はその度にS君に「靴をきちんと履こうね。」などと言って促してきた。自分から履いてくれない時は、私が手を貸して履かせる時もあった。しかし、S君はなかなか自分から靴を履いてくれるようにならなかった。そして、私の対応に問題があったことに気が付いた。

まずは、「靴をきちんと履きましょう」という指示が曖昧であったことである。つまり、「きちんと」という表現がコミュニケーションの障害を持つ自閉症のS君にとって適切な表現ではなかったのである。そのことに気づかせてくれたのは、S君のお母さんの「靴にかかとを入れなさい」という指示であった。その指示の時のS君は自分で靴を履くことができた。しかし、私も同じ指示を出していても、S君はなかなか指示を聞いてくれなかった。それでも、私がS君の靴を履かせる援助は少なくなってきた。

そして、他の問題点が、指示を出す時に、動き出したS君の脇から指示を出していたことであった。つまり、S君にこだわりや興味が湧いている時に、S君の視界から外れている私の指示は、指示したことにならないということである。それからは、S君の正面に立って指示を出すようにしていった。

そして、夏のキャンプの時には、私が何も言わなくても自分で靴を履くS君がいた。何より、S君の成長した姿を見ることができてよかった。これからも、成長していく姿を見ていけるように、努力していきたい。

(障害児教育専攻 2年 熊田賢人)

私のYOU遊広場（3 プラザ）は反省から始まった。

4月19日、YOU遊広場で長野養護学校に行った。内容は子どもたちと一緒に、音楽に合わせダンスを楽しむというものだった。そのときの私の担当はD君であった。D君と意思の疎通は笑顔でできたが、会話をすることはできなかった。それでも私は「何とかして、D君にダンスをさせなくては」と必死でD君の腕を持ったり、足を持ったりして音楽にあわせようとした。しかし結局、D君は楽しくダンスすることはできなかった。なぜD君はできなかったのか。どうして他の子たちは踊れたのか。私は、ダンスが終わった後、そのことを先輩に尋ねた。先輩は「まず自分がやってみて楽しまなくちゃ」とおっしゃった。私はその言葉を聞いて改めて自分の未熟さに気づいた。私はD君の気持ちを無視してダンスをやらせようとした。私自身はダンスをせずに、ダンスを楽しもうとせずに、D君にダンスさせようとして必死だった。D君と一緒に楽しみたいのなら、まず自分がダンスを楽しんで踊るべきだったのである。

今まで多くのボランティアに参加してきたから、「自分にはできる」という思い上がりがあったのかもしれない。その時は、本当にD君に申し訳ないことをしたと感じた。そして、次のことを学んだ。

自分が楽しんでこそ相手も楽しめる

最も基本的なことだが最も重要なことである。私は、これをきっかけに初心にかえろうと反省した。その反省が今のプール指導に役立っていると思う。

現在私は、週に一回、長野養護学校中学部の子を対象としたプール指導をさせていただいている。私の担当は中学3年生のT君である。T君は最初、水に入ることはできたが、潜ることはできなかった。だから私は、目標を「T君が水に潜れるようになること」と決めた。その際、気を付けるようにしたことが「まず自分がプール指導を楽しみ、笑顔でT君に接する」ということである。指導ばかりに重点を置き、T君がプール自体を嫌いになってしまっただけでは意味がない。だから、私は楽しむことを意識したのである。その結果、T君はプールに入るのがうれいらしく、いつも笑顔でプールに入っている。しかし、未だ潜れるようにはなっていない。だからといって、T君が私と一緒にプールに入ることは意味がないことだと私は思わない。なぜなら、T君は確実に進歩しているからである。一番最初、T君は顔を水につけることはできなかった。ところが、今は何とか顔はつけられるようになり、鼻の上まで潜ることができるようになった。このような小さな進歩に気づき、褒め、力を少しずつ伸ばしていくことが指導だと私は考える。これからも、引き続きT君と関わる中で、T君の成長とともに自分も成長していきたいと思う。そして、目標が達成できる時まで初心を忘れずに指導していくつもりである。

このように、私は、一年間YOU遊広場に参加して様々なことを考えさせられ、時に自分を反省し、非常に多くのことを学んだ。ただ「養護学校の子たちと触れ合える」という動機から参加したYOU遊広場であったが、思っていた以上に内容の濃い、学びのある一年間だった。まだまだ、未熟な自分だが、来年もYOU遊広場に参加し、より一層学びのある一年にしたいと考えている。

（障害児教育専攻 2年 武井恒）

4. 今年度の活動の反省

信大での活動内容について

- ・ 子ども達の様子を見ていて、何かを「作る」ことが中心になる活動がよいのではと考えた。七夕飾り、やきいも、クリスマスツリーの飾り付けや、餅つきと、手を動かし、おやつを食べてから終わりにするというように、一定のながれの中で活動できたことは子どもにとっても、分かりやすく良かったのではないかと思う。

活動場所について

- ・ 主に活動する場所の他に子どもが気分転換できるように、(特に室内での活動は)もう一ヶ所場所をとっておくべきだった。
- ・ 野外で活動する時は、危険な場所がないか、移動する場合はどのくらい時間がかかるのかなどを知るために、予め下見が必要だと思った。
- ・ 天候に応じて場所の移動がしやすいように、できるだけ近くに他の活動場所を考えておく方が良かったと思った。

子どもとのペアについて

- ・ できる限り学生と子どものペアは固定で活動してきたが、学生がペアを組むことでその子どもの様子が分かり、又、子どもの方も学生に慣れてくれた点良かったと思う。
- ・ ペアを固定するのであれば、相手の子どもの情報があったほうが学生も安心できるし、子どもとの関係も深まるのではないか。

子どもとの関わりについて

- ・ 初めは、慣れてもらえるか心配だったが、何回か活動を一緒にするうちに関係が良い方へ向かっていった。しかし、子どもとの関係が深まっても、一線を引く(～はしてはだめなど)ところはしっかりしなくてはいけないと感じた。
- ・ コミュニケーションがうまくいかず、子どもの気持ちを汲み取ってあげられないことがあった。
- ・ 子どもと一緒に活動する中で、心が通じたと思える場面に合えたことが嬉しかった。

連絡・準備について

- ・ 学生スタッフの数を早めに確認して、活動の準備も分担し、協力して進めていくことが必要だと感じた。
- ・ 学生で勉強会を考えていたが、今年は出来なかった。必要を感じたら、自分たちで積極的に企画し動いていくことが大切だと思った。
- ・ 一回一回の活動について反省会をしても、その反省を活かせる場がなかった。不安な気持ちのまま活動を続けることになってしまったところがあった。
- ・ お母さん方との話し合いの場をもっと設ける必要を感じた。
- ・ もっと多くの学科からもスタッフとして参加してほしい。そのために活動を知ってもらうことや、呼びかけが必要である。

全体を通して

一年間この鉄腕アトム的活動を行ってきて、私たちは多くの学びを得た。そして、同時に新たな課題が見えてきた。子どもとペアを組み継続的に関わってきたことを通して、子どもとの関係も深まり、もっとこの子のことを理解したいという思いが、今、学生の中には強くあると思う。目に映る活動(計画した活動)について、内容を練ったり、どんな点に注意する必要があるか考えることをベースにして、見えにくい活動(計画通りにいかな

い場合)を、どれだけ考慮できるかということや、臨機応変に対応する力を身につけていく必要があると思った。又、子どもたち一人ひとりに対して、その子どもに合った課題はどんなものがあるか、どんな関わり方が子どもの良いところを伸ばすのかということをも具体化していくことで、学生も、子どももお互いに充実した活動ができるのではないかと思った。

(障害児教育専攻 3年 小島澄)



4 プラザ キャンパスプレーパーク

1. プレーパークとは

最近全国で広がりを見せるプレーパークのさきがけは東京世田谷の羽根木プレーパークなどである。そこには通常の公園にあるような禁止事項がない。子どもたちの自由な遊びを可能にし、遊びの広がりをお大切にするためである。『自分の責任で自由に遊ぶ』をモットーにし、子どもたちが様々な遊びができる環境を作っている。また、プレーリーダーという大人が常駐しており、遊具を整備し、遊びを見守り、時には子どもの代弁者として周囲の大人に呼びかけたりと、遊びの環境を整えている。(教育実践科学専攻 3年 西絢平)

2. キャンパスプレーパークについて

キャンパスプレーパーク(以下プレパ)は2001年4月28日にオープンした。毎週木曜日(午後3時から5時)、土曜日(午前10時から午後5時)の週2日、大学内のグラウンドで開かれている。ここでは、『自由な遊びを可能にする空間』、『自ら遊びを作り出す空間』、『地域の人々が気軽に集える空間』のこれら三つの空間をお大切にしようとしている。

『自由な遊びを可能にする空間』にするため、羽根木プレーパークにならい、『自分の責任で自由に遊ぶ』をモットーにし、禁止事項を取り払うことで実現しようとしている。子どもたちは、火や工具を使い何かを作ったりと、通常の公園ではできない遊びをする。もちろん危険はともなう。プレパでは大学生が『プレンジャー』という名称でプレーリーダーの役割を担っている。プレンジャーも危険だからといってその遊びを止めることはしない。どうしても危険が度を越えた場合に止める。また、プレンジャーは前もって危険な遊具、場所について考え、改善したり、注意を促すなどの対応をしている。

『自ら遊びを作り出す空間』にするため、こちら側から遊びを与えることはしない。プレンジャーは遊びの指導者ではないので「今日は～をしましょう」ということはプレパでは行わない。さらに、材木業者の方から頂いた廃材が置いてあり、子どもたちはそれぞれの思い思いの遊び方を発見し、楽しめるようにしている。一昨年オープンした頃、子どもたちの中には何をしてお遊んでいいのかわからないというような子も見られたが、最近では自分から遊び、プレンジャーが加わることなしの遊びも見られる。

『地域の人々が気軽に集える空間』を作るために子どもたちだけでなく、保護者の方も来るきっかけとなるように親の会などのイベントを行った。最近では、お母さん同士が話している場面や犬を連れてのプレパへの散歩などが見られた。

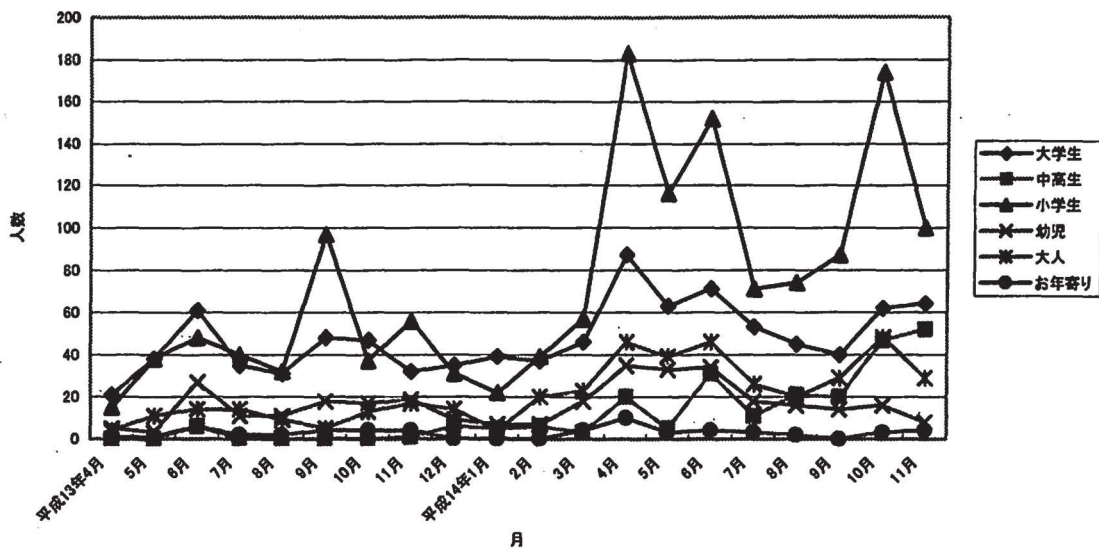
上に述べたような三つの空間を作り、保つことがプレンジャーの役割である。例えば、道具・遊具の整備、運営、人間関係の橋渡し役など様々だ。ケガをしたときの応急手当も大切な役割だ。また、プレンジャー自身が自ら楽しんで遊ぶことも子どもたちの遊びを広げる助けとなる。遊びの楽しさを伝え、子どもの遊び心を刺激する。しかし、その遊びが子どもに楽しそうに見えるかどうかというのはその時々で、プレンジャーの遊びに子どもが加わってくることもあれば、自分で他の遊びをしたりもする。

自由なのだ。この自由こそがプレーパークの大きな特徴であるとお考える。

(教育実践科学専攻 3年 山口真史)

3. 参加数の変遷

キャンパスプレーパーク参加者数の変遷



平成13年度と比較して、全体的な参加者数は増加している。小学生については、昨年度から参加している子どもたちが継続的にプレーパークに足を運ぶ機会が増加したこと、また、特に増加の目立つ中高生と大人については、昨年度プレーパークに参加して今年中学に入学した生徒をきっかけに、プレーパークの存在が広まっていったことや、大人も気軽にプレーパークに立ち寄ることのできる雰囲気が出てきたからであると考えられる。このような昨年度からの参加者数の変遷は、地域の中でキャンパスプレーパークの存在が次第に広まり、定着しつつあることを表している。これは何物にもかえられない財産であり、ここに至るまでに休むことなく活動を続け、そこに集まってくる子どもたちや地域の方と少しずつ信頼関係を築いてきた結果が、こうして数値としても残っているのだ。今後も、キャンパスプレーパークが地域の一部となって、地域の子どもから大人までが集い、笑顔があふれる場所になることを期待する。(教育実践科学専攻4年 清水美香)

4. キャンパスプレーパークでの遊び

2002年4月から10月にかけて、よくされた遊びとしては、ボール遊び、虫取り・草遊び、タイヤ・ジャングルジム・ドラム缶などでの遊び、畑仕事・草刈り、火遊び、工作、料理、鬼ごっこ・ケント・だるまさんが転んだなどであった。2001年の夏は、友たち同士で来て、数人ごとに遊んでいるだけであったが、2002年夏には、もともと知っている子どもだけでなく、プレパに来ている子どもみんなで一緒に遊ぶようになった。遊び内容も、一人遊びのものから、ボール遊びや、鬼ごっこ・ケント・だるまさんが転んだなど、大勢での遊びへと変化していった。小学生と中学生が混じって遊ぶ姿も見られるようになった。

2002年4月からは、プレパに菜園を作り、野菜を育てて、その野菜を使って野外料理をするようになった。また、「長野マラソン給水ごっこ」や「みかん」というジャングルジムでのじゃんけん遊びなど、子どもたち自身で作り出した遊びがよくみられた。

(教育実践科学専攻4年 岡部桂子)

5. イベント

<“キャンパスプレーパーク1歳!”バースデーパーティー□(4月28日)>

4月28日、プレパは1周年を迎えた。当日の朝は、試行錯誤しながらくすだま作り。大人が2、3人立って入ることのできるような大きなダンボールに風船をつめこんだ。午後になり、常連の小学5年生のT君による司会でバースデーパーティーが始まった。小学5年生のMさんのリコーダーにあわせて“ハッピーバースデー”をみんなで歌い、ジャングルジムの上で午前中に作ったくすだまを割った。みんなで牛乳パックを使ってケーキを焼いた。また、日頃から協力してくださっている遠藤さんから、巨大なケーキもプレゼントしていただいた!プレパ1歳のバースデーは、にぎやかな手づくりのパーティーとなった。

<親とプレンジャーの会(6月15日)>

プレパの趣旨を伝える場がない、大学生の立場からでは分からないことも多く、保護者の方の考えを聞きたい、仲良くなりたい、一緒に作っていききたい...などの思いから、この会を開くことにした。午前中に子どもも参加した焼肉パーティー、午後から親とプレンジャーでお話タイム、という日程で行なった。焼肉パーティーには普段あまりお話することのできない方も多く参加してくださり、にぎやかに楽しく過ごすことができた。しかし、焼肉パーティーが終わると、残念ながらほとんどの方が帰ってしまわれた。残ってくださった方とプレンジャーでのお話タイム。非常に少ない人数ではあったが、普段はなかなかできない話をできてよかった。人数が少なくなってしまったのは拘束時間が長くなってしまったからではないかと推測する。この反省を生かし、多くの方と話をする場をもちたい。

<七夕(7月4日、6日)>

近所の方から笹をいただき、みんなで飾り付けをした。どんどん増え続けるみんなの願い。子どもより、大学生や保護者の方が真剣に短冊を書いていたのは気のせいだろうか。現代では七夕まつりをするのが少なくなり、由来を知らない子も多いように思う。そこで、七夕がどんな意味を持っているのかを紙芝居で紹介した。いつも元気に暴れ回っている子たちが落ち着いて聞き入っていた。このような雰囲気でのプレパも良い。

<ハロウィン(10月31日、11月2日)>

ハロウィンのイベントでは、子どもたちは、あらかじめ思い思いの衣装を自分たちで作って、それを着て、大学内の研究室や、地域の方の家に「trick or treat!」と言いながらいろいろなところをまわった。その他、大きなかぼちゃでジャックオーランタンをつくったりと、ハロウィンを楽しんだ。このイベントは地域の方々の協力なしには成り立たなかった。伺った家では、子どもたち一人一人にかわいいお菓子を用意してくださっており、子どもたちが来るのを楽しみに待っていてくださった。このような、地域の方々の協力が、私たちの活動の大きな力となり、地域で子どもを育てようとする気持ちこそが、子どもの健やかな成長につながるのだと実感した。クリスマスに、ハロウィンのお礼を込めて、クリスマスリースを一軒一軒に配ったときも、たいへん喜んでいただいて、改めて地域の方の暖かい気持ちに触れることができた。地域の方との関わりは私たちにとって、たいへん重要な、そして楽しい思い出となった。

<どんど焼き(1月9日、11日、13日)>

今では、大人主催で行われているどんど焼きであるが、昔は、子どもが競い合っしめ飾りや門松を集めて山にし、その高さを競ったという。このような話を近所の方から聞き、大変興味をもった。9、11日は西長野地域をまわってしめ飾りを集め(11日には近所のお

じさんに昔のどんど焼きの話もしていただいた)、13日には加茂神社で行なわれるどんど焼きに参加した。「昔のどんど焼きを復活させたい!」との思いからはじめたこの企画であるが、子どもたちの中にしめ飾り集めへの興味がほとんどなく、話だけではなかなかのってこない。「行きたい!」と言った数人の子と、プレンジャーで地域をまわることにした。

地域をまわっていると、「どんど焼きかい?」と声をかけてくれるおじさん、予告もなく伺ったにもかかわらず快くしめ飾りを出してきてくれる方々、温かい地域の方にたくさん出会うことができた。

加茂神社で行なわれたどんど焼きの当日は、西長野地域の方々がたくさん参加されていた。ほとんどが初めて会った方々だったにもかかわらず、温かく迎えてくださり、楽しくお話しすることができた。普段は道であっても話などしない、地域の方々であるが、話してみるととても楽しい。このように話す機会が増えていくことで、地域での生活が楽しくなることを強く感じた。また、それは、地域の教育力の向上にもつながるであろう。

<プレ8会(毎月7日前後)>

プレ8会はなんとというか言葉ではうまく説明しづらいのだが、プレパをよりよくしていくためにみんなで話し合おうという場である。でも会議のように堅苦しいものではなくてみんなで食べ物を囲んで楽しく様々な意見を出し合おうというものだ。みんなで楽しく話し合うことによって、スタッフ同士が仲良くなり、何かプレパ内でイベントをやろうとするときや、何か困ったことがあってその解決方法などを話し合うときに、話しやすくなり、いい意見も出しやすくなるという...要するに楽しくプレパについて話し合う場なのである。プレ8会には学生だけでなく、高校生も社会人も参加してくれる。だから学生の偏った意見だけでなく様々な見方により意見が交わされ、プレパ向上のためにみんなで意見を出し合おうというものである。毎回の食べ物もその季節にあったものや、自分たちが食べたいものなど様々で、毎回楽しく行っている。

(教育実践科学専攻 4年 小黒あかり、2年 原かつ江)

よく遊びに来る高校生、高橋賢伍くんのプレーパーク

この間、プレーパークに来ている中一の女の子とマジ喧嘩をした。プレパ史上歴史に残る悪代官の僕と反抗期真っ只中の女の子の喧嘩...お互い絶対謝らない。普通なら「俺のほうが年上だから。」そんな理由で僕が謝るべきなのかもしれない。しかし、プレパにはこの「普通」という概念がない。事実、子どもも大人も凶太い奴ばかり。悪代官の僕を前にしても、ビビるどころか、まるで水戸黄門にでもなったかのように悪党成敗を目論んでいる。僕はそんな「中途半端な優しさ」を必要としない子ども達が大好きだ。(死んでも本人達には言わないけど)昔見ていたドラマの主人公が妙なことを言っていた。本当の友達ってのは、相手の悪口十個言っても、一緒に酒飲んでくれる奴だ。僕はプレパの子ども達とそんな関係を築きたい。むしろ築けた気がする。

話は変わるが、プレパでは様々なことを学ばせてもらった。自分自身、成長できた面が沢山あって、本当に感謝カンゲキ雨嵐。経験豊富な地域の皆様、every Saturday 面倒見て下さった大学生の皆様、Fantasista の子ども達、一緒に「楽」を求めたみんなありがとう! Thank you!

6. 二期目のキャンパスプレーパーク

私たちのプレパは今年で二年目を迎え、様々な変化がおこり、一年前にはない新たなプレパへと成長を遂げました。先に説明したように様々なイベントをしたり、畑ができたりしました。畑ではイチゴやナスやきゅうり、ししとうの苗が植えられ、思うように育たない作物もありましたが、“プレパ野菜”が誕生しました。このように、第二期プレパは変化を遂げていきました。しかし、変化をとげたのはプレパだけではありませんでした。何よりも変化を遂げたのはプレパにやって来る人々の意識や様子であったと思います。

平成14年4月から学校週五日制がスタートとなり、土曜日のプレパはたくさんの人々が集い、とてもにぎやかになりました。広いプレパに、ぽつんと一人の学生がやってくる子どもたちを待っているようなことはなくなり、むしろ、寝坊をしてオープン時間に遅れてきた学生を子どもたちが待っていることもしばしばありました。

たくさん子どもたちであふれるプレパでは、以前は学生にべったりだった子どもたちも、今では学年も、通っている学校も異なる子どもたち同士で、彼ら自身が中心となり、楽しそうに遊んでいる様子を度々見かけます。プレパでは『ケント』という遊びが流行しました。この遊びでは、鬼は隠れている人を見つけたときに「〇〇ちゃん、みーっけ！ケント！」と大きな声で叫びます。時折、「青い服着た人、誰？分かんない！みーっけ！」という声が聞こえてくるときがあります。このゲームにはプレパにいる人なら誰でも参加できるゲームなので、名前が分からな場合もあります。名前や通っている学校や学年がわからなくても、仲良く遊ぶことができるのだと感じた瞬間でした。

プレパにやってくる人々の顔ぶれもバラエティー豊かとなりました。バスに乗って遠くの幼稚園からはるばるやって来たちびっこたち、乳母車を押しながらやって来るお母さん、輪をなして学校のことや恋愛の話で盛りあがっていたり、少し大人ぶってみたり、悪ぶってみたりしている中学生たち、犬をつれたおじいちゃん、幼稚園の男の子がひとりだけでやってくることもあります。大学の先生方も顔を見せてくださり、ハロウィン・イベントの時に大変お世話になりました。そして、子どもたちのお父さんやお母さんたちがたくさん足を運ぶようになりました。世間話をしたり、いっしょに野外炊飯をしてごはんを食べたりと、まるで“長野の父、長野の母”のようです。このように、子ども同士だけでなく大人の同士の関わりもあるプレパが展開されていきました。

二年目プレパは、全てのことが良い方向に転じたわけではありません。子どもたちもプレパに慣れた反面、道具類の扱い方が雑になってしまったり、学生との仲が親密になるあまり、ことば遣いや礼儀などがおろそかになりがちでもありました。また、学校週五日制のスタートにより、子どもたちが午前中からやって来て遊びに夢中になるあまり、昼食を摂らずに午後まで遊ぶこともありました。そんな時は、保護者の方へ便りを送ったり、親との話し合いの場を設けたりと、学生だけで解決するのではなく、プレパに関わる人々の手で解決を試みました。こういった点からも、“学生がつくるプレパ”から“みんなの、みんなで作る、みんなのためのプレパ”となったといえます。さまざまな人たちが集い、子どもたちのお父さん・お母さん、地域の人々のご協力により、多くの企画を実現させることが出来ました。

第三期のプレパはどのような成長を遂げていくのでしょうか。プレパは子どもたちだけでなくプレパに集う多くの人たちの成長の源となり、そしてプレパ自身もそこに集う人々の思いによって、成長していくに違いないはずです。(生活科学教育専攻 3年 蓼沼夏子)

7. 私とキャンパスプレーパーク

「プレバが教えてくれたもの・・・」

まさに運命の出会いでした。まさかこんなにプレバの日が楽しみになるなんて想像もしなかったのに、今ではすっかりプレバの虜。夏は水浸し、冬は泥だらけになりながら全力で子どもと戯れる楽しさはプレバならではのもの。本当にやみつきです。

と、こんなふうに一人前のプレンジャーを気取ってみる私ですが、まだまだ半人前以下でいろんな方のお世話になりっぱなしです。

私の場合、運命の出会いといいながら最初からプレバが大好きだったわけではありませんでした。最初のころはプレバに来て何をしてよいのかわからなくて、「何をしたらよいのでしょうか」といろんな人に聞いて回りました。人見知りをして、反省会にも理由をつけて出なかったことがありました。しかし、そんな私に優しく手を差し伸べてくれた方々のおかげでプレバに行くのが楽しみになり、

反省会に出られるようになり、プレ8会にも出られるようになり、自分の考えを人前で言えるようになりました。

子どもたちも名前を覚えてくれて、プレバ以外の所でも声をかけてくれたり、「遊ぼう」と誘ってくれるようになりました。さらに、子どもだけでなく保護者の方々や高校生、地域の方々など、プレバに来なかったら出会うことのできなかつたであろう人たちとも出会うことができました。1年目でこんなに素敵な出会いができたので、来年はもっともっとこの素敵な出会いの輪が広がればよいと思います。そして今度は自分が誰かの素敵な出会いのきっかけとなれるよう、プレバを続けていけたらいいなと思っています。

(社会科学教育専攻 2年 石関千絵)

「プレバとあ・た・し」

こうして二年目の終わりを目前にして、あらためて自分にとってプレーパークとは一体なんだったのかと考えてみる。しかし、いくら考えてみても上手い表現の方法が見つからない。その理由はいたって簡単、自分にとってあってあたりまえというくらい身近なものだったからだ。自分にとってプレーパークは生活の一部になっているといっても過言ではないくらいだと思う。

木曜日の午後、土曜日は一日中プレーパークにいてそこに遊びに来る人たちと楽しく過ごす事がとても好きだった。友人がプレーパークに私がいるところを見かけると「よくやってるよね」とか、「えらいよね」という事をよく言っていたが実際はそうではなく、自分自身遊ぶ事が大好きで、子どもが好きで、いろんな人と話をするのが好きだから、そこにいるのである。「誰かのために」とか、「やらなきゃ」というような気持ちがあるわけではなく、単純に「自分が楽しいから」、というだけなのである。どこかから「そんな事で良いの?」という声が聞こえそうだけれども、プレバはそういう場所でいいのだ。誰かがふらっと立ち寄ってそこに誰かがいれば一緒に遊んで、話もして、たまにはケンカもして。大きな怪我などは困るけど、そんなみんなの“自由”がある場所、それがプレーパークだ。だからこそ、私も二年間も楽しませてもらったのだと思う。最近では地域に大きな輪が広がって、ハロウィンやどんど焼きというイベントもできるようになった。こんな広場がいつまでも続けば良いな、と最近よく思う。もし、自分に子どもができてそのときにまだプレバが残っているようなら、必ず遊びに行かせようと思う。きっとその子もプレバが大好きになると確信している。

(理数科学教育専攻 4年 西澤俊輔)

5 プラザ ふれあいプラザ

1. 5 プラザをやろうと思った動機

このふれあいプラザの一番の目的は、「地域のコミュニティ形成」です。今日、同じ地域に住む人と人とのつながりが薄くなってきていると言われていています。そこで、スポーツやキャンプを通じて人と人とのつながりをつくりたいとおもい、このふれあいプラザをつくりました。YOU遊広場の活動は、子どもとの交流が多いわけですが、このプラザでは子どもからお年寄りまで、様々な年齢層の方々が参加してくださいました。近頃、他人の子どもを叱ることのできる大人がどれだけいるのでしょうか。このプラザの活動に参加してくれた子どもは親子での参加がほとんどでした。親と一緒に参加というと、たいてい子どもの面倒を見るのは親かあるいはスタッフの学生です。そうではなくて、他人の家の子どもも自分の子どもと同じように大切にしたり叱ったりしてほしい、子どももいつも親や学生とばかりいるのではなく、いろいろな大人の人とも関わってほしいという願いがあり、キャンプでは家族をバラバラにして新しい家族=班をつくって3日間を共に生活しました。

ふれあいプラザでは毎月第2・4金曜日にある毎月2回のスポーツ教室を中心に活動しました。今日、生活の便利化に伴った運動不足が問題となっています。そこで、子どもからお年寄りまで、誰でも楽しめるようなスポーツやゲームをすることで、参加者の方たちに身体を動かすことを日常化してほしいという願いがありました。また、毎回プログラムを考える際には、参加者同士がふれあったり、協力できるようなものができるよう工夫しました。

スポーツ教室もキャンプも、学生が全て考え、参加者はただ参加するというのではなく、みんなで作るふれあいプラザにしたいという願いがありました。実際にやってみると参加者にも企画に参加してもらおうということはなかなか難しいことでした。しかし、キャンプでは各班でオリジナルカレーをつくったり、班ごとで出し物をしました。スポーツ教室では参加者の方が自ら紙芝居や絵本を読んでもらったり、歌やリコーダーの演奏をしてくださるようになり、そこからおたのしみコーナーというのができました。そして、最後にやったクリスマス会は、ケーキづくりからはじまって、プログラムは全て参加者の劇やダンスなどの出し物で、私たちがしたことといえば会場などの準備くらいでした。また、各家庭から一品料理を持ち寄って、よそ行きではなく、とても温かい雰囲気ですべての活動を終えることができました。

地域のコミュニティ形成を目的に活動してきたふれあいプラザですが、このように子どもも大人も学生もみんながふれあうことができたのも参加者の方々のご理解があったからだだと思います。今後、さらにこのふれあいの輪が広がっていったらと思います。

(地域スポーツ専攻 3年 藤本晃子)

2. スポーツ教室（毎月第2・4金曜日）

場所：信州大学第2体育館

①活動内容

活動日	参加者数	スタッフ数	内 容
5/24	19	18	<ul style="list-style-type: none"> ・ 動物当てゲーム ・ 人間知恵の輪 ・ ネームキャッチ ・ 円陣風船パス
6/14	21	19	<ul style="list-style-type: none"> ・ ストレッチ ・ ネームキャッチ ・ キックベース
6/28	20	18	<ul style="list-style-type: none"> ・ しっぽとりゲーム ・ 円陣風船パス ・ バレーボール
7/12	17	15	<ul style="list-style-type: none"> ・ 金太郎ゲーム ・ 風船列車リレー ・ フォークダンス
7/26	19	13	<ul style="list-style-type: none"> ・ ブラジル体操 ・ 靴飛ばし ・ サッカー
10/11	14	13	<ul style="list-style-type: none"> ・ ストレッチ ・ まとあてリレー ・ 王様ドッジボール
10/25	17	12	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボール渡し ・ 人間ストラックアウト ・ キックベース
11/8	17	10	<ul style="list-style-type: none"> ・ 団体からだジャンケン ・ こおりおに ・ 人間知恵の輪
11/22	19	13	<p>【運動会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ しっぽとり ・ 玉入れ ・ 箸でピンポンリレー ・ ペットボトルムカデ競争
12/13	25	16	【クリスマス会】

②活動を通して

プログラムを考えると、一番に考えたことは、子どもから大人までが楽しめるということです。そのために、出来るだけ簡単に楽しくすることが大切であり、またそれがわたしたちにとって最も難しいことでした。そして、実際にそのプログラムをやってみると、子ども達の元気さやもっとやりたいという様子が多く、少し大人が遠慮してしまうことがあったように思います。進行についても、これらの状況をまとめることが難しかったです。

今後については、プログラムの作成にあたって、その対象を絞り、その対象にあった内容を考えるべきだと思います。また、出来るだけ簡単なルールで、もとあるスポーツも提供していければ内容の幅も広がると思います。(野外教育専攻 2年 世古じゅり)

プログラムも決まって本番で私たちスタッフが一番悩んだことはなかなか計画通りにプログラムが進められないということでした。スポーツが大好きな子どもたちはスタッフの説明をじっと聞いているのが退屈で数名がどんどんあちこち走り回っていきます。「集合して～」といってもなかなかしてくれないし、「並んで～」と言ってもそう簡単には聞いてもらえません。終わりの掃除なんでもってのほかです。こんな状態がしばらく続きました。

毎回活動が終わって参加者を送り出した後、スタッフで反省会をしました。活動の終わりに参加者に書いてもらった振り返りシートを見ながらよかったことや次回に向けての反省会を行いました。そこでは他のプラザを中心に活動しているスタッフの意見や提案もすごく参考になりました。活動を行う当日までの準備が不十分だということや、どんな活動を行うか参加者がわかるように黒板に書いておくということなどです。このような反省会で出た意見を次の活動でちゃんと活かされていたのではないかと思います。

活動も回を重ねるごとに、はじめは自己中心的な面が目立っていた子が、自分の思いを我慢して他の友達に活動の中心的な役を譲っている姿などが見られるようになり、全体としてまとまったものになっていきました。様々な人との関わりや経験の中で、子どもたちも成長し、たくさんの大事なことを学んでいっているのだと感じました。私たちはスポーツを通して子どもだけではなく、地域の様々な人とふれあうことを活動の中心に据えていましたが、はじめは緊張もあり、スタッフも子どもの方にばかり気を取られ、保護者の方と積極的に関わることが出来ていませんでした。しかし、活動を重ねることによって互いに打ち解け合い、いつの間にかすごく大きな家族のように、誰とでも気兼ねすることなく話せるようになりました。またこのように活動がまとまっていったのは、参加者の方々の力が非常に大きかったと思います。はじめのうちは、スタッフがすべてプログラムを決め、その指示や説明通りに参加者も活動するという感じでしたが、チームでの活動等を通して参加者同士が意見を交わしたりするようになり、その日の活動をより楽しめるように、工夫しながらみんなで作り上げていくようになりました。最後の方では、参加者の方からの提案で活動の残り 10 分くらいを使って絵本の読み聞かせをしたり、リコーダーの演奏をしてくれたり、地理の学習をしたりするようになりました。このようにスポーツということにとらわれすぎずに、活動を通して様々な人と「ふれあう」というこのプラザの一番の目的を達成することが出来たと思います。(言語教育専攻 2年 原山いずみ、天保奈津子)

3. キャンプ

場所：長野市青少年錬成センター

日時：8月16日（金）～8月18日（日）

①活動内容

3日間の日程

8月16日（金）	8月17日（土）	8月18日（日）
<p>開会式 11:30～</p> <p>昼食</p> <p>レクリエーション アイスブレイクを兼ねたゲームで緊張をほぐす。</p> <p>富士の塔ハイキング ハイキングやゲームを通して班ごとの絆を深める。</p> <p>夕食 センター食堂にて。</p>  <p>交流会 歌・ゲーム・各班による出し物 山口組 ドッカンドッカン！ きりんさん ワイワイ動物園 3ぱ～ん 限界に挑戦！ おっちゃんです クイズ大会</p> <p>就寝 センター内にて。</p>	<p>選択クラフト キーホルダー作り・草木染めのどちらかを選んで作る。</p>  <p>うどん作り（昼食） 粉から作る、手作りうどん。</p> <p>フリータイム</p> <p>オリジナルカレー（夕食） 班ごとに工夫したカレーを作る。 山口組 プリンカレー きりんさん シーフード 3ぱ～ん 南国風カレー おっちゃんです 夏野菜</p> <p>キャンプファイヤー 火を囲んでの歌やダンス、読書会を通して、ふれあいを深める。</p> <p>野宿 テントの中で就寝。</p>	 <p>スポーツ大会 靴とばしゲームやスイカわりを通し、参加者同士の交流をより深める。</p>  <p>振り返り メッセージを色紙に書き、キャンプの思い出として残す。</p> <p>閉会式 3日間を振り返り、まとめをする。</p> <p>参加者解散</p>

②活動を通して（振り返りシートより）

【スタッフ】

- ・ 子どもだけでなく、大人や、お年寄りまで参加する初めてのキャンプでした。参加者の年齢層が幅広いので、安全面や、プログラムなど、気を使うところが多くありました。
- ・ 参加者が積極的に、参加者同士、スタッフとコミュニケーションをとっていました。
- ・ スポーツ教室を通して築いてきた世代間の輪が、キャンプでさらに、大きく強くなったと思います。
- ・ 偶然スポーツ教室に集まった仲間が、偶然キャンプに参加して本当の仲間になれました。
- ・ 自分の家の子もそうでない家の子にも同じように接している姿に感動しました。
- ・ これまでも一緒に活動してきたのだからキャンプを参加者の方ともっと一緒に作れたのではないのでしょうか。
- ・ 逆に全く関わってない人もこられる環境も作れたのではないのでしょうか。
- ・ キャンプのスケジュールに余裕があり、融通がきいて、よかったと思います。

【参加者】

- ・ 今回の参加で、子どもが育っていく上で大切なことは、楽しく明るい家庭環境作りだと改めて感じました。（大人）
- ・ 新しい家族を作った班での行動で親子一緒にないことに不安でしたが、いつまでも心配していたのは親の方だけだったと反省させられました。（大人）
- ・ 改めて大勢の人たちと一体となることで楽しさが倍になり、苦労を分かち合うことのすばらしさを痛感しました。（大人）
- ・ 子どもは社会の中で育つもの、未来担う子どもたちは、親の宝物であると同時に、社会全体の宝物であることを思い出させてくれました。（大人）
- ・ ながしうどんをほうちょうで細く切るのが難しかったです。（子ども）
- ・ キャンプファイヤーの火をつけるのは、きんちょうしたけど、やってみておもしろかった。（子ども）
- ・ ハイキングはつかれたけど頂上の景色がきれいだったので、登ったかいがありました。（子ども）
- ・ お母さんとはなれていたけど、みんながいたからたのしかったよ。（子ども）
- ・ ほくが考えたカレーを実際に作れてうれしかったです。（子ども）
- ・ 来年もみんなでこれたらいいなとおもいました。（子ども）

（教育実践科学専攻 2年 富田佐和子、三浦知子）

4. ふれあいプラザとしての活動を通して

ふれあいプラザの第一期の活動が終わった。多世代交流を目的とし、月に二回のスポーツ教室を中心に夏にはキャンプ、冬にはクリスマス会と幅広い活動を行ってきた。幅広い年齢層の人たちみんなが楽しく交流するにはどうしたらいいか頭を悩ませながら、スタッフは常に考えてやってきた。しかし、そうやって一生懸命考えたプログラムも本番では失敗することがほとんどだった。何がいけないのだろう、何が足りなかったのだろうと終わったあとにはスタッフが集まって必ず反省会をやっていた。そんな地道なことを繰り返してきたおかげで、ここまでやってこられたのだと思う。

そして、僕たちの活動に参加してくれた人たちが支えてくれたことも大きなことだった。ただ活動に参加してくれたのではなく、スポーツ教室のときには紙芝居を読んでもくれたり、キャンプやクリスマス会では歌や踊りをやってくれたりして、逆に僕たちを楽しませてくれた。これは僕たちが活動を企画する上で参考になったことも多かった。

年齢関係なく楽しく交流することができた。まだまだ課題は多いが、ここまで継続してやってこられたことは自信にしていると思う。これまで地道にやってきたことを忘れないでこれからもやっていくことが大切なことだと思う。

「来年もやるんだろ？ようやくいい形になったじゃないか。これからだろ。」最後のクリスマス会の際に、ある参加者から僕がかけられた一言である。ふれあいプラザはまだ始まったばかり。これからどんな「形」になっていくのか、ふれあいプラザの一員として楽しみである。

(教育実践科学専攻 3年 西絢平)



6 プラザ おでかけプラザ

1. おでかけプラザの活動方針

おでかけプラザは、さまざまな小学校や公民館でお父さんやお母さんによって企画されている子どもたちの遊びの場に出向いたり、また私たち学生が中心となって遊びの内容を考え子どもたちとさまざまな活動をしたりしています。おでかけプラザは、参加する学生がそれぞれの目標を持ち、その目標に向かって自分自身を高めていくという方針のもとに活動を続けてきました。

2. 1年間の活動

月	日	活動内容
4月		平成14年度活動計画・話し合い
5月	11日	湯谷子どもランド (レクリエーション)
	25日	湯谷小親子ランド (たけのこ汁作り)
6月	1日	湯谷小親子ランド (ガーデニング) 山辺中学校ドリーム大学
	8日	湯谷子どもランド (うどん作り)
	22日	小市育成会親子レクリエーション
	29日	浅川子ども広場 (カレー作りと遊び)
7月	6日	山辺中学校ドリーム大学
	13-14日	湯谷子どもランド (キャンプ in 妙高少年自然の家)
	19日	湯谷小親子ランド (花火大会)
	27日	湯谷小親子ランド (吉田びんづる参加)
8月	24日	湯谷子どもランド (魚釣りとバーベキュー)
9月	7日	山辺中学校ドリーム大学
	14日	湯谷子どもランド (ブーメラン作り)
	28日	湯谷小親子ランド (シャボン玉・木を使って箱を作ろう)
10月	12日	湯谷子どもランド (ハイキング?? in 小布施ハイウェイオアシス)
	26日	湯谷小親子ランド (縄文式パンと焼いも大会)
	27日	浅川子ども広場 (豚汁・おにぎり作りと遊び)
11月	9日	湯谷子どもランド (オリエンテーリング)
	16日	湯谷小親子ランド (手品を教えてもらおう)
12月	14日	湯谷子どもランド (クリスマス会)
	21日	浅川子ども広場 (シチュー・ケーキ作りとクリスマス会)
	28日	湯谷小親子ランド (しめ縄作り)
1月	25日	湯谷小親子ランド (バザー)
2月	8日	湯谷子どもランド (段ボールで家を作ろう)
	22日	湯谷小親子ランド (五平餅作り)

3. おでかけプラザに参加して得たこと

【小市育成会親子レクリエーション】

「けーちゃん、一緒に食べよ。」半日の活動を終えた後、何人もの子どもと一緒にお日余を食べようと誘ってくれました。何よりもうれしかった言葉でした。たった半日、一緒に遊んだだけで多くの子どもたちと友達になれたことが、私の中で一番大きな収穫でした。小市育成会とは、継続的な関わりはなかったため、参加したスタッフ誰もがはじめて会う子どもたちといかに早く仲良くなり一緒に楽しめるかが大きな“カギ”となった。しかし、その“カギ”に対して私には大きな不安がありました。それはこれまでの活動を通して感じてきたことだったのですが、私は子どもたちとの距離に縮めるのに時間がかかります。「はじめまして」の挨拶の後が続かずに、何を話せばいいのかとか、どんなことをして遊ぼうとか考えすぎてしまうのです。今回も体育館に子どもたちが続々と集まり始めてすぐは、不安でいっぱいでした。しかし、いざ始めてみると遊びに夢中になっていました。それは、「自分がどんなことをしてアゲラレルか」を考えるよりも「早く仲良くなりたい」という気持ちが強かったからではないかと思います。だからこそ半日でたくさんの友達ができました。この日の収穫をこれからも大切にしていきたいです。

(生活科学教育専攻 3年 田中慶子)

YOU遊広場の活動は、何を企画するときも、必ず対象に子どもという存在がある。ただこの時の活動は、初めてあう子どもたち、しかも120名余りという子どもたちとの活動であったことに大きな特色があった。全校児童といっても良いほどの子どもたちを前にして、いかに有意義な学生と子どもと親とのかかわりの場にするかが求められた。行って直ぐに、大きな課題が2つ見つかった。第1に、多くの子どもを目の前にしていかに彼らを楽しませるかということ。そして第2に、ゲームに参加することが難しそうな怪我をして車椅子に乗っていた男のこと、小さい幼稚園児に対する対応であった。第1の課題は、私にとって最も挑戦するのが億劫な課題で逃げてきた課題でもある。多くの子どもを「ワー」と集めて遊ぶのが余り得意ではないからだ。教育実習を目前に控え不安を抱えていた私に、小学校1、2年生の女の子が5、6人じゃれてきてくれた。初めて会った彼女たちと様々なゲームを通じて関わるたびに笑顔がこぼれ、他の子どもにも積極的に話し掛けてみることができた。「そうか。ゲームをしているとき、つまり、人と関わっているときの子どもの笑顔は素敵だな」こう思った。この時に得た「大勢の子どもの前でもいつもの自分で大丈夫」という思いが元になり、教育実習でも休み時間多くの子どもと遊ぶことができた。

第2の課題は、「ゲームに参加できないような状態の子ども」を予想していなかったために生まれた課題である。怪我をしていた彼はゲームに参加できずに、寂しそうにしていた。そんな彼に私は、積極的に話し掛けることはできなかった。あの時、もっと彼に関わることができたら。さらには、あらゆるこどもを想定した企画ができたら…と後悔の念が押し寄せた。この事から、その日の反省会では、臨機応変に対応することの必要性、さらには、企画は「対象が見える」時に初めて成立するものだということが話し合われ、その後は子どもの状況を事前に確認なることになった。

(生活科学教育専攻 3年 原山美樹)

【湯谷小子どもランド・湯谷小親子ランド】

おでかけプラザでは、その名の通り、いろいろな所におでかけしてきました。私は湯谷小親子ランドのたけのこ汁作りやガーデニング、湯谷小子どもランドではオリエンテーリングに参加しました。毎回毎回違った内容で、私自身とても楽しかったです。いろんな活動を通して子どもたちと接することができました。人見知りをしていた子どもが、料理で包丁を持ったらがぜん張り切っていたり、みんなで活動するよりも友達とはしゃぐ方が好きな子がいたり……。たった1日だけの活動といえども、子どもたちのいろんな面に出会うことができた気がします。また、子どもたちだけでなく、お父さんお母さん方とお話ができただけでなく、活動の内容によっては、子どもよりも親のほうが張り切っていてすごかったです。また、あるお父さんは「ほめる」ということについて熱心に語ってくれました。親の立場からの感じ方を聞いた貴重な機会でした。このような感じの活動でおでかけプラザの活動を楽しむことができました。

(社会科学教育専攻 2年 小原洋美)

私は、湯谷小子どもランドで子どもたちとうどんや豚汁を作ったり、ガーデニングの活動等に参加しました。その中で子どもたちが包丁を使ったり、お皿を洗うことを生き生きとしてやっていた姿が印象的でした。そして、ガーデニングでは、自分自身楽しむことができました。こうした活動を振り返ると、最初はどのようにやって子どもたちと関わったらよいか分からず、戸惑ってしまいましたが、先輩や友達からのアドバイスを生かし、少しずつ前進できたような気がします。

(社会科学教育専攻 2年 田島理沙)

とても大切な力を私にくれたこの活動は、自分にとってとても為になったと感じている。湯谷小子どもランドのキャンプ中、途中から雨が降ってきてしまい、場所を移動したりと大変でした。また、雨のためにキャンプファイヤーができなかったのが残念です。夜、室内ではがきを使った飛行機づくりをしました。それが始まるまでの少しの時間を急遽つながらなくてはならなくなり、とても困りました。これまでいくつかのキャンプを経験し、レクリエーションなどもやってきたつもりでしたが、いざというときにすぐにできない自分はまだまだ勉強不足で経験不足だと身にしみて感じました。ほんの一泊二日でしたが、子どもたちとの別れは自分が思った以上に寂しく感じました。

(地域スポーツ専攻 3年 藤本晃子)

湯谷小の子どもたちは明るくて元気な子達ばかりで一緒に遊んでいてすごく楽しかったです。(遊ぶというよりも遊んでもらうという感じでしたが……。) たくさんの元気を子どもたちに分けてもらいました。湯谷小子どもランドの行事で一番忘れられないのがオリエンテーリングです。この行事で初めて「引率」というものを体験しました。そして遠足などでの先生の大変さを初めて身を持って体験しました。早くゴールしたいと張り切る上級生と疲れて急ぐことのできない下級生にはさまれてどうしていいのかわからず、混乱の連続でした。しかし、上級生にそのことを伝えると納得してゆっくり下級生とゴールを目指してくれました。本当に素直で優しい子どもたちばかりだと感じました。むしろ私よりしっかりしていてどちらが年上かわからない状態でした。このように、私の初引率は幕を閉じました。他にも湯谷小の行事の思い出はたくさんあります。一生懸命やったガーデニングの花は枯らしてしまいましたが、私の中では大切な体験になりました。

(社会科学教育専攻 2年 長浜愛)

湯谷子どもランドに参加しました。子どもたちは回数を重ねるごとに自分を受け入れてきてくれ、そのことがすごくうれしく思いました。子どもランドには小学生だけでなく、その弟や妹がきていて、幼児とも関わることができました。幼児の一生懸命な姿も見ることができ、貴重な経験ができたと思います。

(生活科学教育専攻 3年 吉田祐紀)

私は主に前期に活動に参加させてもらいました。その中で感じたことや学んだことをについて述べたいと思います。お出かけプラザが他のプラザと違うのは、学生が主体となって企画したものではなく、地域の育成会などのイベントに参加し、子どもと触れ合う機会を持つところです。こういった形で学生が参加することの利点は、学生主体のプラザに比べると、多少学生の負担が少なくすむこと、また、多くの育成会の活動が土曜日の午前中ということから活動に参加しやすいということです。しかし、学生が主体でない分、各育成会の特色にあわせなければならないこともあり、歯がゆい思いをしたこともありました。それでも、子どもと仲良くなる過程はとても楽しく、保護者の方と話をすることができたり、一緒に参加した先輩方のかかわり方をまじかで学ぶことができたよい機会でした。先にも述べた通り、お出かけプラザは学生が主体となって企画するものではありません。最初のうちは学生がしっかりしなければいけないなどという勘違いで傲慢な責任感を感じてしまい、特色にうまくあわせることができず、ずいぶん悩みました。気疲れをして反省会にも身を入れて参加できなかったこともありました。そんな時、浅川小学校の育成会のイベントに参加する機会がありました。そのときに私は思い切ってあだ名をつけてみることにしました。今までは普通に名前でもらうようにしていたのですが、子どもたちにはなかなか覚えてもらえません。そこで、とある先輩に「猫に似てるよ」といわれたのを真に受けて、インパクトがあって覚えてもらいやすいように「にゃんこ」と名乗るようにしました。これだと子どもがすぐに覚えてくれてしかも周りに寄ってきてくれます。最近ではねこみみの帽子をかぶって子どもたちにさらになじみやすいようにしています。この試みは私にとってかなりの大成功でした。また、育成会にとっての学生の位置付けを考えると、学生は保護者と子どもの媒体なのではないかというところが気がつきました。保護者の立場でも子どもの立場でもない中間の存在。両者に寄り添えるけれどどちらでもない。それが学生の立場であり、存在価値なのではないかと思います。こう考えることで気持ちも楽になり自分なりのかかわり方を見つける糸口が見えてきたような気がします。親でも教師でもない利点を直接感じられる活動。それがお出かけプラザであると私は考えます。

(社会科学教育専攻 2年 石関千絵)

私はお出かけプラザでたくさんの活動に参加してきた。湯谷子どもランド、若里公園での子ども祭り、育成会が開いた親子レクリエーション、浅川公民館での浅川子ども広場などがある。その中でも私が一番心に残っているのは湯谷子どもランドである。第一期のときから湯谷子どもランドには参加をしていたが、第二期になって初めて活動をした日、私たちはみんな（子どもだけでなく親も）で遊ぶということを目指し、それができるレクリエーションをもっていった。それは今まで多くの子どもたちが遊んでいるにもかかわらず、子どもたちは2~3人のグループでしか遊んでいなかった。親は親同士で話しをして子どもたちと接してはいなかった。せっかく同じ場所で遊んでいるということを考えての企画だったが、急に全員で遊ぶということに子どもたちが納得いくわけがなかった。その日の子ど

もたちは、自分のやりたいことができないことへのストレスからか学生の話は全然聞かない、学生を叩く蹴る、落ち着かないという様子で私たちの企画はもの見事に失敗した。しかし私たちの狙いは間違っていない。その証拠に徐々に親のかかわりが増えてきたのと同時にみんなで何か同じことをするという企画に子どもたちものってきたのだ。そして夏のキャンプを通してより一層子どもたちは集団というものを感じとっていった。秋の遠足を私たちは企画をし、その中でグループ対抗のレク、全員でのレク、個人で自由に遊ぶという流れを作ってみた。今までのかかわりで私たちに友情や信頼を徐々に寄せてくれた子どもたちは、最後までぐちゃぐちゃになることなく遠足は終わった。そして今ではお父さんが遊びの中心となって子どもたちとかがわっている。第一期の時にはなかった光景である。これからは親と子どもたちが一緒になって活動をしていけたらと思う。これからの課題としては、子どもが何をしたいのかということと私たちが子どもに何を身につけてほしいかということのバランスをうまくとっていくことだ。これまでの活動は私たち学生や親の意向が強かったように思う。その影響で、少しずつ変わっていった環境に違和感が出てきたのか、活動に顔を出さなくなった子どももいるように思う。予定が合わなくて来られなかったのかもしれないが、子どもたちの中にこうなってほしいとかこのようなことがしたいというものが少なからずあると思う。その部分を引き出しこれからの活動にかしていかねばならない。学生・親・ほかの団体の方など多くの異なった環境の方と出会えたことで自分に多くの刺激があった。そういった機会が多くあるのはこのお出かけプラザだと思う。このプラザにかかわることができてよかった。

(教育実践科学専攻 3年 山本公三)

4. 反省・これからの課題

私たちが参加する活動のほとんどが、お母さんによって活動計画が進められています。最初は「遊んでくれるお兄さん・お姉さん」となってゲストのような状態でしたが、だんだん子どもたちの顔を把握していく中で、私たちを中心として活動が進められていくことが多くなってきました。それにつれて、お母さんたちと関わる機会も多くなって、お母さんたちが活動に対し描いているものがだんだんと見えてきました。

お母さんたちは毎回子どもたちが喜ぶ企画を考えていて、その企画を通して学ぶことが多くあったと思います。特に1年間を通した活動となった湯谷子どもランドや浅川子ども広場では毎回違った遊びや企画を考えていましたので、子どもたちが満足して帰っていく姿を何度も見ることができました。さまざまな企画は、子どもたちが満足するだけでなく、子どもたちのいろいろな面を見ることができます。子どもたちの得意分野を見つけ出してあげることが個性を伸ばしていくきっかけにもなることから、いろいろな企画は自己実現のきっかけとなります。料理や自然の中での遊び、工作などさまざまな分野にわたって企画が実現されてきましたが、その中からいろいろな子どもたちのよさを見つけ出し、伸ばしていくことができるということを学びました。

スタッフの参加状況や活動の様子を見ていく中で、お出かけプラザの方針「自分自身による目標設定と成長」に少し甘えてしまった部分があり、これらへの活動参加の目的が「成長」ではなく、「楽しみ」にのみ留まってしまったことはお出かけプラザの最大の反省点だと思います。活動を楽しむことは基本的な部分で、それがないと目標があっても見失ってしまいます。しかし、「楽しむことのみ」の活動ではお出かけプラザの価値がなくなってし

まいます。YOU遊広場の中に位置付けられているプラザである以上、自分自身の成長や学びを得るための活動であることを忘れてはいけないと思います。

またおでかけプラザは個人的な活動であるとともに、協力して遊びを企画し進めていくことも多くあったプラザでもあるので、学生間のコミュニケーションもしっかり図っていく必要があると感じました。

(生活科学教育専攻 3年 藤岡恵美)



7 プラザ ☆イベントプラザ☆

1. イベントプラザとは

今年度からできた新しいプラザである。幼児からお年寄りのまで年齢を問わずに楽しむことができる、1日単位のイベントを考えてきた。プラザ発足時に春夏秋冬と年4回のイベントを予定していたので、それぞれの季節を存分に体で感じ取ることのできるようなものにしたと考え、食事や場所について工夫を重ねてきた。食事はその時期に旬なものを、場所は景色や空気を直接感じることができるように、茂菅の農場や裾花川の河川敷を使用するなど、信州大学キャンパス内にとどまらなかった。また、イベントプラザは、他のプラザとの掛け橋という目的が当初からあった。今までプラザ同士のつながりが希薄だという課題があったためだ。そのため、イベントプラザは秋のイベントとして、YOU遊プラザの1年間の活動の集大成として行われる「第2回YOU遊フェスティバル」の本部という役割を担い、他のプラザと連携を取りながら中心的に活動したり、イベントを通して他の活動も知ってもらおうとしたりしてきた。日常生活では見逃してしまうような自然の風景や、意外としたことがないような経験を通して、異世代間交流、プラザ間交流が自然な雰囲気の中で行えたらいいなという願いがこのプラザには込められている。

2. プラザ長をやってみて

イベントの内容から、参加者募集、スタッフの振り分けなどをすべて自分たちで考えて準備しなければいけないことの大変さを痛感し、いつも時間に追われ、副プラザ長を初めスタッフのみんなには大変な思いをさせていたと思う。しかし、私はスタッフのみんなといろいろと意見を出し合いながら、イベントを作りあげていくことにこの上ない達成感と楽しさを感じていた。私自身、今まで何度もボランティアのキャンプスタッフなどを経験し、その経験を自分で形にしてみたいと考えていたからだ。1日のイベントという枠の中でどれだけのことができるのかを挑戦することができたと思う。そのために土井先生に突拍子もないような案を持ち込み、何度も却下されたこともあったが、それも良い経験であった。自分達がやりたいことを、現実に実行させることの難しさを身をもって経験することができた。例えば、夏のイベントでは川遊びがしたいということになったのだが、場所探しから始まり、使用許可を取る、上流のダムに放流日を教えてもらえるようお願いに行く、トイレを確保するなど、いくつもの手順と、様々な方々との連携で成り立っていることを知った。さらに、安全面、食事の衛生面も事細かにチェックしなければならず、その大変さは想像をはるかに越えていた。

それでもイベント終了後、「普段なかなか経験できないようなことができて親子で楽しめました」といった感想をたくさんいただくと、自分のしたことに達成感を覚えるし、次は何をしようかと考えることが楽しみになる。

まだまだ本当に年齢に関係ないようなプログラムが作れているか、プラザ間のつながりはよくなったかといった課題は残っていると思う。しかし、未熟ながらも参加者の立場になって真剣に考え、取り組むことによって結果はおのずとついてくる。イベントプラザは自由な発想で成り立っている。みんなの自由な発想を使ってこれからもっとよいものを作

っていったらと思う。

(教育実践科学専攻 3年 西村崇)

3. とれたて!

ハイ☆クッ☆キング ～花と緑 DE 楽しく Tea Party～

(1) 概要

イベントプラザの1回目の活動として、以下のような「とれたて!ハイ☆クッ☆キング～花と緑 DE 楽しく Tea Party～」を企画した。今回は春のイベントということで、ハイキングやクッキングをしながら春を感じてもらえるような企画を考えた。ハイキングは、自然を感じながら、2プラザ(信大茂菅ふるさと農場)が活動している茂菅ふるさと農場まで行きゲームをした。クッキングは、信大に戻りキャンパスプレーパークでタンポポ茶とよもぎ団子を作った。イベントプラザ初めてのイベントだったので、わからないことだらけだったが、参加者は年齢問わず募集したところ、50名以上の方の参加があった。

【日時】2002年5月12日(日) 10時～16時(9時半受付開始)

※雨天時、内容は変更しハイキングは行わず信大キャンパス内での活動。

【場所】ハイキング:茂菅ふるさと農場へ クッキング:キャンパスプレーパーク

【内容】春を感じながらハイキング、クッキングを楽しむ。

【持ち物】エプロン・三角巾・タオル・タッパー・おてふき・弁当・水筒・軍手・雨具・リュックサック・レジャーシート

【服装】動きやすい格好・運動靴・帽子

【参加費】一人500円(食費・雑費・保険料含む)

【タイムスケジュール】

9:30 受付開始

10:00 開会式

10:15 アイスブレイク

11:00 ハイキング出発(班ごと)

☆フィールドビンゴを

やりながら茂菅ふるさと農場へ

11:40 茂菅ふるさと農場に到着

・班ごと昼食

(○×クイズ、フィールドビンゴ)

12:30 茂菅出発

13:00 キャンパスプレーパークに到着

13:10 クッキング開始

タンポポ茶作り

よもぎ団子作り

15:10 試食タイム

15:30 片付け・帰りの用意

15:45 閉会式

16:00 解散

☆あくしゅ自己紹介

☆班分け(歌)

…親子バラバラにしての班編成

☆おもちゃのチャチャチャ(全員で)

☆タイフーン(全員で)

☆人間知恵の輪(班で)

(2) スタッフをしてみても感じたこと

春イベントはイベントプラザに参加して、初めての企画でした。何をどのように計画し、どのような準備をし、実行していったらいいのかわらなく、先輩たちについていくという形で参加させてもらった気がします。

私は子どもの頃このようなイベントにあまり参加したことがありません。今回スタッフとして関わってみて、初めて準備の大変さを知りました。準備というのは物的なものだけでなく、時間的な計画での準備、事前の教材研究など様々なものがあること、そしてその大切さを今回学びました。

実際には時間的に余裕がなく、スタッフに事前に連絡が十分に伝わっていないこともありました。また、親子別々の班にすることで、様々な人との交流ができたという意見がありました。しかし一方では、不安を感じていた子どももいたようです。

スタッフの中からも、目的や意識を高め、当日の流れをイメージできるよう把握していることが大切というような反省の声もありました。このようなことを踏まえ、これからの企画に役立てていきたいと思います。

(言語教育専攻 2年 萩原美樹)

4.

すいスイ

夏！まるかじりフェスタ

(1) 概要

イベントプラザの2回目の活動として、以下のような「夏！まるかじりフェスタ」を企画した。今回は夏のイベントということで、筆を使わず、草木や手で河原の石にペイントをしたり、スイカ割りや川遊びなど、暑い夏だからこそ楽しめる企画を考えた。また、川で遊ぶということで安全面にも気をつけるようにした。参加者は年齢を問わず30名ほど募集し、家族数11、小学生以下6名、小学生14名、大人9名の参加があった。

【日時】2002年7月20日(土) 10時～16時(9時半受付開始)

※川での企画のため雨天中止。中止の際は当日の朝、電話にて連絡。

【場所】裾花川河川敷(裾花小学校隣)

【内容】裾花川の河原で、石にペイントやスイカ割り、川に入っただの水遊び。

【持ち物】汚れても良い運動靴(川原が滑って危険なため)・水筒・タオル・濡れても良い服(水着等)・雨具・保険証・動きやすい格好・運動靴・帽子

【参加費】・一人500円、小学生以下一人200円(食費・雑費・保険料含む)

【タイムスケジュール】

9:30 受付開始
10:00 開会式
10:15 アイスブレイク
11:30 昼食
12:45 石にペイント
14:15 鑑賞
14:35 川遊び
スイカ割り
15:15 着替え
15:30 片付け
15:45 閉会式
16:00 解散

今回のイベントは、9時半受付開始で16時解散という予定であった。しかし、10時すぎに来られる方が多かったため開会式を始めるを少し遅らせた。メイン企画の石にペイントまでには余裕を持たせてあったので、落ち着いてアイスブレイクをすることができた。慌ただしい雰囲気はなく、参加者とスタッフがみんなうまく溶け込めたように感じた。昼食は食事係の奮闘により、冷やしソーメンを班毎に全員が満腹になるまで食べるすることができた。腹ごしらえも済んだところで陽も高く、いよいよ石にペイントが始まった。思い思いの石を川から拾い集め、絵の具でペイントする。筆は用いず、すぐ傍に生えている草や、自分たちの指などでペイントをした。班毎に、こちらが用意した花火や水族館などのテーマを選んでもらい、イメージを膨らませて取り組んだ。出来上がったら、心待ちにしていた川遊びへと移動。その際に石の作品にニススプレーをかけ、完成。作品はユニークなものからいろいろなものができあがった。子どもたち(やスタッフ)は、全身びしょ濡れになるまで水かけをしたり、石を投げて距離を競ったり、岩に命中させたりして楽しく遊ぶことができた。

2年生が中心となり、スタッフそれぞれがうまく自分の役割を果たすことができたと思う。また、当日の予想以上の暑さにも、氷や冷たい水を用意したりと、臨機応変に対応することができた。なんとか無事に終えることができたとはいえ、リスクマネジメント等の問題や課題もたくさんあり、学ぶことが多いイベントであった。

(保健体育教育専攻 3年 森田美保)

(2) スタッフをしてみて感じたこと

私はちょうど春イベントが終わった直後にこのイベントプラザに入った。初めて定例会に行ったときは春イベントの反省を行なっていて、いまいよく分からなかったというのが正直なところだ。その次あたりから早速夏イベントに向けた計画を立てることとなったのだが、そのときはまさか自分が企画長の一人に選ばれるとは思っていなかった。

夏イベントは私にとって初の活動だったのでどんな子どもたちが来て、どんな雰囲気になるのか、ということはまったく分からない状態だった。しかし春イベントを経験している他のスタッフのおかげでなんとか考えていけた。

当日はグループ分けからきっちりと企画を立ててあったので、活動に子どもたちの気を引くことができたと思う。河原で遊ぶというのが今回のイベントの目玉であったので、私は、子どもが何とか川の水と触れ合えて、河原での遊びが子どもたちの遊びのひとつとして加えられるように、という思いが達成できるように努めた。河原は私が小さいころは十分な遊び場であり、私はその河原で遊ぶのが大好きだったことを覚えている。今では川が汚いから、危ないからと、敬遠されがちになっている。そんな現状で、何とか子どもたちにもその楽しさを知ってもらいたかったのだ。企画として、沢山ある石を使ったペイント遊び、水遊びなどをしたりしたが、子どもたちが非常に楽しそうにしてくれたのを見て、このイベントをして良かったと思えた。

イベントが終わってみると、子どもたちが楽しんでくれたことは嬉しい限りだが、個人的には反省の多い活動となった。がんばってくれた人がいたからこそ成功といえたが、活動に対して、自分が人任せにしている無責任だったことを認めざるを得ない。自分が主体的に行なってこそ意味のあるものだというのをしっかりと意識した上での活動をしなければ、と強く思われる、そういう点で実りのある夏イベントだった。

(言語教育専攻 2年 田中裕次郎)

5. イベント三原色

イベントプラザのプラザ長、副プラザ長を一年間やってきて本当に良かったと思う。考え方や性格など全く違う3人だったが、3人が3人を必要としている関係で最高の仲間だった。違うからこそ足りない部分を補い合い、3人の良いところ悪いところを理解し認め合うことができた。今だからこのように思えるけれど、初めのうちは不満などを言い合えずにイライラしたりぶつかったり、もどかしい気持ちを抱くことが多かった。約束をすっぽかしたり遅刻したり、仕事をやらなかったり人任せだったり…。しかし、お互いがだんだんと自分を出せるようになってくると、3人がそれぞれ自分の良い所や得意なことを生かすことができるようになってきた。また、イベントを1から自分たちで作り上げていくことの楽しさや大変さを共に感じることもできた。やりたいことをやるには努力が必要である。しかし、一人ではできなくても仲間がいればやりとげることができる。ここで出会った仲間をこれからも大切にしていきたい。

「赤・青・緑…この3色はそれぞれ違う色である。しかし、3色の重なり具合によって、何色にでも成り得る。これが光の三原色である。」という土井先生のお話を聞いた。私たち3人は、まさにイベントの三原色であった。また、その3人を支えてくれたイベントプラザのみんながいたからこそ一年間やりとげることができました。みんなにとっても感謝しています。本当にありがとう☆☆

(西村崇☆☆山本真望☆☆森田美保)

IV. 第2回YOU遊フェスティバルの実践記録

YOU遊フェスティバル

～ぬくぬくぽか気分でワッショイショイ～

1. YOU遊フェスティバルの概要

YOU遊広場の一年間の活動の集大成として、それぞれのプラザで活動している学生と、子どもたちや地域の方が一同に集う、『第2回YOU遊フェスティバル』を2002年12月7日(土)に企画しました。参加者は年齢を問わず募集し、当日は150名の参加者と120名のスタッフが集まりました。

午前中はイベントプラザが企画したキャンパスお楽しみハイク、午後は講座を出したい学生を募集しその学生が中心となって企画した講座を開きました。キャンパスお楽しみハイクは、午後からの講座へ楽しく参加してもらうための雰囲気作りを目的とし、キャンパス内に10箇所の課題解決をめざす楽しいチャレンジゲームを用意しました。子どもたちは班つきスタッフと一緒に、キャンパスマップを見ながら好きなゲームに挑戦していきました。午後は12の講座が集まりました。講座は以下の通りです。

(教育実践科学専攻 3年 山本真望)

NO.	講座名	キャプテン	スタッフ数	募集人数	対象	参加費	活動場所	持ち物
1	みんなで運動会☆	北川伸尚 (障害児2年)	20名	健常児20名・ 障害児20名	小学生・小学部 (※①)	250円	第2体育館	着替え・タオル・ 上履き・赤白帽子
2	羊毛うまれ! フェルト星人 バクバくん	藤沼夏子 (生活3年)	6名	25名	年齢制限なし	700円	N302	タオル(2)
3	Let's DanceSing ～男も女もみんなモー娘～	田中裕次郎 (言語2年)	14名	30名	年齢制限なし	200円	舞踏室	動きやすい服装
4	さんずう村のコンサート♪	小川敦嗣 (理数3年)	5名	10名	小5～一般	200円	N304	電卓
5	目指せ!花火職人!! アードバン職人	岩脇悟子 (理数3年)	8名	14名	小1～中1	500円	生協	牛乳パック・軍手・ハサミ ・バターやジャムなどパンにつ けるもの
6	すきすき 紙好き	藤岡恵美(生活3年)・ 増田美和(障害児3年)	9名	15名	幼児	350円	N103	コップ(麦茶用) ・タオル(手ふき用)
7	第一回 わんぱく 子どもドッジボール大会	前崎伸周 (教育実践2年)	12名	30名	小1～一般	200円	第1体育館	体操服・体育館シューズ ・タオル
8	それいけ!新聞気球?	幸阪創平 (教育実践3年)	8名	10名	小1～小4	300円	泉会館	ハサミ・のり
9	プラスティック?!に宝物を とじこめちゃおう!	石関千絵 (社会2年)	10名	15名	小1～小6	350円	N102	ハンカチ(薄い方がよい) ・宝物・色ペン
10	海の牧場	夏井一智 (野外2年)	2名	10名	小4～一般	500円	N303	新聞紙(1日分) ・水を入れる器
11	こりゃうマイ! 感謝をコメていただくペト	那須紋子 (生活3年)	11名	50名	小1～一般	300円	N204	茶碗・水筒(お茶)・はし ・ペットボトル(500ml)
12	とろーりとかして ペットボトルキーホルダー	藤田優子 (生活2年)	13名	15名	小1～一般	200円	W1F 木工室	ハサミ・カッター ・ペットボトル(2)

※参加費は保険料100円を含む

2. 実行委員長から一言

「あ!!」っという間にYOU遊フェスティバルになってしまったことから、第二回YOU遊フェスのしおり名は「あ!!フェス」に決まりました。講座を募集したのは10月で、スタッフを募集したのは11月でした。今思うと無謀…。最初は講座もスタッフも集まらず…と思っていたら、いつの間にか講座は12、スタッフも120名という大規模なものになっていました。これは本当にみんなに感謝です。一人一人の声かけでたくさんの方が集まり

ました。人と人とのつながりは、このYOUフェスで学んだことのひとつです。当日はたくさんの人、人、人…。顔見知りの家族もいれば初めて来る子どもたちもいました。しかしそれは参加者だけではありません。1年生が松本から朝早く来てくれたり、同じ係りでも始めて顔を合わすスタッフたち。何もかもが忙しく、あっ！！という間にYOUフェスが始まりました。当日は8:00には全員が集まり、前日Cooking隊が作ってくれた豚汁とおにぎり（☆茂菅のお米☆）をみんなで食べました。Cooking隊のみなさん、本当にありがとう！

当日まではイベントプラザ中心の実行委員会を毎週月曜日4:30から行いました。また、本部会、YOUフェス定例会（全5回）、前日準備、その他に、各講座や係りごとの準備もありました。そして、YOUフェスの看板も作りました。みんなで手形を押し、色を塗った石を並べて文字を作りました。（重たい看板を持ってみんなの手形を集めてくれた看板係さん、どうもありがとう。）

当日は雨という予報にもかかわらず天気にも恵まれ、午前中のキャンパスお楽しみハイクはととてもいい天気でした。閉会式が始まるころに雨が降り始め、最後の最後に雨が降ってしまったなあと思っていたら、子どもたちはとても元気に手を振って帰って行きました。子どもたちだけでなく、お父さんお母さんの笑顔もとても嬉しかったです。講座が終わると、自分の作ったものを「いいでしょー！」と持って帰ってくる子どもたち。嬉しくてたまらないという様子で閉会式でも発表をしてくれました。

YOUフェスの実行委員長になって最後に泣けたのは終わったという安心感と満足感、そして何よりもやってよかったという想いからだと思います。スタッフのみなさんにもとても感謝しています。そして、最後の最後まで一緒にいて支えてくれた本部のみんな、本当にありがとう。

（教育実践科学専攻 3年 山本真望）



3. ゲームスタッフをして

私は『あっちこっちでポン』を担当しました。このゲームは手をつないで行うゲームなので、体の接触によるケガが心配でした。みんなが楽しく安全にできるよう、ほかのスタッフに協力してもらいシュミレーションをしながらゲームのルールを考えていきました。何かの企画の担当を任せられるのは初めてだったので、少し不安があり、必ず成功させなくてはというプレッシャーもありましたが、もっと楽しくできるようにとあれこれ工夫をしながら当日に向けて準備をしていくのはとても楽しかったです。

当日は、風船を飾りつけながら子どもたちが来ることを心待ちにしながら始まりました。みんなが笑いながら楽しそうにやっているのを見てとても嬉しかったです。でも頭をぶつけてケガしてしまう子が数人でしまったので、急遽ルールを変えて頭を使うところを、全身を使うようにしました。子どもは学生以上に夢中になって積極的に前でいきます。私たちスタッフがうまくできたからといって、子どももうまくできるとは限りません。子どもの気持ちになって、子どもの立場で考えることの大切さを実感しました。また、楽しさを重視するあまり安全面がカバーできていなかったことが反省です。今回ゲーム長として参加してみて、いつもと違った楽しさを味わうことができました。責任は大きいですがその分やりがいと満足感を得ることができました。また、一緒に考えたり実行したりと協力してくれるスタッフの大切さを実感しました。一緒にやったから成功させることができましたし、楽しかったのだと思います。「一緒にやる」ということにとっても意味があると思いました。

(教育実践科学専攻 2年 松土智美)

私は「自分で作ってぐ〜らぐら」を担当しました。準備段階でのゲーム内容は、子どもたち1人1人に与えられた新聞紙を筒状にして繋ぎ合わせて好きな形を作ってもらい、その中にグループ全員で協力して入るという、バランスと協調性を必要とするものでした。しかし、教材研究不足で新聞紙では軟らかすぎてしまって、つなげて好きな形を作ることは不可能だと分かり、前日に急遽内容を変更しました。そして、自分の頭の中では前日にやればなんとかなると思っていた教材研究が、実は本当に手のかかるもので自分1人ではどうにもなりませんでした。教材研究は、午後の講座で一緒にスタッフが部屋を提供してくれたり、遅くまで付き合ってくれたおかげでなんとか終えることができました。嫌な顔1つせずに私に付き合ってくれたみんなのお陰で、私のゲームは成り立ったと思います。

当日は、他のゲームスタッフもゲームの内容を頭に入れておいてくれたのでスムーズに進みました。ただ、教材研究が足りず用具に失敗が出てしまいました。私たちが試してみても余裕があるから体の小さい子ども達なら余裕だという考えは単純でした。実際にやってみると、子ども達はバランスをとることが難しかったり、自分より体の大きい友達に自分の体を預けてしまったりしてなかなかクリアができませんでした。当日にも教材研究の重要さを感じました。子どもたちが全員で協力してやろうという姿を見せてくれたことが嬉しかったです。驚いたのは簡単に諦めてしまう子どもが少なかったことです。クリアした時にもらえるスタンプが、やり遂げようと言う気持ちにさせていたように思いました。現代の子どもは、テレビゲームで遊ぶことが中心で、このような体を使った遊びには興味がないような先入観があったけれど、楽しそうにしている子どもたちを見て、自分たちのころと変わらないものなのだと感じて嬉しかったです。(教育実践科学専攻 2年 笠原千絵)

4. 班つきスタッフをして

午前中のキャンパスお楽しみハイクで、私に班つきスタッフという任務が課せられていることは前々からわかっていたことだった。しかしフェスティバル前日、班のメンバーを知ったとき、正直戸惑いを隠せなかった。なぜなら、私の班はお父さんお母さんだけのアダルト・チームだったからだ。これは予想していなかった展開であった。

当日、班名となっている動物のジェスチャーをして他のメンバーを探し、集まるというときには、お父さんお母さんたちからも「本当に大人だけのチームでお楽しみハイクに参加するの？」と戸惑っている様子を感じられ、「子どもがいない大人だけのチームでは、あまり乗り気にはなれないのかな？だとしたらどうしよう…。」そんな不安な気持ちでいっぱいだった。

しかし、実際始まってみるとそんな不安は全く消えてしまった。私の予想を裏切って、お父さんお母さんたちはゲームに積極的に参加して下さった。すると、顔見知り同士ばかりではなかったために始めはみな遠慮がちだったものの、ゲームを通してすぐに和気藹々としたとても良い雰囲気になった。

またあるお母さんは、ゲームをクリアすると押してもらえるハンコの数を子どもと競っていた。大人だから、子どもが相手だからと手を抜くというようなことなしに、こうやって親子で競い合えるのって何だかいいなと思えた。そして私自身も、自分が班つきスタッフであるということを忘れるくらいゲームに真剣に取り組み、積極的に楽しんでしまった。大人だから、子どもだから、参加者だから、スタッフだから…そういうことなしに真剣にゲームにチャレンジできるキャンパスお楽しみハイクは最高に楽しかった。

(生活科学教育専攻 3年 エビ班 田中慶子)

「なんて元気な子どもたちなんだろう!？」それが、班の子どもたちに抱いた感想であった。「このゲームはキャンプでやったことあるよ!」「はーやくやりたーい!!」積極的に参加してくる子どもたちのおかげで、私も終始笑顔で付き添うことが出来た。YOU遊広場の活動には初参加の私であったが、この時は、教育実習を終えたばかりということも手伝ってか、子どもたちに接することにもほぼ抵抗がなかった。子どもは、こちらが信頼すれば必ず応えてくれるのだ。

私自身、班つきスタッフとして心掛けていたのはまず、子どもたちに怪我をさせないこと、そして楽しい思い出を作ってもらふこと——初対面で緊張している子も、安心して楽しめるように気を遣うことだった。ところがその心配など、いざ始まってみると必要なかったかのようで、子どもたちは実に逞しく、平均台を渡り、体育館のロープをターザンのように乗りこなす。移動中も歌いながら、次のゲーム目指して駆け出すのだ!そして自分たちが中心となってゲームの攻略への道を切り開こうとする。そのワクワクした目を見ることができたときほど、この活動に参加したことを誇りに思ったことはない。ただ、子どもたちが何度挑戦でもなかなかクリアできないものにはスタッフの援助が必要に思った。もう一度、気を取り直して「初めから」という気分にする、ハンデを軽くするなど、スタッフの腕が試される場所だ。子どもたちを過小評価せず行う「援助」の難しさを改めて感じた。今回の経験も含めてより深く考えていかなければならない。楽しいだけでなく課題も与えてくれたイベントであった。

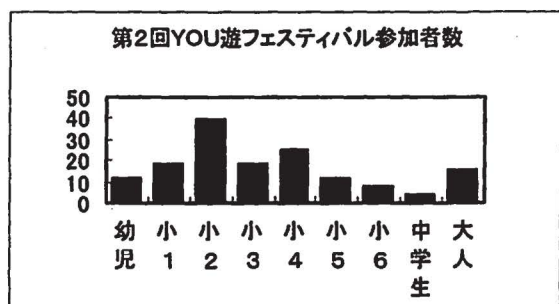
(教育実践科学専攻 3年 ペンギン班 塩崎淳子)

5. YOU遊フェスティバル参加者アンケート

「第2回YOU遊フェスティバル」の参加者にアンケートを配布し、その結果からこれからのYOU遊広場のあり方やフェスティバルなどのイベントをこれからどのように実施していくべきなのか考えていきたい。

(1) YOU遊フェスティバル参加者アンケートの考察 (アンケート回答数 38)

I. 参加者について



参加者の年齢については、YOU遊広場の参加者年齢をそのまま反映したような形で、小学校高学年から大幅に参加人数が減ってきている。また昨年のグラフが一例そのまま右へずれた分布になっており、昨年から継続した参加者が多いことをうかがわせている。

II. 講座の内容について

〈アンケートより〉

- ・玄米が初めて食べられてうれしかったです。
- ・子どもたちと同じものを体験して楽しさが実感できた。
- ・4こもキーホルダーをつくれたのしかった。もう一回つくりたい。
- ・童心に返って楽しい一日を過ごせました。
- ・いろいろなことに挑戦できて楽しかった。
- ・手が汚くなってしまったけど楽しかった。
- ・楽しかった!!! またやりたい。

(子どもたちの感想)

(保護者の感想)

アンケートを家庭ごとに配布したため、子どもの視点と保護者の視点との大きく2つに分けることができた。今回、お楽しみハイクでは子どもの参加者だけでなく、ぜひ保護者の方にも参加してもらおうと保護者だけのグループというものを初めて作った。やはりこれは印象が強かったようで、「照れながらも課題にチャレンジできて良かった」などの感想がいくつも見られた。子どもたちについては、楽しかったと感じた子どもが多かったが、「午後は楽しかったが、午前中はつまらなかった。」という意見も少なからずあった。その理由として、課題の数が多く、加えて広範囲にチェックポイントを設置したため、満足に遊びきれなかったということが一番大きいようであった。午後の講座については各講座が伝えたかったその講座の“楽しさ”が十分に伝わり、楽しかったことがアンケートから読み取れた。

III. 参加費について

参加費はどれくらいまで出せるかという問いには500円が最も多く、1000円、300円など多少のばらつきが見られた。中には1500円という回答もあったが、参加費について

はやはり「基本的には内容によって」という考えの家庭がほとんどであるようだ。今回の参加費については『高い…0人、普通…26人、安い…12人』と多くの家庭が適当であると回答している。金額の大小以前に参加費の用途がきちんと参加者に理解してもらえるように努力することが大切だと感じた。

IV. 時間的な問題について

これについては、お昼の時間が短すぎたこと、講座の時間が短く十分に活動できなかったことなど、時間的に余裕の無い日程だったという意見と、終了時刻が少々遅かったなど、時刻的な問題の2つに分けることができた。今回は去年のアンケートを参考に開始時刻を一時間遅らせ、終了時刻もあまり遅くならないようにと考えた日程だったが、お昼時間が短くなってしまふなど、余裕が足りないという状況になってしまった。開始時刻を遅く、終了時刻を早く、内容もゆとりを持って、この3つが参加者の、特に保護者の希望として読み取ることができたが、実際、充実した内容にすることを考えるとなかなか難しいことだと思う。時間的な3つの問題と充実した内容の両立のためには、教材研究などをしっかり行いスムーズな進行を心がけるべきだと感じた。

(2)今後の課題

アンケートを読み私が感じた、YOU遊フェスティバルに限らずこれからのYOU遊広場の活動を行なっていく中で、私たちが考えていく必要がある点をいくつか挙げたい。

まず、活動内容の検討である。アンケートからは小学生を中心とした子どもの意見と、大人(保護者)の意見の一端を知ることが出来た。特に保護者がYOU遊広場に求めるものとして、普段することができない体験(自然とのふれあい、学生とのふれあいなど)、土曜日の有意義な活用としての企画(学生の地域への進出)といったものが多く見られた。私たちがやりたいことをやる、それがYOU遊広場の活動の基本となっているが、その活動に参加する方々のやりたいことが私たちのやりたいことにもなり得るのではないだろうか。そのためにも次に必要となるのは情報の発信と受信の方法の検討であろう。アンケートでも「このような活動の情報が欲しいがどうすればいいのか」という声が少なくなかった。また私たちが地域の様子を知る機会も多くはない。情報の価値が大きくなっている昨今、多くの手段が考えられるが、何のためにどのような手段で情報の発信・受信を行っていくのか考えていかなければならないと感じた。その他にも(1)で述べたような、金銭に関する問題、時間的な問題についても考えていかなければならないことはもちろんである。

だが、それらの問題について考える以前に、私たちが何を目的としてこれらの活動を行なうのかということ、つまり学生が目的意識を持って活動に取り組んでいくことが重要ではないだろうか。私たちがしっかりと目的意識を持たなければ、上のすべての問題についていくら考えようとしても空回りしてしまうことは明白である。地域の人々にYOU遊広場の活動が浸透してきている中、私たちが何のために活動しているのかをもっとはっきりさせることで地域との信頼関係はより確かなものとなるだろう。また、私たちYOU遊広場の学生同士のつながりも強くなり活動の幅が広がっていくと思うのである。

(教育実践科学専攻 3年 篠原真美)

みんなで運動会

—「思いやる」こと・「思いを伝える」こと—

北川伸尚 障害児教育専攻 2年

「みんなで運動会」を企画・運営するという小さな事であったが、私に沢山のことを考え、学ばせてくれ、子どもたちやお母さん方、養護学校の先生やパン屋さんなどとの出会いをくれた、大切な出来事である。沢山のことを考えさせてもくれた。中心となる時の立場の役割とその大変さ、運営側と参加側の思いの違い、支援が必要な子どもたちに対する配慮、その親御さんの思い・考え、支えてくれる人がいる喜び、そして思いを伝えることの難しさ。この「出会い」と「気付き」は、今後の活動に大きな意味を持つことになると思う。

また、準備の時に応援し、勇気付けてくれた3年生、最後まで養護学校の子の参加者を探してくれたお母さん、協力し、支え、励ましてくれた皆に、ただただ感謝したい。

1. 「思いを寄せて・・・やりたい、やろう、やってみるか」

「みんなで運動会」の1ヶ月半ほど前、上越教育大学の方でも同じような活動が一足早く開催された。参加する子どもの人数が200人以上という大規模な活動であり、私はその様子を見学しに行っていた。子どもたちが皆生き生きとしており、また私と同じ年代の学生が立派に運営している様子を目の当たりにし、刺激を受け、「自分も何かしてみたい」という思いがわいてきたのが、運動会を開くきっかけの1つとなった。

また、ある講義において「ムーブメント教育」というものと出会った。これは、体を動かすこと（揺れなど）によって子どもの発達を促すというものであり、カラーロープやパラシュート、ごく普通にある布などを活用して行うものであった。子どもたちではなく、自分たち学生同士で行っても大変面白いものであった為、もう一度どこかでやりたい、何か実践の機会があればやってみたい、そういう思いがあった。

そして、3プラザ、鉄腕アトム的活動にも参加していたこともあり、養護学校の子どもたちとも一緒に何かできたらいいな、そのような気持ちもあった。

こうした3つの事柄が、「みんなで運動会」を開くきっかけとなった。

2. 「思いに任せたい!・・・準備、準備!ピンチ!」

実際に準備に取り掛かったのは、運動会の3週間前であった。

運動会をするということで、その中で行う種目は一応決まっていたのだが、どのような内容にするのか、どのような準備が必要か、どのような手順で進めていくのか、子どもたちにはどのような配慮が必要かなど、決めていかなければならないことが山積していた。その為、まずはこれから運動会が終わるまでの計画を立てた。スタッフの顔合わせから始め、内容の検討、行う種目の実践、それを踏まえての内容の再検討、再度実践、備品製作、最終準備、そして本番。どの過程においてもとにかく時間がなく、何かと大変であったが、準備とは直接には関係のない1つ思いが、私には印象的であった。

それは、参加者が集まらないということからの思いであった。準備をしている間にも、参加者募集は続いていた。運動会1週間前の時点で、予定参加者は10名。その中に養護学校の子は一人もいなかったのである。養護学校の方にも直接チラシの配布をお願いしに

行った。3プラザでお世話になっているお母さん方にも声をかけた。しかし、参加者は増えない。養護学校の子たちと小学校の子たちとの交流も目的の1つに掲げていただけに、この時は何としても来て欲しい、子どもを集めたい、そういう思いで一杯になっていた。

だが、そのような思いも段々と変化していったのである。「別に養護学校の子が1人も来られなくてもよいのではないか、仕方がないのではないか。」と。これは、ある友達が、夏の自閉症児対象のキャンプでペアになった子のお母さんにこのような話を聞いた、との話を耳にしたことがきっかけとなっているように思う。「うちの子も参加させてあげたいんだけど、こういう種目に参加できるかどうか・・・」という話。この話を聞いた時、「そうなんだ」、そう感じたのであった。自分たち企画する側からすれば沢山の子に来て欲しい、だから募集も沢山しよう、募集した、あとは待つだけ、そのような感じであった気がする。しかし、私たちが考えている以上に、支援を必要とする子の親御さんの側からすれば、単に「わが子を参加させる」ということに対しても様々に思うことがあるのだ。それは「学生さんに迷惑をかける」「心配で参加させるのは不安」「みんなの中で我が子が一人だけ他のことしている姿は見たくない」など、色々であったと思う。参加させてあげたいが躊躇してしまう部分もある、そのような複雑な思いがあった方もいたかもしれない。そのように考えると、今までいかに相手の思いを考えず、自分の思いのみで子どもたちに来てもらおうとしていたかを感じずにはいられなかった。一方的に「来てくれ」と言っていた様な気がしてならなかった。

こう感じたことを契機に、養護学校の子たちが一人も来られなかったとしても、「参加したい！」という思いで来てくれる子たちに楽しんでもらえるように頑張ろう、そう思えるようになった。これは確かに、子どもを集められないことに対するある種の逃げや諦めと受け取られるかもしれない。しかし、あくまで子どもたちやその親御さんの意思・考えに任せたいという気持ちになった、それだけのことであった。

準備自体でも人（スタッフ）が集まらず、思うように進まなかった。スタッフ全員の思い・考えを聞いて何事も決めていこうと思っていたが、実際は、自分や来てくれた4、5人と決めていかざるを得ない部分もあった。そして、前日。初めて当日の会場となる体育館での実践をすることが出来た為、準備がまだまだ足りないことを改めて実感したのであった。当日の進め方、器具・備品の配置の仕方、自分たちスタッフの動き方、子どもたちの動き方など、本番で使う会場に入って初めて、決めなければならないことの多さが浮き彫りとなり、明日本番に対する不安がこみ上げて来た。私自身、それを実感していたのだが、それを同じ場にいたスタッフに指摘されると何ともいえない苛立ちや、投げ出したい思いでいる自分を感じていたのであった。

3. 「思いはどこへ？」

気がつけば夜が明け、半日が過ぎ、いよいよ運動会本番。

体育館に入ってきて、ペアの学生との手形おしから始まり、準備運動としてのラジオ体操、アイスブレイクとしてのじゃんけん列車、パラシュート、「みんなで運動会」を行うにあたって創作活動として玉入れの玉と、応援旗作り。そして、いよいよ運動会開始。自分たちで山ほど作った新聞玉を使った新聞玉入れ、大きさに差をつけて進み易さを考えさせる、ダンボールでのキャタピラレース、少し休憩をはさんだ後に、運動会の定番、綱引き、そして、メインとなっていたパンくい障害物競走。3時間といってもあっという間に過ぎてしまった。実際のところ、本番のことは私自身あまり覚えていない。とにかく自分

のことで精一杯になっており、全然周りが見えていなかったことの証拠であると思う。

ただ、子どもたちが楽しそうにしている、その笑顔を見られたという印象は残っているように思う。

4. 「思いを伝えること・・・」(今後に向けて)

運動会を終えたとき、すごく充実感があった。協力してくれた23名のスタッフも全員が、「自分たちもすごく楽しかった」「子どもたちも楽しそうだったよ」「運動会自体は成功だったと思うよ」との感想の言葉をくれた。

しかし、私には充実感と同時に、寂しさも感じていた。それは、子どもたちが帰ってしまったことや運動会が終わりを迎えてしまったことに対するものなのかもしれないが、もう1つ理由があるように思う。それは、どこかで心残りの部分があったのではないかと、ということである。もっと頑張ろうと思えば頑張れたのではないかと、もっと子どもたちを楽しませてあげられたのではないだろうか、そのような思いが確かにあった。「楽しかったよ」という言葉を聞けば聞くほど、「本当にそうなのか・・・」と感じてしまう自分がいた。

事実、3日後に反省会をしたときも、準備・研究不足な面があった、スタッフ同士・子供同士の交流がもっとできたのではないかと、募集の際の「言葉」の選択への配慮が足りなかったなど、沢山のことが出てきた。特に参加者(養護学校の子)の募集については、今後の大きな課題となり、私はここから1つの大切なことを学んだ。

それは、「思い」を「文字(文章)」を通して伝えることの難しさである。私は、特に養護学校の子を区別しようとか特別扱いしようとして、チラシの対象の欄に「障害児」という言葉を使ったわけではなかった。ただ、今回のフェスティバルで養護学校の子を対象にしたものはこの「運動会」だけであったため、そうせざるを得ないと思ってしまっていた。しかし、そのチラシを目にした養護学校の子の親御さん方がどのように感じたかを考えると、何ともいえない気持ちである。もし本当に「養護学校の子にも来て欲しい」と考えるのであれば、どの講座にも参加できるような配慮をすべきであったと今更ながら思う。

5. 「思いを次へ・・・」

3プラザでのある日の活動が終わった時、1人の3年生がこのような反省を言っていた。「今日の活動で、おんぶはどこでも通用する、いいものだと思います。」つまり、言葉によらなくとも、態度や表情で相手の気持ちや意思は伝わってくるし伝えられる、というのである。同じ空間で同じ時間を過ごし、その中でふれあい、体を動かす、そうすることで、例えば「言葉」というコミュニケーション手段を用いることをまだあまり知らなかったり困難だったりする子たちとでも、十分に楽しい活動は出来るのだ、ということを教えてくれた一言であった。

今回、運動会という活動を取り上げたのも、確かにムーブメントの実践を活動に取り入れたかったというのもあるが、この言葉が私にとってはすごく印象的であったからなのにも思う。何かを製作する講座のように、子どもたち自身が考え、「かたち」として残せる物は、この運動会ではそれほどなかったかもしれない。しかし、「楽しかった」「また来たい」そういう思いが子どもたちの心に残り、今後の様々な活動の中での何らかの励みになれば嬉しい。また、今回の「運動会」は、今後の私自身の活動の励みにもなると思う。

羊毛うまれ！フェルト玉星人パクパクん

—カラフル羊毛でフェルト作り—

田中慶子 生活科学教育専攻 3年

1. パクパクんとの出会い

第2回YOU遊フェスティバルの話が具体化していく中で、私と蓼沼夏子さんとの間に「講座を出そうよ！」という話がどちらともなく出てきた。それはまさに両思いと言うべきかもしれない。自分たちが提案する講座を出して、そこでたくさん子どもたちと楽しく過ごせて、仲良くなれたら…。絶対楽しい！私たちの妄想は膨らんだ。

しかし、具体的に何の講座を開こうかということに関しては、2人とも生活科学教育専攻ということを活かして、「家庭科っぽいことをしたいね。」という漠然としたものしかなかった。何か良いアイデアはないかな、と訪れた市立図書館で一冊の本と運命的な出会いをする。『手作りフェルトのあったか小物』（近藤美恵子 フレーベル館）である。その本の1ページ目に写真で載せられていたパクパクんの愛らしさに私は一目ぼれしてしまった。また、本の題名にもある“手作りフェルト”とは羊毛からフェルトをつくるということであり、今まで実際に羊毛を見たことがなく、フェルトと言えば手芸屋に売っているフェルトシートしか思い浮かばなかった私にとって、「えっ!!フェルトって作れるの!!」という新鮮な驚きもあった。

パクパクんとは、簡単に言ってしまうと手のひらサイズのフェルトクッションだ。羊毛をアルカリ性のぬるま湯に付けることで一度スケールを広げ、摩擦によって絡ませて成形し、乾燥させることによってその状態でスケールが閉じるため、色々な形のフェルトを作ることができる。パクパクんは丸いボール状の形で、大きく開いた口がチャームポイント。丸い形のフェルトは比較的作りやすく、カラフルな羊毛を使えば組み合わせ次第で何種類ものパクパクんを作ることができる。しかも、羊毛に触れたことがない子がほとんどだろう。これは教材にぴったりだと考えた。そこで、「羊毛の不思議に興味を抱き、子ども自身の感性をはたらかせて、オリジナリティーあふれる作品を創造してほしい」という願いのもと、私たちの講座ではパクパクんを作ることになった。

2. 12月7日、フェルト玉星では…

当日会場となったN302の教室を私たちは【フェルト玉星】とし、壁には布を張り、丸型や星型に切り取った画用紙を貼って雰囲気を出した。そのフェルト玉星で、参加者17人、スタッフ7人が過ごした大まかな時間の流れは以下の通りである。

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1☆ スタッフと参加者の自己紹介 | 2☆ フェルトについてのお話し |
| 3☆ パクパクん作り | 4☆ まとめの時間（写真撮影） |

この日のフェルト玉星はとても良い匂いだった。なぜなら香り付きの台所用洗剤を使ったからだ。教材研究では普通の洗剤を使用したのだが、羊毛を用いるためにパクパクんがどうしてもほのかに動物臭くなってしまうので、その匂いを消すために本番では香り付きを使った。また、フェルト玉星の机の上は大洪水だった。数人で1つのボウルを使うため

どうしても回りが水浸しになってしまう。しかし、そんなことは気にも止めず、子どもたちは夢中になってパクパクん作りに取り組んでいた。

参加してくれた女の子の多くは、小さいサイズのものをいくつも作っている子がほとんどだった。そして、そのいくつも作った中の2つを重ねて〈雪だるま〉を作る子もいた。この季節ならではの発想だ。また、男の子に関しては、皆とても巨大なサイズのものを作っていた。これは私たちが予想もしていなかったサイズであった。だれが一番大きいか競争している風でもあり、年中さんの男の子は自分の手のひらよりも大きいものを作っていた。またある女の子は、偶然巻きつけた羊毛が途中の部分だけほどけてしまったのを利用して、キーホルダー型パクパクんを作っているのを見て感心してしまった。もしかしたら子どもたちには、失敗なんてないのかもしれないと感じさせられた。

3. 〈17人17色〉のパクパクんとの出会いから

参加してくれた17人はそれぞれ好きな色の組み合わせで、大小様々なパクパクんを作っていた。羊毛は何色か用意していたのだが、女の子が多かったこともありピンクと白が人気だった。けれど、いくら同じ色の組み合わせで作ったとしても、羊毛の巻き方一つで違った表情のパクパクんができあがっていた。そんなオリジナリティーあふれるパクパクん作りの中で、私たちの予想していた子どもたちの姿とはちょっと違った面も見ることができ、そこから考えさせられるようなことがいくつかあった。

まず、パクパクん作りを始める前に、作り方の大まかな説明も兼ねて『フェルトはどうやってできたか』という話を、わかりやすく紙人形劇にして発表した。『ノアの箱舟』の話でもあり、「へえ、そうなんだ。」という驚きと制作に対する意欲が高められればと期待していた。しかし子どもたちの様子から、私たちの用意した紙人形劇はそこまでは至らなかったようであり、むしろ「早く作りたい。」という気持ちを無視した形となってしまったのではないかと反省している。フェルトに関する話であるならば、もっと羊毛の不思議について子どもたち自身が考えられるような内容のものにすれば良かったと思う。

また、パクパクんは羊毛を丸めてフェルトクッションを作り、口の部分を切り取り、目や触角などの装飾を加えて完成となるのだが、「口を開けたくない。」という子がいたことに驚いた。私たちはパクパクんの魅力を“大きな口”としていたので、口を開けたくないという考えは予想もしていなかった。考えてみれば、子どもたちは独自の発想でオリジナルパクパクんを作っているのであるから、口のないパクパクんがいったておかしくない。このことから、“オリジナリティーあふれる作品を創造して欲しい”という願いを持ちながら、私たちの中にあつた「パクパクんとはこういうもの」という固定された考え方を、無意識のうちに押しつけようとしていたのではないかと考えてしまった。

このように反省点を一つ一つ挙げていくと切りがない。しかし、この反省点を生かそうという思いが次の活動の意欲へとつながるのではないかと感じている。また逆に、良かったと思う点は次の活動への自信となる。今回の一番良かったと思う点は、私たちに子どもたちに柔軟な対応ができたことではないか。教材研究をした結果、一個のパクパクんは乾燥時間を抜かせば以外に短時間でできてしまうことがわかったため、途中でゲームをしようとその準備もしていた。だが、当日の子どもたちの次から

次へとパクパクを夢中になって作っている姿から判断し、ゲームは全てカットして
しまった。このことで、十分にパクパク作りの時間をとることができた。この判断
も、今までの様々な活動があったからこそのことだと感じる。今後も、良い点も反省
点も生かし、多くの子どもたちとの活動の中で自分自信も成長させていけたらと思う。
スタッフのみなさん、ほんとうにありがとうございました☆



Let's DanceSing!

—BOYもGIRLもみんなモー娘。—

田中裕次郎 言語教育専攻 2年

1. 講座開講までの経緯

講座はどんなのがあるんだろう、どんな人がやるんだろう、何か面白そうなのがあったらやってみようかな、というのが講座の存在を知ったとき思ったことだ。正直に言うとそのときは講座なんて他人事で、まさか自分が講座を開くなんて思いもしなかった。そんな私が本当に講座長となって講座を開くに至ったのは、誘われたから、というただそれだけのことだった。他の講座長に不謹慎だと怒られそうだが、実際に誘われていなければ講座長をやることはなかっただろう。しかし、やると決まったら、失敗は許されない、絶対いいものにしてやる、と不思議と意識が高まった。

この講座に求めたものがいくつかある。ひとつは、体を動かすということだ。子どもたちが運動しなくなっているという話を最近良く聞くが、実際にそうだろうと私も思う。そこで、運動系の講座を考えた。

次に、この講座が「遊び」であることだ。あくまでもダンスを「遊び」として行ない、そして子どもたちの遊びのひとつとして、加えられたらよいと思っていた。そうになってくれるのが理想だが、テレビなどでダンスするのを見て、自分も踊りたいと少しでも思ってくれるようになればそれでよかった。

そしてもうひとつ、子どもたちが楽しめること、これが最優先だった。如何に高尚な目的のもと行なわれたとしても、実際に活動する子どもたちが楽しめなかったら何の意味も成さない。そのことを念頭において考えた結果、今をときめく“モーニング娘。”を選んだ。子どもたちが取りかかり易く、楽しめるのではないかと思い、決定した。男である私がモー娘。を踊るなんてかなりの抵抗はあったが、岡村も踊っていることだし、何より男の子にも参加して欲しいという思いが強かったので、腹を決めた。

スタッフは予想以上にたくさん集まってくれた。一年生の参加もあり嬉しい限りだった。しかし、当日までにダンスの振り付けを覚えなければならなかったので、集まって練習する時間をとった。また、会場の雰囲気作りも大切なので、飾り付けをしたり、全員同じ小物をつけたりと工夫をして雰囲気を出した。

2. 当日の活動を通して

振り付けは思った以上に早く進んだ。当日スタッフも覚えるのが早く、スムーズに進めることができたといえる。

子どもたちは真剣であったが、楽しそうだった。最初はやはり私たちが指示して踊らせていたような感じがあったが、緊張がほぐれ、体があったまってくると、自分から振りを覚えようと熱心に私たちの踊りを見るようになった。そうなってくると、よく分からない部分を自分から練習したり、スタッフに聞いたりするようになり、踊ることに関して積極的になってくれたのではないかと思う。

最後に全体の前で発表すると言うと、ほとんどの子どもが嫌だと言ったが、中には嬉しそうに緊張した顔を見せてくれる子どももいた。嫌だといった子達もいざ発表、と音楽をかけるとやはり楽しそうに、そして一所懸命踊ってくれた。子どもたち自身が、一日練習した結果を実感できたと同時に、私たちスタッフも、子どもたちが楽しんでくれたということを実感でき、素直に嬉しいと思えた。

3. 反省・考察・課題

楽しめる、ということに焦点を当てれば、今回の活動も自分自身なかなかのものだったと思う。しかし現場の様子を考えると、子どもが少なかったということもあるのだが、参加者同士のふれあいというのをおろそかにしてしまった。私は努めて子どもたちとかかわろうと進んで話しかけるなどしたが、参加者同士、子ども同士の横の関係に関しては穂ドン度何もしなかったというのが実際だった。その部分は確かに計画の時点から考えが回っていなかったのが当然の結果といえればそれまでだが、自分のことばかり考えずに、もっと視野を広く、客観的に計画を練ることが必要だと強く感じる経験となった。

参加する子どもたちにとっても、運営する私たちにとっても、より実りのある体験となるように今回の活動を通して学んだこと、反省したことを十分に活かせるようにしたいと思う。そのためにどうすればよいか、というのが当面の課題であろう。

(言語教育専攻 2年 田中裕次郎)

1. 講座開講までの経緯

私が講座を開こうと思ったのは、自分で何かをやってみたいと思ったからだ。私は二年なのでY O U遊プラザに関わってから約一年経つが、その中の活動を通して学んだ事や感じた事を活かして、実際に自分たちではじめの企画から責任者としてやってみたいと思ったのだ。

そして何を実際にどんな講座を開くか決めたのだが、私は自分が好きなことで、また子どもたちが年齢を問わず参加でき、体を動かして楽しめるものがないと思ひ、ダンスにすることにした。ダンスをすることを通して、子どもたちがみんなで体を使って表現する楽しさを感じてくれればよいなと思った。

思っていた以上にスタッフが集まり、まずはスタッフの振りの練習から始めた。それほど難しい振りではなかったが、覚えるのに多少時間がかかってしまい、子どもたちが当日の時間内のなかで踊れるように不安になったので、覚えやすいように振りを作り変えたりした。また、衣装をそろえなかったのだが、それは費用の問題もあり無理だったので、その代わりにみんなでおそろいの小物を頭につけることにした。

2. 当日の活動を通して

みんな始めはやはり恥ずかしがって、戸惑いながら振りを踊っている子もいたが、だんだんのってくと笑顔が見え始めた。なにより驚いたのは、振りを覚えるのがとても早いことだ。私たちスタッフよりも短い時間でどんどん覚えてしまい、予定していなかった間奏の難しい部分まで最終的には踊れるようになってしまった。新しい振りに入るたびにま

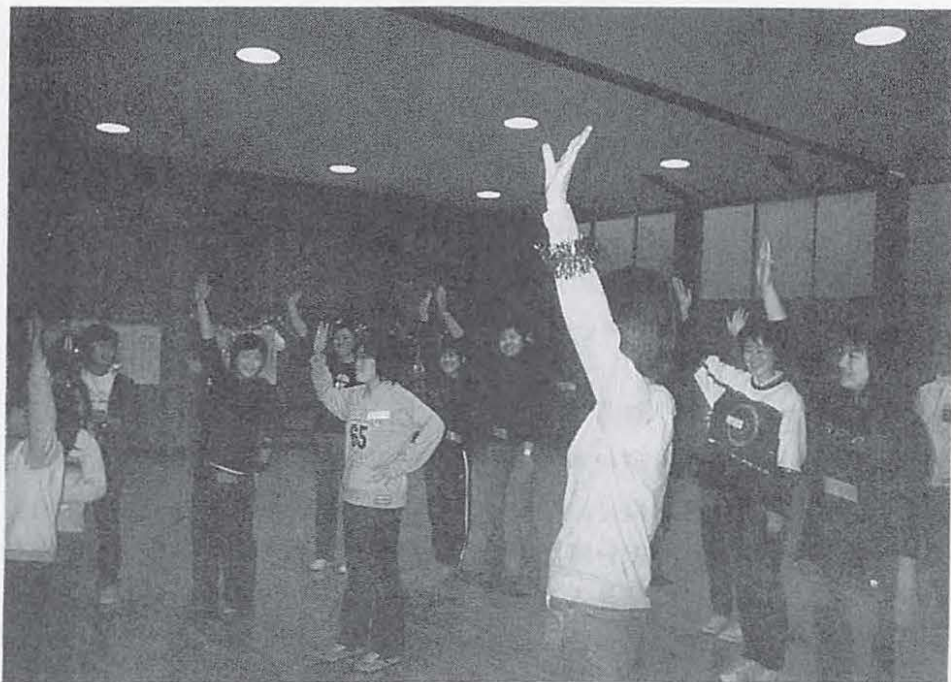
ず模範をして見せたのだが、その時は「えー難しいよお。」「できないよお。」などと言うのだが、実際やってみてできるようになってくると、とても嬉しそうに「できたよ、見て。」とか「なんだ、簡単じゃん。」という声が聞こえてきた。それからは踊って見る前から「できないよお。」と言う声は少なくなり、子どもたちの成長が感じられた。

3. 反省、考察、課題

子どもたちの様子から、ダンスを楽しんでくれたことが感じられたので、その点から見たら講座は成功したと思う。しかし反省する点はたくさんあった。一番反省する点は、当日の他のスタッフと子どもの関わりをあまり促せなかったことだ。確かに子ども的人数に比べてスタッフの人数がものすごく多かったせいもあるが、そのような中でも工夫次第ではもっとスタッフ全員を子どもと関われるような環境を作れたのに、子どもたちにばかり意識が集中してしまい、あまり周りに目がいかなかったことをとても反省している。

また私はこの活動を通して、活動を起こすこと、責任者になることの大変さを感じた。こうすれば良かった、ああすれば良かったなどということをあげればきりが無い。しかしそのように感じたことを忘れないで、これからの活動に活かしていくことが何より大事だと思うので、この活動で学んだことを大切にしたいと思う。

(言語教育専攻 2年 福田翠)



さんすう村のコンサート

—学生のでどこまで「数学」を教えられるのか—

小川敦嗣 理数科学教育専攻 3年

1. 教育実習を終えて

始まりは教育実習だった。

三年生の夏休みは教育実習がある。実習にあたっての不安要素はたくさんあった。今まで、学ぶ立場でしか教育に携わったことがない僕が、教壇に立つ姿は想像がつかなかった。先輩たちから聞く話も、その過酷さだけが一人歩きをしていた。

それでも、始まってしまえば、そんな不安を感じる暇がないほど毎日が忙しく、必死で授業計画を立て、教具を作っているうちにあつという間に終わってしまっていた。教育実習では、なにもかもがうまくいくわけではない。足りないところを実感させられて、落ち込みもする。しかしかえってそういったものがなければ、勉強にならない。そうして、実感させられたことが、自分の数学力のなさだった。それまで、受験勉強や学校の試験では、数学の成績もそこそこにはできていたから、自分の数学力というものには疑いをもったことはなかった。もちろん、自分ができることと、人に教えることは本質的に異なるという意識はあった。だが、自分の数学力があれば、授業らしいことはできるだろうと高をくくっていた節がなくはなかった。

実際の授業はそんなに単純ではない。実習中に教科担当の教官から言われたことであり、ある意味、核心をついていると思うからその言葉をそのまま使う。「教師が子どもに教えるということは、分かっている人が分からない人に教えるということ。これは思っている以上に難しい。数学を知り尽くしていなければ子どもに教えることはできない。これは例えば方程式を教えるといった時、それが決して文字が表す値がいくつかを求める方法を教えることだけではないということ。子どもに教えることを頭に入れたときには、方程式の「方程」とは何なのかという根本から考えなければならない。そこまで含めて授業を立てたとしても子どもにどのくらい伝わるかは別問題なのだ。」

自分が数学について知っていると思っていたことの多くが、解法や公式の暗記だったのだと思い知らされた。「数学」の楽しさを子どもに伝えたいと思っていた自分が、身の程知らずだと感じた。数学の楽しさを伝えるためには、教師が数学の本質を知り教材化して工夫を凝らすと同時に、そこには絶対譲ることができない数学的考え（変化する中から不変のものを見つけ出し一般化する等）を盛り込む必要がある。実習中、一時間一時間の授業を計画し、教壇に立つことに精一杯で、そのような工夫を凝らすことが全くできていなかった僕は、学生である今、自分にどこまで子どもが楽しめる授業ができるか試しておきたいと思ったのだ。授業という言葉と、講座本来の意味とが、どの程度合致するのかは分からない。でも、講座募集の話がもちかけられた時、少しも迷うことなく申し込んでいた。自分の力を試すチャンスだと思ったのだ。

2. どこまでできるか・・・

とはいうものの、一人でできる自信はどこにもなく、仲間に話を持ちかけてみるどころ

から始めた。フェスティバルの一週間後には、数学科の必修授業の試験が予定されていた。講座を開くことになれば、試験の準備がそれだけ遅くなることを意味する。そのことを理由に反対されても文句は言えない。そう思って誘ってみたものの、反応が思いのほか良かったことに拍子抜けした。そうして集まったのは全部で四人。僕を含めた五人が“さんすう村”の役員となった。

講座の内容を決めるにあたって条件を付けた。

- ① 子どもが数学に興味をもてるような内容
- ② 子どもが必要感をもって、この後のさんすう、数学の勉強を学校でできるような内容
- ③ モノを作るなどして、子どもの活動の成果を形に残せるような内容
- ④ インターネットなどに記載されている模範授業ではなく、全て学生スタッフが考えたオリジナルな内容

この四項目のどれか一つでも満たさないものは却下することとして、さんすう村の活動内容は以下の二つに決まった。

- ① ドレミファ音階が、等比数列によって決まることを利用して楽器を作ろう。
 - ② 折り紙には図形の対称性が使われているから様々な種類の形の紙で折ってみよう。
- ①については、楽器の材料として竹、弦の材質としてテグスが決まると簡単に作ることができた。②についても、スタッフの一人に任せて、長方形、正三角形、ひし形の三種類の形で鶴と枙の折り方を研究してもらい実際に折れるようになった。

しかし、最後まで問題となったのが、お土産だった。実際に、当日活動するとなると難しい題材ではあっても、自然界や生活の中には多くの数学が潜んでいるし、そういったものに気付いた時、子どもたちは数学を学ぶ必要感をもてるのではないかという思いから僕らは、音階と折り紙を含む十数個の題材を一冊の冊子にしてお土産にあげようと企画していた。そのお土産作りが思いのほか困難な作業となった。ただでさえ子どもたちに抵抗がある教科である「さんすう」、「数学」を楽しいと思ってもらいたいと考えたとき、教科としての「数学」のもつ難しさは、そのまま指導者（教材研究者）である僕らに跳ね返ってくる。分かりやすい言葉に置き換える必要がある部分は何箇所も出てきた。文字ばかりの冊子では子どもは最初から読む気をなくすという指摘から必ず図を入れるようにし、オールカラー印刷にすることで、冊子全体に明るさを出した。こういった配慮が実習中どの程度できていたかと振り返ると、後ろめたさを感じないわけにはいかない。そんな風な実習中の後悔もあってか、子どもの反応を予想しながら仲間と夜遅くまで話し合うことは、その大変さとは裏腹に楽しい作業だった。

何事にも予想外というものは付き物だが、さんすう村は全く予期していないところで、窮地に立たされることとなった。参加者募集の状況から第一志望でさんすう村に来たいという子どもが一人もいなかったのだ。スタッフの間では、「自分たちのやってきた教材研究は決して無駄ではなかった。今回は、中学生、高校生の参加は多くないだろうし、一人もないならそれはそれで仕方ない。」というあきらめに近いムードが漂っていた。

そんな折、土井先生から声を掛けられて、僕らの意識は180度変わることになる。その時の言葉は次のようなものだった。

「教育とは、学ぶ者と教える者とがいる所に成り立つ。いくら教材研究を進めて、素晴らしい授業計画が頭の中にある先生がいても、学び手である子どもがいなければ教育と呼べるものはそこには存在しない。学び手がいらないからあきらめた、という態度は教育者とし

て非常に大仰な態度。『教えてやるから、来たい奴は来いよ』と言っているのと変わらない。それではだめだ。何とかして自分の知っていることを次の世代に残そうと思うのであれば、指導者の側から学び手を誘いに行くこと。一人でも学び手がいれば、そこに教育は成立する。つまりは、講座として成立することになるのだから頑張りなさい。』

この言葉でスタッフ全員がビラを配り、家庭教師先の子どもに声をかけたりして、何とかして参加者を確保しようと行動を起こした。その結果、当日の飛び入り参加も含めて5人の子どもたちが参加してくれることとなった。

3. 当日を向かえて

当日の流れは以下の通りである。

- ① 折り紙作成 (45分)
- ② 休憩 (10分)
- ③ 楽器作り (85分)
- ④ 曲の練習 (20分)
- ⑤ 感想発表 (10分)

実際には、楽器作りに手間取ってしまい楽器を完成させることなく終わってしまった。大きな原因として、こちらが、等比数列であることを提示するのではなく、あくまで子どもの主体的な取り組みの中から数学を発見してほしいという意図があったため手間取ってしまったことが考えられる。しかし、指導者が、一方的に数学を教えるわけにはいかなかった。本来の趣旨からそれてしまうからだ。折り紙の方は、子どもも熱心に取り組みスムーズに進めることもできた。

4. 子どもがいて先生がいる

教師になりたいと思ったのはいつだったか。はっきりとは覚えていなくても、僕の中の教師とは、教科を教える人だった。これは間違いない。大学に入ってから勉強も、教育実習に臨む時の気持ちも、数学を教えたいという部分に頭がいていたように思う。でも、この考え方は、教科先行の教師観だと思う。『「数学」という教科があるからそれを教える先生がいる。』本当にそうだろうか。確かに、勉強を教えるというのは教師という職業の重要な側面ではある。しかし、教師である以上、その授業の前提に子どもをおくべきではないのか。これは、生徒の反応を予想するといったこととは別に、子どもがより必要感をもって学習に取り組めるような教材研究に重点が置かれるべきだと考えるからだ。当たり前だといわれるかもしれないが、「子どものために」という言葉の意味をもう一度考える必要があると、この活動を通して感じた。

「数学」を教えることが教師の仕事なのではなく、どのような方法で、どのような素材を使って教えるのが教師である以上考えなければならないことだと思う。この活動で、夜遅くまで仲間と話し合った、子どものためにできるだけ分かりやすくという工夫とそのための努力は、フェスティバル当日、涙となって表出した。

教師になりたいと思ったのはいつだったか。子どもという前提とそのための教材研究、そしてその先にある涙を現場に行き流せたらステキだと今、強く思う。

人との出会い

岩脇悟子 理数科学教育専攻 3年

1. 講座開講までの経緯

○動機・講座内容の決定・・・2002年11月初め、私はその年の夏に教育実習を終えてからというもの、「自分の力で何かを成し遂げたい」という気持ちを強く持ち始めていた。そしてその気持ちを何処に向けていこうかと思いをあましていたとき、キャンパス内である応募用紙を受け取った。それが今回のYOU遊広場イベント講座募集の紙であった。私は紙を受け取ったその日にはもう講座希望の紙に自分の名前を書き始めていた。だが、氏名を書いたのはいいものの肝心の講座内容が全く決まっていなかった。私自身が前回のYOU遊広場イベントにスタッフとして参加したことがある経験から、前回と同じような内容をして私自身が楽しめないと思った。もちろん同じ内容でも関わる人々・環境もかわってくるので楽しいはずなのだが、それでも私自身が何かおもしろくなかった。せつかくやるのだから私自身の今もっている能力・知識を知恵として使い、私ならではのこをした、と我ながら大きな野望を持ち始めたのだ。前回のYOU遊広場では体を動かすものと身近なペットボトルなどを使うという内容が多かったように感じた。前回の内容の中でスポーツは、自分主催でやる講座内容として私の興味を引かなかった。そして、講座内容を考える上でもう一つ問題となったのは、この講座は子どもたちと一緒にやるということである。子どもたちがメインであり、たくさんある講座の中から楽しそうなものを希望して参加してくる。よって子どもたちが楽しそうに思わないもの、楽しめないものでは成り立たないのだ。さて困った。私には人に自慢できるようなこと、自信をもって扱えることが全くなかった。それなら前回にも扱われていなかった私の専攻分野である科学を扱った講座をやってみよう！と考え始めた。そしてその日私が自分でやってみようと思った科学を扱ったものを思いつく限り書いて、まだ内容は検討中と付け足しすぐさま応募用紙を提出箱に出したのだ。なぜか、そのときは不思議なくらいなんの迷いも不安もなかった。

応募用紙を提出したとき、すでに開催日まで1か月ちょっとしかなかった。講座内容を考えるのもわざわざ自分一人で考えるより誰かと一緒に考えた方がより良い案が浮かぶだろうと考え、同じ学科である友達を今回のイベントに誘い、二人で考えることにした。そうして生まれたのが今回の私たちの講座内容である「線香花火と電気パン作り」である。選考の基準として、まずはコストを考えた。科学でのものづくりを子どもたちとやる時に一番のネックとなるものである。金銭面が無制限であるならばいくらでもおもしろいものはある。当然あまりお金はかからない方が良い。よって作る際に必要な薬品を信大教授である漆戸先生が余っているものを使ってよいとおっしゃってくださったので、子どもたちの身近にあるがなかなか作った経験がなさそうある「線香花火」をやることにした。しかし、線香花火だけでは当日の開催時間が余ってしまう。そこで、電気回路をつくって牛乳パックとホットケーキミックスだけでパンケーキが作れるという電気パンもやることにした。これには、私たちが食べ物を扱ったものをやりたかったという、個人目的も含まれていたのだが・・・。

○教材研究・・・まず始めにスタッフとやらなければいけないこと、それが教材研究であ

る。特に私がやろうとしていることは念入りにおこななければ、火や電気を使うことから常に危険度が高い。そこで、電気パンも線香花火も数回実際にスタッフ同士で作ってみることにした。線香花火は火薬の量や当日必要な道具・気をつけなければいけない点・時間はどのくらいかかるものなのかをスタッフみんなで検討しながら行った。そのときも私一人では思いつかなかったであろうたくさんのアイデアが浮かびあがってきた。やはり、様々な人と検討し合うことは大切である。その後、教材研究が出来上がってくると、スタッフにそれぞれ飾り・景品・当日に使う線香花火などの作り方説明などの担当を二人以上でつくり、決まった人が中心となってやっていくようにした。そのとき一番困難だったのはスタッフ同士が学科・学年両方共様々なので、なかなか全員会える機会が少なかったことである。そこでメールを使って課題を出したり、何回か同じ教材研究をする日を設け、来れる日にだけきてもらい、スタッフ全員に経験してもらうように工夫をした。

○願い・・・子どもたちに対する願いとして、科学の不思議に興味・関心を持ち、ものづくりの楽しさ・達成感を実感してもらいたかった。また、今回参加するスタッフには、このようなY O U遊広場での活動はどのようなものであるかを実感してもらい、難しいのだけれどできるだけ渡された作業をただするだけでなく、自分たちで考え内容を考え作り上げていってほしかった。私が講座長であり一番の責任者ではあるのが、それはそれで置いておき、できるだけスタッフ全員といろんなことを経験しながらこの講座をつくりあげていきたいと考えていた。それは、前回のY O U遊広場でスタッフとして経験していたときに感じたことであるが、言われた事をするだけだと楽ではあるが何か達成感が得られなかったのだ。その経験から特に今回初めてY O U遊広場に参加する人たち（学生）にもできるだけ自分自身で動いて活動し、苦労や楽しみ、そして達成感を自ら経験してほしかった。

2. 実際の活動を通して

○子どもたちの当日の動き・・・参加者である子どもたちの年齢層は予想していた以上に幅広かった。小学1年生から小学6年生までいたのだ。当日は子ども14名スタッフ9名であった。まず、始めに恒例のアイスブレイクを一つやり、出来た子から一列に並んでもらい、名前を言ってもらいながら2班に分かれてもらった。そして、子どもとスタッフをそれぞれ2班に分けたまま、線香花火・電気パンをそれぞれの班に前半につくってもらい、残りの後半を班はそのまま内容を入れ替えて行った。そして最後に自分が作った線香花火の中で特に良いと自分で思うものを全員2つ残しておいてもらって、みんなで一斉にやった。当初の予定では線香花火はやはり火を使う物であるので、前半に作った子も後半につくった子も最後に一斉にやろうと考えていたのだが、スタッフから「それは前半に線香花火を作った班が面白くないだろう」という意見がでたので、もしやりたいという子がいて前半の時間が余っていたら2本を残して全てやってもよいということにした。それは大正解であった。子どもたちは自分で作った物をすぐにでも験してみたいくなるものなのだ。

また、子どもたちは線香花火・電気パン両方に同じくらいの興味があってくるわけではなかった。特に男の子は線香花火をずっとやりたがり、また女の子の中の数人は電気パンにチョコチップなど何を入れてやってみるかにこだわり、中に入れるものを子ども同士で交換し合っている姿も見られた。できるだけやりたいようにやらせていたのだが、器具はそれぞれ1班ずつしかない。時間も限られている。よって、全部でき終わって時間が余ったらもう一度やってもいいよと言いつつ聞かせながら、今やっている作業を時間内に終わらせ

た。子どもの興味は様々である。線香花火をつくる際に使う電子天秤にとっても興味をもった子。すりつぶすことがとても楽しいと感じた子もいた。すると、一人1回作業ができるように用意してあったのだが、他の子の作業を横取りしてでも何回もやりたがる子もいた。すると取り合いになるものである。今回はそのことにすぐスタッフが気付いて、「みんな平等に15秒ずつね」など決まりを作ってやることにしていた。するとどうなるのかなと観察していたら、子どもたちは余計に活気づいて順番を待っている子どもたちで秒数を数えあったりしている様子が見られた。楽しいかどうかはやり方次第である。

また、子どもたちの中にはわざと危険な事をしたがる子どももいた。電気配線のやりかたをあえて、危険だと言われている方法でつなげようとする子など。今回は子どもたちが怪我をすることはなかったのですが、一度火花が散り子どもたちを驚かしてしまった。しかし、それを見てからの子どもたちは危険な事をあえてしようとはしなくなった。口でどのくらい危険であると言われても子どもたちは実感がわからないのだ。しかし、だからと言って、危険なことをあえて経験させる必要はないが、どんなことでも経験することが一番の学びにつながるのではないかとそれを見ていて感じた。

3. 反省・考察・課題

今回、私自身学ぶ事がとても多かった。それを一つ一つ書き上げていくと、とても原稿枚数が足りなくなってしまうほどである。まずは今回参加してもらったスタッフの中から数人の人に感想・課題を述べてもらったので、それを載せたいと思う。

田中千穂(3年)・今回のYOU遊広場は私にとって二度目だった。しかし、困難な事には変わりなかった。今回の体験では改めて演示実験の大切さと「本番では何が起こるかわからない」という常に保たなければならない緊張感の重要性を感じた。子どもたちは予測できないような事を簡単にする。どんなに入念な下準備をしたとしても、それは確かな自信にはつながらない。私自身の今後の課題として、子どもたちのどんな行動にも柔軟に対応できる力をつけたいと思う。

長野幸子(2年)・私は子ども達と一緒に活動したいと思い、またこの講座はどちらも行程がどうやるのか興味を持ち、参加しました。花火もパンも大成功でとってもいい体験ができました。そしてスタッフに参加者にと、たくさんの人と出会えて本当に良かったです。

今回の講座では当たり前かもしれないが、スタッフと作業を進めていくうちに材料や方法など様々な面で壁におち当たった。時間が限られているということも要因の一つではあるが、その限られた時間の中でどれくらいベストをつくせるかが大切である。私一人ではとてもこの講座を開く事ができなかった。この講座を選んでくれた子ども達はもちろんであるが、なによりこの講座を通してスタッフ(本部の方や他の講座の人たちも含む)に出会えたことが最高であった。反省点としてはまずスタッフの中で学科や学年が様々であったせいもあるが、学生の空いている時間が合わずそれをどうやって工夫しみんなで成し遂げていくかをもう少し工夫する必要がある。少人数で作業をし、完成させることは確かに楽である。しかしそれでは意味が無い。何らかの形で全員が関わって成し遂げてこそ価値がある。また、様々な学科の人たちが集まってきていたので、その分新しい人との出会いと言う面ではとても良かったのではないだろうか。今まで知らなかった人たち同士かつ動機などに相違があるかもしれないが、同じ活動がしたくて集まってきた人たちと活動を共にする・これが一番充実感・達成感があらわれてきた要因ではないかと考える。

すきすき紙すき

増田美和 障害児教育専攻 3年
藤岡恵美 生活科学教育専攻 3年

1. 講座を出そうと思った動機

私ははじめ、講座は出さずに、スタッフとして参加しようと思っていました。1年間プラザ長として二つの活動に参加してきて、全体を見て、まとめていくという立場ではなく、スタッフとして子どもと接することを、1年間のまとめにしようと思っていたからです。しかし、夏に2週間の幼稚園実習を経験し、もっと幼児と触れ合ってみたいと思うようになりました。また実行委員長の山本真望さんの「幼児だけの講座ってないから、出してみたら楽しいかも」という一押しもあって、幼児を対象とした講座を出してみたいと思うようになりました。しかしどのような活動をするかなどは全く決めておらず、またYOUフェスの1週間後に卒礼での活動を計画していて、一度に二つの企画を進めていかれるかどうかという不安もあったため、講座を出すことを最後まで迷いました。

(障害児教育専攻 3年 増田美和)

私は1年間プラザ長としてさまざまな活動に参加してきました。YOUフェスでは講座を、一年間の活動の中で特に印象強く、楽しかった幼児が参加できる、幼児対象の講座にしたいと思いました。しかし、すぐには講座を出すことに踏み切れませんでした。なぜなら私は幼児の発達段階や実態をほとんど知らなかったからです。知っていることと言えば小学生や中学生の一歳差とは違い、発達段階に大きな差があるということだけ。講座にはたくさんの幼児が参加してくれるだろうし、講座長になれば学生スタッフの先頭に立たなければいけません。そんな不安な気持ちとそれでも幼児対象の講座を出してがんばりたいという葛藤を繰り返しながら、内容を決めず講座応募の紙に「幼児対象の講座を出したい。」と書きました。しかし幼児対象の講座は出来ないかもしれないという不安は最後まで残っていました。

(生活科学教育専攻 3年 藤岡恵美)

それぞれの違うところで同じような思いを抱えていました。私たち2人はそれぞれのプラザをやっていて、その日も。自分の考えている講座の話をする、お互いが同じ悩みを抱えていることを知り、協力して講座を出すことに決めました。そして、スタッフ募集が始まりました。集まってくれたスタッフは計7人。それぞれ色々な思いを持って参加してくれました。

昔と違って、現代社会には紙はとても普通の品であり、簡単に手に入れることができます。そのようないつも見ている、使っているものについて、どうしてできたのか、どんな材料でできたのかと、ほとんどの子どもが考えたことがないと思います。今回のような楽しい活動を通して、子どもたちにいつも食べている野菜で紙を作ることが出来るということや、紙を作るの大変さなどを分かってもらって、これから、物に対して大切にようになる。自分もその活動から、普段で知ることができないことを知り、勉強になれるからと思って、その活動に参加することにしました。

(教育実践科学専攻 2年 張薇)

2. 作り方

教材研究ではまず、野菜の葉や茎だけを使って紙を作ってみました。野菜の葉や茎と片栗粉を水に溶かしたものをミキサーにかけ細くしました。このとき、ミキサーにかけると時間をいろいろ変えてみました。すると、ミキサーに短時間しかかけなかったものは、水を絞って紙にすると、茎などの繊維がまだ荒く残ってしまっていてごつごつした紙になってしまいました。そこで次からは、繊維も細くなるまでしっかりミキサーにかけたうまくいきました。しかし、次に問題となったのは、紙が乾くと縮んでくるということでした。そこで牛乳パックを細かくちぎって今までの材料に新たに加えてみました。すると紙は手触りが滑らかで破れにくくなり、また乾かしても縮まなくなりました。さらに字も書けるようになりました。これでなんとか納得のいく紙ができました。次に私たちは紙の色を変えてみたらおもしろいのではないかと考えました。それまでは緑色の紙しか作っていませんでしたので、にんじんやみかんの皮、いちょう、りんごの皮などを使って作ってみました。すると、にんじんやみかんの皮、いちょうを使ったものはきれいに発色しましたが、りんごの皮は変色してしまってきれいに発色しませんでした。最後に紙に落ち葉をはさんでもうまくいくのか試してみました。すると一枚の紙にいろいろな色が加わってとてもかわいらしい紙に仕上がりました。

(言語教育専攻 2年 天保奈津子)

紙すきをするためのすき枠は牛乳パックの紙を使って作りました。教材研究の時には幼児の手の大きさに合わせてすき枠のサイズを決めることを一番に心がけましたが、あまりに枠を小さくしてしまうと出来上がる紙のサイズも小さくなってしまって、紙に絵や文字を書くことができなくなってしまうので幼児の手に合わせることもともに、出来上がる紙の大きさも考慮しました。また、野菜の皮や葉っぱでできた紙は乾燥させると思った以上に縮んでしまうということが教材研究からわかったので、そのことも考慮した大きさの枠にしました。この紙作りの教材研究では、はじめに大根の葉っぱの部分を使ってみましたが、3回目の教材研究では野菜ではなく道端に生えているニラに似たような葉っぱを使って紙を作ってみました。葉っぱを細かく刻み、ミキサーにかけるときには水で溶いた片栗粉を混ぜてみると繊維も細くなり、片栗粉によってつなぎ目もできてそれまでに作った紙よりは紙らしくできました。見た目には大根の葉っぱで作った紙とはたいして変わりませんが、出来上がった紙からは葉っぱのにおいがして、身近な草の感じがよく出せたと思います。また、葉っぱや草を使うと緑色の紙しかできないので、他に黄色のイチヨウの葉やみかんの皮などを使っていろいろな色の紙を作ろうと考えました。みかんの皮の部分は内側に繊維質が付いているので、それがつなぎの役割を果たし、紙の感じを一番うまく表すことができました。このように紙作りの教材研究では繊維質を含んでいるものや、出来上がる紙の色、紙の粗さを考えて材料を選びました。回数を重ねる度に紙らしくなって行って、出来上がった紙の上に落ち葉や木の実を埋め込むなどして季節感のある紙も作ることができました。

(社会科学教育専攻 3年 島田綾香)

3. 当日の流れ

時間	予定	実際
12:30~	歌を使った自己紹介	体育館から教室へ移動

12:50～	スタッフ自己紹介	歌を使った自己紹介と 紙づくりの説明
13:20～	紙すき	草や葉っぱ探し（宝物探し）
14:00～	レクリエーション （歌を使って手遊び・ 体を使ったゲーム）	紙すき （個人のペースにあわせて）
14:30～	おやつ	
15:00～	作った紙に手紙を書く	おやつ
15:20～	閉会式（終了証授与）	閉会式（終了証授与）

4. 当日の子どもの様子

私とペアだった子は自己紹介をしあった時、まだ緊張と不安のためか、自分の名前を本当に小さな声で言うぐらいでした。それが、こちらがいろんなことを話しかけ、返事を焦らずにじっと待っていると、しだいにどんどん自分から話すようになりました。活動中も自分で作る紙をよいものにしようとする姿勢が感じ取れ、夢中になっていました。最後できた紙を大事そうに扱い、お母さんに見せた時の笑顔がとてもかわいらしかったです。

（社会科学教育専攻 3年 坪野さやか）

私は当日、Mちゃんとペアになったが、私の膝に乗ったり、抱きついてきたりと、とても人懐っこい子どもでした。宝探しをする時は、外で遊びたい気持ちのほうが強く、宝を捜さずにかくれんぼをしたり、赤い実をとったりしていたので時間がかかりましたが、「集まる時間だよ」と促すと駆け足で戻って行きました。大根の葉を使って一緒に作業したが、作業手際が早く、周りの子どもと順番を競っていました。また、紙を絞ったり、乾かしたりする時、最初は作業をするが、後半は外で遊ぼうと誘って来たので鬼ごっこをしました。おやつタイムは自分のぶんを私に分けてくれる優しい一面を見せてくれました。

（社会科学教育専攻 3年 山本恵里子）

YOU遊フェスティバルに今回初めて参加しました。当日はやはり初めて会う子ばかりだったので緊張しっぱなしでなかなか声をかけられず戸惑ってばかりでした。先輩達の溶け込む姿を見て正直羨ましいと思っていました。でもそんな思いもいつの間にか消えており、気付けば子どもの輪に入ることが出来ていました。良かったという思いでいっぱいでした。今回のフェスではプラザの活動時にも増して学ぶことが多かったです。

（教育実践科学専攻 2年 田中千尋）

子どもたちは真剣になって、材料となる木の実や葉を拾い集めていました。そしてそれを使って自分だけの紙を作ることに、とても目を輝かせていました。小さな子どもたちにとって紙すきの作業は、けして簡単なものではありません。しかし、いやだと言ってあきらめることなく、ときには隣の子との作業の速さを競いながら、また学生の手を借りながら、思い思いの紙を一生懸命に作っていました。子どもたちの生き生きとした姿が見られ、大変良かったと思います。

（理数科学教育専攻 1年 松島裕）

5. さいごに

この講座をひらき、私はみんなで協力して一つのことを作っていく楽しさと、幼児のパワーを感じることができました。みんなで試行錯誤しながらの教材研究は、大変というよりも、「どうすればきれいな紙ができるだろう」とわくわくしながら行うことができました。また、当日の子どもたちのパワーは、私の想像よりもとても強く、「もしかして難しいかな」と思っていた作業も楽しそうにこなしてくれました。

反省としては、子どもがどのくらいの早さで作業をしていくかがわからなかったとはいえ、計画していた時間が大幅にずれてしまい、レクリエーションができなかったことです。レクリエーションをどうしてもしたかったというのではなく、事前に「もし予定とずれたら」ということをほとんど考えないまま、当日に臨んでしまったことを反省しています。その場に応じて時間を変更していくことはとても大切だと思いますが、始まる前にあらゆる場合を考えておく必要があると強く感じました。 (障害児教育専攻 3年 増田美和)

紙すきの講座を出そうと思ってから 1 ヶ月間、紙の作り方、講座の進め方、レクリエーションなど悩んで考えることが多くありました。今までの自分は、自分一人だけで何もかも考えてしまうことが多かったのですが、この講座を出すことによって友達同士の助け合いを十分に感じるすることができました。友達の意見やアドバイスを聞くことは、時間がかかることがあるかもしれないけれど、より考えていたものを深くよいものとしてくれると実感しました。また、野菜の葉をもらうなど地域の人たちのやさしさや暖かさに触れることができました。

この講座を出すことによって、普段の生活の中では気付けなかったことを感じる事ができました。人のかかわりの中で学ぶことがたくさんあり、そして感動がたくさんありました。自分を成長させるためには、多くの人とかかわることがどれだけ重要かということに気付くことができ、本当によかったと思います。 (生活科学教育専攻 3年 藤岡恵美)



第一回 わんぱく子どもドッチボール大会

前崎伸周 教育実践科学専攻 2年

1. 講座を開くまでの道のり

「YOU遊フェスティバルを行います。」この言葉を聞いたときに、私の中のお祭り好きの血が騒ぎ、どんなことをするんだろう、自分にも何かできないだろうか意識するようになりました。そして、講座募集の広告見てすぐに講座を開こうと思いました。このときはまだ具体的に何をやるのかは考えてなく、子どもたちと体を動かして遊びたいとだけ考えていました。自分が子どもだったら、どんな講座があったら参加するだろうか考えたとき、真っ先に思い浮かんできたのが、『ドッチボール』でした。

私が、小学生のころは、毎日学校でドッチボールをやっていた記憶があります。私の中では、子どものスポーツ＝ドッチボールです。ドッチボールというスポーツを通して、多くの友達と知り合えてもらえたらうれしいです。また、多くの人と触れ合うことの少ないこのご時世で、大勢の人と触れ合う機会という意味もあります。また、スポーツには必ずルールというものがつきものです。子どもの頃に、世の中にはルール(秩序)があるということ教えることはとても重要なことだと思います。こうした経験を子どものころにしないでいると、ルールの守れない自己中心的な子に成長してしまうのだと考えます。子どもにルールを教える上で最も効果的なのがやはりスポーツだと考えます。そういった点にも注意して行っていきたいと思いました。

もう一つ、この講座を開こうと思った出来事がありました。私は、昨年8月に子どもキャンプに参加しました。そこでの自由時間の遊びで、子どもたちとドッチボールをしました。子どもはどの活動よりもはりきり、顔も真剣そのものでした。私自身もそれに負けじと大人気なく、本気でぶつかっていきました。子どもも大人も関係なく、本気でぶつかりあえるのがドッチボールの醍醐味だと思います。子どもにとっても、自分より年上の人と対等に渡り合えたことで、終えたときの満足そうな顔といったらそれは今でも忘れません。もちろん私たちにとっても、子どもと本気でぶつかり合えるというすごく貴重な経験ができます。これらのことから、私はこの講座を開こうと思いました。

2. 講座の流れ

- ・ 開会宣言、開会式、抽選会(10分)
- ・ 準備体操(5分)
- ・ 試合開始(100分)
- ・ 閉会式、表彰式(10分)
- ・ 後片付け(15分)

3. 当日の様子

当日は20名以上の参加があり、混乱を招かないか不安であったが、スタッフも13名と多かったため、大きな混乱もなく進行することができました。

会場作りや、対戦表などはすべて前日までに仕上げておいたため、当日はドッチボール

のみに集中することができました。一番の問題であった、どのボールを使うかということについては、実際に教材研究をした上で、参加者の学年層に幅があるということも考慮して、やわらかいビーチバレーボールで行うことにしました。

はじめに、ルールの説明をきちんとしたことと、審判を学生がきちんに行ったこともあり、ルールを破るとか、判定にけちをつけるなどということはありませんでした。

試合は4チームの総当りで行いました。どの試合も、子どもも学生も全く関係なく白熱した試合ばかりでした。子どもの投げる球に学生が当たったと思えば、学生の渾身の一撃を子どもが受け止めたりと時がたつのも忘れるくらい熱中していました。試合を行って行く中で「OOちゃん、パス」など、子供同士が名前呼び合うようにもなりました。時には、ハイタッチを交わしたり、当てられた子を励ましたりと、ドッチボールを通して、子ども同士につながりができていくのがわかりました。私と同じチームにこの講座唯一の中学生の男の子がいました。はじめは、小学生の元気に圧倒されていたのか、ほとんど喋らず、元気もありませんでした。しかし、ひとたび試合が始まると、チームの大黒柱として大活躍しました。すると、周りの小学生が歩み寄って、「何でそんなにうまいの?」とか、「ねえねえ、何年生なの?」と興味を示し、一目置く存在となりました。すると、その子は後半は人が変わったかのように積極的になり、顔も輝いていました。この子が輪に加わった瞬間でした。学年の壁を越えたつながりも作ることでできるスポーツはいいものだと改めて思いました。

ただ一つ、残念だったことがあります。それは、女の子に対する配慮不足でした。男の子の中に混ぜて行ったため、女の子が活躍するという場面があまりありませんでした。そのため、後半は、女の子の中には疲れたといって休んでしまう子も出てしまいました。そのため、後半は、コートを半分に分け、一方を男子、もう一方を女子に分けて行いました。このおかげで後半からは女の子も、活躍の場を与えてあげることができました。このことは、今回の最も大きな反省点でした。

試合の合間には、休憩を何度かとり、学生と子どもの交流、子供同士の交流ができ、より楽しい雰囲気づくりをすることができました。子どもにとっても、また学生にとってもこれほど多くの人と同じ空間で関わりあえたことは、とても貴重な経験になったと思います。

4. まとめ

キャプテンとしてこの講座を行ってきたが、今までの活動は3、4年生に頼ってばかりいた自分が、責任もって何とかやり遂げた初めての活動であると思います。この講座を通して、ひとつの物事に対して、いろんな視点から見ることの大切さや、人をまとめることの大変さを知りました。また、準備を手伝ってくれた仲間の大切さも知りました。今回の活動は必ず、私の将来にプラスになってくることだと思います。

また、今回の活動を通して、改めて子どもにとってスポーツがいかに大きな存在か、再認識することができました。はじめは、輪に入っていけない子も、スポーツを行うことで、その輪の中に自然と入っていけるのです。

また、学生自身が本気でできたことも良かったと思います。子どもは私たちが考えている以上に、大人の表情を敏感に感じ取っています。適当にやろうものならば、子どもたちものってきません。時には、手を抜くということも大切だとは思いますが、子どもと触れ

合うときには、私たち自身が心から楽しみ、楽しさを共有することが大切だと思います。

子どもたちの感想で、「ドッチボール楽しかった」という感想や「来年も開いてね」という言葉画が多かったことは、とても嬉しいことでした。また、機会があれば、第2回、第3回と開催したいと思います。



気球よ…飛べ！

—悪戦苦闘の17日間—

幸阪創平 教育実践科学専攻臨床学校教育学分野 3年

1. はじめに

私が、YOU遊フェスティバルに参加するきっかけとなったのは、数ヶ月前の教育実習から「子どもと一緒に遊びたい」「附属小の子どもともう1度会いたい」という気持ちからでした。もともとYOU遊広場に参加していなかった私は、自分で企画して子どもと関わる機会がありませんでした。そこで、今回YOU遊フェスティバルの講座長を務めることで、自ら考えた講座で子どもが楽しんでくれることを願って参加することにしました。

さて、講座「それいけ！新聞気球？」を開くことにしたのは、広いプレイパークの真中で子どもと一緒に作り上げた熱気球を大空高く飛ばしたら、子どもが喜ぶだろうという単純な発想からでした。とは言っても、小学校低学年の子どもは飛行機や電車のような乗り物に興味を抱く年頃だと思います。熱気球は乗り物としては一般的と言えませんが、その飛ぶ原理や卵のような形にきつと子どもが興味を抱く要素があると思います。そこで「温められた空気が上昇するのはどうしてなのか？」という科学的疑問を子どもが抱いてくれることを原理の面から求め、構造面から身近な新聞紙を使って「本当に紙なんかで気球が飛ぶの？」という不信感を子どもに持ってもらうことを期待していました。

そこで、本番17日前から来る日も来る日も実験を開始したわけですがその過程は悪戦苦闘の日々でした…。

2. 気球実験の全容

【11月20日】新聞気球を道場で作ることにした。「『NHK やってみようなんでも実験』米村傳治郎 監修 青春出版社」に載っていた新聞紙を504枚使って作る新聞紙気球（天板72枚 側面432枚）を真似て作ろうとしたが新聞紙の枚数不足で断念。

【11月21日】新聞の枚数を減らして気球を作ることにした。つまり、YOU遊フェスティバル当日は子ども達と1つの大きな気球を作り上げるのではなく、それぞれの子どもが気球を作って飛ばすことが出来るようなミニ気球を作ることにした。そこで、新聞紙12枚（天板6枚 側面6枚）を使って気球を組み立てることにした。新聞紙同士をビニールテープで張り合わせて気球の形を作ったら、気球の入り口部分に針金のリングを取り付ける。最後に水糸をリングの所から垂らせば完成である。さて、これから気球を飛ばすのだが、本によれば火力の強い大きなバーナーで熱すると書いてあるものの、そのような高級な道具は無かったのでプレイパークで焚き火をしてその熱で飛ばすこととした。もちろん、焚き火は直接新聞気球にあてるのは危険なので底をくり抜いた1斗缶を二つ重ねて煙突を作って焚き火の上にかぶせた状態で気球の口に差し込んだ。しかし、気球が膨らむまでには時間がかかり、一瞬浮いたかと思うとすぐ落ちてきてしまう。気球が飛ばないことに不安を感じた。

【11月22.23.24日】気球が飛んでもすぐに落ちてしまうことを反省し、新聞紙の接着をビニールテープからノリに換えて軽量化を図る。そして、新聞紙の枚数を5と1/4枚（天板1

枚 側面 4 枚と 1/4 枚) にしてさらに軽くした。また、気球の発射台の煙突をさらに高く細くすることで、気球の中にまで煙突を指し込み熱が外に逃げないように改良し、焚き火もブロックで釜戸を作ることで安定した火を確保することにした。以前と比べ、体積も小さくなり質量も減った気球はすぐに膨らんだ。しかし、小さい故に弱々しく風が吹くたびに膨らんだ機体は凹み、折角集めた熱が全部外に逃げてしまった。飛ばぬ気球に落ち込んでいた時、ちょうど 23 日と 24 日は土曜日、日曜日で小学校は休みだったので数人の子ども達が気球の周りに集まって来た。最初は気球を飛ばすことで頭がいっぱいだったが不思議そうに気球の周りに集まって来た子ども達が喜んで手伝ってくれたので気球は飛ばなかったものの、こうして気球を通じて子ども達と遊べる事が出来て楽しいひと時を過ごした。(その後、子ども達と焚き火で芋も焼いて食べたりも…。) 本番まで 2 週間である。

【11 月 25.26.27 日】焚き火でススまみれになった気球を何度も作り替えては飛ばすものの飛ぶ気配は無く、悩んでいたところノリオさんから「ちゃんと浮力を計算すれば大丈夫だから」とアドバイスを受け、「『ソーラーバルーン』 広井力 著 立風書房」という本をお借りして、浮力の計算をすることになった。まず、新聞紙、針金リングの重さを量るために 1/100 まで計測できる質量計と外気温と気球内部の温度を測るための温度計を化学科の教官からお借りした。質量を測るもことも困難を極めたが、花瓶の形をした気球の体積を求めることに四苦八苦であった。その結果、ミニ気球が飛ぶには外気温と気球内部の温度差が約 40 度だと飛ぶことが判明したが、焚き火の炎では不可能であったためこのサイズの新聞気球は断念しなければならなかった。さらに、不幸なことに本番当日、気球の講座は外で行うため雨案を考えなければならぬことが判明。屋外も飛んでいないのに屋内はどうなるのか不安は募るばかり。

【11 月 28.29.30 日】雨案を考えることにした。雨が降れば体育館で焚き火は無理なので熱を発生させるにはドライヤー、もしくはアウトドアで使う携帯用ガスバーナーを使うしかない。したがって、まずはドライヤーを使ってみたが、ドライヤーの熱では気球はびくともしなかった。次に体育科の教官からガスバーナーとガス缶をお借りして実験してみたがこの火力でも気球はあがらなかった。そこで、葛藤はあったが仕方なく新聞気球をやめて厚さ 0.025mm の強化ポリ袋で気球を作ることにした。しかし、1 つの気球を作るのに 4 と 1/4 枚を使った強化ポリ袋は質量が重いためミニサイズの気球は飛ばなかった。次に厚さ 0.017mm の普通のポリ袋を購入し同じように作ったらガスバーナーの炎でポリ袋気球はあっという間に浮かんだ。しかし、ポリ袋気球の内部の熱はすぐに冷めてしまうため滞空時間は短い。この問題を解決するために、気球の高さを 2 倍 (ポリ袋 8 と 1/4 枚) にして温かい空気が十分に確保できるような構造にした。その結果、ポリ袋気球は先にも増して飛ぶことが出来た。本番まで 1 週間である。

【12 月 1 日】雨案の計画はほとんど出来たものの、肝心の新聞気球は飛んでいなかった。半ば新聞気球をあきらめようと思いつつも、ポリ袋気球の細長い形にヒントを得て、長くて体積を大きくした新聞気球を 1 度試しに作ってみようと思いつき、30 枚の新聞紙 (天板 6 枚 側面 24 枚) で作ってみた。そして、これを焚き火の発射台にセットすると 3 分もかからずに気球はミルミル飛んでいきプレイパークから体育館を超えて生協食堂まで飛んでいった。この時、初めて新聞気球が気球らしく飛んだ瞬間であり、感動の瞬間であった。本番まで後 6 日、少し肩の荷が下りた。

【12 月 2.3.4.5.6 日】新聞気球もポリ袋気球も飛んだのでこの 5 日間は気が楽であった。た

だし、当初の計画とは大きく変更、晴れても雨が降っても子ども達には2人で1つのポリ袋気球を作り、晴れた時は事前にスタッフが作っておいた新聞気球をみんなで飛ばすことした。これは、本番当日、気球の作成時間が1時間半の設定だったので、ハサミやノリを使って30枚の新聞紙をはり合わせて作るの細かい作業故、子ども2人とスタッフ1人では非常に難しいと感じたのと、ポリ袋気球の場合、子どもが無地のポリ袋1面にマジックペンで絵を書くことが出来るので飛ばした時に一層喜びが増すのではないかと思ったからである。また、2人1組というのは子ども同士が協力して気球を作ることで初めて出会うメンバーと仲良くなることを目的としたためである。

気球を作る前に「どうして気球が飛ぶのか？」という導入を入れることにした。そこで、スタッフの山口君の案で「一休さん」改め西君が扮する「キッキュウさん」をメインキャラクターにしてトンチを交えつつ「水を張った水槽の中に熱いお湯の入った水風船と冷たい水の入った水風船を入れたら、水風船はそれぞれどうなるか？」という問題を出して子ども達の前で実演することで、気球内部の空気も熱で温められて上昇することを教えようと考えた。これですべての準備は完了。後は当日晴れてくれることを願うだけである。

3. 本番当日の様子・子どもの動き

当日、「それいけ！新聞気球？」に応募してくれた子ども達が体育館に集まっていたので迎えに行くと教育実習の時のクラスの子どもが2人来てくれていて、久しぶりの再会にとでもうれしかった。その後、6名の子ども達を泉会館に連れて行き、キッキュウさんの実験導入から始めた。子ども達は小1から小4までの男の子である。わんぱく故、実験や作り方の説明の最中、集中して話を聞くというよりか、興味を持ったものにどんどん集まってくる状態であった。水槽や水風船、キッキュウさんのズラにまで興味を示していた。「水を張った水槽の中に熱いお湯の入った水風船と冷たい水の入った水風船を入れたら、水風船はそれぞれどうなるか？」という問題提起に、子どもは班のスタッフや友達と相談しながら「たぶんあったかい方が浮くよ」とか「よく解かんなくなってきた」とつぶやいていた。そして、実演する時、子ども達はワッと水槽を取り囲んでその瞬間を逃すまいとまじまじと覗いていた。

次は気球の作成である。子どもは6名だったので1班2人にして、それぞれの班にスタッフを2人配置した。低学年の子ども同士が一緒の班のところは、スタッフに子どものハサミの取り扱いには注意してもらって作業を進めてもらった。1時間半という長丁場の制作だったので小1の子ども達の様子を覗いていると、途中で両面テープの切れ端で遊んでしまう一幕もあった。しかし、スタッフがそれぞれの子どもに作業の役割を与えるように声がけしたことで責任を持って子ども達も制作に参加することが出来たのではないだろうか。また、作業の中でスタッフが子ども達と常に対話をしながら楽しく作業できたことがこの長丁場を乗り切れた要因だったと思う。

ポリ袋気球に絵を描いている時に、小1の子どもが「この気球にみんなの名前を書いて飛ばしたいな。」とスタッフにつぶやいた。さっきまで両面テープで遊んでいた子どもが実は気球にそのような願いを込めていたことに私は驚いたと同時にこの講座を開いて良かったと改めて思った。最後、その気球には子どもが班のスタッフの名前や顔を描いてくれてすばらしい気球が完成した。

飛ばすためにプレイパークに向かった時、小雨が降り始めていた。このままだと新聞気

球もポリ袋気球も飛ばなくなると思い、急いで準備に取り掛かった。各班ごとにガスバーナーとガス缶とガスバーナーがスッポリ入る手製の煙突を配り、早速準備に取り掛かってもらった。私は新聞気球を飛ばすため釜戸と焚き火の準備をした。それぞれの班からポリ袋気球が飛ぶと歓声が上がった。子ども達はポリ袋気球から垂れ下がった2本の水系を2人が1本ずつ持って風に流されないようにコントロールしていた。そんな中、新聞気球は発射台に設置したその大きな機体を保護者の方々が支えてくれたおかげで、熱の充満した気球はムクムク膨れ上がり、空高く舞い上がった。気球が飛んでしばらくして落ち始めると同時に我先に気球の落下地点に急いで子どもが走っていった。よくは分からないが、なんか私もそんな気持ちになって負けじと走った。感動の瞬間である。

4. 感想と反省

今回、『それいけ！新聞気球？』をやってみて、今までの学生生活とは一味違った形で自分に真剣になれた。真剣に取り組んではいたものの、迷惑をかけることは多々あり、普段人をまとめるようなことに携わってこなかったのが、当日まで気球スタッフの予定を合わすのに手間取って準備に支障をきたしてしまった事、途中で気球計画が変更したため道具をあれこれ実行委員の方に請求した事が反省点である。

17日間の内10日間は不安の連続で、本番1週間前というのに周りの講座は順調にしている一方で、私の講座はタイトルの新聞気球さえ飛んでいなかった。しかし、スタッフやYOU遊フェスティバルの実行委員の方々が手伝ってくれたおかげでなんとか本番に間に合うことが出来たととても感謝している。そして、何と言っても気球が飛んだ時の子ども達の笑顔が悪戦苦闘の17日間の報いとして私のすばらしい思い出となった。保護者の方からも、「普段うちの子どもは家に閉じこもっていたのに気球と聞いて喜んで外に出て来たんですよ」とか「子どもが東京ディズニーランドより楽しいと言ってました」と感想を聞かせていただいて本当にやった甲斐があった。このような気持ちを多くの教育学部生に味わってもらえるようにYOU遊フェスティバルをこれからも是非続けていって欲しいと思う。



プラスチック?!に宝物をとじこめちゃおう!

—子どもの想像力と創造力—

石関千絵 社会科学教育専攻 2年

1. 今の自分にできること

「なにかやってみたい。なにか自分の力でできることはないだろうか」と思ったのが講座をやってみようときっかけだった。しかし、当初は「自分で講座を開いてみよう」などという考えはまったくなく、「誰かの講座に便乗させてもらえないかな」程度にしか考えていなかった。そんな私が講座の応募が始まってから一番乗りで申込をすることになってしまったのだから世の中わからない。講座応募の箱を見た瞬間、「自分にもなにかできるかもしれない」と思ってしまったのだから、まったく思い込みとは恐ろしいものである。友人2人を強引に巻き込んで、何にしようか考えたところ、ラミネートカードがいいということになった。理由は私が小学生の時、体験してみて楽しかったからだ。今は安易すぎる決め方だったと少し反省している。なにしろ生活図鑑等、一切調べることなく決めてしまったのだ。でも、中身までいい加減に決めるわけにはいかない。「子どもが楽しめて、しかもなにかの役に立つラミネートカードの講座」を目指して私のフェスティバルに向けての活動が始まったのである。

2. 講座の目的と教材研究

この講座を通して、まず子ども達に感じてもらいたかったのが作る楽しみだった。楽しくなければやる意味がないと思った。私は2年で教育実習の経験がない。だから、学習に対する子どもの実態がわからない。でも、きっと子どもは楽しみの中に自分なりの学びを見出すのではないかと思ったのだ。

それから、ラミネートカードをやりたいと思ったときから、私はラミネーターを使うのが嫌だった。ラミネーターを使えばきれいに仕上がるかもしれないが、それだけでは何の面白みもない。同じ「熱を加える」でも自分の手で作ったという実感をもって欲しかった。そこで、浮かんだのがアイロンである。普段、子ども達が触れる機会の少ないアイロンという家電。しかし、アイロンはどの家庭にもあるものである。それが工夫次第で様々な用途があるという事を知って欲しいと思った。

さらに、どうせ作るなら、自分の個性を生かして、自分の力で作ったものに愛着を持って欲しい。自分独自の自由な発想をして欲しい。そのためには授業形式のような教え方はしたくない。そこで、一斉に作り方を教えるのではなく、分からなくなったら班付きのスタッフに聞くという方法をとることにし、さらにスタッフにはなるべく手伝わない、手を出さないようお願いをした。

教材研究のほうは思ったよりも難しくなくて、低学年の子どもがアイロンを使っても失敗せずにできそうだった。「宝物」である切抜きやシールは各自の持ち寄りにしてあるので、こちらで用意したのは画用紙や折り紙と押し花にした葉くらしいのものだ。ちょうど紅葉の時期だったので、自然の色合いに目を向けるのもいいかなと思った。見本は作らず、スタッフの教材研究とかねて名札を作ったが、学生も楽しんで作れるものだと分かった。

そんなこんなでたいして忙しくもないくせに、自分ひとりで勝手に忙しいと思ひ込み、勝手にいっぱいいっぱいになっていると、いつの間にかフェスティバル当日になっていた。

3. 講座の流れ

- *スタッフ自己紹介（10分）
- *アイスブレイク（ナンバーコール）→班決め（15分）
- *班確認・班で自己紹介（10分）
- *カード作り（45分×2・間に10分の休憩）
- *作品鑑賞会・終了賞プレゼント
- *掃除・かたづけ（10分）

4. 子どもの作品から

カード作りが始まったとたん、部屋の空気が変わった。それは子ども達がこの講座をいかに楽しみにしてくれていたかが分かるものだった。普段、言う事を聞かないいたずらっ子達がカード作りに熱中している。そして出来た作品を自慢げに見せてくれる。その様子が私にはとても嬉しかった。そして、その中には、私達の予想もしなかった発想でカードを作り上げた子どもがいた。

小学校2年生の男の子

ラミネートカードは紙などをラミネート紙の間にはさんで熱を加えるとラミネート紙同士がくっついてわりと硬くなる。彼は一度ラミネートしたものをさらにもう一度ラミネート紙にはさんでさらに硬くしていた。

小学校6年生の女の子

周りの子どもが切り抜きに合わせてラミネート紙を切っている中、A3のラミネート紙を全部使って大きな作品を作り上げた。自分の好きなキャラクターの切り抜きやシール、思い出の写真や押し花などを使い、アイロン掛けもハンカチをうまくずらしながら作った大作は自分の部屋に飾ると言っていた。

5. 講座を終えて

*反省点・・・何よりの反省はアイロンの扱いだ。結果的に4人も火傷をさせてしまったのは私の管理不行き届きのせいである。前半はアイロンを使う時、子どもから絶対に目を離さないように援助するようにしていたのだが、後半になればアイロンの扱いにもなれて、特に高学年は一人で出来るようになるだろうと思ってしまったのがそもそも間違いの元である。アイロンに対する抵抗はなくなったものの、少しの油断がケガの元になってしまった。火傷の子が出てしまったのにそのままアイロン掛けを続けてしまったことも火傷の子どもを増やしてしまった原因である。本当に悪い事をしてしまったなと深く反省している。

それから、宝物についての細かい注意が欠けていたことも反省しなければならない。宝物（雑誌の切抜き、シール、写真など）というふうに記載したのだが、子どもの宝物の中には立体的なもの、お金などが含まれていた。カードと言えば薄いものという考えが私の中にあっただけもあるが、子どもにとって重要だったのは宝物という言葉だったのだ。子どもに連絡をする時は、細かすぎるくらいの内容でちょうどいいのかもしれない。

*考察・・・今回、講座をやってみて子どもには2つの「そうぞうりよく」がある事を知

った。ひとつは想像力、発想する力である。子どもの想像力は果てしない。私達が思いつかないようなことを平気でやってのける。もうひとつは創造力、創り出す力である。子どもはその小さな体に考えられないような力を持っていて、何かを作り出す時にその力を発揮する。その時の集中力にも目を見張るものがある。彼らは休むことも忘れて、時間の許す限り作り続けていた。いつか読んだ本の中に「時間を忘れて夢中になれるものがある人は幸せである」という言葉があった。その通り、子どもたちは作っている間中、時間を忘れて、時間の許す限り真剣に取り組んでいた。別に大人になるとその力が消えてしまうわけではないが、子どものもつ力には私達に「すごい」と思わせるものがあるのだ。今回、この2つの「そうぞうりよく」を目の前で見せてくれた子ども達に心から敬意を表したいと思う。

6. 私とYOU遊広場

今年1年間、YOU遊プラザの活動をしてきて、子どもの発想の素晴らしさ、着眼点の鋭さに何度も驚かされてきた。そして、子ども達からたくさんの楽しい時間をもらった。時にはもう投げ出したかったり、つらかったりすることもあったけれども、それでも今まで続けてこられたのは子ども達がそこにいたからだと思う。

信州大学に来られて本当によかった。来年度は今年学んだたくさんの事を生かして、さらにYOU遊広場の活動に取り組んでいきたい。

お世話になった先輩方、友達、そして顧問である土井先生には本当に感謝しています。ありがとうございました。来年度もよろしくお願いします。



海の牧場

夏井一智 野外教育専攻 2年

萩原瑞恵 美術専攻 3年

吉田理史 野外教育専攻 2年

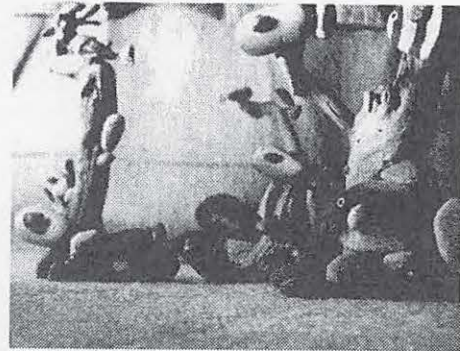
1. ねらい

自然物（石、流木）を用いて、素敵な作品が作れることを知る。

また、長野では普段見る機会が少ないカラフルな魚を、図鑑を通して知ってもらう。

2. 用意したもの

① 見本・・・・・・・・・・3つ



② 石・・・・・・・・・・体を構成する石は大きめの楕円形で、3~7cm くらいが良い。鱗は小さい三角の石が理想的。

③ 流木・・・・・・・・・・真っすぐで単調なものよりも、曲がっていて変化のあるものの方が見た目にも面白く、曲がった箇所を魚を固定させるのにも役立つ。10cm~30cm くらいの長さの流木。

④ ボンド・・・・・・・・・・石や金属を接着するボンド。特徴はA剤とB剤を混ぜる5分で硬化し、接着強度が強い。

「KONISHI ボンド クイックメンダー コンクリート・金属 100g」実売価格 720 円

※ ボンドの量は、7人でぎりぎり足りる量。ホームセンターで購入できる。

⑤ 絵の具・・・・・・・・・・アクリルを用いる。ターナー、リキテックス何でもよい。作品で使用する量は少量でよいので、一箱 12 色セットで十分足りる。画材店で購入。実売価格 1500 円?/セット

⑥ ジェッツ・・・・・・・・・・絵の具を塗る前の下地に必要。なければアクリルの白でも応用できるが、何本も必要になり高がつく。画材店で購入。実売価格?円

⑦ 筆・・・・・・・・・・2/0は一人に一本必要。8/0は2~3人に一本でよい。サイズ2/0（身体を塗る）実売価格 200?円

8/0（目や細部を仕上げる）

画材店で売っている中で一番細筆 実売価格 200?円

- ⑧ 魚の図鑑・・・一人一冊あるのが理想的。
- ⑨ バケツ・・・筆を洗うために必要で、水を入れることができるなら何でもよい。

3. 参加者に持ってきてもらったもの

- ① 新聞紙・・・机の上に引いて汚れないようにする。またパレットの代わりや、ボンドを混ぜるときに用いることもできる。
- ② バケツ・・・同上⑨

4. 1ヶ月前～1週間前の流れ

和歌山県にスキューバダイビングに行った帰りに熊野灘にて、大量の石と流木を拾ってきた。形の良い流木はなかなか見つからない。石は全体的に丸いものが多かった。次に長野市の犀川で、鱗になる三角の石を拾いに行ったが、ここも全体的に丸いものが多い。

見本の作品製作を開始する。

5. 1週間前～3日前の流れ

再度、三角の石を拾いに今度は、裾花川に出向いた。流量が少ない上流のほうが丸くならないので必要な石が多かった。

3つの作品が完成。一つの魚を作るのに丁寧にやると3時間はかかるので、一つの見本に少なくとも20時間はかかった。

6. 3日前～前日の流れ

石をサイズ毎に仕分けし、選択しやすいように分別した。

前日に教室のセッティング、黒板等の飾り付けを行なった。

7. 当日の流れ

- ① あいさつ (5分)

自己紹介をスタッフ、参加者それぞれ端的に行ない、海の牧場のねらいの説明。



- ② 製作手順の説明 (3分)

見本を見せながら、石選びから接着までの過程を説明。



- ③ 石選び (30分)

図鑑を見ながら3匹の魚を選び、ボンドで接着する。
魚ではないが、カメは人気がある。



④ 下地塗り (15分)

ジェットで下地を塗る。2度塗りしたほうがまだらにならない。ベタ塗りもいいが、石を使ったことがわかるように魚の腹の部分は絵の具を塗らないほうが、よい場合もある。



⑤ 着色 (80分)

図鑑で見た魚を参考に、好きに着色してみる。実物とは違ってかまわない。



⑥ 接着 (40分)

流木を選び、土台をつくる。土台は石を流木の根元の周りに並べて、倒れないようにする。

接着はスタッフが最初にボンドの使い方を見せて、後は個人で行なってもらう。なるべく手につかないようにする。最低5分は固定しなければならないので、動かないようにする必要がある。動かしてしまうと、なかなか接着しない。



8. 講座で感じたこと・反省・課題

今回の参加者は小学生2人と大人2人でちょうどよい人数だった。ただし、参加料が500円では採算が合わずに自己負担をした。しかし次回は今年の画材が使えるので、その問題は少なくなると思う。今回、当講座に参加しなかった小学生で、作品を見て次回は絶対参加したいという子どもが数人いた。講座募集のとき写真を載せて欲しかったと言われたが、次の機会ではそのような工夫が必要かもしれない。

講座のねらいとしては、目標を達成できたと強く感じる。なぜなら参加者からこれから川や海に行ったときに、自然の見方が変わると言う声があったからだ。これは石や流木を探したりするということで、まさに「海の牧場」が個人の趣味の一つに成りえたといえるだろう。また参加者から「魚の形や鱗はこんな形なんだ。開いている魚しか見ていないから知らなかった。」という感想も聞かれ、作品づくりを通して「見る」から「観る」、そして「気づく」へという流れができ、ねらい以上の目標を達成できた。

とろ～りとかしてペットボトルキーホルダー

藤田優子 生活科学教育専攻 2年

1. これまでの活動から

私は、これまで7プラザ、イベントプラザのスタッフとして、いくつかのイベントを仲間とともに企画し、子どもたちとかかわってきました。その活動を通して、得たものはたくさんあります。しかし、理論ではなく、体験から得たものは自分ではどのように成長したかよく分かりませんでした。また、私は大学で環境教育を学んでいます。これまでに、環境に対する価値観の形成で、子どもたちに環境問題を自分たちの生活の身近な問題としてとらえて欲しい、という思いがありました。そのような思いから、これまでイベントプラザで自分自身が学んだことや、経験を生かして、自分で講座を出してみたいと思いました。そして、講座の内容は、環境問題に触れるような内容にしたいと考えていました。

しかし、環境についての講座を出したい、とは思っていても、YOU遊フェスティバルはどういうものなのかも分からず、自分ひとりではどうしようもないと思っていました。そんなとき、私が所属する研究室では毎年、研究室で講座を出している、ということを知り、担当教官である森山先生に相談してみることにしました。すると、今回も研究室として講座を出すということになりました。私の思いを伝えると、今回は研究室の環境教育分野所属の私と、3年生の先輩の二人が中心になって講座の準備をすすめていくということになりました。

2. ものづくりをとおして

こうして、私の思いは研究室のゼミ活動としての講座ということになりました。そうすると、研究室にはいろいろな分野所属の学生がいます。みんなで取り組めるような内容にしたいと考え、研究室は「技術科教育研究室」ということもあり、「環境教育+ものづくり」の講座にしよう、ということになりました。しかも、子どもたちの身近なものとして環境教育を感じて欲しいという思いが強く、どのようなものを使ってものづくりをし、環境問題につなげるか、ということが大きな課題でした。そして、身近なものの再利用をテーマに、ペットボトルで、キーホルダーを作ることができるということが分かり、ペットボトルのキーホルダーを作ることに決めました。

3. 波乱万丈の教材研究

さっそく、研究室の人や先生と、インターネットで調べた方法で教材研究をするようになりました。ペットボトルを切って、鍋に入れ、コンロにかける……。ペットボトルはみるみる縮まり、「溶ける、溶ける！」と感動していたのもつかの間、白い煙が異臭を放ち始め、想像では透明なまま溶けると思っていたのが変色しはじめました。とりあえず型に流し込んだものの、取り出して触っているとすぐに割れてしまい、想像以上にインターネットの画面に写る見本とはかけ離れたものができてしまいました。しかしそのときは、その後、どれだけ大変は教材研究になるか予想もしませんでした。

「まあ、最初はこんなもの……」とめげずに何度もペットボトルを溶かし続けました。

しかし、何度繰り返しても見本のように上手くはいかず、変色したり、型から取り出すと割れてしまいました。そして、私は教材研究を始めたその日のうちに、「もうダメだ・・・、違う内容にしたほうがいいのかも・・・。」と思いました。しかし、何度も何度も試行錯誤を繰り返していくうちに、十分満足とはいかないものの、兆しが見えるようなものになりつつありました。もしもの場合に備え、ペットボトルでビーズを作り、キーホルダーをつくる方法も、同時進行で教材研究を始めました。それから、空き時間や放課後を使って、さらに教材研究は進みました。キーホルダーのホルダーの部分は、どのように取り付ければ良いか、子どもが安全に作るにはどのような方法がよいか・・・。課題はどんどん出てきました。ときには休日も卒論や研究に来る先輩にお願いし、研究室を開けてもらったり、遅くまで教材研究のために残ってもらったりもしました。また、ペットボトルを溶かす作業の繰り返しで、部屋中異臭が漂い、寒い中暖房なしで窓を開けっ放しにしていたり、扉を開けていると、同じ階の他の研究室の学生から苦情がくることもありました。そして、もう一方のビーズを使ったキーホルダーの材料には、炭酸ジュースのペットボトルが良いと分かると、研究室のみんな、冬の寒い時期にもかかわらず、みんなの飲み物は炭酸ジュース、となっていたりと、教材研究中の苦労はたくさんありました。しかし、子どもたちが安全に、楽しくものづくりもとおして環境問題に触れてもらおうと言う目標があり、だんだんとかたちになっていきました。

4. 当日までに・・・

実は、研究室の活動で、YOU遊フェスティバルの1週間前に、中野市で行われる、ものづくりのイベントでもこのペットボトルのキーホルダーを親子でできる活動として、紹介することになっていました。なんとかこのイベントに教材研究を間に合わせ、YOU遊フェスティバルではこの反省を活かして、最後の1週間の準備をして、万全の体制で望めるといいなと考えていました。しかし、実際は反省するより、最後の仕上げの作業が多く残っていたのと、今まで一緒に、中心になって今回の活動を進めてきた先輩が、都合により急に活動できなくなる、といった、私にとっての非常事態に陥りました。それまで、かなりその先輩に頼っていた部分が多くあり、急に大役を一人で任されたような気持ちになり、とても不安になりました。自分一人だけではどうしようもなくなってしまいました。そんなとき、他の同級生や、先輩の励ましがああり、なんとか最後までやり遂げられそうな気になりました。

5. いよいよ本番！

研究室みんなの協力で、なんとか準備を終え、当日を迎えることができました。私は、全体の受付係りの仕事もあり、講座の時間まであまり準備はできませんでした。しかし、とにかく、なんとかやるしかない、困ったときは研究室のみんなが助けてくれるだろう、と信じて講座が始まりました。ペットボトルのキーホルダーの講座は、結構参加者が多く、特に小学校低学年の子どもたちが目立ちました。火を使う作業などがあり、やけどの危険があったので、グループ構成もいろいろと話し合い、子ども二人を一人の学生が見るという形にしました。私が参加者の待つ体育館に迎へに行くと、子どもたちは元気いっぱい、持参していたペットボトルを手に持ち、早くやろう、と言わんばかりの様子に圧倒されてしまいました。会場である木工室に着くと、私たち学生も楽しみで、ドキドキわくわくし

てきて、始まる前の不安は、子どもたちの笑顔でいつの間にか消えていました。

始めに、全体で作り方やペットボトルなどの話をしてから、それぞれの作業に移りました。ペットボトルを切るときに、子どもたちは手を切らないか、コンロの火やホッとプレートでやけどをしないか・・・と思いながら、その様子を見守っていました。どのグループも、学生が一人一人の子どもたちと上手く作業を進めているようでした。ところが、そこで思いもよらないハプニングが発生しました。コンロに小さい鍋をかけて、ペットボトルのチップを溶かしていた一人の女の子の鍋から、突然炎が出たのです。幸いその子に、けがはなかったものの、大惨事になりかねない出来事でした。何度も何度も教材研究を行った中では、予想もしなかったことだったので、とても驚きました。しかし、炎が出た原因は、鍋をコンロに近づけすぎたからということが分かり、その後は安全に行うことができました。子どもたちは自分で、思い思いの形のキーホルダーを作りました。私は、事前に先輩や先生と相談して、今日のこの講座に参加した記念として、講座の最後に、講座でがんばった印として、表彰状をつくり、そこには、子どもたちが自分で作った作品の写真を貼ったものを記念品として持って帰って欲しいと考えていました。その方法は、携帯のカメラ付き機能を利用して、写真を撮り、先生のパソコンに画像を送り、印刷してもらうという方法でした。本当は最後に講座の閉会式をして、子どもたちの感想を聞いたり、表彰状を渡したり、という時間を持ちたかったのですが、時間の関係で、講座中には表彰状を渡すことができず、結局最後の閉会式のときになってしまいました。

6. 講座を終えて

最後はドタバタした展開になってしまいましたが、なんとか講座は終わり、YOU遊フェスティバル全体の閉会式になりました。そこで、わたしには思いもよらない嬉しい出来事がありました。たまたま、私たちの講座で一緒に過ごした小学生が、参加者を代表して、私たちスタッフに、「ありがとう！」とお礼の言葉を言ってくれたのです。私は通常のYOU遊広場の活動でも、その子どもを知っていて、講座中も、いろいろとその子との関わりがあったので、大変感激しました。今までの苦労も、その一言で一気に吹き飛びました。

私は今回、講座を出すことでたくさんのことを学びました。自分がいかにまわりの人たちに支えられているか、実感したり、子どもたちとの活動は思いもよらないことが起こるということも学びました。そして、自分がどんなに大変な思いをしても、子どもたちの笑顔で、全てがやってよかった、という充実感に変わる、ということに気付きました。やはり一番は、みんなの協力がないとできない、ということです。どのようにして、協力してもらうか、ということとはとても難しいことですが、そのことも、今回の経験を通して学ぶことができました。

振り返ると、反省するところはたくさんあります。本来の目的である、ものづくりをとおして環境問題に触れる、という課題は達成していたかというのは疑問が残ります。しかし、少なくとも子どもたちはペットボトルというものを使って、ものづくりの楽しさを味わってくれたと思います。それがもし、環境問題にまで発展しなくても、ペットボトルという身近なものに目を向けてくれたと思います。これらのことが、子どもたちにとって、環境問題や、何かのきっかけになってくれると、この講座を出した意味につながると思います。私は、第2回YOU遊フェスティバルで学んだ多くのことを、これからの活動や、目標に生かして行きたいと思います。自分自身が成長できた活動だったと感じています。

変わりゆく自分

—「信大YOU遊広場」の継続的な活動・人間関係を通して—

山本公三 教育実践科学専攻 3年

Changing Myself

—Through Continuous Activity and Human Relations
of Shin-dai YOU-Yu Plaza—

YAMAMOTO Kozo : Major : Educational Science ,junior

【キーワード】 責任 YOU遊広場の土台 継続的な活動 XYサタデースクール 地域

1. きっかけ

私は第二期YOU遊広場の発起人、また運営委員長として一年間活動を行ってきた。私になぜそのようなことになろうかと思ったのは、先輩に「来年も自分たちのしたいことやってみないか」と声をかけられたことや、第一期の活動に参加してきて、子どもとの関わりを体験できる場だと思い、この活動を続けていきたいということもあったが、一番は自分を変えようと思ったことだ。今ここで伝えなければならないときにごまかしたことしか言えなかったり、何も言えなかったりと、自分の意見をはっきりいえない自分が何年も前からいたように思う。そんな自分が嫌だと感じていた。しかし、自分を変えようという努力も環境もなかった。なぜなら、生活の中に「責任」といものがなかったのでいつでもやめること、逃げるのができた。このYOU遊広場の中心になることで追い込まれるときや逃げられないときが来るだろう、そのときに自分がどう対応するか対処するか、そういうことをやり抜いていくことでなにか自分変わっていくのではないだろうかと思ったので思い切ってプラザ長ではなく運営委員長に立候補した。

自分の意見、気持ちを周りの人に発信できることを自分の一番の目標とするとともにYOU遊広場の一つの目標にもした。そして目標を持つということでさらなる「責任」を持って生活できるようになり、生活にメリハリができてきた。

2. 最初の悩みはYOU遊広場の土台に

発足準備会には毎回8人前後の人が来てくれた。もっとも発足していくのにみんなで考えていたことは、どうすればたくさんの人の意見をきくことができるだろうかということだ。なぜならYOU遊広場は興味ある人、参加してくれる人みんなの意見で作りに上げてきたからだった。そのためには今までどんな活動をしてきたのかということや、だれでも入ることができることや、自分の得意なことを子どもたちに教えることや、子どもと楽しめることを全面的にビラに載せて多くの学生に配ったが、2月の段階で第二期から参加してくれる人は5人ほどしかいなかった。それでも今までの活動から引き続き参加する人

を合わせると 40 人近くにはなった。人を集めることがどれほど難しいか、身にしみて感じた。しかし何かをしなければ人を集めることはできない。ピラが一番効率の良いものとは思わないが、私たちにできることはそれぐらいしか思いつかなかった。ピラを配ることについての利点は誰がYOU遊広場で活動をしているのかというのがわかることと、配るときにほんの少しにコミュニケーションをとれるところにあると思う。交友関係を作るためには挨拶・会話がまず一步である。これは同じ年代に限らず子どもとの関わりにも言えることである。またこれは私が土井先生に言われたことでもある。「YOU遊広場は誰が中心でやっているのか、その顔がわからなくて誰がここに入ろうとするだろうか。あなたたちが頑張っているのだから、その顔と名前をまず知ってもらうことが一番初めにするのではないのか。」つまりピラを配る意味は人を集めることを目的とするとともに、それ以上に自分たちの存在を知ってもらうことにある。

このように「人集め」が最初の悩みになっていくと思う。何の活動なのか、何を目的としているのか、そういったことを自分たちが明確にしていないと周りの学生には伝わらない。たとえ、しっかり明確にあらわしたとしても学生に受け入れてくれる部分がなければ参加にはつながらない。よく「サークルみたいで壁があって入りづらい。」と言われるが、壁というものはお互いが持っているものだと思う。私たちはもっともっと宣伝をし、活動への参加を呼びかけていかなければならないと思うが、そこから一步を踏み出すのは、やはり自分自身である。どうすれば人が来てくれるかという悩みから試行錯誤をし、周りに呼びかけていく。その呼びかけに自分から一步を踏み出してくれた人がYOU遊広場の一年間の土台になっていくのである。

3. 継続していく中で必要なこと

継続した活動ということもあって参加者も固定されているプラザが多い。そこで毎回次の活動に活かせるように参加者の様子をノートに残しておくことが必要となってくる。なぜなら、参加者と同様学生も毎回の活動に参加することは難しく、あるときの活動はどんなもので、子どもの反応や行動はどういった感じだったかを休んだ学生が知ることで、次の活動に学生自身がつながりを感じることができるし、参加者との関わりのおつきになくなっていくからだ。教育実習では子どもの様子を追っていくことを大切にしているし、そこから学ぶことも多いことを体験した。YOU遊広場は自然体験・世代間交流を大事にしているが、体験・交流だけで終わらせてしまうのではなく、そこから参加者は何を考え、どのように変わっていったかを観察していくとともに、その参加者を通して自分はどのように変わらなければならないかを常に考えていかなければならない。これはどんな本にも載っていないし、誰も教えることのできないものだと思う。自分で体験したからこそ感じ、考えていけるものである。だからこそ、体験したことを大切にしていかなければならない。「継続は力なり」というが活動をするたびに反省点・改善点を探しだし、自分なりにさらにはみんなで吟味しあっていくことで初めて継続ということになるのだと感じた。

また、子どもたちとの活動以外に毎週火曜日に運営委員会と水曜日に定例会を行ってきた。

運営委員会では各プラザの活動の様子や予定を報告しあってきた。継続した運営委員会によってどのプラザがどんな活動をしてきたかということは各プラザ長に伝わっていったと思う。またどのプラザ長もノートに各プラザの報告を記入してきた。

しかし機械的な報告会になってしまったのが今期の反省点だと思う。これは各プラザ長にも聞いてみての感想でもある。毎週やる意味があったのか、もっと深い話し合いを多くしたかったなどプラザの悩みの解決や個人的な子どもとの関わり、活動をやってみての苦悩などにもっと触れていきかけた。それができなかつたのは司会を務めてきた私にある。毎週のことの一つ一つの運営委員会を大事にすることができず、何も考えないで会に臨んでいた。本来なら私がいくつかの議題を考えてそれをみんなで話し合っていく会にしていかなければならなかつた。つまりもっと客観的にどのプラザを見ていかなければならなかつた。改善点としては毎週ひとつのプラザに絞って悩みや相談をもし自分たちのプラザならどう解決していくかをそれぞれのプラザ長が考え、それを相談したプラザ長は参考にしていく。それをしていくことで本当の意味で各プラザがわかりあっていくことに思う。また子どもとの関わりについてそれぞれのプラザ特有の関わり方があると思う。それについても話し合うことでプラザ長としてそれぞれのプラザに参加している学生に子どもとの関わり方のひとつを提案することができ、多くの学生の役に立っていくと思う。

次に定例会のことだが、これは毎週水曜日のお昼休みを利用して、プラザに参加している学生に各プラザの予定の報告や活動報告を伝える会である。つまり火曜日の定例会で話し合ったことを伝える場である。これについても改善の余地がいくらでもある。まず定例会をする意味がプラザに参加している人に伝わっていないところである。こちらの願いとしては自分のプラザ以外のことを知る機会の場で、そして知ることから他のプラザにも参加してみようという思いをもってもらえたらと考えていた。しかし実際には参加している学生の一部しか定例会には来ず、その数も回を重ねるごとに減っていった。また、定例会を通してほかのプラザの活動もしてみたいという人はまったくといっていいほど出て来ず、結局定例会は報告の場だけになってしまった。時間も30分しかないのでできることは報告だけになってしまうという現実もある。そこで私は二つの提案をする。

一つは、今まで一期では紙に伝えたいことを書き、二期では黒板に伝えたいことを書いてきたのだが、それをプラザ長が読んでいくという形ではなく、それぞれがプラザを宣伝していく形にすることで、具体的な興味を学生がもてるかもしれない。その宣伝はプラザ長だけがするのではなく、そこに参加している学生が積極的にほかの学生に自分が活動していることについて話しかけていける場にしていったらどうだろうか。

もう一つは、活動を通しての自分の思いを伝える場にする。たとえば、活動中に困った状況があって自分は何をしていいかわからなかつたということがあつたと定例会で発表する。その発表に対して、発表した学生が活動しているプラザの人たちだけが答えるのではなく、定例会に参加している学生が自分なりの考えで答えていく。そうすればいろいろな見方から状況をとらえることができるので、次の活動のときに発表した学生はもちろんのこと、定例会に参加した学生も活かしていくことができるはずである。またこういう討論会をしていくことで、学生が全部のプラザについて根の部分で関わっていくことになるのではないだろうか。根に関わっていけば活動という幹にも行きやすくなるのではないだろうか。

それにしても第二期YOU遊広場ではどうしても自分のプラザという意志が強く、ほかのプラザというものへの意識が弱かつた。それは運営の仕方や呼びかけの仕方に原因があつたと思う。特に呼びかけの方法としてとってきたメーリングリストというものが大きい原因ではないかと考える。緊急のときや決まつたことの報告などには効果的かもしれない

が、人を集めることに関しては何の効果にもならなかったように思う。人がいなくて困っていることや自分の気持ちを伝えるのにはやはり直接会うなり、電話して声を確かめるなりをしないとなかなか人は理解してくれないように思う。やはり全体という意識をもつためにも毎週行われる定例会を有意義なものにしていかなければならない。

4. XYサタデースクールから学んだもの

地域の協力・連携なしではこの活動は続けていけなかっただろう。それぞれの活動で地域の方や親が、助言をくださったり手助けをしてくださったりしていただいた。特に昨年からの継続的な活動ということもあって、親の活動参加が大きく増えたと思う。送り迎えや見学だけでなく、時間のある方は一緒になって活動に参加してくださった。学生の子どもを見る負担が減り、そのおかげで活動内容の幅がもてたり、活動範囲の幅が広がったりもできた。

しかしこの活動は大学の近くの地域に限られてしまう。今私はXYサタデースクールというJAとNPOとが連携した農業体験と算数・国語の基礎学習とを繋げる取り組みに参加させていただいている。これはJAから農業体験を提供してもらい、NPOと私たち学生で基礎学習を進めている。私たちのYOU遊広場と違って、この活動の注目すべきところは、JAが農業体験を教えてくれる、つまり専門家の方が専門のことを教えてくれるということである。やはり私たち学生がいくら農業のことを勉強したとしてもJAの方たちの経験にはかなわない部分がある。またJAという地域に密着している団体が活動の一部を担っているところにもある。JAが担っているということからどこの地域でもこの活動は行っていくことができるのではないかと思う。地域から元教員や塾講師などの方々が出てれば基礎学習を専門に進めることも可能である。学生の位置づけは子どもとの距離が近いということにあるので、そういう点なら高校生やどこかのボランティア団体の若い方に協力を要請すれば担える部分であると思う。そうなれば地域の活動に、私たち学生が協力をするという形になる。その中で学生が企画する部分が存在すれば、地域の発達と学生の企画力が向上していくと思う。

YOU遊広場といったものがなくなったときに土日に何もすることがなくなってしまったら、私たちが行ってきたものは自己満足のものでしかならなくなってしまふ。この活動が地域に根付いていくことで初めて、地域が育っていくと思う。今までの活動では私たち学生のためにはなっていたが、地域に返っているものがあつたかというとなかつたように思う。地域が発達することで週五日制が有意義なものになるし、本当の「ゆとり」というものが存在していくのではないかと思う。

またXYサタデースクールは活動体験を学びに結びつけようとし、活動体験を体験のままにしないで、そこから学習をし、子どもたちに学習をする楽しさや学習をする意味を与えていると思う。YOU遊広場も活動から学びに結びつけられるように、活動に出てくる言葉から慣用句やことわざを考え出したり、子どもたちが数の計算や単位の変換などの算数に出合えるように学生が流れを考えたりしていくことで、YOU遊広場は活動と学習とをひとつにしていくことができるのではないかと思う。

XYサタデースクールに参加している子どもの中で確実に変わってきている子どももいる。あるお母さんは、自分の子が「あまりしゃべらなかつたのに、あかるくしゃべるようになってきた。さらに、何かをやるという気持ちが湧くようになってきた。」とおっしゃ

っている。この「何かをやろうという気持ち」という部分はXYサタデースクールが終わってからもその子の中で生きている。YOU遊広場でも農業体験から「食物を大切にしようになった。」「食物を育てる難しさを知った。」「みんなでやる楽しさを知った。」など多くの変化をもたらしてきていると思うが、「何かをやろうという気持ち」が活動以外の人に、例えば学校や家にいるときに、表れてきているかどうかはわからない。子どもによって差があると思うが、XYサタデーの取り組みである子は「生きる力」を取り戻しているのである。このXYサタデースクールへ数多くの学生が参加し、実際に活動や話し合いを重ねていくことでYOU遊広場との違い、YOU遊広場にはないものがわかっていくと思う。私もまだこれだというのがわからないので、これからもXYサタデースクールに参加していこうと思う。

5. おわりに

この一年間ずっと運営委員長として私が本当に適確だったのか、運営委員長として何をしなければいけないのかという思いをしてきた。各プラザ長が苦勞している中で私は運営委員長としてアドバイスも支えになることもできなかったように思う。一緒に活動することで少しでもプラザ長の負担を軽くしようと多くの活動に参加した。しかし参加するだけでプラザ長の負担が軽くなるわけでもない。もっと話を聞くべきだったと思う。YOU遊フェスティバルが終わってからプラザ長の涙を見てきた。私はその涙の意味をどこまでわかっていただろうか。プラザ長でしか味わえなかった苦しみを私は共有できていなかったことにそのときにはじめて気づいたのであった。

私なりにがんばってきた一年間ではあったがそのがんばりは自己満足に過ぎなかった。忙しく苦しかったにもかかわらず私を一年間も支えてくれたプラザ長にとっても感謝をしている。また尊敬もしている。一年間大きなけががなかったことや、大変な事態が起らなかったのはプラザ長が細心の注意を払って活動をしてきてくれたからである。プラザ長がいたからこそ私が運営委員長としてやってこられたのだ。

また、ここで出逢った人たちは私にとってかけがえのない人である。私はこの一年、専攻の枠を超え、学年の枠を超え、ただ無邪気に話せるこのYOU遊広場の環境がとても好きだった。YOU遊広場に参加していなかったら、運営委員長にならなかつたら今いる友達も今の環境も、そして今の自分もいなかった。運営委員長をやってよかったと感じている。

このYOU遊広場で一番得られるものは、子どもとの付き合い方や企画力、指導力などというのではなく、ともに喜び合える・怒り合える・哀しみ合える・楽しみ合える人を得られるということである。どの人も「やってみよう」と自分の壁を破ってきているのでとても魅力があり、自分にはないものを持っていると感じる。それが自分の成長につながるのである。同じ空間ではない人と接することの大切さはこのYOU遊広場に参加している人は感じていることだろう。

私のくだらない話し相手になってくれた数多くの皆さん、協力して下さった地域の方々、参加者の皆さん、そして土井先生、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願ひします。

人づくりのための土づくり

－「第2期信大YOU遊広場」の活動を通して－

山本真望 教育実践科学専攻 3年

Production of the Ground for Cultivation of Men's Ability

－Through activity of Shin-dai YOU - Yu Plaza－

YAMAMOTO Mami : Major : Educational Science, junior

【キーワード】心の教室相談員 YOU遊フェスティバル 意識 人との関わり

1. はじめに

「第2期YOU遊広場」が発足し、今年こそやるぞ!と思っていた私は、一年間様々な活動に参加してきた。「第1期YOU遊広場」では、主にキャンパスプレーパークに関わっていた。キャンパスプレーパークは、禁止事項のない冒険遊び場である。2年生になり、YOU遊広場の存在を知るとすぐに興味を持った。キャンパスに公園を作ろう!というところに惹かれ、プレンジャーとしてキャンパスプレーパークに行き始めた。それまで、継続的に子どもたちと関わる事がなかったからか、「子どもたちとどう関わればいいのか」、「何をして遊べばいいのか」と悩むようになり、遊びに行くことが怖くなってしまった。しかし、1年間ほかのプラザなどで活動したりしていく中で、自然に自分のまま関わっていけばいいんだと思った。そして、継続的に関わる事の大切さを感じ、今年こそは継続的に子どもたちに関わっていこうと思い「第2期YOU遊広場」の活動に参加した。「第2期YOU遊広場」では、運営委員会、イベントプラザ、牟礼ふるさと農場、茂菅ふるさと農場、興譲館に主に参加した。その中でも特にイベントプラザでは副プラザ長、そして最大イベントである「第2回YOU遊フェスティバル」では実行委員長をやり、たくさんの人と出会い、学ぶことができた。こうしたフレンドシップ活動で何を学ぶことができたのだろうか。一年間の活動を振り返ってみたい。

2. 心の教室相談員

今年度、中学校の心の教室相談員をやらせていただいた。大学の授業で、不登校の現状やどのように対応していかなくてはならないかを勉強していたが、教育実習もまだの自分に相談員が務まるのだろうかと最初は不安を抱えていた。そして初めて学校現場や中学生の現状を目の当たりにし、自分の思い込みにはっきりと気づくことができた。相談員だからとか学生だからとか関係なく、まず学校という現場を知り、中学生と関わる事ができるということが大きな意味を持った。そしてその次に自分の立場を意識し、学生としての甘えを自分の中に感じた。

(1) 自己指導

配属された中学校の校長先生から、『相談員は指導をしてはいけない』ということを読んだ。相談員は子どもたちの話をたくさん聞き、気持ちがスッキリし、考えが整理されるのを待つ。そこで大切なのは、教育とは自己指導であるということであった。子どもたちが自分で気づき、自分で解決していく。それが子どもたちの大きな成長につながっていくのである。子どもたちは何をしに相談室に来るのだろうか？子どもたちは話をしに来るのである。話をし、落ち着くまで花を見つめお茶を飲み、そうして自分で答えを見つけていくのである。たとえその答えが一般的には正しくなかったとしても、自分で決めるということがその子にとってとても大きなことだと思った。自分が何か正しい答えを導かなくてはならないとか、元気づけてあげなくてはならないとか考えることはただの自己満足である。その子が話しをしやすい、自分を出しやすい環境を作ることが大切だと思う。

(2) 環境

相談室は、子どもたちが気軽に来れる環境を作ることがとても大切だと思った。関係作りはもちろんだが、ほかの心の教室相談員をしている人と話をしている、方針や相談室のあり方、家庭との連携等、学校によってぜんぜん違うということを感じ、学校と家庭、そして相談室の連携の重要さを感じた。「担任の先生には内緒にしてね。」と言いながら相談室に来る生徒もいる。子どもたちは本当に深刻な悩みを抱えていたり、自分でも気づかないくらい無理をしている子もいる。そういう子どもたちが、「ここでは安心できる」「自分の居場所がある」というように思える場所が学校にひとつでもあればいいなあと思った。自己指導の前に、ちゃんとそれができる場所、自己理解できる場所がないと自己指導はできない。自分と向き合い、自分を表現できる場所が、子どもたちには必要だと思う。そして、表現した自分を認めてもらえる場所であることもとても重要である。

私が行っていた相談室にはもう一人常駐の先生がいた。その先生はお茶とお花をやっていて、その中学校でも同好会の顧問をなさっていた。常にお花がアレンジメントされて机の上に置かれていた。相談室に来る子どもたちに「好きな花を選んでさしてごらん」と言って、小さな（フィルムケースで作った）手作りの花器を渡し、子どもたちも意外に夢中になって花をさしていた。そうして落ち着いてくると自分から話はじめるのである。それぞれ「味」というものがあると思うが、先生は自分の味を生かして相談員をしていると感じた。先生の「味」が相談室の雰囲気となっていた。私は人に刺激され、左右されやすい。自分の良いところを生かして、自分の「味」を見つけていきたいと思う。

中学校に行って、学校という現場を少し知ることができたように思う。子どもたちの変わっていく姿を見ることができてとても嬉しかった。子どもたちの実態や連携の大切さを強く感じ、これからの自分に生かしていきたいと思った。

3. ☆イベントプラザ☆

「子どもたちと関わりたい」「体験活動がしたい」という単純な理由からプラザの活動に参加してきたのだが、興味・関心だけではやっていけない現実があった。もちろんやりたいという気持ちがないでは何もできない。しかし、やりたいと思っても行動しなくては何も始まらないのである。これをイベントプラザの活動で感じた。2年生の時はどの活動にも受身的に参加していたように思う。準備等の大変なことには関わらず、当日だけ参加が多かった。牟礼の活動も茂菅の活動も1番最後の収穫祭（牟礼→そば打ち、茂菅→もちつ

き)にだけ参加した。おいしいとこ取り(?)と思っていたのだが、スタッフや参加者が1年間継続的に活動してきた姿を見てとてもうらやましく思った。1年間活動してきた満足感やスタッフと参加者の間にある信頼関係が自分とはぜんぜん違ったからである。そして、当日だけ参加するだけでは満足できず自分も企画から参加したいと思うようになった。企画・運営をするとすると、誰かがやってくれるのを待っているだけじゃ何も進んでいかない。本部(裏方)がいるからこそイベントができあがっていたということを実感し、人任せではなく自分から積極的に関わっていくことから始まった。

「第2期YOU遊広場」が発足し、私は運営委員会の副委員長と同時にイベントプラザの副プラザ長になった。総会の日、イベントプラザに興味のある人が6人集まり、その内の3人がプラザ長に立候補した。3人でやる気を出し合ったのだが決まらず、結局くじ引きをすることに…。そのくらいはじめてからイベントプラザは熱かった。この熱さに拍車をかけたのが2年生だった。4月になり、スタッフ募集をして一番多かったのはイベントプラザである。2年生のパワーはととてもすごく、イベントプラザには欠かせない存在になった。イベントプラザで得たものの1つはこの仲間である。最初は、お互いに思っていることを言い合えずにイライラしたりもした。しかし、お互いを理解し認め合うことができるようになってくると、考え方や性格がぜんぜん違うにも関わらず、それぞれが自分の良い所や得意なことを生かすことができるようになってきた。周りに刺激され、自分の視野や考え方が広がったり、自分に少し自信が持てるようになった。

イベントプラザのスタッフはイベントごとに募集し、そこで集まったメンバーでそのイベントを考えていく。しかし、主なメンバーはほとんど変わらず一年間を通して関わることができたように思う。イベントプラザは自由な発想でイベントを考え、自分たちも楽しんでイベントを作り上げてきた。特にイベントプラザらしさが十分に発揮されていたのはタイトル(YOUフェスはサブタイトル)である。このタイトル決めで、みんなのバラバラだった気持ちもひとつになり、気合いが入ったのは間違いない。

4. 第2回YOU遊フェスティバル ～「あ!!フェス」～

「第2期YOU遊広場」の一年間の活動の集大成として、「第2回YOU遊フェスティバル」はイベントプラザが中心となって企画・運営し、開催された。イベントプラザで今までやってきたことや自分の力を試したいという思いもあり、半ば勢いでなった実行委員長だが、不安とプレッシャーに何度も押しつぶされそうになりながらもみんなに支えられ、なんとか乗りきることができた。「第1回YOU遊フェスティバル」や「YOU遊サタデー」と違う所は午前中のキャンパスお楽しみハイクである。これはイベントプラザが中心となって企画したもので、午後の講座に楽しく入っていけるような雰囲気作りを目的としていた。春・夏のイベントを生かし、アイスブレイクや班の名前にもイベントプラザらしさがでていた。春・夏のイベントではできなかったプラザ間交流だが、このYOUフェスではそれぞれのプラザ関係なく「YOU遊広場」全体で一つのイベントを開催することができた。スタッフアンケートでもあったが、「YOU遊広場」で活動してきた人は、一年間のまとめとして、自分自身の挑戦として今回のYOUフェスに参加していることが多かった。

(1) 意識の違い

「YOU遊フェスティバル」に限らず「YOU遊広場」の活動全体に言えることである

が、スタッフが多いので意識を統一することが難しいと感じた。「YOU遊フェスティバル」では 120 名の学生が集まった。このように大勢のスタッフが集まって一つの活動を行うにしても、熱意や意識はみんなバラバラである。しかし、同じ活動をしていくにあたってある程度は意識の統一をはかることが大切であると感じた。そうでなくては本部や実行委員とその他の学生との間に壁ができてしまう。「YOU遊広場」の活動は強制的なものではない。自分たちがやりたくてやっているのである。それぞれ優先順位も取り組み方も違うのだが、それ故に、一部の人に負担が増えたり、せっかく決めたこともその通りに進まず全体の迷惑になることもある。意識を全く同じにすることはできないが、一人一人役割があることを意識していくことが大切だと思う。YOUフェス前日、体育館で準備をしていたときの出来事である。自分は全員に向かって指示を出したつもりでいた。しかし、指示をした後で「自分は何をすればいいのですか?」「これから何をやるんですか?」と聞いてくるスタッフがいるのである。ピリピリしていたせいもあり、「何で聞いていないの?やる気はないのか。」とってしまった。しかし、前日準備に来てくれなかった人もたくさんいる中で、ちゃんと予定をあけて準備に来てくれているだけでも、来てない人よりもやる気があるという風に思うことができた。もんたんのおかげである。一人一人、意識も違えば活動への取り組み方も違う。指示を出す立場として、それを意識しながら、全員にではなく一人一人に対して声をかけることが大切だと思った。

(2) 参加者について

参加者は春・夏のイベントと同じように、年齢を問わず今までプラザに関わったことがある人を中心に募集した。すると 150 名という大勢の参加者が集まった。「YOU遊広場」の活動は、参加してくれる子どもたちだけでなく、地域の方やご家族のご理解とご協力があつてこそ成り立っていることを強く感じた。

今回のYOUフェスは、障害をもっている子どもたちにも参加してほしいという願いがあった。午後の講座の一つである『みんなで運動会』は、障害をもった子が障害をもっていない子とペアを組み、みんなで運動会を作っていくという講座であった。この講座の参加者を募集するにあたり、健常児 20 名・障害児 20 名と言葉で分けてしまったのである。あるお母さんに「うちの子を障害児という言葉でくくらないでほしい」と言われた。春・夏のイベントも今回のYOUフェスも、年齢を問わず誰でも参加できるイベントとして参加者を募集したはずであった。誰もが参加できるはずのイベントなのに、こちらから枠を狭めてしまっていた。視野が狭く、イベントを作る側と保護者の側の目線や意識、想いが違っていたということに気づかされた。とてもショックだった。そんなつもりはなくても、こちらから壁を作ってしまったことは事実である。障害をもっている子が参加できなかったもう一つの理由に、不安要素がたくさんあったということが挙げられる。参加はしてみたいさせてみたいけれど、「学生だけに任せて大丈夫かな」「どういうことをするのか」という不安を保護者の方は感じていたという話を聞いた。参加者募集のチラシには簡単な内容しか載っていなかった。また、無神経にも保護者の方の気持ちをぜんぜん考えていなかった。人と関わっていく上で、意識や想いの違いはあるものである。しかし、お互いが理解しわかっていくことが大切なのである。「誰でも参加できる」ではなく、気持ちの面でも「誰もが参加できる」活動にしていくことが今後の課題である。

5. 農作業体験 ～牟礼ふるさと農場と茂菅ふるさと農場～

「今年は絶対自分で作ったそばを食べるぞ!」という気持ちから、全 12 回中 11 回牟礼

の活動に参加した。今年は班を固定し、1年間同じ班で活動した。班の畑があり、自分たちの畑で自分たちが作った野菜を食べることができた。初めは個人個人で作業し、スタッフとしか話をしなかった子どもたちも、だんだんと同じ班のメンバーの顔と名前を覚えて一緒に作業するようになっていった。最後の方の活動になってくると、スタッフがいないでも子どもたちだけで楽しそうに作業している姿がみられた。イベントでは本部だったので子どもたちとあまり関わることはできなかったが、農場ではスタッフとして子どもたちとおもいきり関わることはできた。『人づくりのための土づくり』とあるように、牟礼でも茂菅でも土をおこし草取りをする。そうした作業の中でも、人間形成されているんだなあ実感することができた。毎回活動の最後に行っている『大地に礼』からも、人は自然に生かされていることを感じる。茂菅の活動で稲刈りに参加したときのことである。初めて会った幼児に2年生の子が稲刈りの仕方を教えているのである。一緒に鎌を持ち、「危ないからね」と言いながら一緒に稲刈りしている姿を見た。とてもあたたかい気持ちになった。

6. おわりに

「第2期YOU遊広場」は「とにかくやってみよう！」という気持ちで活動することができた。やりたいことができるという環境…そういう環境があるということが、とても幸せなことだと思った。また、自分一人ではできないことも仲間がいればやりとげられるということを実感した。たくさんの人と出会い、自分の視野や考え方も広がっていった。ぶつかることもあったが、信頼しているからこそぶつかることができた。ここで出会った仲間をこれからも大切にしていきたい。

1年間の活動を通して、たくさんの人と出会うことができた。一緒に活動をする仲間や、活動に参加してくれた参加者、そして私たちを支えていてくれた先生方…。本当に感謝しています。ありがとうございました。



興讓館に残された message

原山美樹 生活科学教育専攻 3年

Message from koujyoukan

HARAYAMA Miki : Major : Life Science Education, junior

1. “夢と思い出”

“夢見ていたんだ いつか あの日にかんしゃできることを いのっていたんだ あの日の思い出が 夢に変わらないよう ほくたちは歩んでいる 「今」という大切な時間を 「いつかあおう」 そんな言葉言わないよ だって わかっているから かならず また会う時を。”

“悲しかったんだ つらかったんだ きっと ほくは 生まれてきてはいけないと思ったんだ だけど、見つけたんだ キレイな光 ここはちがう世界 ここでは もう だれも追ってこないよ そしてきみたちに出会ったんだ 初めて会って知ったときから なみだがでそうだったんだ ほくだけじゃない みんな とても すてきなんだ ほくのことわかってくれたんだ 学んだこと 楽しかったこと しかられたこと みんなぜんぶが愛なんだ ほくは あのとき もう 死んでいた だから ここで 生まれかわったんだ 「0 から」 この想いをむだにはしない 星の瞳に写せば たった いっしゅんのことかもしれない だけど 忘れないんだ 忘れられないんだ 言葉でうまく あらわせないでも このきもちをつたえたい 「ありがとう」 そして 「さようなら」なんだ ほくは みつめていく 自分自身と自分のみらいを ながい道のりに この時間をすごせたことを むねにきざもう そして かんしゃときほうをむねにして たびだっていく…でも ときに悲しいことがあり つらくなったら きみたち光を求めていいかい？ ほくの心をあたたかくする きみたちのもとへ また・・・”

2. 涙の卒業式

2002年12月20日 いままで一緒に活動してきた4人の子どもの卒業式が行われた。学生という身分の限界。自分の能力のなさ。いくら計画しても思い通りには動いてくれるはずのない子どもを目の前にしての心の葛藤。“エネルギー充電”に反して、怒る時には怒らなければならない「館長」という立場。

仲間や子どもの前で、数え切れない涙を流し、葛藤に明け暮れる毎日。そんな日々の中で8ヶ月が過ぎたこの日。また、私は、やっぱ涙を流していた。けれども、今までとは違う。それは、自分自身に対する悔し涙ではない。成長し旅立っていく子どもに対する涙であった。1に記した「夢と思い出」の詩は、この日旅立っていた生徒が残してくれたものである。これを見たとき、「興讓館」でやってきたことは、決して無駄ではなかったこと、学生の強い思いがあれば、必ず彼らに伝わるということが初めて嬉しく感じられた瞬間で

あった。夢のようなひと時であった。決して理論どおりには行かない子ども。けれども、自分自身も子どもたちと歩むことで子どもたちに何かが育っていく。そう思った。

3. 心の教室では…

私が、興譲館の館長を勤めようと決心した根本のきっかけは、2年生の時経験した“心の教室相談員”が強く心に残っていたためだ。私が、行っていた中学校では、「心の教室」に1人の生徒が通ってきた。その子は、“勉強はしたいけど教室へは行きたくない”という状況であった。その子は、相談室に来るなり勉強に励んでいたが、担任の先生は、その子に対して「教室へは来ないのか？まだT君との関係は上手くいかないのか？」などといっていた。そんな毎日が続き、私は正直窮屈になった。学校側の事情が理解できずに、対応のまずさに腹が立つだけだった。そして、「説得されるだけの毎日ではなく、学校とは離れた場所で、体験活動をする中で、その子どもが自分自身で何かを得る…そんな部屋を作りたい。」こう思った。そんな中、土井先生から「来年は、不登校の子どもをキャンパス内に受け入れる事業を計画している。」というお話をお聞きした。その時、私は、「これしかない」と思った。自分の専門とは直接関係ないと言われるかもしれない。けれども、2年の時参加した環境教育学会では、環境教育は、様々な環境問題強いては心の問題を解決するために確立される学問だという発表が印象に残り、いつか必ずしや自分の専門にも繋がってくる問題だと考えた。

そんな思いからプラザ長になりたいと思い立候補させていただいた。

4. 立ち上げ当時の方針と実際のズレの建て直し

興譲館は、2002年3月28日、“子どもの心を癒すエネルギー充電機関”として、幕をあけた。ところが、この方針が、後で大混乱を招くこととなる。

実際活動がはじってみると、「具体的に何をしたら良いのかが分からない」「子どもにどこまで自由を許してよいの？」「エネルギー充電だから、子どもを叱るようなことは出来ない」「自分は役に立っているのか？」などという声があちらこちらから聞こえた。

定期的に通ってくる子どもは、最初は、自分自身の壁が崩せずに悩んでいたものの、3ヶ月たつと皆が皆すっかり打ち解け、エネルギーが満ち溢れんとばかりに、元気を取り戻していたことは確かであった。

よって、夏休み明けの10月はじめ15人の学生が集まり、“エネルギー充電された子どもに、+α社会に出たときに必要な学びを与える場所”として、1時間を40分に区切り、6時間分のカリキュラムを実行させることに決めた。さらにそのうち水木金の2時間目を漢字練習、水木金のお昼休みの一部を掃除、金曜日の2時間目を体育、金曜日のお昼から4時間目にかけて「調理実習」を位置付け、これらのメニューを継続させることとした。

5. 調理実習が残した message

「調理実習」を金曜日継続して始めた理由は、家庭科の免許を取っている私が、子どもの生協食堂での食事を見て驚いてしまったからだ。メロンジュースとコッペパン、ざるうどんだけ、カレーと牛丼…。栄養も美味しさもあったものではない。これではいけない。普段口にしていないものがどんな過程を経ているのか教えたい。そして自分が自立していった

ときに少しでも役に立つようにやりたい。こんな率直な思いで始まった。

始めてみると、器用に子どもたちは調理を進める。興譲館には、調理用具は揃っていない。ガスコンロ、似つかないほど大人数用の鍋、切れない包丁を竹の部屋や備品庫から借りてきての調理実習だ。しかも、旧附属小の水道管から出る水はとても茶色く、飲むのが億劫になる。そこで、こどもたちは、「興譲館」より100m近くも離れた水道まで、わざわざ洗い物に行く羽目になる。しかも「植木」が近いので、洗剤使用は極力控える。

そんな状態の中で、特に苦勞した調理実習は、「だまっこ鍋」という秋田の郷土料理を作った時だ。「だまっこ」とは「ご飯を餅上に潰したもの」である。そう、ここで「潰す」という作業が必要になるのだ。「さて、何で潰そう？」当然適した棒などない。そこでまず考えたのがスプーンだ。しかし、スプーンは、曲がってしまい子どもたちは笑いながら「ダメだ」といっていた。次に考えたのが、“サランラップの上から手で押し付ける”という方法だ。これも、サランラップが破れてしまい、子どもたちは苦笑する。次に手で直接潰すという方法に踏み出すが、これも手にべたべたとくっつき、子どもたちの顔は引きつる。しかし、失敗しながらこの3つの方法を繰り返し、「だまっこ鍋」は完成した。その後の試食で、子どもたちから「苦勞したから美味しい。」「自分で作るって大変だけど美味しいね。」という言葉が聞かれた。また、子どもから「なんか家族みたいだね。」といわれ暖かい雰囲気を作ることが出来た。

調理実習を通して、友達と協力する力、仕事を分担してこなす力、道具がなかったり水道が遠かったりしてもやり遂げる力、ご飯粒まで残さず食べ洗い場を汚さない力、など生活に必要な様々な力が日に日についていくのが分かった。来年は、自分で作物を育てたものを料理するという事も視野に入れつつカリキュラムを作れたらと考えている。

6. 嫌だった漢字練習が…

設立当初からスタッフを悩ませていたのは、勉強に対する抵抗が大きい子どもの実態だ。また、学生も「勉強は強制するものではない」と言う思いで、特に策は講じなかった。ところが、4年生のK先輩だけは違った。「せめて子どもに小学校ぐらいの漢字はかけるようになって欲しい」と漢字練習の教材を作った。さらに、10月より、水木金の2時間目を「漢字練習」に固定した。

始まって2ヶ月、子どもには大きな変化が見られた。しかも定期的に通ってくる子どものうち、いつもスケジュールがたたらずにいる2人の子どもにだ。それは、12月も終わりに差し掛かったころのことである。最初のうちは「胃が痛い」「僕はやらない」といっていたA君が、あたかも当然のように自分で持ってきたノートと辞書を取り出した。「僕今日は、全部正解するぞ」とA君。いつも何度か声に出して読み覚えてから望むスタイルを「僕今日は、読まずにいくつできるか試してみよう」とB君。さらに、1ヵ月後、驚くべき変化が訪れた。それは、今まで“ただ覚えて答えを書くだけ”のB君の解答用紙が、漢字で真っ黒に埋め尽くされていた。漢字練習をしたのである。さらに、私がA君と英単語を覚えようとしていると、「僕にも教えて」とB君もくらくらいついてきたのである。

この実践から、「子どもは始め、“嫌だ”ということも、工夫次第で“楽しいものになる”ということ。「勉強は自分がしたいと思わない限りは押し付けても無理があり、興味を持ち始めモチベーションが高まった時に、いかに学びを工夫できるか」が大事だと学んだ。こ

の時、今後は「やる前は嫌だったけど、やってみたら楽しかった。」という興譲館の時間が作れるように工夫したいと考えるようになった。そして何よりも「学習材の大切さ」を学んだ。

そして1月中旬から、スタッフが教材研究をして臨む時間が設立された。第1回目は、1月8日で、「習字」をやった。その時の反省会はまるで教育実習の反省会を思わせるような反省会であった。

7. お姉さんから教師としての見方へ

始めた当初の自分は、自分の中に「不登校の子どもは傷ついている」という固定観念を作り上げてしまっていた。よって、子どもたちの甘えも許していたし「ここに来ることさえも難しいことだろう」と決め付けてメニューもさほど用意しなかった。5月中旬になると、子どもたちが急にスタッフに対して反抗的態度を見せるようになった。今までは、竹細工や折り紙などで盛り上がっていたものの、スタッフが「ねえ。今日はスケジュールサッカーなんてどう？」と言うと「やだ」というのである。それから、5月中旬に始まった“百マス計算”に対しても「やだ」という声が、異口同音に聞かれてくるのである。牟礼や茂菅の農場も誘うが、「やだ」「面倒くさい」の連発である。「いったい何がしたいのよ？」と子どもに、怒りをあらわにすることも出来ずに、機嫌を取ることに一生懸命で過ぎていく毎日。また、自分の役割が見つからなかったのか、それとも空きコマを費やすと言うことが負担だったのか、次々と「興譲館」を去るスタッフ。自分自身も「興譲館」にとって自分が有益な存在なのか全くわからずにいた。

そんな中、4ヶ月が過ぎ“基礎教育実習”の季節になった。まず行って驚いたことは“教材研究のきめこまやかさ”である。ひとつの授業を作るのに、4時間以上は必ず費やす。しかし、作った教材は、全てが授業の中で使えるわけではなく、子どもの状況に応じて授業内容を変えていく。「興譲館」では実践したことの無いスタイルであった。しかも、子どもの様子を事細かに記録し、足りないところは伸ばし、よくできるところはほめていく。教師自身と子どもへの評価のあり方がとても充実していた。

基礎教育実習の最終日、土井校長先生の前で、私は、また、涙を流した。何をいったのか覚えていないくらい私は動揺した。「興譲館」を運営する館長として「子どもを育てる」という観点が、全くかけていたからだ。土井先生に申し訳なくて、子どもたちに申し訳なくて、ただただ動揺した。

10月になって、大学の授業も減り、興譲館に来る時間が長くなるに連れ、子どもたちへの愛情は深まっていった。そして、「これはおかしい」と言うことに対しては、必ず自分の気持ちを伝え、叱るようになった。自分の気持ちを伝えると、自然に子どものほうも返してくれるようになった。「僕ここはこういうようにして欲しいのだよね。」と、いつてくれるようになった。不思議とその部分は、自分たちも「まずいかな。」と思っていた部分が多かった。

話し合うことで子どもに「自分たちはこういう思いでやっている」と言うことが伝えられるし、明らかにこちらの失敗と感じられるところは直すことが出来る。

自分が実際教師になった時も、子どもたちと「まずいところ」を言い合える関係になりたいと思う。

8. 親からの message

親たちとの個別懇談は、最初の面談もあわせて、人によって3回-6回行われた。そこでは、とても大切なこと多くを学んだ。その中で深く考えさせられたのは、「教師の在り方」である。

ある母親は、「不登校になってから、担任の先生は一度も尋ねてこない。また、尋ねてきたと思ったら、『自分が来ると「登校刺激」になるからもう来ません。』といわれた。」という話を聞いた。これでは、せっかく「興譲館」で元気を取り戻しても「学校」と繋がっていないので、次へのステップが開けない。

また、ある母親は、「不登校になってから、プリントがこない。子どもは、少し立ったら最終的には学校に戻りたいと考えているのに、学校が何をやっているか分からないので困る。最初のうちは、自分（親）が取りに行っていたが、そのうち億劫になってしまった。」と言う話を聞いた。

また、ある親からは「家の子どもは、中学校は一度も行っていません。でも、母親としては、学校から何らかの message があると思っていたのですが、何もありません。それに、せめて教科書くらい欲しいと思って、申し込んだのですが、全く届きませんでした、催促すると『忘れていました。』いわれました。」という話を聞いた。

生徒現状の報告に、学校を尋ねることがあった。ある中学校では、「学校の先生はとても忙しいので、「興譲館」には、是非ご協力いただきたい。」と言われた。

予想するに、「不登校の子ども」は、今まで、「家庭で解決する問題」と理解され、多くの学校、担任は、「生徒の message を待っている状態」なのではないかと考える。更に生徒側も「学校からの message」を待っている状態なので悪循環が起こる。

いずれにしても、学校側、担任側の無発信が原因で長引く「不登校」は極力避けなければならない。こう思う。

9. 相談があった15人の子どもからの message

「興譲館」は、相談があったすべての子どもが通いやすい場所であったかというところではなかった。子どもの対象は「学校にいけそうで行けない子ども」の段階で、「引きこもりの子ども」まで、元気にさせるだけの段階にはなっていない。数年後は、引きこもりの子どもまでを何らかの形で対象に出来るようになっていって欲しいと願う。

もうひとつ気になったのは、「問い合わせ」の子どもの中に、「障害をもった子ども」がやけに多いことだ。しかも、彼らの多くは、通常は、学校に行っており、その学校にプラスしたよりどころを求めているようであった。その相談事項にも、「特殊学級に行っているが、友達ができずに悩んでいる」とか「聾学校に行っているが友達が出来ない」とかだ。

今年度から、私も養護学校の授業を受け始めた。そこで聞いたことは「交流教育と言ってもまだまだ難しい。交流できれば一番だが、結局大人がマンツーマンで着いていないと不安である。」ということだ。学校の中でも一般に“LD”とか“ADHD”の子どもは悩みを抱える傾向が強いらしい。子どもが置き去りにされない学校を作るにはまだまだ大変多くの課題が残されているのだと感じた。

メンタルサポーターとして

石井里佳 教育実践科学専攻 3年

As a Mental Supporter

ISHII Rika : Major : Educational Science, junior

【キーワード】 学校 教室 不登校児 メンタルサポーター

1. 不登校児について

私がいじめや不登校について興味を持ったきっかけは、10年ぐらい前に、中学生がいじめで自殺した事件が起こったことである。同世代だったこともあり、とてもショックで、悲しかった。また、高校生のとときにクラスメイトが、あるときから学校に来なくなった。そんなに親しくなかったこともあり、私は何もできなかった。なぜ来なくなったのか、今どうしているのかもわからないが、そのことはずっと私の中に残ることとなり、次第に不登校への関心を高めていった。

不登校という言葉が出てきたのは最近だと思う。以前は登校拒否などと言われていたが、「拒否」ではなく、「行くことができない」という状況もあるということ言い改められたようである。そもそも学校へは行かなければならないという概念があるからそのような言われ方をされてしまうのだと思う。学校へ行かなければならないのかという問題についてはあまり深く言及しないが、現在、長野県内でも不登校児は大勢いる。

メディアや身の回りの出来事に影響されて、私はいじめや不登校などについて深く勉強したいと思い、大学に入学した。初めて不登校児と接したのは教育参加という授業で、不登校児と学校に通っている子どもの両方を集めて一緒にキャンプをする活動に参加したときだった。そこでは一週間子どもたちと少年自然の家泊り込むということもあり、ある種、非日常的な生活となった。どの子どもが不登校児なのかまったくわからずに活動する中で、自分のなかに不登校児に対する偏見があったことに気付かされた。そのキャンプはとても貴重な体験であり、ますます深く不登校について考えたいと思ったのはもちろんだが、その一方で、学校に通うような日常を不登校児はどうしているのか気になった。キャンプをしていたのは、学校の夏休みに当たる時期である。それ以外の日はどう過ごしているのだろうか。キャンプで会う子どもたちとの関係はそのとき限りで、来年のキャンプに来てくれれば会えるかもしれないという程度のものだった。キャンプ後に学校に行くようになったのか、元気なのかどうかはわからなかった。

2年生になってからも、そのキャンプには参加した。一方でYOU遊広場の活動を知った。不登校児とかかわるプラザはあったが、その時はメンタルフレンドといって、空いている日を利用して中学校に出向くものだった。私は交通手段が限られていたのと、適当な空きコマがなかったので、その活動には参加できなかった。しかし、普段から継続的に不登校児とかかわる活動ができないかという思いはずっとあった。そのときに興譲館という不登

校児を大学に集めて活動する計画の話聞き、とても興味がわいたのである。

2. 興譲館と私

興譲館に関しては他の方が詳しく書いてくださると思うので、ここでは私の思いだけを書くことにする。

興譲館の概要はすでにあっただが、細かいことは何も決まっておらず、実質白紙であった。「継続的な活動」がしたいという一念で、私はこの活動に参加することに決めた。

春休みに何回か話し合いをし、何を目的とし、どのように進めていくのかなどについて決めた。どのような活動をしたいのかはすべて自分たちに委ねられていたので、一生懸命考え、春から子どもたちを迎える準備をした。

私の中では3年生になり、それなりに空きコマもでき、興譲館に参加できると思っていた。具体的なイメージが自分の中でできていたわけではなかったが、何かできるような気になっていた。

ところが実際は違って、空きコマもあまりなく、レポートなどで毎日忙しくて、自分が継続的に行かれない状況になってしまったのである。私は自分の中で、子どもたちだけに継続性を求めている、自分の継続性については考えていなかったことに気付かされた。まだ子どもたちとの関係ができていない中で、週に一回、短時間行くだけのペースでは毎回ゼロからのスタートになってしまっているように私には思えた。せっかくその日築けた関係も、一週間経つうちに消えてしまって、また初対面のような状況になってしまったように思えたのである。突然行っても何をしたいのかわからなかったし、私自身何をしたいのかもわからない状況だった。

これは私の勝手な思い込みで、それでも通っていれば子どもたちと関係が築けたかもしれないと今なら思えるが、その頃の私はそのまま興譲館から遠のき、ついに行かなくなってしまったのである。

3. メンタルサポーターについて

3年生の後期になり、やっと空きコマが少しはもてるようになった。しかし、一度行かなくなってしまった興譲館には行きづらく、同じプラザでありながら活動しない自分に負い目を感じていた。

そんな時、附属長野中学校から、学校へは来ているが教室に行かれない子どもたちを見てほしいという話があった。私もメンタルフレンドの活動に興味はあったのでやらせていただくことになった。しかし、メンタルフレンドは初めてだったので、結局はどのように進めていけばいいのかわからなかった。

はじめは教室に行かれない子どもたちがいる部屋に行って、勉強を見たり、話し相手になったりしてほしいということであった。相談相手というよりも、本当に、ただ行って、少し雑談をする程度のことしかできなかった。先生という役割でもないのに、自分たちをどのように呼ぼうか考えていたところ、メンタルサポーターという名前を附属中学校からつけていただいたのである。

初めてその部屋に行き子どもたちと会ったときは、お互い緊張していた。私が案内された部屋は、その時は主に女子が2、3名いて、勉強したり、雑談をしたりしていた。なかなか話すきっかけを見つけられずにいたが、好きな芸能人などの話題によって少しずつ話す

ことができるようになったのである。これから活動していくためには、まず、生徒と話すことができるようにならなければいけないと思い、私が積極的に話し掛けるような形になった。

4. 仲間との連絡

メンタルサポーターと学校の連絡は私が中心に取ることになった。メンバーは10人ぐらいで、私は主にメーリングリストで連絡をまわすことにした。みんなが忙しく、全員で集まって話をするのは難しいと判断したからである。

はじめの頃は個人で学校に連絡して、空いている時間に中学校に出向くという方法をとっていたが、少し経ってからは、私がみんなの都合をまとめて、一括して中学校の方に連絡するという形にした。大体の話はそれで通じたが、あるとき、大きな問題を起こしてしまったのである。

附属中学校の方から、子どもたちの中には触れてほしくない話題もあり、今までは学校に行ったらすぐに子どもたちの部屋に行っていたが、これからは学校の方の仕事を手伝ってもらうこともあるかもしれないという話を聞いた。

このことについては次の項目で詳しく述べようと思うが、私はこのこともメールで連絡してしまったのである。私なりによく考えて文章を作り、回したつもりであったが、読み手によっては大変癪に障る文章だったということにあとから気がついたのである。

何でもメールで連絡するのではなく、重要な連絡は実際に人を集めて連絡することが必要だということに私は気付かせてもらったのである。

結果としては、私がその後、みんなに集まってもらって直接連絡し、誤解を解いて一段落したの（だと思っている）である。そのメールを気にした人もいれば気にしなかった人もいたと思うが、このような事態を引き起こしてしまったことで、メールで連絡することの危うさを知ったのである。

しかし、今は仲間の連絡はあまりなく、それぞれがどのような活動をしているのかもたまたまに少し聞くだけである。しばらくは連絡ノートを利用していたが、最近に行っているのも私だけということもあり、あまり連絡を取っていない状況になってしまっている。

5. 子どもたちとの関係

この項目については、私個人の経験と思ったことを述べるので、他のメンタルサポーターがどう思っているのかは別の問題になる。

私ははじめ、少しでも話ができればと思っていた。どう関わろうか、どこまで立ち入っていいのか、不安と疑問がいっぱいであった。急に行った私たちよりも普段から関わっている先生の方がいいのではないかと、また、そのような先生がいるのであれば私は必要ではないのかなどである。

「早くいろんなことを話せるような仲になりたい」と私は無意識のうちに急いでいたのだと思う。仲良くなって、何か目に見える成果を出したいと焦っていたのだと思う。そのようなときに、前項で書いたようなことを附属中学校の先生に言われたのである。私は「深入り」の理由がよくわからなかったし、これから私たちメンタルサポーターはどのような動きをしていったらいいのかを見失ってしまったのである。

附属中学校の先生にこの質問を問いかけたところ、あまり質問ばかり投げかけて話すの

は子どもたちの負担になるということ、特にこちらからアプローチしなくてもただ居るだけで関係ができるようになる、焦らずに関わってほしいということを言われたのである。そういえばと思い、自分の今までの活動を振り返ってみると、早く子どもたちと深い関係を築きたくて、なんでも疑問形式で子どもたちと会話をしてきたこと、子どもの状態も考えずに話しかけてしまっていたことなど、思い当たることがたくさんあった。このことを言われた日も、次回はもっと話そうなどと自分本位でこの活動に取り組んでいたのである。それでは子ども達の負担になることは目に見えていたのに、私は少しも気付いていなかったのである。

そのことがあって、私のこの活動の取り組み方は変わった。今、一番心がけているのは話し過ぎず、子どもたちの話を聞くことである。もちろん、子どもたちに問いかけをすることはあるが、常に問いかけているのではなく、子どもたちから話してくれるのを待つことである。実際、待っているのは苦しいと思う時もある。部屋の空気が重いように感じたときなど、話しかけたくなるが、ここは生徒は話したくないのかもしれないと思って待つ時もある。調子が良くなれば生徒のほうから話し始めることもある。

1月になってから、私が行っている部屋に新しく女子が一人加わった。同じ学年ということもあり生徒同士の仲は良い。給食の時間は新しく来た子の友達も来てとてもにぎやかである。にぎやかなことを喜ばしく思う反面、心配にもなる。この生徒たちの教室嫌いが進んでいくような気がするのである。しかし、私にできることは正直にいうと何もない。教室にいるからこそわかる楽しい雰囲気があると思うので、少しでもそれが伝えられたらと思う。

6. 附属長野中学校の対応

附属中学校の対応は、私たちメンタルサポーターにとっては、とてもよくしてくださっている。学級担任の先生も、空き時間には生徒たちが居る部屋に来てくださり、話をしてくださる。必ずしもこれが、生徒にとっていい影響を与えるかはわからないが、そのうち、この部屋にいる生徒たちもわかってくれると思う。教室が嫌いな生徒だけでなく、先生が苦手な生徒もおり、そのような場合、先生からのアプローチも効果がなく、ますます独りになってしまっているように思う。

最近では、他の生徒から「あの部屋にいる人たちは遊んでいる」といわれたことを受けてか、附属中学校で話し合いをしたらしく、積極的に生徒を教室に帰そうとしている。担任以外でも教科の先生などが巡回の時に来て、教室へ行った方がいいということ話を話していた。それを受けた生徒も、考えてはいるようだがそのままである。

7. 今後の課題

私も、教室に戻れるなら教室で、みんなと授業を受けた方がいいと思うが、その部屋を出されたことで、学校の何処にも居場所がなくなってしまうようなことにならなければいいがと少し心配している。今まで自分自身が、積極的に学校（教室）復帰を目指した活動をしてこなかったこと、また、目指そうとあまり思ってなかったのも、少し戸惑っている。しかし、このまま教室に行かなければ、行く機会を逃してしまい、ますます行きにくくなってしまいうだろうとも思う。これは教室に行かれない生徒だけの問題ではなく、クラス全体の問題だからである。

中学生というちょうど思春期の子どもたちは非常に難しい時期だと思う。その子どもたちの気持ちを尊重して受け入れつつも、こちらの思いを伝え受け入れてもらうのが難しいと思った。まだ学生という年代だからこそ、生徒の気持ちに共感できるが、学生という立場だからこそ強く言えないのは弱点だと思う。

このメンタルサポーターは、私にとってはいろいろ得ることができ、良い経験をさせていただいたと思っている。自分もしっかり考えて行動しなければならないと思う。また、学校の仕事を手伝ったことで、授業以外での教師の大変さも知ることができた。しかし、今回は、目的が曖昧だったため動きにくかったということがあったので、課題としては、先生や仲間との連絡を密にとり、どのような目的でどう動くかはっきりさせることが必要だと思う。



みんなから学んだこと

—「信大YOU遊広場」での活動を通して—

増田美和 障害児教育専攻 3年

What I Learned Among Everyone

—From Activity of Shin-dai YOU-Yu Plaza—

MASUDA Miwa : Major : Handicapped Education, junior

【キーワード】 牟礼ふるさと農場 鉄腕アトム 声かけ 臨機応変 連携

1. はじめに

私は今期の信大YOU遊広場に、「1プラザ・牟礼ふるさと農場」と「3プラザ・鉄腕アトム」を中心として参加してきた。二つの活動は、活動内容は違うが、そこから私が学んだことを振り返ってみると不思議と同じものが多いつまり私は今年の活動において子どもとかかわっていく上での基本を、改めて学ぶことができたのではないかと思う。また、運営する、企画するという立場から感じたことも多い。それらを中心に活動を考察していきたい。

2. 子どもの目線で

牟礼の活動で学習係になり、作物についてのクイズを出そうとしたときだった。クイズの問題はもちろん考えていたし、どういう解説をしようかも考えていた。しかし私は、「どうやって子どもたちの関心をひき、どうやってクイズをはじめるか」を全く考えていなかった。いざみんなの前に立ち私は何気なく「じゃあこれからちょっと、みんなの作るものについてお勉強しようと思います」と言ってしまった。言った後の子どもたちの反応を見て、すぐにしまった!と思った。「なんでえ?」「えー。お勉強やだあ」「漢字とかやるの?」...

子どもたち、特に低学年の子どもにとって「お勉強」は、学校や家でするもので、ここは農場で、畑仕事やレクリエーションをする所だったのである。さらに「お勉強」は国語や算数のことで、作物についてのことは「お勉強」ではなかったのである。子どもの立場になり言葉を使うべきであったと反省し、それからは「学習・勉強」という言葉ではなく、「豆知識クイズ」という言い方をするようにした。

また、アトムの活動においても、子どもを活動に誘い込もうということに必死になってしまい、その時子どもが何に興味を持っているかに関係なく、つい「やろうよ」という声かけが多くなってしまったことがあった。ある先輩は反省会するとき「無理に活動に戻そうとしても、難しかったし機嫌もよくなかった。でも、まあいいかと自由にいけるようにしたらにこにこしていた。そうしたら私も楽しくなった。」ということを書いてくれた。もちろんせっかく準備した活動なので、参加してほしいという気持ちはあるが、無理に誘うことは

せず、その子どもが楽しかったと感じて帰れることが大切だと思った。また子どもの興味を生かした活動、子どもが自然と参加する活動ができるようになりたいと強く思った。

さらに、お母さん方の企画に参加したとき、会場が二つ用意してあり、メインの活動以外に、好きなことができる場所が準備されていた。すると子どもたちは、自分のペースで活動に参加できていた。このことから、会場を二つくらい用意しておき、やりたくないときは別のことをできる場を作ろうという意見が反省会に出され、それからは信大で行う際もできるだけ会場を複数用意する、または活動を複数用意することを心がけるようになった。

まずは、子どもの目線になり活動や言葉遣い、そして会場を考えること、そして、どのような声かけをして関心を引くか、きちんと考えてから活動することが大切だと感じた出来事であった。

3. 臨機応変な対応

牟礼の活動において最も手ごわいのは天気である。学部が晴れていても安心はできない。また、着いたときの天気がどんなによくても油断できない。幸い活動を雨天延期にすることはなかったが、午後になると急に霧が出てきて、周りが見えなくなるということ—そのときの反省会では「走っていった子どもが見えなくなり怖かった」という発言が出るほど濃い霧だった—が何回かあった。また急激に寒くなったり、雨が降り出したりしたこともあった。そんな時、私はつい「どうしたら活動を最後まで続けられるだろうか」ということを考えてしまいがちであった。しかし子どもの健康、安全を考えると予定よりはやく切り上げることも必要だな...と考えているといつも土井先生に「増田さん。こんな天気になってきたから、早めに終わりにしましょう。」と声をかけられた。「農場での活動は、私たちが天気に合わせなくてはいけない」ということはわかっているに、いつも対応が遅くなってしまい、何度も反省させられた。

別の活動のときは午前中だけの予定だった草取りを、子どもたちが「最後までやりたい」と言ったため、午後のレクリエーションを中止して続けたこともあった。

アトムでいえば、子どもの集中力が切れてきたため、おやつを予定より早めたこともあった。

このような経験をしていくうちに「臨機応変」という言葉を意識するようになった。以前から大切なことだと思ってはいたが、経験してみても心からそう思ったし、子どもたちと接すれば接するほどその大切さを感じる。教育実習の際ある先生から「授業が始まったら学習指導案は捨ててしまいなさい」と言われた。私はプラザの経験からなるほど、と素直に納得することができた。計画を捨てることはとても怖いことである。そのためあらゆる場合を想定しての計画を立てておくことは無論大切である。しかし思い切ってそれを捨て、目の前の事実に合わせていくことはもっと大切であると、1年間の活動を通して強く感じた。その「計画を捨てるタイミング」をいかに正確なものにするかが、次の私の課題である。

4. 連携

「信大牟礼ふるさと農場」では「牟礼村ふるさと振興公社」と、「鉄腕アトム」では「長野養護学校楽しい放課後クラブ にこ²」とそれぞれ連携して活動を行ってきた。どちら

の活動も、この連携がなければ成り立たなかった。

特に牟礼村ふるさと振興公社の竹元課長さんには、私たちが畑の手入れを十分できない分の作業を、すべてやっていただいたといっても過言ではない。手作業だけでは間に合わなかった畑を耕す作業や草取りを、私たちがお願する前に、機械を入れてやってくださった。水や肥料の心配もしてくださり、活動のたびに大きなタンクをトラックに乗せて持ってきて下さった。また当日の活動においては、保護者の方の力も大きかった。スタッフだけでは人数・技術の足りないある種裏の仕事(道具の用意や収穫したものを並べる作業、またお昼を作るための鍋を置くかまど作りなど)に、さっと手を貸してくださった。作業においても、自分の子ども以外の子にも声をかけながら、また時間が間に合わないときは黙々と、一緒に作業をしてくださった。

にこ²の活動でも、保護者の方がいなかったら、活動にならなかったと思う。それと同時に学生は保護者の方の接し方や企画の立て方から、とても多くのことを学ばせてもらった。

しかしどちらの活動も「連携していました」と言うには話し合い—お互いの願いや反省を出し合う機会—があまりにも少なかった。たいてい活動の内容や、時間、参加人数を活動の数日前に電話で連絡し、当日お願いしたいこともその電話で言うだけ。もしくはFAXを送るだけ、という「連携」のとり方であった。当日もばたばたとした状態になってしまい、なかなか顔を見ながらゆっくりとお話をする機会を持つことができず、漠然とこれでもいいのだろうかという不安を抱えたまま、活動だけが進んでいった。

そんな中12月26日に初めて「にこ²」の今までのこと、これからのことを話し合う機会を、保護者側からの提案で持つことができた。それまで「このような活動で、子どもや保護者の方は満足してくれているのだろうか」という不安があったため、この話し合いに臨むのはとても緊張したが、あと3回の活動をさらに良くするため、また自分の振り返りという意味で、楽しみな面もあった。

話し合いで、保護者の方は「こういう活動も取り入れたい」といった要望の他にも、普段の子どもの様子、学校への要望など、活動に直接は関係ないが、私たちがこれからのこと(鉄腕アトム活動だけではなく、将来のことなど)を考える上で、大切にしなければならぬこともたくさん話してくださった。また今までの活動についても「活動→おやつ→お帰り」というパターンが決まっていた方が子どもたちは安心なのでこのままでいいということをお願いいただいた。このときの話し合いの中で出たことを1月の活動でほんの少しではあるが取り入れてみた。効果がどれだけあったかはあまり分からなかったが、お互いの願いを、少しずつでもいいから具体的な形にできたとき、本当の「連携」ができるのではないかと思う。

話し合いが終わり、このような場を作ってくくださった保護者の方に感謝すると同時に、活動内容が不安なのに、話を聞くことも不安で動こうとしなかった自分を、深く反省した。「自分から動く」がYOU遊広場においては大切なことなのに、私にはまだそれが足りない。プラザは私がひとりで行っている活動ではないのに、「プラザ長」という肩書きを知らないうちに意識していて、「活動への意見=私への意見」と無意識のうちに感じてしまい、話し合いや反省会から逃げていた面もあったと思う。批判されることを恐れず、そしてそれは私を責めるものではなく、よりよい活動にするための大切な指摘であるということ常々頭に置いて、もっと自分から動かなくてはいけないと強く思っている。

YOU遊広場での活動をしなかったら、私はずっと反省から逃げていたかもしれない。また、もしひとりで活動していたのなら、他者からの意見を正面から受け止められずやり逃げていたかもしれない。たくさんの人に支えられているこのプラザにおいて、このような経験ができて、本当によかったと思っている。

5. 運営の面から

「牟礼ふるさと農場」も「鉄腕アトム」も、月に一度、自分たちで企画しての活動があった。それは「継続的な活動をしたい」という思いからのものであったが、本当によかったのか一番気になっている点である。

月に一度の活動は、とにかく日数的に忙しい。特に農場の活動においては、農場パスポートの発送、返信期間が必要なため、すぐに翌月の計画を立てなくてはならない。そのため、一回ごとの反省を十分にしないまま次に活動になだれ込む、という感じになってしまった。また、そういった事務的な準備に追われ、スタッフの中で「願い」を確認する時間すら、十分にとることができなかった。活動を多くすることで、参加者とのかかわりは深まるが、それだけが目的ではなかったはずである。目的を意識できなかった運営は反省しなければならないと思っている。

またスタッフへの連絡は、主に定例会とメーリングリストを使って行ったが、定例会に来られないスタッフ（それが誰なのか、把握することも難しかったが）への連絡はどうしても遅れてしまう。またメールでの連絡は一方向的であるため、相手からの何かしらのリアクションがなければ情報が伝わったのかすらわからない。当たりまえであるが、メーリングリストに登録していない人には何の情報も伝わらず、スタッフが固定されてしまう。さらに出欠席の連絡も、返信が来ないと、1→欠席するから返信が来ない、2→出席するつもりだけど返信を忘れている、3→メールを読んでいない、など最低三つのパターンが予想でき、どうすればいいのか悩むことになる。

しかし一通のメールで全員に届くこと、メーリングリストで送ったメールはほとんどの人の携帯電話に届くため、今伝えたい連絡を送るにはやはり手軽で便利、という利点もある。

結局よい方法が見つからないまま、活動が終了しようとしている。定例会のあり方、メーリングリストの使い方においては多くの反省点・改善点があると思う。これについては、プラザ長など連絡する立場の人が考えなければならない問題であると同時に、プラザに参加しているスタッフも「自分は返事をしなければならないメンバーである」ということを意識しなければ、どのような方法をとっても改善は難しいように思われる。私自身もメールの返事が遅れてしまい、他のプラザ長に迷惑をかけることがある。「あとで言おう、あとでやろう」ではなく「今言おう、今やろう」、そういう態度で臨むことが、何事においても、たとえ返事ひとつにおいても大切なことだと感じた一年間であった。

さらに私は、仕事を分担する、ということが苦手であった。係を決めるときも、「ここを〇〇さんをお願いしたい」となかなか言えず、立候補だけを待っているため、いつも同じ人が同じ係になっていた。そのため、例えば二年生に牟礼での学習係を経験してもらうことなく活動が終わってしまった。去年の私は先輩に「やってみたら？」と言われたことで、新しい経験をすることができた。自分で立候補するには自信がない。でもやってみたい気もする。そんな私の背中を押してくれる一言だった。しかし私は今年その「やってみたら？」

の一言が言えなかった。それが言えたら、もっと農場の、別の角度から見た楽しさを伝えることができたかもしれないと思う。また自分が必要以上に背負い込んで、当日までばたばたすることもなかったと思う。そして周りに「プラザ長は大変そう」というイメージを与えることも。

これから「お願いします」そして、何かを分担するときは「私がやるよ」という、その一言が言える人間になっていきたい。

6. 広がった友だちの輪

「友だち」というと語弊があるのだが、しかし「知り合い」よりはもっと近い人が、YOU遊広場の活動を通してたくさんできた。

農場やにこ²と一緒に活動している、子どもたち、そのお父さん、お母さん。活動以外の場所で会ったとき「あ！」と気付いて声をかけてくれると、とても嬉しい気分になる。

去年から0プラザ・メンタルフレンドの活動を通して通っている中間教室の先生、子どもたち、保護者の方、全国フレンドシップで出会った他大学の学生。またそういった外部の人だけでなく、同じ信州大学教育学部の学生とも、プラザを通して知り合うことができた。

様々な人と出会うことで、私は多くに刺激を受けることができた。そのことによって、自分が行ってきた活動を反省することもできたし、逆に自信をもつこともできた。その人たちと話をすることで様々な考え方や体験に触れることもできた。

こうしてプラザを通して知り合うことのできた人々との関係を、これからも大切にしていきたいと思う。

7. 最後に

上にも書いたが、「信大YOU遊広場」を支えているのは、人と人との関係であると思う。いくら私が農場で活動したい、養護学校の子どもたちと活動したいと思っても、ひとりではどうしようもないことが多い。ご指導くださる先生、たくさんのおアドバイスと励ましをくださる先輩方。一緒に活動を作り上げてくれる仲間。そして協力をしてくださる地域の方々、保護者の方々、そして何よりも参加してくれる子どもたち。みんなに支えられて1年間の活動が何とか無事に終了した。活動が終わったあと、笑顔で帰っていく子どもたちと、「楽しかったね。」と言い合いながら片付けをする学生スタッフのおかげで、次も頑張ろう、という力をもらった。私自身、みんなで作り上げることの楽しさを強く感じた1年だった。

この場を借りて、YOU遊広場にかかわってくださったすべての方にお礼を言いたい。本当にありがとうございました。

農業体験から学んだこと

—子どもたちとのコミュニケーション—

高橋和之 理数科学教育専攻 3年

What I Learned From The Farming Experience

—Communication With Children—

TAKAHASHI Kazuyuki : Major : Science and Mathematics Education, junior

【キーワード】 牟礼ふるさと農場 茂菅ふるさと農場 食 農業体験 鮎 コミュニケーション

1. 私がYOU遊広場に参加したきっかけ

私が今年度YOU遊広場に参加した理由は、YOU遊広場での活動が自分自身を高める機会になると考えたからである。YOU遊広場に参加し活動をする事で、子どもたちや保護者の方々、そして仲間たちと新しく出会うことができる。新たな出会いを通して、新しいものの見方や考え方に触れることができる。そのことは自分自身の世界を広げることにつながると考えた。

私は大学2年生の終わり頃から本格的にYOU遊広場に参加した。大学1年生の時には当時のYOU遊サタデーに2回参加し、大学2年生ではYOU遊フェスティバルに参加した。今まで、イベント的な活動には参加をしてきたので、大学3年生からの継続的な活動ではたくさんの経験ができると考え、活動することが楽しみであった。

私がYOU遊広場で今年1年間、主に活動してきたことは、牟礼ふるさと農場と茂菅ふるさと農場での農業体験だった。牟礼ふるさと農場では主にそばを作り、茂菅ふるさと農場では主にお米を作った。私は牟礼ふるさと農場の畑と茂菅ふるさと農場の田んぼを同時に触れることができるチャンスを持つことができた。両方の農場を同時に経験できることはとてもよい学びになると考えた。

2. 子どもたちを取り巻く食の文化に対する問題

現在、私たちの食卓にあがっている食べ物のほとんどは諸外国から輸入されてきたものである。輸入に大きく頼っている食べ物は、牛肉や豚肉などの動物類や、えびやいくらなどの魚介類、大豆、小麦などがある。これらの食べ物の例は限りなく挙げることができる。私たちの食べ物に対する環境がそのような状況にある中で、唯一お米だけが自給率100%を保っている。私たちが毎日食べている日常的な食べ物の中では、お米だけが自給率100%を達成していると考えられる。このように私たちの食べ物が諸外国の輸入に大きく依存した状況の中で、子どもたちは毎日の食生活を送っている。

今、子どもたちは食べ物に関してどれだけの興味を抱いているのであろうか。子どもたちはスーパーマーケットに行けば、袋に包まれたにんじんやピーマンを見ることができる。

そして大きくてまっすぐに伸びた大根を見ることができるだろう。また、豚肉や魚は切り身にされていたり、ミンチになっていたりしている。大豆は豆腐、おから、きな粉、油などになっている。このように子どもたちがスーパーマーケットで見ている食べ物は、全て人の手が増えられたものであると考えられる。子どもたちは常に人の手の増えられた食べ物を見て育っていると思われる。では子どもたちはその食べ物がどのような過程で作られたものであるのかをどこまで考える機会があるのだろうか。お米に関して考えていくなれば、玄米と胚芽米と白米ではどのような違いがあるのかや、現在販売されている無洗米とは何なのかや、これらのお米を比較して、それぞれのお米のメリットやデメリットは何なのかを考える対象となるであろう。そしてお米はどうやって作られているのかが考えられる。子どもたちは飽食の時代において、その食に関する現実と面と向かい合って考えられているのだろうか。日本で作られたお米に関しても知らないことが多いのに、ましてや諸外国からの輸入品は知る由もないことである。では、子どもたちにとって農業体験をすることがどんな意味を持つのであろうか。今後そのことに関して考察をしていく。

現在、日本の産業別人口の中で農林業に携わって生活している人々はわずか6%である。6%という低い割合になっている理由として考えられることは、高度経済成長の時代に製造業へ出稼ぎという形で人々が田んぼや畑から離れてしまったことが考えられる。また、機械の大型化に伴い、少人数で大量の農作物を生産することができるようになったからとも考えられる。では、これからの農業を子どもたちが支えていくために、子どもたちは農業体験をするのであろうか。確かに、子どもたちは農業体験を通して農業に対する興味を抱き、農業を志す場合も考えられるであろう。農業を志すために農業体験をすることも目的の一つとして考えられるが、確固たる目的とはなりにくいと思われる。私が考える農業体験をする目的とは、実際に食べ物を作ることを通して、作ることの大変さと収穫に対する喜びを感じ、食べ物に対する興味・関心を抱くとともに、食べ物大切さをより身近に感じることであると考える。また、みんなで食べ物を作るということを行うことで、子どもたち一人一人のコミュニケーションをもつ機会になる。一つのことをみんなで向かい合うことは一つの共同作品であると考えられることもできる。もし仮に、田んぼでお米を作ることを体験するならば、一人ではお米を作ることができない。そのため、お米をみんなで作ることになる。子どもたちはお米を作るときに農家の方にお米の作り方を教わらなければならない。子どもたちはお米の作り方を学びながら作業を進めていく。そのような状況の中で子どもたちはみんなと会話をしながら作業を進めていくであろう。またお米の場合、子どもたちは半年間ほどお米を育てていく。子どもたちはお米を育てている間、お米が実るのを「待つ」ということが必要である。その期間の中で子どもたちの中からお米に関して興味を抱く場合がある。この興味からお米のことに関して調べてみる機会を持つことができる。そして子どもたちはお米を育てて、四季を感じながらお米を収穫するであろう。

私は農業体験が子どもたち自身の世界を広げる機会になると考える。お米作りを経験したことがない子どもたちは、田んぼの泥を足でとらえた感触を実感することや、農薬を使わなかった場合は、雑草が生えてくることを学ぶことや、収穫の喜びをお互いに分かち合う機会を持つことが大切である。また、お米作りを既に経験していて、お米に関してはある程度知識を持っている子どもたちは、クラスの中でお米に関して知っているということが自信になり、お米のことをよく知らない子どもたちに対して教えることで、お互いのコミュニケーションの機会になる。

子どもたちの現在の生活は自然と大きな隔たりを持っていると考えられる。子どもたちは家庭に帰ると、テレビやテレビゲームなどがあり一人で遊ぶことができる。子どもたちは外で遊ぶことも少なくなり、お互いにコミュニケーションをとる機会が少なくなっている。そのような子どもたちの生活を取り巻く環境に対して、農業体験はお互いにコミュニケーションをとる機会と自然に対する触れ合いを持つ機会を与えることができると考える。子どもの頃に体で感じた経験は大人になっても忘れることはない。そのために農業体験をすることは大切であると考えます。

3. 牟礼・茂菅ふるさと農場での実践

私はこの1年間、牟礼・茂菅の両ふるさと農場で農業体験をする機会を得た。始めのうちは農場がどこにあるのかも分からない状態であった。そのような状況の中で、土井先生や仲間それぞれにそれぞれの農場を案内して頂いた。そのとき見た初めての農場の光景は忘れられない。牟礼ふるさと農場はまだ雪が多く残っていて、畑が白く覆われていたのを覚えている。畑のすぐ近くには林があり雄大な環境であると感じた。晴れた日には飯綱山が間近に見ることができ素晴らしい自然であった。茂菅ふるさと農場では田んぼにたくさんの花が咲いていた。近くには裾花川と民家があり、旭山の雄大な景色を見ることができる農場であった。農場は山々に囲まれて緑豊かな環境であった。両方のふるさと農場とも自然に囲まれた雄大な大地であり感激した。

今年1年間は牟礼・茂菅の両ふるさと農場で月に約1回のペースの活動を行ってきた。私にとっては、農場での活動を月に2度行うことができたことは充実した生活を送る要因になった。私が初めて参加した活動は牟礼ふるさと農場でジャガイモとトウモロコシを植えることであった。私が、初めての活動への参加に伴って、自分自身に対する目標を設けた。その目標は子どもたちや保護者の方たちと笑顔でコミュニケーションをとることであった。私は初めての出会いで、お互いに何も知らない状況にあると思ったので、私自身から積極的に話し掛けるようにしていった。子どもたちは最初、寒さのせいもあってか、なかなか笑顔が見られなかったが、全員でゲームをして遊ぶ頃から笑顔がたくさん見られ、たくさんのコミュニケーションをとることができた。初めての活動だったが、とても楽しい思い出を作ることができた。この初めての活動の経験や自信が、今後の活動での自分の行動の支えになった。

その後の牟礼ふるさと農場での活動で、多くの作物を子どもたちと植えることができた。ジャガイモ、トウモロコシに始まりブルーベリーの苗、サツマイモ、そば、落花生を植えていった。サツマイモの苗の植え方は船底のように土を掘って植えていくのでとても感動した。このような植え方があることに驚きを感じた。このように私が楽しい感激を得ることができたことも、子どもたちと一緒に植えたからこそと考えられる。そしてこんなにも多くの作物を植えることができた経験はとても自信になった。

私の茂菅ふるさと農場での初めての活動は田おこしだった。しかしこの活動の当日の天気は雨になってしまった。そのため、活動はみんなの話し合いの結果、中止となった。私は活動が中止になったことに対する残念な気持ちとともに、仲間たちのこの日の行動に対して感動した。この日の仲間たちは活動が中止になったということ、活動に参加することが決まっていた参加者の家庭へ連絡するために、各自分担をして電話をした。30件近くもあった連絡を10分程度で終わることができた。このような仲間の行動から、お互いに

協力することで得られる力はすごいものだと感じた。更にその後、早速次回の活動である田植えとどろんこ遊びについての話し合いをした。今すべきことを一つずつしっかりとこなしていく姿は私も常に見習うところであり、今でもその光景を思い浮かべることができる。

その後の茂菅ふるさと農場での活動は、田植えとどろんこ遊び、田んぼの草取り、かかし作り、稲刈り、脱穀、精米などと、私が経験したことのない活動ばかりであった。私が経験したことの中で田んぼでのどろんこ遊び、田んぼの草取り、鳥よけネットをはることなどがとてもよい経験になった。子どもたちと一緒に汗を流してお米作りに打ち込めたことは大切な思い出になっている。

茂菅ふるさと農場で育てた作物は大学内の畑で育てた作物も入れると、お米、大豆、サツマイモ、トマト、ナス、かぼちゃ、スイカ、メロン、ジャガイモ、ケナフ、ヘチマ、ウリなどが挙げられる。これらの作物を育てるために、本などを調べて学習したことは良い経験になっている。これらの作物に対して教材研究をしていったことは、とてもよい経験になっている。

私が茂菅ふるさと農場での活動の中で大切な思い出の一つになっていることがある。その思い出は田んぼに放した鮎の成長の様子である。茂菅ふるさと農場では農薬を使わないため、田んぼに雑草が多く生えてしまう。そのため雑草のほうが稲よりもよく生長してしまい、お米の収穫につながらない。そこで、鮎の稚魚を田んぼへ放し、雑草を小さいうちに食べさせることを考えた。鮎の稚魚たちは体長2~3cmでとても小さく、一見めだかのように見られた。私は小さな体をしている鮎の稚魚たちを見て、これからの田んぼでの生活をするのができるのかと考えた。鮎の稚魚を子どもたちと一緒に田んぼへ放し、鮎の元気な成長を期待した。しかし鮎を田んぼへ放流した後、生きた姿を見せた鮎はいなかった。そのため私たちは鮎が田んぼからいなくなり、ほとんど絶滅してしまったと考えた。そんなことを考えているうちに、田んぼの水を引く時期になった。私は鮎が田んぼにはいないであろうと考えていたが、わずかながら鮎が生きていた。私はそのことを知り嬉しかった。そして鮎を田んぼから救いだし、いよいよ田んぼの稲刈りをするということになったときに、更にまだ稲の間の水溜りで鮎が生きているということを確認することができた。鮎は足の大きさ程度の水溜りの中で生きていた。鮎の大きさは10cm程度までになっていた。私は鮎の生命力に感激した。泥まみれになりながら生きている姿から強い信念を感じた。

4. 運営委員会での活動

私は1年間運営委員会に参加してきた。運営委員会では牟礼・茂菅の両ふるさと農場での活動だけでなく、他のあらゆるプラザの活動の報告であったり連絡を伝えたりする場であった。また、各プラザが直面する問題をみんなで一緒に考える場でもあった。一からみんなで築き上げていく運営委員会の中に、私が参加する上で大切にしてきた考えがある。その考えは、運営委員会にしっかりと参加し、牟礼・茂菅の活動の報告だけに限らないで、あらゆるプラザの活動の状況を把握することが大切であるという考えである。私は運営委員会のあらゆる状況をできるだけ把握し、何をどのようにしていけばよいのかということ状況を応じて考えていった。そのように考えることを通して、私自身が運営委員会に積極的に参加することができた。

運営委員会での活動からは、教師としての実践的指導力を培うことができる。一から積み上げていく活動では、みんなで一緒に考えながら話し合い、決まったことを活動として実行していくことが必要である。このような活動の輪の中へ私自身を飛び込めたことはとてもよかった。私にとって実践的指導力とはどのようなものなのかを感じ取る機会となった。このような活動で得ることのできる力は、教育現場に立つときに必ず自信につながっていくと考える。

5. 今後の私に対する目標

私は今年1年間、牟礼・茂菅の両ふるさと農場での活動と、運営委員会での活動を行ってきた。この1年間での経験を通して今後私が設ける目標は、教師としての実践的指導力を実際の学校現場でチャレンジすることである。学校現場で実際に向き合っていく子どもたちは学校に対してそれぞれの期待を持っていると思われる。私が子どもたちにどのような経験や活動を考えていけばよいのかを考え、行動として示すことが大切であると考え。このような目標をもとに今後の生活で勉学に励んでいく。

6. 終わりに

私は牟礼・茂菅でのふるさと農場ではたくさんの農業体験を得ることができ、子どもたちとも多くの触れ合いを持つことができた。私がこのような農業体験を通して学んだことは、子どもたちとコミュニケーションを多く取っていくことがお互いの意思疎通にとってとても大切であるということである。子どもたちと積極的にコミュニケーションを取っていくことで、子どもたちと心の触れ合いをすることができる。このことは学校現場において特に子ども理解や学級経営に関して大切なことであると考え。

また、学校現場での実際の指導においては指導力がとても大切であると感じる。このことは田んぼや畑で農業体験をしている中で、先生方や多くの仲間たちの、活動に対する取り組み方から考えたことである。指導していく立場では、自分自身の中に確固とした信念を持っていることが大切であると考え。この信念を原点とし、子どもたちに指導をすることができると思う。

この2つの考えを1年間の農業体験と運営委員会での活動を通して学んでいった。この考えはこの1年間の充実した活動があったからこそ生まれたものであると考えている。

この1年間で土井先生や多くの仲間たちからたくさんのご指導を頂きながら多くのことを学んだ。私はここでの学びをもとに、今後の教育に携わっていく決心である。

教材としての農業

那須紋子 生活科学教育専攻 3年

The Aguricultuer for Material of Education

NASU Ayako : Major : Life sience education, junior

【キーワード】 茂菅ふるさと農場 人集め 玄米 フナっこ 臨床の知

1. はじめに

私がこの信大YOU遊広場に初めて参加したのは、大学二年の一月に行われた茂菅ふるさと農場のもちつきである。ずっと教育学部に来たら、こどもと関われるような活動をしたかったと思っていたのだが、なかなか踏み込めず、ずっと活動をやっている友達に「私も実はやってみたい」ということを話していたらこのもちつきに誘われ、ほとんど準備にも参加せずに当日いきなり参加したのだった。初めての参加ということで、他のスタッフの学生の配慮で、始めに一番こどもと関われる受付係を任された。しかし始めてみると係の仕事をこなすことばかり考えてしまい、こどもに自分から話しかけたり仲良くなって遊んだりできない私があった。先輩に「もっと向こうまで迎えに行って行った方がいいよ。」と言われ、迎えにいったが、上手く話しかけられずこどもに無視される。ガムテープの名札をつけるため名前をきいてもおしえてくれない子、書いて貼ってもすぐにとってしまう子、「危ないから降りよう。」と呼びかけても積み重ねてある机から絶対に降りない子、疲れたと言っても「もっと!」と言っておんぶをせがむ子。一年間ずっと学生と一緒に活動してきた茂菅ふるさと農場のこどもたちは、私が今まで知っていたこどもではなかった。浪人時代、教育学部に行くことを迷ったとき、教師である母親の小学校に見学に行かせてもらった。そこでは、休み時間になると何者かもよく分からない私のところに、私が何もなくてもワーっとこどもたちが来てくれて、自分が描いたマンガを見せてくれたり、教室移動のときにわざわざ案内してくれたり、とても素直で良いこどもたちとふれあい、「やっぱり学校っていいな。教師っていいな。」と思い、教育学部に入学した。しかし、そこでのこどもたちのイメージが茂菅ふるさと農場でくつがえされたのだ。茂菅ふるさと農場のこどもは本音でぶつかってくる。もちろん母の小学校のこどもたちの姿も本当のこどもの姿であるだろうが、もちつきに参加してみて、それはごく表面的な姿にすぎないように思えた。母の小学校でのこどもとのふれあいの中で、私は一度も「困らせられること」がなかった。しかし、もちつきで私はずっと「困られられっぱなし」だった。茂菅ふるさと農場のような学生による一年を通した継続的な活動は、「こどもの本音を引き出す」という作用もあるのだということを実感した。先生ではなく学生、初めてではなくよく知ったお兄さんお姉さんや活動内容。こどもたちの本音にどう対応していくか考えられるという点が、この活動の魅力だと感じた。また、二年次後期の生活科指導法で、「前期は授業で田植えをした」ということをきき、稲を作るという大規模な作業を授業でできたのかと思い、他人

の田で遊んだことはあっても作業をしたことのなかった私は、将来学校で農作業についても指導できるように農作業を行ってみたいと願うようになっていた。そこで茂菅ふるさと農場がその授業で行った田であり、信大YOU遊広場で活動を行っていることが分かり、実際に参加してみて以上のような魅力を感じたので、茂菅ふるさと農場を希望し、農場長となったわけである。

2. 土づくりは人づくり

農場長になったはいいものの、農作業をほとんど体験したことのない私には、何から始めればよいのか右も左も分からない。しかしやりたいことはたくさんあった。私は希望に満ちあふれていたもので、去年はこどもたちを招いての田んぼの活動が、田植え、稲刈り、脱穀というように良いところ取りで、田おこしや草取りや水入れといった地味な作業は全部学生がやっていたということで、今年は一通りの作業をこどもたちと一緒にやりたいということで一年間の活動回数を増やしたり、あれも作りたいこれも作りたいと、様々な野菜や果物をあげ、今年にはケナフやヘチマという教材化できるものも作ろうということになった。作物を作るということに重きをおくのではなく、できた作物を教材とし、それを調理してみたり何かを作ったりというように、作った後の活動に重きをおいて、自分たちの教材として作物を作るということもして行こうということだ。しかし、今年には農場の畑の部分も田にすることになり、野菜などを学校のプレーパークで作らなければいけなくなった。広場の端のクローバーがびっしりと生い茂っている大地を耕して、畑作りをすることになった。春休みの企画の段階では集まっていた学生も、授業が始まりいざ畑を耕そうという段階になるとなかなか集まらない。私は学生が集まるのは当然のことだととらえており、学生が集まらないという事態を予想していなかった。農場長になって大変なのはたくさんの学生スタッフをまとめることから始まると思っていた。メーリングリストできちんと呼びかけをしても、集合時間に集まるのは私以外に平均二人くらいで、私ひとりのときもたびたびあった。始めは、みんなはやる気がないという憤りを感じたり、ひとりで作業している姿を見られた土井先生に声をかけられると辛くて涙が出たりしていたが、そのうちスタッフは集まるものではなく、集めるものなのだということに気づいてきた。

現代の日常生活の中で、たくさんの人間が集まることを必要とし、その作業に集ううちに自然と人がふれあう場ができる空間がいくつあるだろう。何をするにもたいがいのことは、家族内または家族の一部の人間だけで行うことができると思う。それは機械の普及によって、家庭内でも主婦ひとりで家事をこなすことがそこまで大変にならなくなったことにより、家族内で役割分担する必要がなくなったり、田を持っていても地域の人々の協力を求めずとも農作業ができるようになったりしたからだろう。しかし、人間の手で「土づくり」を始めようとするとうとう人間が集まらなければならない。昔は機械がなかったので、田の作業も全部人間の手で行わねばならず、そのためにはやはり人が集まらなければならない。しかし、しかたなく人が集まるのではなく、人の手が必要なきときは互いに協力し合うと言う「結いもやい」の精神や、集まって共に汗を流して作業したり、休憩のときにおしゃべりに華を咲かせるという人間同士のふれあいの魅力によって、自然に人が集まるという結果になっていたのだと思う。しかし、現代ではそういう風習は忘れさられ、人が自然に集まるのが難しくなってしまった。茂菅ふるさと農場の土づくりに人が集まらないのも、このようなことが原因なのかもしれないと感じた。

今の状況で人を集めるにはどうしたらよいのか。私にできたことは、自分ひとりでもいから諦めずに畑を耕すことによって他の人たちの心に訴えたり、他のプラザにも参加して「結いもやい」の精神を浸透させたりすることだ。そして何より、ただ作業するのではなく作業が仕事と感じないくらい楽しく作業できるようにし、また来たいなと思ってもらえるようにすることだ。このように結果的に自然と人が集まるように、人を集めなければならないのだと分かった。他のプラザへの参加は少ししかできなかったが、以上のように働きかけると少しずつだが人が集まるようになってきた。プレーパークで作業していると子どもたちも寄ってくることもある。こどもなので作業に集中しているのはつかの間、他の事に興味を示す。土を掘っていると「この幼虫はカブトムシの幼虫かな?」「これは何だろう?」と作業とは関係ない話題を持ち出す。そういう気持ちのゆとりが必要なのもかもしれないと思った。子どもたちは、何をするにも事務的ではなく、その作業を楽しもうとすることができる。私たち大人は、我慢することに慣れてしまって、作業はただ真面目に黙々とすることが当たり前だという感覚があり、このように力を抜いて作業することを忘れてしまっていた。子どもたちに人が集まる作業の基本を教えられた気がした。これは茂菅ふるさと農場の畑だけでなく田の方でも同じである。畑は学生だけで作って食べるのだが、田の方は、50人のこどもたちと一緒に月に一回くらいイベント的に作業を行うのだが、こども50人を安全に作業させるにはたくさんの学生スタッフが必要だし、準備の段階の話し合いにもたくさんの人間の協力が必要だ。当日参加のスタッフは、こどもとのふれあいやイベント内容の魅力によって集めることができるが、話し合いの段階に人を集めることがとても難しかった。そこで、話し合いにも人を集めるには、こども抜きの話合いにも魅力を持たせるよう、楽しい雰囲気を出しながら作業したり、内容を決めるときに行き詰まらないようあらかじめきちんと考えて用意しておいたりすることが大切なのだ。やることがスムーズに決まると心にゆとりが生まれるので、作業に追われることなく楽しく準備することができる。これが実行できたのは12月7日のYOU遊フェスティバルのときで、話し合いへの出席率はそれまでと比べ物にならないほど良かった。

「土づくりは人づくり」と聞いていたが、その意味についてははっきりつかめていなかった。しかしこれまで述べてきたようにして、私なりにその答えを見つけられた気がする。土づくりを通して人が自然に集まり、そこに人間同士のふれあいが生まれる。私は農場長になったことで、人が集まる原点について考え、人が集まる意味や人を集める方法を学ぶことができた。まさに、土づくりを通して、人（ふれあい）づくりを学んだのだ。

3. こりゃうマイ！感謝をコメントいただくべし

12月7日のYOU遊フェスティバルで、私は茂菅ふるさと農場から米を使った講座を出したいと思っていた。しかしずっと迷っていたのは、普段でさえ学生スタッフを集めるのに苦労していたのに、同じ日に同時に講座がいくつも行われスタッフが分散してしまうフェスティバルで、果たして十分な数のスタッフを確保できるのかという不安があったからだ。しかし、スタッフは実行委員の学生たちで集めてくれるという言葉に安心し、講座を出すことに決めた。ずっと活動ごとにスタッフ集めに苦しんできた私は、始めの実行委員の言葉に甘えて、スタッフ集めに対して特に取り組まず、自分から周りに働きかけたりしなかったし、講座名も適当に「Let's 米」というふうにつけてスタッフ募集をかけた。しかし、やはりスタッフの集まりは悪く、始めのスタッフ数をきいたときはただショックだっ

た。フェスティバルの初めての話し合いで、スタッフに自分の講座内容について説明するために、今までの茂菅ふるさと農場での活動後に、子どもたちが書いた感想などを読んでいると、「早くお米が食べたいです。」という感想をかなり前から書いている子が多いことに気づき、「こんなにも子どもたちは、お米が食べられる日を楽しみにしていたのだな。子どもたちは、やっと初めて自分たちで作ったお米を食べられるのに、私はスタッフを集められないでいるなんて、子どもたちに対して何て申し訳ないのだろう。米が食べられると期待に胸を膨らませながらやってくる子どもたちを、精一杯むかえられるように努力しよう。」と思った。子どもたちの声によって目が覚めた私は、まず講座名を考え直した。いくら楽しい講座を考えていても、それをやる前にその楽しさが伝わらなければ人は集まらない。自分が参加者の立場にたって、たのしそうだ、参加してみたいな、と思うような講座名が必要だと思った。そこで考えたのが「こりゃうマイ！感謝をコメていただくベェ！」である。学校の学習でも、子どもたちが学びたくなるような単元名は、子どもたちの意欲・関心を高めるのにかなり有効だと思う。実際、私は講座名を変えてスタッフを募集したら、「楽しそうな講座だね。参加したいな。」という反応が返ってきて、十分なスタッフと参加者を確保することができた。楽しい名前をつけられれば、始める前の段階で、人の心をつかむことができる。

このように大前提である、スタッフと参加者集めに成功したら、次は内容についてである。実習の経験も手伝って、それまでの茂菅ふるさと農場ではあまりやってこれなかった「学習」に焦点を当ててやりたいと思っていた。しかも子どもだけでなく大人でも勉強になるような内容で、かつそれを楽しく行えるような方法を考えたい。今回のテーマは「玄米」だったので、玄米というのがどういうものなのか、どんなパワーがあるのかということを知ってもらうことをねらいとした。まず、脱穀の段階ではまだモミの状態だったコメが、どのようにいつも食べている白い米の状態になるのかという学習をするために、三つずつモミを渡し、三つのうち二つのモミ殻を手作業で取らせ、殻を取った状態のものが玄米ということ伝えて後、さらに二つの玄米のうち一つをつめで削らせ、糠を取り除いたものがいつも食べている白いお米だということ伝えて、モミ、玄米、白米の三つの段階を紙にテープで貼らせた。この三つの段階がどのように精米されているのかは大人でも曖昧な人が多いと思うので、子どもたちはもちろん大人も一緒になって真剣に取り組んでいた。その後、玄米の威力について劇を通して楽しく紹介し、次に昔ながらの方法でモミ殻を取って玄米を作る作業に入った。昔ながらの方法とは、一升瓶にモミを入れて上から棒で突付くという方法だが、子どもたちひとりひとりが十分に満足するまで作業できるように、手軽な物でひとりひとりに用意できる一升瓶に代わるものはないかと考え、500mlのペットボトルを思いついた。底が固くないと殻がとれないので、半分に切って底に折り紙で作った箱をはめて手作りモミ殻取りが完成した。これを使って作業させ、できた玄米を白米に二割程度まぜてさらに味を良くするためにサツマイモを入れてご飯を炊いた。またその他にも別の炊飯器で、100%玄米のご飯もスタッフの方で炊いておき、玄米だけでも味わえるようにした。そして試食のときには、保護者の方から、「いつもはご飯だけで絶対食べない子どもが、今日はお米の味をじっくり味わうように食べていたのがすごかったです。」とか「玄米でもこんなにおいしく食べられるんですね。」というお言葉をいただき、子どもたちにもとても満足してもらうことができた。そして最後に今回の講座で最も重要視していたのが、家庭へのフィードバックだ。今回学習した内容を家庭で子どもたちが紹

介できれば、家の人にも学習内容が伝わったり家族とコミュニケーションする機会が設けられたりしてよいと思うし、またせっかく学んだことをその場だけで終わらせないよう家庭でも学習内容が生かされることが究極のねらいと言えるからだ。そこで、茂菅ふるさと農場の活動で初めて「学習カード」というものを用意した。そこにはモミ、玄米、白米の三つの段階を貼った紙を貼ったり、玄米の威力や自分や友達の感想を書いたりさせ、子どもたちが家に持って帰れるようにした。また、今回作ったサツマイモご飯のレシピとサツマイモと玄米をお土産に渡して、帰ってからすぐにでも作れるようにした。このように実習で考え得たことを生かして活動内容を考えたり教材研究をしたりしたので、いつもより内容の濃い活動を行うことができ、始めて茂菅ふるさと農場の活動を教師の目で学習材料として働かせることができたのではないかと思う。

4. フナっこの話

この茂菅ふるさと農場で大変お世話になってきた林部さんという方がいる。この方は、ずっと農業をしてきているいわばプロの方であり、一年間を通して私たちの活動にアドバイスをしてくださり、作業面でも協力してくださった。この林部さんが、YOU遊フェスティバルが終わり、私たちの一年間の活動が一段らくしたということで、スタッフ一同の前で挨拶をしてくださったときの話しがとても印象的だったので端的に紹介する。

「今年の茂菅ふるさと農場は、新しいことにチャレンジする活動ばかりでいつも驚かされました。特に今年初めて田んぼにフナっこを放し稲刈りのときに成長したフナを子どもたちに持って帰らせるということをやろうと聞いたときは、本当に無事フナっこが田で生き延びることができるのか、田干しのときはどうするのかという不安をおぼえました。そこで一部うちの庭の池で稲刈りのときまでフナっこを育てることにし、稲刈りを迎えました。すると、ほとんどいなくなったと思っていたフナっこが生きていたんです。しかもうちの池で育ったフナっこよりかなり大きく成長していました。私はずっと農業をしてきましたが、まだ新しく学ぶことがあるのだと気づかされました。」

また林部さんは、自分のりんご畑のりんごの木を、何本か新しい苗木に植え替えるそう。その苗木から今と同じようにりんごが採れるようになるには、何十年かかるのだろう。「息子たちがりんご作りを引き継いでくれるかは分からないが、学生さんたちの前向きな姿を見て、植えたくなった。」と林部さんは言うてくださった。教育の活動は、地域の人々にも働きかけ影響を与えることもあるのだと知り感動した。そのような教育を行って行きたいと思う。

5. 臨床の知

私たちの活動は体験中心の臨床の知と呼ばれる。「こどもはおんぶをしてあげると喜ぶ。そしてさらにおんぶをしたまま走ってあげるともっと喜ぶ。」という事実があるとして、そんなこどもについてどうとらえるか。そこに保育学の知識が加わると、「母親と父親にはそれぞれ違った役割があり、この事象で説明すると、おんぶが母親の役割でさらにそれで走るというのが父親の役割だと考えられる。よって、このこどもは母親のスキンシップを充分には受けておらず、さらに父親のはもっと不足していることが分かる。」という答えが出る。臨床の知+知識によって初めて、学生にとって本当の学びになるのではないだろうか。

実践から学び得たもの

—子ども達と向き合うことを通して—

小島澄 障害児教育専攻 3年

Learn something by Practice

—Through Communicating with Children—

KOJIMA Sumi : Handicapped Education Major, Faculty of Education,
Shinshu University Third years student

【キーワード】子どもとの関わり 継続的な活動 挑戦

1. YOU遊広場との出会い

私がYOU広場の活動を始めたのは、ちょうど一年前になる。活動を始めた動機は、継続的に子ども達と関わりたかったということと、以前からYOU遊広場の活動に参加している学生が、非常に生き生きとしていて、私自身もそんなふうになりたいと思ったからだった。それまでこのような活動があるのは知っていたが、サークル活動が忙しかったために自分にはできないと決めつけていた。しかし、学生時代にやらなければおそらく後悔することになると思い、YOU遊広場の活動を始めることにした。そして私はこの一年、鉄腕アトム（3プラザ）と興譲館（0プラザ）に関わってきた。多くの子ども達、一緒に活動した学生、地域の人々との出会いは、自分にとって大きな支えであり、迷った時に帰ってこられる場所であり、これからも大切な存在となることを、今改めて感じている。

2. 子どもと正面から向き合うこと～鉄腕アトムでの活動～

このプラザは、学生が空きコマを使って、定期的に障害をもつ人や子ども達と関わりたいという願いから発足した。ちょうど同じ時期に私達がやりたいと思っていた活動を必要としているお母さん方のグループがあることを知った。こうして鉄腕アトムでは、一年を通して、長野養護学校の子ども達とそのお母さんのグループ「楽しい放課後クラブにこ²」と毎月2回、関わっていくことになった。

<ペアを組むことと全体を見ること> 初めのお母さん方との話し合いの場では、構えずに、学生側の意見や企画をたくさんだしてほしいということと言われ、心強く感じた。学校の場所が離れていることや、子ども達の、普段とは別の場所での活動を大切にしたいという思いから、2回のうち1回は、信大で学生が企画することになった。長野養護学校での「にこ²」は学校の設備・遊具等を使用させて頂いて、ダンスやサーキット、おやつ作りをしたり、学校の近くの公園へ遊びに行ったりした。初めのうちは、子どもの顔と名前が覚えられずに、戸惑い構えてしまうこともあったが、何回か回数を重ねるうちに自然とその子どもの名前を笑顔で呼べるようになった。私達のプラザでは、学生スタッフが毎回同じメンバーではなかったために、全員がいつも同じ子どもとペアを組め

たわけではなかった。私はどちらかという、いろいろな子どもとペアを組んだり、ペアにはならずフリーで動いていたことが多かった。ペアを組んだ時には、私はその子どもとの「共有」をととても大事に考えた。共有というのは、一緒に過ごす時間でもあり、その子が見るものでもあり、感じるものでもあった。同じ感情をもつというよりも、同じ目線にたって一緒に歩いていくようなものなのだと思う。名前を呼ぶと、小さな手でぎゅっと握り返して返事をしてくれる子ども、喜びを体全体で表現する子ども、鼻と鼻を合わせて、やわらかな肌の感触を感じている子ども…子どもと、今までより少しでも距離が縮まったと思える、このような瞬間に出会うと、本当に嬉しく、同時に子どもがかけがえのない存在であることを再認識する。そして、一人ひとりみんな違う、私達と同じように子どもだってこの小さな体でいろいろなことをいろいろなものから感じて吸収しているのだと思い、その力に驚かされる。子どもと一対一になって過ごした時間は、中身がぎっしりつままったものになった。フリーで動いていた時には、全体を見ながら、危険な場面を知らせることや、活動の補助が主になった。子どもと直接関わらなくても、今ここで子ども達がより楽しく活動できるように、自分は何をしたらよいか考えることの大切さを学んだ。ペアを組んでいる時は、その子どもとの関係に注目しているため、周りが見えにくくなることもある。だから、全体を見ている人が、ペアを組んでいる学生に危険を知らせることが必要になる。又、これはあまり実践できなかった点だが、客観的に見ることで、学生のプラスの意味での変化に気づくことができると思う。子どもとの関係に不安を感じている学生に、「こんなところが良かったと思う」「子どもがとても嬉しそうにしていたよ」と伝えてあげること、その学生は子どもとの関わりを前向きに捉えていくことができるのではないだろうか。私自身も、子どもとの関係がうまくいかずに落ち込んでいる時に、別の視点から客観的にアドバイスされたことで、持ち直せたことがあった。参加する学生は、みんな子どもが大好きである。だからこそ一緒に頑張っている学生と、悩みや喜びを分かち合うことも、活動を進めていく上で絶対に必要なことだと感じた。

＜養護学校での活動＞ 養護学校での活動で印象に残っているのは、体育館で行ったサーキットだった。サーキットというのは、ある空間に5、6種類の運動器具や遊具を分けて配置し、それらを回って遊んだり、運動するものである。その日、私は初めて顔を合わせる男の子とペアになった。その子は、いろんなところを回って遊ぶよりも、落ち着いた場所に長い時間いる方が好きな様子だった。滑り台を滑っては、また登り、また滑ることを繰り返していた。私は他の遊具のところへ行こうと誘ってみたが、子どもは嫌がった。それから急に何をすることも否定的な行動をとるようになってしまった。言葉をかけても泣いてしまい、お母さんのところへ行きたがった。しかし、ここで何もせずに（自分にはどうしたらよいか分からないから）お母さんをお願いするというのは無責任に感じた。何をしてあげたらこの子は喜んでくれるのだろうと考えた。そして私はいつのまにか自分がこの子に対して「してあげる」姿勢になっていたことに気づいた。そこで「一緒に楽しむ」ことを大切にしなければと思い、私の方から子どもに積極的に働きかけていった。すると、いつのまにか、その子がキャッキヤと声をあげて笑い、マットの上で一緒に転がっていた。私は、この時に子どもと関わることの意味、おもしろさを体で感じたように思った。同時に、子どもと関わるということは、真正面から真剣に子どもと向かい合うことなのだ改めて思った。このことは、子どもとの関係に限らず、人と人との関係の中で忘れてはいけないことなのだと思う。

＜信大での活動＞ 信大での企画は、ホットケーキ作りからスタートした。いくつかのグループに分けて、生地をつくることから始めた。子ども達は、「作る」ことに一生懸命取り組んでいた。粉をかき混ぜる感触や、フライパンに生地をながすタイミング、ケーキの表面にぷつぷつと穴ができて焼けてくる様子など、全てのことを楽しんでいるようだった。最後に自分でデコレーションできるようにと、用意したクリームを、喜んでぬってくれたことが嬉しかった。最初の企画の内容としては成功だった。しかし、反省点として、場所の問題があがった。この時は、W館の調理室を借りたので、5階まで上がらなければならなかったことと、使用できる教室が一室しかなかったので、子どもが遊べるような場がなかったことだ。養護学校での活動は、メインの活動に飽きてしまう子どもが遊べるように別の部屋が用意してあった。信大の企画でも、主に活動する部屋以外にもう一室確保しておくことが必要だということが分かった。一回目の企画でも、調理室を出たがった子どもがいたが、授業中だったために、思いきり遊ばせてあげることができなかった。平日の授業がある時間帯での活動なので、自由に教室を借りられるわけではなかったが、一つの活動を長い時間続けることが苦手な子どもにとっては、気分転換ができる別の空間が必要になることが分かった。

信大企画は、その季節の行事を活動の中に取り入れていった。七夕飾りを作ったときは、プレーパークで活動した。ブルーシートを敷いて、飾りを作るための折り紙や色画用紙、ペン、はさみなどを用意して、ペアの学生と子どもで笹に飾りつけをしていった。外での活動だったので、子どもが行きたいところへペアの学生と動くという点では良かったものの、暑さ対策を考えていなかったことが反省点であった。テントを張ったり、水遊びの場所を設けるなど、工夫はできたはずだったが、天気が良いれば大丈夫という思いだけで、それ以上のことを考えていなかったのは本当に反省すべき点だと思った。暑さのために体調を悪くしてしまう子どももたくさんいるので、天候の変化にも臨機応変に対応していかなければならないと感じた。

何回か信大での企画をやっていく中で、時間の中にある流れをつくっておくと、子ども達が活動しやすいことに気がついた。その日のメインの活動、特に手を動かして何かを作ることをした後に遊び、最後に、もうすぐおしまいという意味でちょっとしたおやつを食べるから解散という形を組んでいくことにした。年末に行ったクリスマス会では、子どもが持ち帰ることができるようにと、ダンボールで作った小さなツリーに、子ども達が好きなように飾りつけをして、自分だけのクリスマスツリーを作った。私はこの時はペアを組まずにフリーで動いていた。毎回同じ子どもと学生のペアを見ていると、学生は子どものことをよく理解しているし、子どももペアの学生に慣れてきている様子だった。活動の後の反省会では、今日は前回よりもコミュニケーションがとれた、こんなことが分かって良かったという、その子どもとの関わりの中でどんな変化があったかを言ってくれるのを聞いて、できる限りペアを固定してきたことについて、良かったと感じた。学生がいろんな子どもと関わるということも確かに大切だと思うが、ペアを組み、一人の子どもとの関係を深めていくことで、その経験が勉強になり、新しい発見ができることも多いのだと思う。

今年、初めの信大での活動は餅つきを企画した。今まで、子ども全員が活動に参加するという場面は少なかったが、今回は子どもがみんな杵をもって餅をついた。そして、出来上がった餅をみんなで食べる場面でも、一斉に「いただきます」ができたことがとても嬉しかった。こういったことに喜びを感じられるのも、一度限りの活動ではなく、継続的に

子ども達と関わってくることができたからだと感じた。

私は以前、活動の前に一人ひとりの子どもと向き合わなければと思っていた。しかし、3プラザ、鉄腕アトム活動を一年通してやってきて、わずかな時間で、子どもと向き合うということは簡単にできるものではないということを強く感じた。活動の中で、ゆっくり時間をかけて、その子との関わり方を見つけていけば良いのではないかと今は思う。又、学生が企画する活動では、内容そのものを考えることも大切だが、その活動がより充実したものになるように周りの環境（場所や天候）にいついともっと考えていくことが課題であると思う。一年間の活動について、お母さん方との反省会では、子どもと学生との関係をもっと深めたり理解できるように、カードなどを使ってコミュニケーションできたらということが提案された。学生同士で勉強会を企画することや、お母さん方や機会があれば学校の先生ともっと話しをして、そこで学んだことを活動につなげていけたらと思う。

3. 挑戦することを子どもと一緒に学んだ～興譲館での活動～

興譲館に来ている子どもたちとの関わりは、私の中でとても大切にしたいものである。興譲館に行くまで、不登校の子どもたちと関わったことはなかった。授業では不登校の子ども達についてよく耳にしていた。しかし、実際に関わったこともないのに、彼らの何が分かるのだろうと思っていた。そして、少しでも子ども達のことを分かりたいという思いから、私は興譲館に行き始めた。

「こんにちは」と初めて顔を合わせた子ども達。丁寧に自己紹介をしてくれたことが印象に残っている。その笑顔からは、学校に行けない状況にあるということは全然感じなかった。興譲館の当初の目的は、エネルギー充電のためということだった。子どもと一緒に竹を使って小物を作ったり、折り紙や、絵を描いたりした。初めのうちは、特に変わった様子もなかったが、何回か興譲館に行くと子どもと関わっているうちに、気になるところがでてきた。「自分にはできない」「どうせ～だから」という言葉や、学生にとっても気を遣うところ、時折見せる寂しそうな顔…はっきりと言葉にして言わなくても、この子達は、おそらく辛い思いや悲しい思いをたくさんしてきたのだろうと感じた。それが分かってくると同時に、私はどう接していったら良いのか分からなくなっていた。今思うと、その時は興譲館に行っても、ただ子ども達を傷つけないようにと、他愛もない会話をして時間を過ごしていたように思う。

子ども達は、週の三日を興譲館へ来て過ごしている。時間の感覚を身につけられるように、45分に区切って一日を過ごすようになった。朝は、計算や漢字練習をするが、その後の時間の過ごし方が課題となった。子ども達一人ひとりが少しでも自分に自信をつけ、伸びていけるような時間が必要だということによく分かっていた。しかし、実際に子ども自身が一日の計画をたてることは簡単ではなかった。毎週行われる反省会では、その週に問題となったことや、どうすることが、その子どもにとって良いのかについて話し合った。こうした正しいという確かなものはなかったと思う。私達は手探りの状態で子ども達と関わろうとしていた。何でもいから新しいことに挑戦して欲しいと思い、あれをやってみようか、これもおもしろそうだよと誘ってみても、全て断られてしまう。断られると、どうしてよいのか分からなくなる。しかしまた誘ってみる…と、その繰り返しだった。私は週に2コマしか行けないことが多かった。その分、子ども達との関わりも希薄なものになってしまっていた時期があった。久しぶりに、一人の子どもと外に絵を描きに行った時

のこと、私はその子が描いた絵を褒めた。本当に上手だったからだ。しかし、その子は、私の言葉を素直に受け取ってはくれず、自分で描いた絵をけなすような言い方をした。私は何と言葉をかけたらよいのか悩み、結局何も言えなかった。その時、自分は何て無力なのだろうと痛いほど感じた。ここへ来て過ごしている子ども達に、何もしてあげられない自分に腹が立ち、情けなくなった。私自身、興譲館へ勉強をしに行っているつもりだったが、子どもとの関係に自信がもてず、ここにいる意味がないのではと考えたこともあった。そんな気持ちを持ちながらも、私が興譲館に行っていたのは、正直に言ってしまうと自分自身のためだった。ここでやめたら子ども達から逃げることになる。自分に居場所が見つけられないからという勝手な理由でやめたら逃げる癖がついてしまうと思ったのだ。悩みながらも、やはり子ども達に会いたいと思っていたし、自分が行くことのできる限られた時間の中でも、自分が出来る精一杯のことをしようと決心した。

私がいつも確実に行くことのできる時間は金曜日の2コマだった。この時間は、体育館で運動する時間だった。私も一緒に体を動かして子どもに積極的に声をかけるようにした。人数が多い時にはいつもドッジボールをするのだが、最近気づいたことがあった。興譲館が始まってまだ間もないころドッジボールをした時に、ボールを投げることにしなかった子どもが、今は、人に当てるという意識でボールを力強く投げているのだ。そして、背も高くなり堂々とした姿勢で立つ姿がとてもたくましく見えた。その成長に驚き、嬉しい思いがこみあげてきた。

一年間、興譲館の子どもと関わってきて、又、学生スタッフと一緒に活動をしてきて学び得たことが多くあった。おそらく他のスタッフのように子どもと多く関わることはできなかったと思うが、子どもとの関係の中で、子ども達と一緒に、挑戦することの大切さや強さを学んできた。初めて出会う物事にはいつも臆病になってしまう自分が、子ども達の成長を見て、私も勇気づけられたのだ。学生スタッフの仲間とは、話し合いの場で、多方面からの意見を論議することで、自分では気づけないところや、いろんな考え方があることを教えてもらい勉強になった。

今の興譲館はもうエネルギー充電だけの場ではないと思う。新しく学生が企画する時間を設け、教材研究なども行っている。この一年間の反省であった子ども達との積極的な中身のある関わりを、実践できるようになることが私自身の課題である。そして、自分ができることややってみたいことを、実践する前から諦めるのではなく、実践してから反省するようにしていきたいと思う。

4. 最後に

YOU遊広場の活動に関わるようになって、多くの人と出会い、一年間、充実した日々を過ごすことができた。3年からのスタートで不安もあったが、この活動を仲間と一緒にやってきたことが自分の中で糧となっていこう。これからも様々な人との出会いがあると思うが、その一つひとつを大事にしていきたいと思う。学生生活も、残り一年となった。気持ちがあっても、そこに行動が伴わなければ、形にはならない。自分が感じていることを相手に伝えること、思い切って自分で行動を起こすことが、自分には必要なことだと思う。残り一年を悔いのないようしっかりと自分の足で歩いて過ごしていきたいと思う。

変化

蓼沼夏子 生活科学教育専攻 3年

Change

TADENUMA Natsuko : Major : Life Science Education, junior

【キーワード】 プレパ プラザ長 こども 苦悩

1. はじめに

私はこれまで、約1年半の間、YOU遊広場の活動に参加してきました。キャンパスプレパーク（以下、プレパと省略いたします。）の活動を中心に、ふれあいキャンプに参加したり、イベントYOU遊広場活動に参加したり、YOU遊フェスティバルで講座をだしたり、様々な活動に参加してきました。そこで、これらの活動を通して感じた喜びや苦しみ、きれいな言葉を並べるのではなく、私自身のありのままの気持ちを言葉にしたいと思います。

2. “こども恐怖症”からの脱皮

私のはじめてYOU遊広場の活動に参加したのは、2年生の夏、7月14日土曜日のプレパの活動でした。前日の夜に友人から「明日、暇？」と連絡をもらいました。デートのお誘いかと思ったら、プレパへのお誘いでした。その頃の私はこどもが大の苦手、こどもと遊ぶことに恐怖心を抱くほどでした。そんなこども恐怖症の解決の糸口を見つけるために、勇気を振り絞りプレパに行くことを約束しました。

このように、こどもと関わることに悩みを持っていた私は約半年間の活動を通して、大きく変化しました。草や土の上に寝転んだり、野外炊飯のときに多少汚い食器でも気にすることなく使うようになったり、虫を怖がらなくなったたり、以前の私だったら考えられなかったことが当然のことのように感じられるようになりました。プレパでこどもたちと夢中になって遊び、彼らの人気者となっている先輩方をみて、その姿に憧れました。しかし、私には同じようにはできませんでした。また、こどもたちから発せられる、些細な言葉が時には鋭いナイフのように感じられ、心を痛めたときもありました。こどもたちと遊ぶことを通して、傷ついたり、悩んだり、元気付けられたりしてきました。その中で、私はこどもとの関わりについて、自分なりの答えを見つけることができました。誰もが自分に適したこどもとの距離観があるのです。だから、心に無理をしながらかどもの中に溶け込み、一体化するような接し方をしなくてもよいのです。自分自身の心が心地よいと感じる距離のとり方でよいのです。それ以後、私のこどもに対する恐怖心がなくなりました。私は“こども恐怖症”から脱皮することができたのです。

3. 三人寄れば文殊の知恵！？

何かの“長”という役割を担うのは、たいてい一人であります。しかし、我がプレパのプラザには驚くことに、プラザ長が三人います。

「来年どうする？」という言葉が頻繁に耳にするようになった頃、私の脳裏に「プレパのプラザ長！？」という言葉がよぎっていました。しかし、私は胸をはって「プレパのプラザ長をやりたいです」とは言えませんでした。私の心には半年前とは違う、不安と恐れがあったからです。その頃の日記にこう書いてありました。

『第二期の総会の時に泣いた。アルバイトとYOU遊広場の活動の両立は無理なのだろうか。なんか、自分がYOU遊広場とどう関わって行くのか、が決められず困惑している。中途半端な自分が嫌になった。こらえ切れずに泣いてしまった。いつになっても決められない。プレパのプラザ長をするのか、どうか。なんて、無責任なのだろう・・・』
このときの私はYOU遊広場の活動もやりたい、でも他のこともしたい。そんな私に、ある人言いました。「一番やりたいと思うことを好きなようにやればよいだけのことだよ」と。私はこの言葉を聞いたとき、こぼれる涙を我慢したことを覚えています。やりたいことがたくさんあって、どれかに決めることができないでいる私にとって、とても苦しい言葉でした。

ある日、第二期のプレパについて考える会が設けられました。楽しく会食しながらも心の中ではプラザ長のことどうしたらよいらろうと、考えていました。迷いの気持ちでいっぱいだったのです。あれこれと話合ううちに、刻々と時間は過ぎ、だんだんと重苦しい雰囲気へと変わっていきました。何度も「私がプラザ長をやりたいです。」と言おうとしましたが、言えませんでした。結局、前代未聞ともいえる、プラザ長が三人誕生することになりました。『三人寄れば文殊の知恵』といわれるように、性格の異なる三人が、互いのウィークポイントをカバーし合いながらがんばっていくことになったのです。

プラザ長とは、どんな存在なのでしょう。プレパも含めてYOU遊広場の活動は、やりたいと思う人の気持ちによって運営されるものです。その為、決して無理をしたり、強制したりするものではないと、されています。けれども、各YOU遊広場プラザ長となったからには、やはり、極力そのYOU遊広場活動を優先しなければならないと感じてしまいます。“責任はあるけれども義務はない”という意見を聞いたこともあります。私は責任ある立場に立ったならば、“義務”というものが暗黙の了解として、背負わなければならないことではないかと考えています。

『責任と義務』という点はどんなに話し合っても明確な答えは見つからなかったと思います。その人の気持ちの持ち方次第で、義務とを感じるか、感じないかは、大きく変わってきます。私の場合は前者であったと思います。

プラザ長の三人でプレパについてどう考えているのかを話し合ったこともありました。プレパというものがたくさんの空間的役割を担っていて、プレパというものをどのようにとらえるかは個人個人で異なっています。そのため、三人の意識統一を図ろうとしましたが、うまくはいきませんでした。三人の気持ちがすれ違っているときも多々ありました。「なんで、私はやらなければならないの。他にもプラザ長はいるのに・・・」と愚痴をこぼしたこともありました。すれ違う気持ちの軌道修正は容易なことではありませんでした。私の心の中に芽生えた苛立ちにも似た気持ちはなかなか消えませんでした。それぞれの事情があってプレパの活動から離れてしまっていることを理解できないわけではないのです。

が、なんともやりきれない思いでした。しかし、自分が同じような立場に立った時、自分だけがプレバのことを考えていたり、苦勞したりしているのではなく、それぞれの思いがあって、それぞれが苦勞を感じていることによく気づきました。私は表舞台ではなく影でプレバを心配し、支えている二人のプラザ長の姿に気づき、彼らに助けられているのだと感じました。自分の独りよがりともいえる、あのような気持ちを抱いたことを恥ずかしく思いました。

やはり「三人寄れば文殊の知恵」といわれるように、三人で挑んだからこそ、プラザ長という大きな課題に打ち勝てたのだと思います。

4. “こども”はお客様ではなく、お友達

冬の寒い季節も終わり、暖かな春がやってきた頃、不安ながらも第二期プレバが始動し、プレバ自身も一周年をむかえました。私のプラザ長デビューでもあり、私ははりきっていました。戸惑う気持ちもありましたが、がんばろうという気持ちの方が大きかったのです。

時には遅刻や寝坊をしてしまう時もありましたが、何度もプレバに参加するうちにこどもたちや彼らの親の方とも仲良くなることができました。以前だったら、こどもに「あんた、だれ？」と聞かれることが多かった私でしたが、多くのこどもたちが私の名前を覚えてくれました。ある日、私がプレバをお休みしたときに、「今日はなつ（私）いないの～はやくよんできてよ～」とこどもが言っていたよ、と仲間のプレンジャーから聞かされたとき、とてもうれしくなりました。以前に憧れていた人気者の先輩に少しでも近づけたような気がしました。そして、こどもたちが私の存在を認め、必要としているのだと感じられたことが何よりもうれしかったです。もちろん、以前までの“こども恐怖症”は一切なくなり、思う存分に遊ぶことができるようになりました。時間はかかるものの、一人で火をおこすこともできるようになり、一人前のプレンジャーになれたよう気がします。

私のなかで“こども”という存在に対する意識が変わったのです。このような活動をしていると、どうしても彼らを“お客様”的に扱ってしまうことが多々ありました。その為、彼らのわがままな行動やルール違反な行動を見ても目をつぶり我慢してしまうことが多くなっていました。そして、彼らのしたいと思うことがスムーズに行くようにと、いろいろと準備をしようとしています。それでは彼らの行動がお膳立てされたものになってしまいます。それでは、彼らの自分の力で何とかしようとする開拓力・努力する気持ちは一向に育たず、他力本願な部分ばかりが助長されてしまいます。大人ではない“大学生のお兄さん・お姉さん”という立場だからこそできる、叱り方や注意の仕方があります。

私はプレバで「ありがとう」「ごめんなさい」の言えることの大切さや他者を大切にすることを学んで欲しいと願っていました。自分ものではないから雑に扱っても構わない、自分にとって都合よければよい、自分だけが楽しければよい。自由な空間であるプレバという場が、そのような気持ちを容認するような場にしたくなかったのです。そのため、プレンジャーがこどもたちの見本となれるような行動をとることは当然ことですが、時には真剣に怒ることにもつとめました。

“こども”は特別な存在ではありません。友人のひとりなのです。共に遊び、共に喜び合いながら、けんかをしたり、時には傷つくようなことをしてしまったり、叱られたり、注意をされたりしながら、共に成長を遂げていけるはずです。なぜなら、どんな行動にも相手を思う愛情がこもっているからです。

5. 苦惱

突然ですが、「私の悪いところ」それは、“優柔不断なところ”“何でもやりたがり、抱え込んでしまうところ”“すぐ逃げ出さなくなってしまうところ”です。この症状はYOU遊広場の活動の中で多々現われました。そのことは私の反省点でもあります。

YOU遊広場の活動もやりたい。でも、アルバイトの仕事もしたい。友人や恋人との時間も欲しい。勉強もしなくてはならない。このように私の心の中には多くの欲望が渦巻いていました。YOU遊広場の活動を続けていくうちに、思うように動けない自分に苛立ちを感じ、プライベートの時間が削られることを苦に思い、逃げ出してしまったこともありました。ときどき、辞めようと思ったこともありました。

私は心の中で葛藤を繰り返していました。辛いのは自分だけではない、みんな大変な思いをしているのにがんばっているのだと分かっている、悲劇のヒロインを気取っている私がいまいました。こんな中途半端な気持ちでYOU遊広場の活動を続けることはできない、決断をしなければならぬと思いつつも、優柔不断な私には決定打をはなつことはできませんでした。このような気持ちでプレパに行っても楽しいはずがありません。きっと、こどもたちもプレパの仲間たちもそのことに気づいていたような気がします。嫌な場の空気を作っていたと思います。

もともと要領がよい方ではないのに、あれもこれもと手を広げてしまった私は、結局のところ、すべてを一生懸命にできずに中途半端になってしまいました。その上、多くの人に迷惑と負担をかけてしまいました。ごめんなさい。

自分が選んだことにも関わらず、最後まできちんと責任を果たしきれなかったことが私の最大の反省であります。

6. かけがえのないもの

プレパを含めYOU遊広場の活動を通して人々の温かさを感じました。プレパでは多くの人々と交流の機会を得ることができました。まるで“長野の父と母”のように、一緒にプレパで野外炊飯をし、食事をとったことが何度もありました。また、地域の人々や犬たちとも交流をもつことができました。もし、YOU遊広場活動をしていなかったら、近所のスーパーで会っても知らん顔だったはずが、今では「昨日～でみたよ」と目撃情報が寄せられてしまうほどです。いま住んでいる町内が自分の町内であると感じ、自分も地域住民のひとりなのだと実感することができました。

また、同じ志をもつ仲間の大切さを学びました。同じ気持ちを持った仲間たちと集い、話し合いながらひとつの企画を作り上げていくなかで、意見の衝突をしたりしながらも協力し合いながら、共にがんばっていく気持ちが高まりました。真剣な眼差しで話し合いをしたり、弱音を吐いたり、悩みを打ちあけあったり、YOU遊広場活動とは関係のないはなしをしたりしたり、ふざけあいながらも、互いを必要と感じ、助け合いながら成長していくことができたと思います。先に述べたように、何かと弱音を吐き、苦悩していた私がYOU遊広場の活動を続けることができたのは、仲間の支えがあったからだと思います。

プレパでは、四年生の先輩方が忙しいにも関わらずプレパの話し合いに参加してくださり、いろいろと手助けしてくれました。また、とても楽しそうにプレパで遊んでいる姿は励みとなりました。やはり、四年生の先輩方は私の憧れです。私以上にプレパを大好きで、プレパのことを一番考えているのだと感じました。先輩方と同じようにとは言いません

が、自分のできる範囲で来期のプレバを支えていきたいと考えています。いま後輩たちのがんばっている姿が見るたびに、応援したいと感じます。

このYOU遊広場の活動の中で私は見違えるほど成長を遂げました。YOU遊広場の活動を通して多くのことを得ました。こどもとの関わりに対する自信、人々の優しさや温かさ、そして、仲間の大切さ。どれも、私にとってかけがえのないものとなりました。

悩み、苦しみ、涙も流し、あれこれと愚痴や文句もいいました。しかし、私はやはり、YOU遊広場が好きなようです。

7. おわりに

第二期の活動が終わり、肩の荷が下りたような気持ちでいます。不完全燃焼な部分もあったけれども、充実していたと感じています。YOU遊広場の活動に参加していなかったら、また違った大学生活が展開されていたと思います。両者とも自分の人生にとって価値ある貴重な体験をすることができたと思います。ただ、楽しかったで終わってしまうのではなく、いろいろ悩んだり、弱音をはいたり、YOU遊広場の活動を苦に思ったりしながら、多くのことを考え、いつもこころが喜びと苦悩に揺れている、つまり、こころが生き生きしていました。

いま、私は自分の人生の道のりの中で重要なターニングポイントに立っています。自分の目指すべき道はどこなのだろうか。わたしに“先生”がつとまるのだろうか。私は悩んでいます。しかし、重要なことだからこそ、思う存分に悩み苦しみ、後悔のない選択をしたいと思っています。

YOU遊広場での活動の中で培われた自分の力とその可能性を信じ、苦悩しながらも、最後に満足のゆく喜びを手にするように、がんばっていきます。



経験からの「知」と「とらえなおし」の重要さ

—実際の子どもとの関わりを通して—

山口真史 教育実践科学専攻 3年

A Importance of “Leaning” and “To Interpret Over Again” From Experiences

MASASHI Yamaguchi : Major : Educational Science, junior

【キーワード】メンタルフレンド プレーパーク 不登校 経験 とらえなおし

はじめに

この信州大学に入学して三年目になった。子どもとの関わりを求めて様々な活動に参加した。YOU遊広場もその一つであり、多くの経験・体験を得ることができた。それらの場はそれぞれ違うものではあったが、経験によって得たことはメディアを通して得る知識よりも確かな知に近いものだと感じていた。ここでそれらの経験をまとめ、何を得たのか整理するとともにそこから何を導くことができるのか考えて生きたい。

1. きっかけ

私が大学への進学を決める頃、教育上の問題がメディアで多く取り上げられていた。少年の起こした事件をはじめ、学級崩壊・不登校などという言葉が使われだしたのもこの時期である。聞きなれない言葉であったが、メディアのあたりまえのように使われるなかで、イメージが膨らんでいった。高校生の頃このイメージについて考えさせられることがしばしばあり、それが先入観であることを感じていた。勝手な思い込みが人を傷つけることもある。教育の方面に進路を定めたとき、このイメージにとらわれない知識がほしいと思った。どうしたらイメージにとらわれない知識を得られるか。まず、「自分で見たい!」と思った。その対象（当時は漠然と「教育」としていた）を自分の目で見ることでイメージではなくリアルな対象が見えてくるはずと考えた。そこで数ある教育学部の中で「臨床の知」という概念を掲げる信州大学の教育学部で学ぶことを決めた。その中でさらに自分から積極的に教育に関われる場、例えばキャンプや子ども向けのイベントに参加した。そしてそのまま二年目に長野に移ってからは「YOU遊広場」に参加させていただき、自分の目で子どもを見ることができた。

2. メンタルフレンドとしての実践から学んだこと

(1) メンタルフレンドとは

大学二年の夏休みに土井先生に誘われるかたちで犀南中間教室のメンタルフレンドをす

ることになった。中間教室とは不登校の子ども達のために行政が用意した施設で、小学校や中学校に併設されている。犀南の中間教室は下水鉤小学校の近くの敷地にあり、平屋の一軒家である。普通の民家を改築して作ったものらしく、とてもアットホームな雰囲気を感ずる。適応指導員として教育経験のある先生が常駐していて、遊んだり、ゲームしたり、本をよんだり、コンピューターでインターネットもできる。教科書や参考書もそろえてあり学習もできるようになっている。そこには不登校の子ども達が2003年2月現在9人來ている。全員が中学生だ。そして、それぞれが思い思いのしたいことをして一日を過ごしている。私はメンタルフレンドということで週に一度、だいたい半日ほど中間教室にいる。メンタルフレンドとはいっても何をしているわけでもなく、來た子ども達と話したり、遊んだり、ときには勉強を教えることもあるが、特に仕事とされていることはなく、子ども達と一緒に過ごしている。何をしたらよいかと今考えたら迷ってしまいそうなものだが、特に迷うことなく、その日ごとに子ども達と様々なことをしている。これは、プレーパークでのプレンジャーの経験のおかげだと思う。プレンジャーとメンタルフレンドは役割がとてもよく似ていると感じる。自分の中でメンタルフレンドとして、また、プレンジャーとして目指すものが同じだからであろう。この目指すものについてはあとの項目で書こうと思う。

(2) メンタルフレンドとしての実践から

前に述べたように、メンタルフレンドとして、これをやってきた、というものはない。しかし、メンタルフレンドをすることによって不登校の子どもたちと直に接する機会を得た。これ自体が価値をもっている。

「不登校」という言葉は高校の頃から聞かれるようになり、それに関する世論もメディアに登場するようになった。その中で、気付かないうちに「不登校」に対するイメージができてしまっていた。実際に接することでそのイメージの存在に気付くことができた。不登校のイメージは何であろうか。引きこもりがちで人と接することが苦手で・・・など様々でてくるはずだ。しかし、よく考えてもらいたい。「不登校」というのはあくまで、限定された状態(学校に行かない)を表す言葉であり、それ以上のことを表してはいない。だが、私たちは先に言ったようなイメージを持ってしまっている。実際に関わってみて、固定的なイメージはおかしいことに気付いた。子ども達は本当にそれぞれだ。初めて会った私に明るく声をかけてきてくれたり、学校に行っていないことを平気で話す子もいる。全くもって普通の子である。初めて不登校の子ども達と接したのは一年生の頃の教育参加でのキャンプであり、短い間ながら、自分のイメージの不確かさを感じた。メンタルフレンドとして長い時間接することにより、不登校とは言っても、例えば、A君なら、不登校という前に、A君。Bさんも不登校の前にBさんなのだ。不登校の子どもだからといって全員が人と接するのが苦手で、全員が引きこもりがちというわけではない。よく、不登校の子とどう接すればよいのか?というようなことを聞くが、それはおかしな疑問に思える。不登校の前にその人物がくるのだから、不登校ということから人物を確定し、特に不登校の子ども用の接し方を用意するのは何か違和感がある。先入観を排除し、一人一人を捉える必要を感じた。

メンタルフレンドとしての活動の他に、長野市内で活動している「ブルースカイ」という登校拒否を考える会のフリースペースに何度か訪れたことがある。週一回体育館をかり、

自由に遊ぶことをできるようにしている。十数人の子ども達が毎週来て、サッカーをしたりバスケットをしたりしている。ここでは不登校というイメージからは考えられないくらいの生き生きした表情の子ども達を見ることができる。中間教室でも、好きなゲームやマンガの話を先生に話す子やギターを弾いたり、友達とゲームをしている時の表情はとても生き生きしている。

私がメンタルフレンドを始めて一年たった頃、中学生の男の子二人が中間教室に加わった。彼らは友達同士であり、最初ずっと二人でゲームをしていた。二人での会話はあるものの私などが話しかけても反応が薄かった。とても静かにゲームをしていた。それから五ヶ月ほどたった今、今もゲームをしている。だが、表情があかるくなった。静かにゲームというよりわいわい、うるさくゲームをしている。時には他の子どもとともに一緒に遊び、私とも今では冗談を言い合える。この変化はかなり大きなものである。この変化はどうして起きたのか。そして、学校に行かない、もしくは行けない子ども達がなぜフリースペースや中間教室ならば来ることができるのか。しかもそこでは元気に過ごせるのか。

それらの問いの答えはフリースペースや中間教室の雰囲気にあると思う。実際に行って見て前に述べたように、犀南中間教室はとてもアットホームであり、色々できるが、強制はされない。フリースペースもその名の通り、好きなことを自由にやって強制されない。圧迫感がない。時間にも縛られない。そして居心地がいい。それは子ども達も感じているのだと思う。思ったこと、好きなことを自由にできる。そんな場になっている。

フリースペースをやっている団体は子どもの居場所を作るという目的を持っていることも多いようだ。その先駆けの「東京シュール」というフリースクールは有名である。十一月に新宿シュールでのシュール主催の学制ゼミに参加し、シュールのスタッフに話を聞いた。子どもが自由に過ごし、学びたい子は十分に学べ、遊びたい子も十分に遊べる。自分達でどんなことをしようか決められる。さらに何もしたくなくても何もしなくても良い。そんな居場所をシュールは提供している。

この「居場所」とはどんな意味なのか。私は通常の意味の「居る場所、居てよい場所」に加え「自分が認められる、認められている場」なのではと思う。自分の好きなことをすることを認めてもらい、話を聞いてもらえる。自分が認められていることを感じるができる場、それが「居場所」であると考えている。そんな居場所の提供できるのが中間教室であったりフリースクールであったりすると考える。新しく中間教室に来た彼らは居場所を感じることで、自分を出すことができ、それが私には変化に見えたのではないか。

(3) プレーパークでの実践から考える。

前に述べたようにメンタルフレンドとプレーパークのプレンジャー(プレーリーダー)はよく似ている。プレーパークでは禁止事項を取っ払い、自由な遊びの広がりをもたせようとする場である。当然自由を大切にしている。やりたいことを実現できるように、道具、工作の材料など置いてある。そして、「危ないから」とか「汚れるから」というような理由で遊びをやめさせたりはしない。子どもの「遊びたい！」を認めてあげられる空間なのだ。やりたいことが認められる場という点でフリースクールや中間教室と同じだ。プレーパークでのびのび、生き生きと遊ぶ子ども達を見ることができる。これは、プレーパークを子ども達が「居場所」として感じてくれているからなのではないか。

プレンジャーの役割はその空間の運営、安全管理とメンタルフレンドと異なるように思

えるが、プレジジャーも子どもの遊びを認めてあげ、メンタルフレンドもその子を認めてあげるといふ点で子どもにとって同じような存在であると思ふ。

3. 不登校について言えること(とらえなおして考える)

不登校ひとまとまりに言われることが多いが当たり前ながらやはり一人一人違ふことを感じた。不登校とはこうだ!とは言えないはずなのだ。では不登校は捉えようがないことなのか。不登校全体への対応について様々な議論が行われている。前に述べたように不登校という人物ごとに異なる傾向を見せる問題ながら、不登校全体についてどう考えたらよいか、ここでメンタルフレンドの実践のとらえなおしをしたい。

私は不登校で明るい子に接した経験から、不登校の子もそれぞれだと感じた。しかしながら、現在全国で不登校の子ども達は13万人以上とも言われている。そのなかでこの数人にのみ関わった経験からどんなことが言えるのか。とらえなおしはここで必要になってくる。

自分の経験をそのまま一般化してしまうことはとても危険だ。明るい不登校の子どもに接したからといってすべての不登校の子どもが明るいとは限らないように、中間教室に来る子ども達がすべてでなく、中間教室にもこれない子ども達もいる。経験からは全体について言うことができない。

だが、不登校の子どもへの対応を考える上で「居場所」という考え方でとらえなおしてみると、不登校の子ども達に限らず、子ども達は居場所を必要としていると思われる。認めてほしいという感情は誰もが持っている。子ども達はその感情ストレートにおつけてくる。自分はこんなことができるんだ!というようなのもこれだと思う。その自己主張を受け止められたいと思う。私自身、子どもに限らずある欲求だ。不登校の子ども達を考えてみると、そのような場が通常通り学校へ行く場合に比べて、著しく少ない。「居場所」を不登校の子ども達も求めている。唯一経験から不登校全体について言えることだと思う。

だから、居場所としての中間教室やフリースペースがもっと身近なものになってほしいし、何より学校が居場所としてどの子にも機能するようになってほしい。

4. とらえなおしの重要性

経験や体験は何かしらの一部分であり、それ単体では全体を見ることはできない。しかし、それらをとらえなおすことで、傾向やもっと大きな情報につながる。今までYOU遊広場など多くの経験の機会をいただいた。経験は確かに先入観を排除し、リアルな姿を見ることができた。しかし、全体を経験することはできない。子ども一人一人に接することはできても、子どもというものを語ることはできない。そこで必要になるのがある観点からのとらえなおしである。例えば「居場所」という観点からとらえなおし、経験をつなぎ、全体を見る。必要なのは経験だけでなく、この観点からのとらえなおしも必要になる。

かつて、私は、きっかけで述べたように教育について何かしら考えるのに最も重要なのは経験のみであると考えていた。しかし、経験から直に考えてしまったがためにできた先入観の存在に気付いた。キャンプで子ども達が喜んでやっていたプログラムの遊びをパークで子ども達に提案したら全くのってきてくれなかったりした。また、他のキャンプの運営方法の良さを体験し、そのまま自分たちのキャンプに組み入れたが、うまく機能しなかった体験もある。キャンプでの成功の経験をそのまま、他で行おうとしたための失

敗であった。成功の意味をとらえなおした上で応用する必要があったのだ。なぜ成功したのか？状況、人、モチベーションなど様々な観点でとらえなおしが必要だった。これに気付き、経験のみが重要という考えは誤りだと気付いた。

おわりに

YOU遊広場など子どもに関わる活動の中で、子どもを認めてあげたいと強く思うようになった。私自身自分に自信を持つことができない性格であった。初めて参加したキャンプで、子ども達はそんな自信の持てないような私を受け入れてくれた。たった一泊のキャンプだったのに認めてくれた。そんな温かい気持ちを感じることができた。とてもうれしく、自信につながるできごとであった。それから、私はそんな認められているんだ！という感覚を子ども達にも感じてほしいと思うようになった。それから多くの経験の中で子ども達もそれを求めているという感覚が強くなった。特に不登校の子ども達と関わるようになってからますます強くなった。それを受け、自分はメンタルフレンドとして、プレジジャーとして、ただの大人としても子ども達を認めてあげたいと思うしそれを目指したい。それには今回は書かなかったが、子どもとどう向き合うか、わがままをも認めることが本当の認めてあげること居場所の確立につながるのがどうか、自由とわがままの区別など問題は多くある。

さらに今回述べたように経験をとらえなおしながら得ていく事により、よりリアルに大きな問題を見ることも目指していきたい。個人個人の子どもの関わる側にながら社会全体を見ることにより多くの子ども達を認め、問題を抱えているならばその問題からの解放のために意見を発することができたらと思う。そのためにこれからも多くの経験を積んでいきたいと強く思うと同時に、様々な観点からのとらえなおしを学んでいきたい。経験に終わりのない以上、この勉強に終わりはない。

最後になったが、私に様々な経験の場と考える力を与えてくれたYOU広場と先生方とその他多くの人々に感謝している。自分ではこれでも教育学部を志望していた頃に比べたら格段に多くの物事を考えることができたようになったと思う。さらに何年後かして振り返り、これでも大学三年当時に比べたら格段に・・・、とつぶやく自分があってほしいと思う。



大きな街の小さな村づくり

—身体活動を通じて—

藤本晃子 地域スポーツ専攻 3年

Making a Small Village in a Big City

—By Pysicai Exercise—

FUJIMOTO Akiko : Major : Lifetime Sports, junior

1. はじめに

私はずっと体育科の仲間や、剣道部の仲間の中にいました。ここが一番居心地がよく、安心できる場所だったからです。そんな私がたったひとりで竹の部屋に入っていくことはとても勇気のいることでした。第2期の信大YOU遊広場をどうやっていくかという話し合いが行われ、興味のある人は誰でもいいので来て下さいという知らせに私はとても迷いました。しかし、どうしても自分がやりたいと思ったことを実現させたくて、本当に一年分くらいの勇気を出して竹の部屋の戸のドアを開けました。

勇気を出して入っていったものの、そこでの話し合いで、私は何ひとつ意見を言うことができませんでした。こんなこと言ったら駄目なんじゃないか、私はおかしなことを言ってしまうのではないかという思いがいつも私にブレーキをかけていました。その上、まわりはみんなこれまでYOU遊広場の活動を熱心にやってきた人たちや、自分の意見をきちんと持ってその集まった人ばかりで、その中で自分はとても場違いのように思えました。それでも私がこの話し合いに参加し続けることができたのは、「自分が来たいと思うんだったらおいでよ。自分で決めなよ。」という発起人でもあった現在の運営委員長の言葉のおかげだと思います。いつも誰かに手を引いてもらって動いていた私だったため、心のどこかで「おいでよ。」という言葉を待っていたような気がします。自分で決めるということはとても苦しく、勇気のいることでした。しかし、一年間、プラザ長としての私を支えたのはこの「自分で決めた」ということではないかと思います。自分がやりたいと思ったことのために勇気を出して一歩を踏み出すことができたことは、いつも自分に自信がない私にとってとても大きな自信につながると思います。

2. ふれあいプラザ

1) 総合型地域スポーツクラブ

私がこのプラザをつくりたいと思った一番のものは、授業で学んだ「総合型地域スポーツクラブ」でした。この総合型地域スポーツクラブというのは、これまでのようにひとつの種目を同じ世代の者が集まって競技力を高めるようなスポーツクラブではなく、「多項目・多世代・自主運営」のスポーツクラブのことです。

今、様々なところでこの総合型地域スポーツクラブの立ち上げが行われています。私は

これに大変興味を持ちました。そして、私がこんなにも強く惹かれたのは、その目的のひとつである「地域のコミュニティ形成」でした。今日同じ地域に住む人と人とのつながりが薄くなってきているということを授業で学びました。私は下伊那の山の中にある小さな村で生まれ、育ちました。そこでは道で誰かに会えば当たり前のようにあいさつを交わします。歩けば家まで 30 分以上もかかる駅から歩いているお年寄りを見つけると、私の母親は「乗っていかんかな？」といっちは車のドアを開けます。そして、私が歩いているときも同じように声を掛けてくれる人がいるのです。例を挙げたらきりがありませんが、私の村ではみんながつながり、関わりあい、助け合って生活しています。私はこのようなコミュニティの中で育ちました。総合型地域スポーツクラブというのは、この大きな街の中に小さな村を作ることだと思っています。

総合型地域スポーツクラブの「多種目・多世代・自主運営」の概念について学び、素晴らしいことだと感じました。しかし、実際にそのようなスポーツクラブを自分の中でイメージしてみると、そこには矛盾だらけでした。そこで、自分なりにこの総合型とはどのようなものなのか、また、このようなクラブが必要とされている中で、自分たち学生には地域の中で何ができるのかを考え、自分で何かやってみたいと思ったのがこのプラザをつくりたいと思ったきっかけです。

2) 募集

このふれあいプラザをはじめるとあって、まず問題となったのが参加者募集のことでした。このプラザでは地域のコミュニティ形成を目的としており、空間的な範囲は狭く、年齢の範囲は広くしようということになりました。そこで大学のある西長野地区に募集をかけてみようということになりました。しかし、子どもだけが対象なら学校への募集のおしらせの依頼が考えられますが、子どもからお年寄り、それも西長野地区だけとなると、どこにどうやって募集すればよいのかわかりませんでした。そこで地域のことは地域の人に聞くのが一番ということで城山公民館へお話を聞きしに行くことにしました。この「公民館」という発想が出てきたのも、大学の授業で生涯学習について学んできたおかげだと思います。このことに限らず、このプラザでの活動と大学での勉強は互いに関係しあっているものでした。

公民館では信大周辺の自治の仕組みや公民館での活動についてとても丁寧に説明してくださいました。お話を聞きして、地域のコミュニティ形成などと偉そうなことを言っていた私自身が自分の住んでいる地域について何も知らなかったということに気が付きました。そして、私自身も、地域に住んでいる人たちと関わろうとしていないことに気が付きました。ただ区費を払っているだけで、私は地域と何の関わりも持とうとしていませんでした。

公民館で地区の区長さんをお願いすれば回覧を回していただけるということをお聞きし、西長野地区の区長さんをお願いしに行きました。その他にも、第一地区の子ども会の育成会長さんにお話を聞きしたり、老人クラブの集まりにも行かせて頂きました。ここで私は、知らない人の中へ、それも大人の方の中へ入っていってお話をすることとはとてもエネルギーのいることだと感じました。しかし、この苦労は大切なことだったと思います。小さな村の中で、当たり前のように人と関わり、人と人との関わりあいが薄くなった

世界を知らない私にとって、この経験は人と人とが関わりあうことのマイナスな面を知るよい機会であったように思います。私は、このような過程の中で、自分の足で地域の中に入って行くことの大切さや大変さ、またその一方でいろいろな人と関わることの喜びを実感しました。

このようにして募集をかけ、応募して下さった参加者の方ははじめは三人ほどでした。一人でも参加してくれる方がいる限り、ふれあいプラザはやろうと思いましたが、これはあまりにも厳しい現実でした。子どもでもお年よりでも、気軽に来られるようにと歩いてでも来られる範囲にしか募集していませんでしたが、昨年キャンプに参加して下さった親子にも募集することにしました。そして、最終的には約 20 名の参加者が集まって下さいました。参加してくれる人がいることのありがたさを改めて感じました。

3) 多様目

毎月第 2・4 金曜の 19 時半から 21 時におこなったスポーツ教室ではアイスブレイクからはじまり、様々なことを行いました。この内容を中心になって考えてくれたのがふれあいプラザに参加してくれた体育科の 2 年生でした。このプラザを作るとき、体育科の人たちにももっと Y O U 遊広場に参加してほしい、体育科だからこそできることを一緒にやりたいという思いがあって、とてもうれしかったです。

子どもも大人も、男も女もみんなが遠慮することなくおもいっきり楽しむことができ、それなりに運動量があって、安全で、かつふれあいのある内容を考えることはとても難しいことでした。私は体育を専攻しており、その中で既成のスポーツをそのまま参加者に提供するのではなく、参加者に合わせて工夫するという考え方を学んできました。私は、このことがとても重要なことだと思っており、確かにこの考えのもとでボールを変えたり、ルールを工夫することでうまくいった部分が多いと思います。しかし、私は工夫することそのものにどこか縛られていた部分があったのではないのでしょうか。体育科ということにある種のプライドのようなものを持っていたのではないのでしょうか。あるとき、サッカーをしようということになって、私はいつものように何をどう工夫すればいいのかということに頭を悩ましていました。そこでスタッフの中のひとりが「普通にやろうよ。」と言ったのです。普通のサッカーなんならお年よりの人たちは参加できないのではないかなどいろいろ考えましたが、普通にやってみることにしました。すると意外なことに子どもも親世代の人もお年よりもみんな楽しんでいました。私はある種のショックのようなものを受けました。

このスポーツ教室でプログラムを考えることを通して、参加者に合わせた内容を考えることの難しさ、また、考えることで自己満足するのではなく、何よりも参加者に満足してもらおうということが第一だということを改めて感じました。これまで自分が学んできたことを実践できるとても貴重な機会をいただきました。

4) 多世代

このプラザには様々な年齢層の方々が参加して下さいました。子どもだけでなく、大人の方も参加して下さったことで、スタッフ対子どもたちという形ではなく、大人の中に子どもがいました。回を重ねるうちに、お父さんをリーダーにしてチームをつくるとい

うこともしました。スタッフが子どもを動かすのではなく、大人の人たちが自分の子どもかどうかに関わらず、集合させていたり、順番を決めたりしていただきました。このような関係が関わりあう中で自然とできていったように思います。キャンプでは特に、家族をバラバラにして新しい家族のようなはんをつかったことで、大人の方たちが自分の班の子を自分の子に対してのように関わる姿が見られました。

また、このプラザには参加者全体の5分の1程度ではありましたが、50代、60代の方も参加していただきました。中には独り暮らしの方もいらっしゃいました。このふれあいプラザには人と人との関わりあいがあります。人と関わるということはその中で自分の存在を明確にするということなのではないかと思えます。キャンプで登山をするのにその下見に一緒に行って案内してくださったり、キャンプでみんなのお母さんのようにいろいろとお世話してくださったり、私はこの方たちにたくさんお世話になり、いろいろなことを学びました。ふれあいプラザの活動が終わった後でも、帰り道で出会ったり、街でお会いすると笑顔で声をかけてくださいます。私はこのことがうれしくてたまりません。今日、核家族が増え、独りで亡くなっていくお年よりもいるそうです。誰かに必要とされるということは人間にとって喜びなのではないでしょうか。いろんな人との関わりが子どもの成長にとって大切だということによく言われますが、人と関わるということはいくつになっても必要なことだと思います。多世代交流というのは、一方通行ではなく、互いに必要とし、互いに何かを与え合うものなのだと思います。

5) 自主運営

いつかこのふれあいプラザのようなものが私たちの手を離れたところで行われるようになってほしいという願いが私の中にありました。このプラザができた頃、参加者と一緒につくり、できれば参加者にリーダーになってもらえるようにしたいと思っていました。しかし、できたものを与えることよりも、参加者の人が企画に参加できる器を用意することのほうが難しいということを知りました。

キャンプではできるだけ参加者の意見を取り入れたいと考えましたが、月に二回しかないスポーツ教室の時間の中で話し合いの場を取り入れるということはとても難しいことでした。しかし、その中でもカレーの具を班ごとオリジナルにしたことで、子どもは感想に「自分が考えたカレーをつくった」と書いており、ほんのささいなことでも、自分が決めたということは大きいのだと感じました。また、班の名前を各班で考えたり、当日の短い時間の中で班の出し物を考え、それぞれの班の色を出してくれました。このようなことができたのも、それまでのスポーツ教室での関係づくりの成果ではないでしょうか。そして、班付のスタッフや参加者の皆さんのおかげだと思っています。

キャンプの昼食でのことです。野外炊事でうどん作りを計画していましたが、うどんだけではもの足りないのではと、参加者のひとりのスーさんが近くの家へ野菜を分けてもらいに行ってくださいました。このような、とても温かいキャンプができたことに感謝しています。

スポーツ教室では、いつの間にか「お楽しみコーナー」というのができ、毎回、お母さんや子どもが紙芝居を読んでもらったり、リコーダーの演奏をしてくれたりしました。そして、最後にやったクリスマス会では、自慢の料理を持ち寄っていただき、歌やダンスや激

など、私たちスタッフがしきる時間はほとんどないほどみんなで作った時間を過ごすことができました。その中でも、スタッフに人にも協力してもらいたいとか、ひとりで参加しているスーさんやトシ子さんも一緒にやってもらいたいといったようにこれまでのふれあいプラザの総決算だったように思います。この8ヶ月で築き上げた関係を絶つことなく、この輪をさらに広げていくことができたら幸せです。

3. 最後に

私がプラザ長としてやってることができたのも、先生方やスタッフや、そして何よりさんかしてくださった方々のおかげです。この活動を通して最も私に欠けていたことは報告・連絡・相談の「ほうれんそう」だと思います。何かをするにはひとりではなく、たくさんの方の協力があるのだということを身にしみて感じました。運営するということは自分が思っていたよりも重いことでした。

また、私は常に時間を気にし、進行することに一生懸命になって、私自身が楽しむということができていなかったように思います。いつも形にこだわって、他のスタッフの努力や参加者の方の気持ちをいくつも無駄にしてしまったのではないかと思います。私は笑顔を忘れてしまっていた気がします。このことは教育実習でも同じでした。今後、本当に大切なことは何かを自分で考え、見つけ、それを実行できるようになりたいと思います。

この一年間の活動で得たたくさんのお出会いは私にとって宝物です。プラザ長になる決心をしたとき、これまでの自分を少しでも変えたいと思いました。私は変わることができたとは思いませんが、少しだけ強く、大きくなれた気がします。



世代間交流の実践

—スポーツを通して—

西絢平 教育実践科学専攻 3年

Practice of a Different Generation Exchange

—Through Sports—

NISHI Junpei : Major : Educational Science, junior

【キーワード】 世代間交流 スポーツ 高齢者 子どもの視点 共有 継続

1. はじめに

副プラザ長としてプラザ長の藤本晃子とともに第一期ふれあいプラザを立ち上げてから、もう一年が経とうとしている。今では、第二期ふれあいプラザも無事に発足し、新たな活動が始まろうとしている。

元はといえば、前年度のY O U遊広場で小島真知子さんが中心となって活動していた第5プラザの引継ぎであった。その活動内容は親子で二泊三日のキャンプを行うというものであった。自分自身、もう一度このキャンプに参加してみたいというのがふれあいプラザに参加した第一の動機である。参加したいというだけで、副プラザ長を務めようとは全く思っていなかった。藤本晃子の強い要望により、副プラザ長を務めることになったのだが、今期のふれあいプラザは親子キャンプだけではなく、子どもから高齢者までスポーツを通して交流をしたいというのが、藤本晃子の考えであった。これまでのY O U遊広場では、子どもとその親が主な参加者であり、高齢者との関わりはほとんどなかった。それは自分にはなかった考えであり、大変興味深いものであった。「地域の活性化」という意味では、高齢者の存在は決して無視できるものではないし、これまでのY O U遊広場に足りなかったものである。「世代間交流」という新しい活動がこのプラザなら可能かもしれないと自分自身感じた。そして、話し合いをする中で生まれたのが「ふれあいスポーツ教室」である。子どもから高齢者まで、どのような年齢層の方でも楽しめるような軽度のスポーツを通して世代間交流を行うというのが、このふれあいスポーツ教室の内容である。

さて、ふれあいプラザのテーマである世代間交流であるが、これを実践するにはまず、幅広い年齢層の人たちを募集しなければならなかった。先ほども述べたように、今までのY O U遊広場の参加者層は子どもとその親であり、高齢者の参加者はいなかった。私たちは高齢者の方々にも参加してもらおうと、近くの公民館まで直接話をしに行った。私たちの気持ちが伝わったのか、三人の高齢者の方がこのふれあいプラザの活動に参加してくれることになった。人数は少ないながらも、これで私たちの目指す「世代間交流」へ向けての基盤ができたのである。

本レポートを始める前に、ふれあいプラザの立ち上げに伴いご協力いただいた土井先生、並びに、小島真知子さんをはじめとする先輩方に感謝の言葉を言いたいと思う。本当にご

協力ありがとうございました。それでは本レポートに移りたいと思う。

2. 世代間交流の実践

(1) ふれあいスポーツ教室において

ふれあいプラザの主な活動は毎月第二、第四金曜日の午後 7 時から行っていたふれあいスポーツ教室である。どのような年齢層の人でも楽しめるような軽度のスポーツを通して、世代間交流をはかろうというのがこのふれあいスポーツ教室のテーマである。体育館の中で、ストレッチから始まり、軽めの運動をして、メインの活動に移るとというのがいつもの流れである。私たちスタッフはふれあいスポーツ教室が行われる前週から準備を始めていた。スタッフのほとんどが 2 年生で、考える活動内容もバラエティに富んでいた。ボールを使った運動や、ボールを使わない運動、鬼ごっこなどの要素を取り入れた新しい運動など、である。

さて、実際の活動ではどうだったか。これまでの Y O U 遊広場の活動は子ども中心の活動であったためか、なかなか高齢者と子どもたちの交流を促せていない状態であった。元気に遊びまわる子どもたちの世話に回らざるをえず、うまくいっていなかったように思う。高齢者の方も、子どもたちや若い人たちのなかでどうしていいのかわからず活動の流れにただ身をおいている様子であった。しかし、活動を重ねていくうちに、スタッフ自身が高齢者や大人との関わり方を学んでいき、各自、自分の役割、例えば、他のスタッフが子どもと遊んでいるときは高齢者の方と話をしに行こうという感じで、こういうときは自分はどうしようと考えようようになった。

スタッフが積極的に高齢者の方と触れ合っていくようになり、今度は高齢者の方の行動に変化が生まれた。高齢者の方から子どもやその親と触れ合おうとするようになったのである。高齢者の方の夢中になって活動している姿や、声を上げて仲間に声援を送ったり、楽しそうに笑ったりしている姿は、私たちに更なるやる気を起こさせてくれた。

活動内容はどうだったか。活動内容について一言っておかなければならないことがあるが、私たちがふれあいスポーツ教室でやっていた「スポーツ」というものは、サッカーや野球、バレーといった定番のスポーツとは少し異なっており、それらのルールを私たちに変えたものや、鬼ごっこなどの遊びにスポーツ的な要素を取り入れたものなど、独特なものばかりである。そのようにアレンジした理由として、子どもから高齢者にいたるまで、どのような人でもできるような軽度の運動でなければいけないことと、年齢関係なく楽しめることの二点である。Y O U 遊広場にこれまで参加していた人たちはこうした活動に慣れていたと思うが、もしかすると初めて参加する人の中には本格的なスポーツを期待していた人もいたのかもしれない。

さて、ふれあいスポーツ教室に参加していた高齢者の中には、足が不自由な人や、腰の状態が良くない人もいた。活動内容を考える際には、どうしてもこういうことを考慮に入れる必要があった。しかし、あまりに考慮に入れすぎると、元気いっぱいの子もたちが不満に思うだろう。何せ、動きたい盛りの年齢である。何度かこの不安が的中したこともあった。逆に、活動レベルを子どもに合わせると高齢者の方が活動についてこられないということもあった。

こういった幅広い年齢層の人たちがいるときには活動の「バランス」を考える必要がある。ある年齢層の人たちだけが楽しめるような内容ではなく、どの年齢層の人たちも楽し

める内容を考えなければいけない。先ほど述べたが、高齢者の方も子どもたちと楽しそうに活動している姿が見られた。しかし、活動内容自体に満足していたかは疑問である。私たちが考える内容はどうしても「子どもの視点」から考えたものになってしまい、大人がやるには少し物足りないだろうと思われるものばかりであったからだ。それでも楽しんでできたのは、子どもが本当に楽しそうにやっていたからであり、楽しそうな雰囲気の中に身を置いていたからではないだろうか。

ところで、ふれあいスポーツ教室も後半に入ったところで、新たな変化が見られるようになった。親子で参加している方が紙芝居をやってくれるということになったのである。ふれあいスポーツ教室はいつも最後に振り返りの時間をとっていて、その時間を利用して感想などを書いてもらっていたのだが、その時間に紙芝居をやってくれることになったのである。紙芝居だけではない。歌や、楽器演奏など、身体を動かす以外のことをやってくれるようになった。身体を動かした後のこういうゆったりとした時間は心をリラックスさせてくれた。さまざまな年齢層の人たちが、一つのことを目で感じたり耳で感じたりする、つまり、「共有」するだけでも世代間交流が十分可能ではないかと私は思う。話をしたり、一緒に運動をしたりするといった直接的なコミュニケーションではなくても、何かこういったことを通して、同じ空間にいるだけで間接的なコミュニケーションになる。つまり、間接的に交流をしていることになるのではないだろうか。

参加者自身が、自ら進んで企画して発表してくれたことは、このふれあいスポーツ教室を運営している私たちにとっても嬉しいことであった。同時に、それは私たちの願いでもあった。真の世代間交流は誰かに促されてやるものではなく、自ら進んでやるものであると思うからである。とにかく、この時間は参加者だけではなく、スタッフも楽しむことができた。スタッフ自身が自分たちの役割を忘れて安心できる唯一の時間であったと思う。

(2) 夏のキャンプにおいて

ふれあいスポーツ教室の一つのイベントとして夏に行われたのが、長野市錬成センターでの二泊三日のキャンプである。当然、このキャンプには子どもから高齢者まで参加した。去年のキャンプは親子が対象であり、今年のキャンプはその意味では異なっていた。

私自身、親子キャンプは去年体験しているものの、他のキャンプはどれも子ども対象のキャンプであり、高齢者が参加するキャンプは初めてで不安は大きかった。高齢者を対象にしたキャンプはもちろん存在する。子どもを対象としたキャンプでも当然のことであるが、高齢者対象のキャンプはより安全に注意を払っているし、危険にさらさないような準備も万全にしてある。私たちのキャンプもこれらのことに十分気を配らなければならなかった。長野市錬成センターの付近には蜂や蛇が生息している。キャンプでは外で活動する機会も多くなるため、このような危険は付き物であった。これらを事前に回避することは難しい。そこで、対処法マニュアルを作り、スタッフ全員、何が起こってもすぐに対処できるようにする必要があった。しかし、実際はスタッフ全員が完全にマニュアルを理解するという段階までいかなかった。幸い、このキャンプでは目立った怪我や事故は起きなかった。それにせよ、反省が残る点である。

さて、このキャンプの目的であるが、特別深い教育的な意味があるわけではなく、ふれあいスポーツ教室に参加している人たちの交流の場として設定した。スポーツだけではなく、普段の生活では体験できないような自然活動を通して、世代間交流を行おうというものであった。内容は登山や、野外炊飯、クラフト、キャンプファイヤーなど、シンプルな

ものである。

このキャンプでは、積極的に交流を深めるためにいろいろな工夫をした。まず、班構成であるが、幼い子どもは別として、親子をわざと別々の班にした。親子一緒では、どうしても親子で話す機会が多くなってしまい、他の人たちと交流する機会を妨げてしまうのではないかと考えたからである。また、高齢者から子どもまで、いろいろな年齢層が触れ合えるように班を構成した。まずは、班の中での世代間交流をしてもらいたいと考えたからである。次に、活動であるが、班で行動したり、班で一つの出し物を考えて発表する活動を取り入れたりもした。これも班の中での交流を深めるためである。そして、班以外のメンバーとも触れ合えるようなプログラムも作って、なるべく多くの人と交流できるように工夫をした。また、部屋割りに関しては、女性、男性、年齢関係なく、大勢の仲間と同じ部屋にした。寝起きを共にすることで、一つの大家族のような雰囲気が出ていたと思う。

実際の活動では、この工夫が功を奏したか、スタッフ含め参加者たちが自然に親しみながら楽しく交流できた。二泊三日という短い期間のキャンプではあったが、大勢の仲間と寝起きを共にし、食事をしたり、早朝の体操をやったりと、普段の生活では決して体験できない生活を送ったことは、深い交流につながったのではないだろうか。このキャンプを終えたふれあいスポーツ教室ではそれまでとは少し違った感じがした。「仲間」から「家族」になった気がしたからである。本当に良い交流ができたと思う。

3. これからのふれあいプラザに期待すること

第一期ふれあいプラザは二つの「変化」が見えた。一つはスタッフ自身の成長である。最初のほうで言ったとおり、スタッフのほとんどは二年生でこういった活動に慣れていない人も多かった。それが、活動を通していくにつれて、それぞれが自分の個性を発揮し始めるようになった。そして、話し合いの場などでも自分の意見をしっかりと言うようになった。スタッフの成長はふれあいプラザの成長に大きくつながった。二つ目は、参加者の取り組み方の変化である。前述したが、参加者自ら企画をし、発表してくれる場面が見られるようになった。ふれあいスポーツ教室だけでなく、キャンプや、クリスマス会（第一期ふれあいプラザの締めくくりとして行ったもの）などで、参加者が、自分たちの得意なことを披露してくれたり、料理を作ってきてくれたりするなど、形は違うけれども、自ら進んで何かをやってくれた姿は嬉しく、また、このプラザをやってきて本当に良かったと思えるような気持ちにさせてくれた。自分にとって大変励みになった。

このような変化を見せてくれたふれあいプラザであるが、その分、第二期のふれあいプラザに対する期待も大きい。第一期ふれあいスポーツ教室では、スポーツを通して、世代間交流を行ってきた。身体を動かす機会の少ない高齢者にとっては良い機会になったであろうと思う。しかし、運動は「継続」しなければ意味がない。月に二回しか活動がなかったふれあいスポーツ教室では「継続」という意味では満足できるものではなかった。第一期は「交流」という意味では満足に近いものがあるだろう。第二期では運動を「継続」してできるような工夫をこらしてほしいと思う。また、活動内容に関しても現状に満足することなく、考えていってほしいと思う。「子どもの視点」だけではなく、「大人の視点」、そして、「高齢者の視点」で考えても面白いのではないだろうか。どの世代も心から楽しめる活動というのは難しいとは思いますが、挑戦していく価値はあると思う。

このふれあいプラザは発足してまだ間もない。まだまだ未熟な面も多い。しかし、裏を

返せば、「伸びしろ」はたくさんあるということである。二年生スタッフの成長には驚かされたし、発想にも感心した。どのような形になるにせよ、第二期のふれあいプラザがどのような「変化」を遂げるのか楽しみである。

4. おわりに

私はときどき、ふっと気が緩むときがある。そういうときは決まって人任せにしてしまおうとする。この性格が、何度も藤本晃子やスタッフに迷惑をかけた。この場を借りて謝りたいと思う。

本当にスタッフにはいろいろと助けてもらった。これだけのメンバーがこのふれあいプラザにいたことは心強かった。自分も見習う点は多かった。最初はどうなるか不安だったが、副プラザ長を務めてよかったと、今は思う。

そして、プラザ長の藤本晃子には本当に感謝している。自分が副プラザ長をやったのも彼女のおかげだと思う。自分自身、副プラザ長としてどれだけの働きができたかわからないが、プラザ長として、スタッフをまとめあげる力にただただ感心するばかりであった。

藤本晃子をはじめ、スタッフのみんなの姿からいろいろなことを学んだ気がする。ふれあいプラザの成長を期待するとともに、自分自身も成長できるよう努力していきたいと思う。



おでかけプラザが教えてくれたもの

藤岡恵美 生活科学教育専攻 3年

Things Odekake-Plaza Gave Me

FUJIOKA Emi : Major : Life Science Education, junior

【キーワード】 おでかけプラザ プラザ長 子ども 葛藤 成長

1. はじめに

私がY O U遊広場、特におでかけプラザで活動の中で、さまざまなことを考えることができました。子どものこと、地域の人々とのこと、そして一緒に活動をしていく人たちのこと。それは楽しかった、やってきてよかったと思うこともたくさんありますが、プラザ長という立場が自分を苦しめる結果になったこともありました。今思えばそれらを含めて、とてもこの1年間は充実したものとなっていたと思います。

2. プラザ長になったきっかけ

私がおでかけプラザに参加しようと思ったのは、昨年度のおでかけプラザの活動方針の「自分の空いている時間を利用して」というところに魅力を感じたからでした。以前から、子どもと一緒に何かしてみたいという気持ちはあったものの、上手く時間が使えず行動にも移せなかったため、これを機会に自分のやりたかったことを少しずつやっと思いしました。このプラザの活動方針はそんな私の願いに最も近いものだったし、またほとんど知り合いがいない中で、このプラザには私をこころよくむかえてくれた友達がいたので、安心してこのプラザに参加することができました。おでかけプラザは、私を含めみんなにも短期の活動のイメージがあり、このプラザを中心に1年間続けていくと決めた人はその場には私と運営委員長である山本公三君、そして去年おでかけプラザを中心に活動してきた4年生の町田竜太さんの3人以外いなくて、自動的に私が竜太さんから頑張ってもらいたいと肩をたたかれることになりました。自分でも何も知らない私がプラザ長なんてやってもいいのかという疑問もありましたが、同時に与えられた仕事を最後までやろうという強い責任感ももつことができました。

3. 葛藤

去年の活動内容やどのように進められてきたのか、どのような場に行っていたのかなど何も分からない状態でしたが、さまざまな話を少しずつ聞いたり去年から続けて参加している活動に顔を出すなどして、場の雰囲気や子どもの様子を感じていきました。子どもたちの一所懸命な部分や優しい部分、一緒に走り回ったり笑ったりと同じ時間を共有していくにつれて子どもたちのことが分かってきました。

この調子なら、何とかやっていけるだろうと思っていた矢先に、私たちが中心となって遊んだりする企画が舞い込んできました。何十人の子どもたちをまとめ、一緒に遊ぶことは初めてだったので、遊び方すら分からなかったのですが、先輩や今まで活動してきた友達に協力を得て、たくさんの遊びを教えてもらうことができました。リハーサルまでやってもらって、がんばってねとエールまでもらいました。子どもたちをまとめることがどれほど大変か、分からなかったのがありますが、プラザ間長だから自分が頑張らないといけないという責任感もあり、当日、考えてきた遊びをすべて自分で進めてしまい、子どもたちにも学生にも混乱を招いてしまったと思います。そのうえ、上手く進行していかない自分自身にも嫌気がさし、とりあえず最後まで進行はしたものの誰もが納得いかない時間を過ごしたといった状態のまま終わってしまいました。

活動が終わってからお母さんたちも交え、少し反省会をしました。何もかもが納得いかない状態だったことは誰の目から見ても明らかで、出てくる反省の言葉が私の非であるというようにしか聞こえず、内容はほとんど覚えていません。自分の力のなさも呆れるほどで、プラザ長になんてなるのじゃなかったとさえ思いました。この1回の活動は、自分の実力を感じさせ自信をなくさせるものとなったと同時に、この1年間を終えて思い返してみると、この活動があったからこそその成長した自分がいると思わせてくれるものとなった活動でもありました。

しかし、そのときの私には失敗のもつ意味が分からず、いやな経験として私を苦しめるものになっていました。また、すべての活動が活動初めということもあって、打ち合わせや話し合いなどが週に何回もあり、自分の時間がなくなっていくことにも疑問を持っていました。おでかけプラザは、こんなに時間が拘束されるものなのかと思い、自分の期待していたものと現状との違いから、疲れるもの・しんどいものとして、プラザは位置付けられていたこともありました。プラザ長をやりたいくないと逃げの方向にも考えたりもしました。私は、プラザの活動を楽しいもの・本当に意味のあるものとして感じられるようになった8月まで、やめたいけどやめたらどうなるのだろうという葛藤をしながら活動を続けていました。

4. 私を救ってくれたモノとは

葛藤の中での活動は、義務感に駆られたものであり、子どもたちと関わっている最中は楽しいと思えたとしても、活動が終わると次の活動のための声かけや連絡など自分にとって面白くないことがたくさん待っていました。お母さんたちに遊びを考えてきてほしいといわれることが増えてきても、最初のうちはいろいろな人に相談したりして、新しい遊びを取り入れてきましたが、回数が増えるにつれて私の中の遊びのレパートリーも増えてきたことから、だんだん相談の回数が減っていきました。自分の成長を自分で阻害していることにも気付かずに、一人で考えるほうが楽だという成長を求めない活動を、5月の失敗があってから3ヶ月間続けてきました。

8月の湯谷小親子ランドの活動は実習中で忙しい状態であったのですが、誘いもあって参加することにしました。その日は、湯谷小親子ランドで「魚釣りとバーベキュー」の企画で、久しぶりに遠くに出かけるものだったので、子どもたちだけでなく周りの大人たちもが大いに盛り上がっていました。いつもは、少しまとめ役をよろしくといった感じの雰

囲気がありますが、その日は学生スタッフも私と同じ3年生の2人だけだったこともあり、子どもたちと同じようにはしゃぎ、お父さんたちにまじってバーベキューをしたりしました。自然に私たちの周りに子どもたちが集まり、いつもなら男女や学年が別れてしまう傾向があるのですが、その日はみんなが一緒に川に入ってカニを取ったり、ブランコにのったりと、年齢・性別を超えて同じ空間を楽しむことができました。

これまでの私は、上手くまとめようと子どもたちのやりたいことよりも自分の計画に進めようと必死でしたが、一步輪の外から見てみると自分が楽しむことができれば、子どもたちもついてきてくれるのではないかということに気がきました。そういえば、先輩たちはすごく楽しそうに子どもたちと遊んでいるだけのように見えて、子どもたちを引っ張っていつている姿を何度も見たことがあります。楽しむだけではいけないと、気を張ってきましたが、楽しむことがあってこそ、指導力や注意力が生きてくるということに気付くことができました。子どもたちの姿から私に足りなかった最も大事なことを学ぶことができました。

このときから、私はどの活動でもまず楽しんでいくことができました。子どもたちと一緒に楽しむためには、一人ぼっちの子どもがいてはいけません。納得がいかない遊びをしたり、年齢によって楽しめない遊びをしてもいけません。楽しむ方法を考えれば、子供たちのことを考えることができるようになりました。分かりやすく説明する方法や、話を聞いてもらうための方法、一緒に楽しむための方法を自分なりに少しずつ発見することができました。自分の成長が少しでも見えてくると、もっと自分自身が大きくなりたいと思うようにもなりました。子どもたちの存在自体が、私を前向きに成長させてくれた、最も大きな要因だったと思います。

5. お父さんお母さんから学んだこと

1年間おでかけプラザの中で、実に何百人もの子どもたちと関わってきました。そこには、いつもお父さんお母さんがいて、こんな風になってほしいというそれぞれの思いを聞くこともできました。

私たちが参加する活動のほとんどが、お母さんによって活動計画が進められています。最初は「遊んでくれるお兄さん・お姉さん」となってゲストのような状態でしたが、だんだん子どもたちの顔を把握していく中で、私たちを中心として活動が進められていくことが多くなってきました。それにつれて、お母さんたちと関わる機会も多くなって、お母さんたちが活動に対し描いているものがだんだんと見えてきました。

お母さんたちは毎回子どもたちが喜ぶ企画を考えていて、その企画を通して学ぶことが多くあったと思います。特に1年間を通した活動となった湯谷子どもランドや浅川子ども広場では毎回違った遊びや企画を考えていましたので、子どもたちが満足して帰っていく姿を何度も見ることができました。さまざまな企画は、子どもたちが満足するだけでなく、子どもたちのいろいろな面を見ることができます。子どもたちの得意分野を見つけ出してあげることが個性を伸ばしていくきっかけにもなることから、いろいろな企画は自己実現のきっかけとなります。料理や自然の中での遊び、工作などさまざまな分野にわたって企画が実現されてきましたが、その中からいろいろな子どもたちのよさを見つけ出し、伸ばしていくことができるということを学びました。

しかし、そのような企画の中でもお父さんやお母さんの位置付けは単なる付き添いであることが多く、子どもとその親と学生の3グループが一緒に遊んだりすることは最初のうちはほとんどみられませんでした。湯谷子どもランドのお母さんたちからは、どんな方針であるとかそういった話はなく、むしろ楽しむことを目的としたような会であったので、特に意識をせずに関わっていました。月に2回くらいのペースで開かれる子どもランド・親子ランドには、自由に子どもたちが参加するのですが、だんだん名前も覚えていくことができました。これまでそこに参加するスタッフは、短期なことが多いので子どもたちもスタッフもそしてお父さんお母さんたちも名前を覚えることがなかったらしく、今回の学生スタッフが名前を覚え呼びかけている姿がとても嬉しかったと言ってくれました。

子どもの名前を覚えて呼びかけてあげることは、子どもたちと私たちの距離を縮めてくれることは、今までの経験から自然と分かってきたことですが、そのことが保護者側から感謝されるとは思っていませんでした。お父さんお母さんたちは、子どもたちの活動の様子をしっかりと見つめてくれていたのだなということを知りました。また、「この前家でね・・・」と家に帰ってから私たち学生の話をしてくれていたことを聞いたり、「お姉さんたちが来てくれるんだったらうちの子も行きたくなるわ」と言ってくださったりと、子どもたちにとっての私たちの存在感をお母さんたちから聞くことができ、その言葉一つ一つが私たちを元気付け自信を持たせてくれました。

保護者からの目は、最初私にとって窮屈なものであると思っていたのですが、保護者の想い等を聞けるようになってくるとその言葉が自分の成長の一步であることが多く、学ぶことが多くあったと思います。

6. プラザ長になって学んだこと

1年間活動を続けてきて、私は本当に子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごせたと思います。最初に感じた葛藤は、今となってはこんなにも子どもたちと関わることの喜びを感じさせてくれるひとつの方法だったのではないかと思います。そのことは、プラザ長にならなければ気付けなかったことがほとんどです。人前で話すことがほとんどできなかった状態から、少しではありますが子どもたちにも理解できるような話し方や注目させるためにどうすればいいかなどを経験を通して学べたと思います。

最も自分の成長を感じたことは、子どもたちの様子を見るなど周りに対して注意を払えるようになったことだと思います。今までなら、一緒に遊んでいる子どもたちだけの安全を確認し、その子が楽しめているかだけを考えてきましたが、プラザ長というまとめ役の名前をもらったことによって、そこにいる子どもたちの安全を気にし、一人になっている子がいないかも確認することができるようになっていたと思います。これも、一緒に活動をしたスタッフの動きから学んだことなのですが、自分もそうならなくては、というプラザ長としての責任感からくる意識をもてたことによって実現したことだと思います。

プラザ長は、まさに学校でいう教師の存在であったのではないかと思います。内容は遊びだけですが子どもたちの安全を守り、「遊び」の中から子どもたちの性格や良さを発見し、成長を考えたりその子に合った接し方をしていくことで、自分自身も成長することができます。子どもを見つめることは同じ時間を共有することによって実現するものだと、私はお出かけプラザで学ぶことができたと思います。そのことは、実習中も意識し、どれだけ

忙しくても休み時間は子どもたちと一緒に過ごし、たくさんのお話をすることで、子どもたちのいろいろな面を発見できたと思います。また、子どもと同じ目線であることが多すぎて、もっと気を配らなければいけないというアドバイスもいただくことができ、さらに自分自身に足りない部分も知ることができたと思います。

また、自分に足りないものとして、周りの人との協力が上手くできないという点が課題として残されていると思います。一人で考えるとどうしても一方向しか物事を見ることができず、偏った考え方になってしまいます。今までほとんどのことを一人でやってきてしまい、そのときは自分自身で満足行くものだったのですが、YOU遊フェスティバルで人との協力を学び、おでかけプラザでの私のやり方に自分で疑問を感じてしまいました。3年生も含め2年生はほとんどが子どもたちと関わるのが初めてだし、教育実習などが無いと子どもと関わる場がYOU遊広場以外ではないと思います。そのような場であるにもかかわらず、その機会を制限してしまったことはプラザ長としてやるべきことではなかったと反省しています。

7. おわりに

この1年間さまざまなことがありましたが、どの活動も私にとって貴重な経験となりました。自分が大変な時に友達からかけてもらった言葉は、今でも鮮明に覚えています。子どもたちとのすばらしい時間とたくさんのよい友達に出会えたことが、私がYOU遊広場に入って最も大きな収穫であったと思います。この経験を生かし、これからもいろいろなことに挑戦し、自分を成長させていきたいと思っています。



YOU遊プラザを通して見つけた楽しさと自分の成長

—「イベントプラザ」の実践の分析—

西村崇 教育実践科学専攻 3年

Growth of the Pleasure and Himself Who Found It

Through the YOU-Yu Plaza

—Analysis of Practice of an “Event Plaza”—

NISHIMURA Takashi : Major : Educational Science, junior

1. はじめに

私は今年度、第7プラザ「イベントプラザ」のプラザ長として活動してきた。昨年度は今年度も活動を続けていた「キャンパスプレーパーク」のスタッフとして関わり、子どもとたくさん関わることができ、YOU遊プラザの活動の楽しさや厳しさを知った。しかし、毎週2回というペースに予定が合わなくなってしまって、だんだん私はプレーパークから自然と離れていくこととなった。しかし、子どもたちと関わりたい、自分で何かを作りあげてみたいという気持ちはずっと持ち続けていたので、今年度は、“継続的な子どものかかわり”を大切にしているYOU遊プラザにおいて、自分がプラザ長になって、継続的にはかかわることができない参加者やスタッフのために、1回限りのイベントがあってもいいのではないかと考えたことが、このプラザを作ったキッカケである。

発足準備会では、3人がプラザ長に立候補し、運良く私がプラザ長として活動していくことになったのだが、後の2人も副プラザ長として、また、その脇を経験豊富な3、4年生や、意欲のある2年生に囲まれ、頼りない私を、またイベントプラザを大いに盛り上げてくれ、1年を通して楽しく活動できたことを今、とても感謝している。

2. イベントプラザに込めた思い

私がこのプラザをはじめるとあってキーワードとしてきた言葉が3つある。「季節感のある」「異世代間交流」「プラザ間交流」である。はじめに述べたように、イベントプラザは、継続的なかかわりをそれほど重視していなかった。だから、もしも1回しか参加できなくても、楽しみ、何かを感じて帰ってもらいたいという思いが強かった。そこで、内容がわかりやすいようにする意味も込めて年に4回、春夏秋冬にちなんだものをコンセプトにして企画することを初めに決めておいた。結果的に、春に参加してくださった参加者の方から、「夏は何をするんですか?」「夏もぜひ参加したいと思います」と言った意見をたくさんいただくことができ、夏以降も繰り返し参加される人が大勢いたことは、とてもうれしいことだった。

そして、参加対象をあえて決めないといった姿勢を貫くことで、幼児からお年寄りまで、どんな人が来ても、みんなが楽しめるようなものにし、「異世代間交流」を目指した。それを実現するためにはどのような配慮をしていく必要があるのかということを実験的に考えるよい機会となった。企画内容が子ども向きであるとか、体力的にきついものであったら、年長者の方からは敬遠されてしまう。どのようなものを参加者が求めているのかを敏感に察知し、かつ自分たちがやりたいことを見つけ出すのは、大変な苦勞をともなったが、とても楽しかった。私たちの会議はこの「楽しさ」を大切にしていた。自分達が楽しい雰囲気の中で学年や経験に左右されることなく自由に意見をみなで出し合うことができることが本番での楽しさにもつながると考えていた。自分たちの力の限界を超えていると判断された企画は、土井先生がはっきりと切ってくれるので、私たちは意見をどんどん出し、壁にぶち当たった時は真剣に悩むといったように、会議のメリハリがつけられていて、壁に当たってもみんなで何とか乗り切ろうという気持ちになることができた。この時の会議の楽しさを私はずっと忘れずにいたい。この経験から、他の話し合いの場でもこういう雰囲気を出せるようにしていきたいと思った。

「プラザ間交流」は、プラザ同士の参加者やスタッフのつながりが少しでもできるように協力ができればと考えてきたが、それほどの成果はおさめることはできず、課題を残した。プラザはどこも、それぞれ忙しいスケジュールを組んでやっていて、計画していても予定が合わず、イベントプラザもイベントだけで手一杯になってしまった。このように、自分でできたこと、できなかったことはたくさんあるが、初めからこのキーワードを決め、スタッフ全員に共通の理解を得ることができたことで、目標をしっかりとって活動していくことができた。昨年度から継続されたものでない新しいプラザなので、自分たちが1から作りあげていくという意気込みだけで進めてきたのだが、その意気込みが正しい方向につながっていったのではないかと思う。

3. イベントを通して

イベントの準備段階では、いろいろと勉強させられることが多かった。私達の初めての企画であった春イベントの時は、30人程度の参加者を募集したいと考えていたのだが、どの程度の範囲の人たちに、どの様な方法で伝えるかといったことが全く見当もつかずに、「ぜんぜん人が集まらなかったらどうしよう。」「こんなにビラを配ったら、応募がありすぎてしまうのではないか。定員を超えてしまった場合はどうしよう。どうやってお断りすればよいだろう」と両極端な予想をたてながらみんなで考えた。

また、募集の方法も、回覧板を使おうという意見で固まったのだが、大学周辺だけとはいえ、何百枚もプリントを印刷しなければならないし、回覧板に載せてもらうためにはどのような手順をとればよいか全くわからず、昨年度の資料を参考にしたり、城山公民館にお話を伺いに行くなどしながら情報を集めた。その後、紹介してもらった自治会長さんに連絡をとって、相当な無理をいってお願いして、ようやく載せてもらうことができたのだ。というのも、回覧板に何かを載せてもらいたいときは、1ヶ月くらい前からお願いしないといけないということをこの時はじめて知ったのだが、私たちは頼んでからすぐ載せてもらうつもりでいたからだ。自分達の考えの甘さを痛感した。

地域の人を巻き込んで活動しようとする時に、それに関わる人の協力は欠かせないということを経験して感じた後は、できるだけ早く、普段は着慣れないスーツを着て、お願

いに行くという姿勢を心がけた。知らない人にあって、しっかりと自己紹介をし、自分達の行っている活動を説明するということがこんなに難しいことなのだという事も知らなかった。そんなことも、回数を重ねるにつれ慣れてきて、苦にならずにできるようになったのだから自分でも驚く。経験してみてもそわかることや、できるようになることだと思う。そして、それらのことが身につき、しっかりとできるようになってからは、協力してくださる方も快く対応してくださるようになり、準備段階でも前もって計画を立てることを覚えていくことができた。

4. 子どもたちの様子

春のイベントでは、午前中ハイキングをした。その時、ハイキングの途中で見た植物を使ってビンゴゲームをしたのだが、私など比べものにならないほど植物のことをよく知っているのである。「早くしないとこのマスが全部埋らないよ」といいつつ、先のほうへ走って行ってまで必死で探していた。ハイキングといっても、普段自分が生活している範囲である。参加者に自然を感じてもらおうなんて偉そうに言っていたが、自分のほうこそいかに普段から自然を意識していないかを逆に知らされることとなった。

夏の時は、川原の石にペイントしたのだが、自分の作った石を全部合わせると、袋にいっぱいになるのに、「全部ウチに持って帰りたい」といって親が困っている様子も見られた。私も描いてみたのだが、「こんなのペンギンじゃないよ」とかささん言われた。でも最後にその石をもらってくれてうれしかった。代わりに自分の石を1個くれた。子どもたちにとっては、自分の作ったものはみんな大切な宝物で、一個づつ思いを込めて描いているのが伝わってきた。子どもたちは何をやるにも真剣にまっすぐに向かってくる。だから、自分たちがやりたくないことにはなかなか手が出ない。子どもが「やってみたいな」「行ってみてもいいかな」と思わせることができれば、あとは私の予想をどんどん越えていろいろなことを自ら学んでいった。

5. ふれあいキャンプに参加して

私は、毎週行っているふれあいプラザのスポーツ教室には1回も参加したことがなかったのだが、「キャンプに行きたい」という理由だけで、キャンプのみのスタッフとして参加させてもらえることとなった。このスポーツ教室は毎週活動していることもあり、参加者と継続的に関わっていて、イベントプラザとは違う雰囲気を楽しむことができた。

キャンプの参加者とスタッフはとても仲がよく、しかも、私が実際に参加してみても結構ハードな内容だなと感じたにもかかわらず、幼児から60代の方まで参加され、私の目指していた異世代間交流がそこでは行われていた。互いに体力の違いや年齢の違いを助け合いながらキャンプに取り組んでいる姿を見て、参加者とスタッフとの間に信頼関係というか、絆のようなものを感じた。継続的に関わってきていないとできないもので、その雰囲気をとてもうらやましく感じた。はじめは、いきなり現れた私がこの良い雰囲気を壊してしまうことになるのではないかと考えたりもしたが、終わってみると、全くのいらぬ心配で、みんなすぐに受け入れてくれ、そのキャンプの間だけ、大きな家族の一員に加わらせてもらえたようないい気分であった。私はそこで、この家族のような関わり方は、異世代間交流をする1つのヒントになると感じた。それぞれの家には、子ども、大人、おじいちゃん、おばあちゃんそれぞれが自分の役割を持って日々生活している。このキャンプでは

カレーを作るにしても、ハイキングをするにしても、スタッフは年の離れたお兄ちゃん、お姉ちゃんのように、参加者の親が、他の子どもも自分の子どものように接している姿は、見ていてとてもほほえましかったし、そのような助け合いが行われることが普段のスポーツ教室に参加することによって経験していてわかっているから、安心して60代の方でも参加できたのではないかなと感じた。

私がこのキャンプで一番新鮮に思えたプログラムはキャンプファイヤーである。私は今まで小中学生相手のキャンプファイヤーしか企画したことがなかった。そこでは、どのように演出して場を盛り上げて、最後いかに感動させて終わることができるかということを中心に考えていたように思う。しかし、このふれあいキャンプのキャンプファイヤーは、体を動かすハードなものほとんどなく、声を使うものや、その場で楽しめるもので、体力的につらい方にはイスを用意して、座りながらでもできるように配慮されていた。また、プログラムの最後には絵本の読み聞かせがあり、世代を越えて楽しめるものが考えられていて感心した。

もしこのキャンプそれ自体が私たちイベントプラザの企画するような一回限りのものであったらこのような多世代の方が参加されたかどうかは疑問の残るところではあるが、それでも、うまく異世代間交流を実践している場に自分も参加することができてよかったと思っている。とても楽しかった。

6. YOU遊プラザを通して学んだこと

私はこの活動を通して、ほんとうに多くのことを学ぶことができたと思う。その中でいくつかここに挙げてみたいと思う。

まず、子どもと直に関わっていくことの大切さを感じた。今、普通に大学のカリキュラムを組んでみても、実際の子どものと直に関わる機会はほとんどない。私は教育学部に在籍しているにもかかわらず、(あくまで教師を目指しているとの前提で)「子どもとあまり関わったことがないのでどう接したらよいのかわかりません」というようなことを言う人を何人も見てきたが、私はそんなことは絶対に言いたくなかった。教師になるという希望を少なからず持っている人ならば、子どもと接することは大学でも重要なことはわかっているだろうし、子どもとかかわる機会なんて自分で作る気にさえなればいくらでも作り出せると思うからだ。大学に入るまでは子どもと接することなどほとんどなく、正直子どもが得意ではなかったのだが、自分で選んで教育学部に来たのだから、自分から積極的にできることを精一杯やってみようと思ったのだ。そういう意味では気兼ねなく入れ、自分達のやりたいことを尊重してくれるYOU遊プラザはとてもよい場所であると思う。私はこれからもYOU遊プラザの活動が続けられていくことを願ってやまないのだが、先のことにはわからない。でも、みんなが子どもたちと何かをやりたいという気持ちを持っていればきっともっと違う形に変わりながらも続いていけるのだと思う。

そして、いろいろな年代の子どものと接していると、年齢に応じた発達の仕方や、その子やその周りで流行っていること、どんなことに興味をもっているのかということが自然と感じられるようになってくる。そして、そのことがもっと知りたくなってくるのでたくさん参加者に話しかけるようになる。親と話していると「学校の宿題が少ないから全然勉強しないんですよ」とか、「学校ではなかなかこんなことはやってくれませんしね」といったような学校に関する話を話してくれたりして興味深いし、子どもと話していると、「ウチ

の先生はね…」「私のお母さんは…」といった少し暴露めいたこともくったくなく話してくれる。その一つ一つが私にとっては新鮮で、その話からヒントを得て、「今度はこんなことをやってみようかな」などと考えたりするのである。このやりとりは本当に際限がなく、いつまでも私を飽きさせることがない。自分から積極的に話しかけていって、情報を得ることの楽しさを知ることができた。

この自分から話しかけることも、私はぜんぜん得意だったわけではない。私は目立ちがりの性格ではあるのだが、前へ、前へと話すことで自分をアピールすることはなく、また、人見知りをする性格のため、初対面の人、それも目上の人と話すのはとても苦手なことであった。しかし、YOU遊プラザで、自分が中心になって話し合いを進めていくこと、目上の人と話をする、多くの人の前で話すことが多かったので、「話す」ということに対しての抵抗が減った。そのことにより、視野がひとまわり大きくなった気がする。

また、YOU遊プラザの活動にかかわっている人たちは、みんな子どもに対する情熱がものすごく、本当に真剣に子どもと向き合っていた。そして、とても個性豊かなメンバーが揃っていた。これだけいろいろな人がいると、子どもとの接し方も人によってばらばらで、それぞれに特徴が出る。自分が子どもと同じ立場になったように無邪気に遊ぶ人、ちょっとしたお母さん代わりのような人、自分の特技をいかして、子供たちの人気者になっている人など。でも、みんなその子どもが好きな気持ちを持って、上手に子どもたちと接しているなど感じる人が多い。子どもと接していくにはこうしなければならないといったマニュアルなどなく、私は私なりのスタイルで子どもと接していけばいいのだ、ということを感じられるようになった。

特に、夏に行った教育実習は、このことがとてもよくいかされた場であった。初めて出会う大勢の子どもたちに対して、仲良くなりたいという強い気持ちを素直に出すことで、早く打ち解けることができた。YOU遊プラザの人たちは、自分のスタイルをしっかりと持っている人が多いので、個性的に見えるのだろう。それは、子どもにとっても大人にとっても魅力的なことだ。そんな人たちと一緒に活動できたことは私にとってはものすごく大きなことであった。

7. 最後に

私はこのYOU遊プラザの活動を通して一番心に留めておきたいと感じたことは、何度も書いているが、苦勞したこと以上に楽しかったことである。私はこの「楽しさ」が学びの場において本当に大切なものだということを実感した。子どもたちにこんなことを身に付けてほしい、こんな気付きをしてほしいということを考えたときに、それを実現させるためには楽しいものを考えなければいけないなどということである。楽しい時は、みんな素の自分になることができるし、感じたことを自分からどんどん吸収していける気がした。その後ろには大変な苦勞があろうとも、私はとりあえず「楽しい」ことにこれからもこだわって子どもと接してみたいと思う。

第2期YOUプラザの発足から1年間、竹の部屋という私たちの活動の拠点になっている部屋で夜遅くまで準備をしたり他のプラザをがんばっている人や先輩と情報交換をしたり、子どもとの接しかたについて話し合ったり、すべてが私の貴重な経験であるし、財産である。この1年の活動は、本当に私を成長させてくれたと思う。次の1年もそのまた次の1年も、今のように自分が成長したなど感じるようなことができるようがんばっていきたい。

イベントプラザが教えてくれたこと

—イベントプラザを通して—

森田美保 保健体育専攻 3年

The things Event Plaza Gave Me

—Through the Event Plaza—

MORITA Miho : Major : Physical Education, junior

【キーワード】 イベントプラザ 企画 テーマ 経験 仲間 資質

1. はじめに

私がイベントプラザ長になりたいと希望した理由は、何かのイベントや行事ごとの企画運営などを通して、他の人の意見や考えをまとめ、頼りがいのある存在となってリーダーシップを発揮し、責任のある役割をソツなくこなせるようになり、そういった中で、子どもたちとたくさん触れ合い多くの仲間に出会いたい。などとできすぎたことを考えていたからだった。プラザ長をやりたいと決意するに当たっては様々な迷いや戸惑いがありかなり悩んだことを記憶している。けれど私は先に述べたような考えからイベントプラザ長に立候補した。結果はプラザ長立候補者三人によるくじ引きで、私は副プラザ長に決まった。実のところがかかりの気持ちも内心あったが、三人ともが熱い気持ちを持っていたので意気消沈というわけではなく、早速、イベントやるで！という気持ちが湧き起こっていた。

2. 企画するって・・・!?

理想と現実が違うものと言うが、まさにこのことを示していると言える。私のあさはかな考えでは企画することとは、色んな人の意見や考えを聞きアイデアを出し合って形にしていくものだ、と単純に考えていた。実際、春のイベントについて話を進めていこうとしたときに、突然私の中の思いが行く手を阻まれた。やる気のあるみんなが集まって話し合いをしているのにいっこうに話が前へ進まない。一から全てを企画することの難しさをそのとき初めて体感した。今なら何をどのような手順で決めていくべきかということはおおよそ見当が付くが、あの頃の井戸端会議といったらひどかった。何度も同じことについて話し合ったり、わけの分からない話に花が咲いてしまい脱線したり、沈黙が続いたり、二年生につまらない無駄な時間を過ごさせてしまったりと要領の悪さが炸裂していた。

また、企画というのは計画と違うということの意味を身を持って体験した。計画というのはいつ・どこで・だれが・だれに・何を・いくらで・どうするかということを決めることであるが、企画はこれに「なぜ」という観点が加わるということだ。このイベントを行う理由は何なのか何を目的として行うのか、ということである。このことが明確になっていなければ、ただのお遊び計画やお楽しみ会のようにになってしまう。企画をする際に目的がはっきりしていれば方向性について迷ったときや悩んだときのよりどころとなり、意見がまとまりやすくなる。私たちスタッフが、このイベントを何のために行うのかがわか

っていることが大切なのだ。そう頭では理解したけれど、実際には計画を立てることで精一杯だったようにも思える。けれどやはり深い意思の強い意志がある目的やコンセプトがきちんとあれば、もっとスムーズに進んでいったに違いない。とにかく企画をするということは、並々ならぬ忍耐力や要領の良さが必要であるということが身にしみてわかった。

3. ～テーマ～

「2.」での企画に関することとも言えるが、あえて「3. ～テーマ～」の項目を作ったのは、今思うと私には各イベントのテーマの持つ意味合いがとて大きかったように思うからだ。春イベントでは「ようこそ とれたて！ハイ☆クッ☆キング～花と緑 DE 楽しく Tea Party～」、夏イベントでは「すいスイ 夏！まるかじりフェスタ」、第2回 YOU遊フェスティバルでは「ぬくぬか気分ワッショイショイ」、どれをとっても魅力的でイベントのイメージを湧かせるものばかりで、何よりこれを決めるときみんなのこだわりが重要なコンセプトを作り出していたのだということが後になってよくわかった。「この言葉は必要！この部分は外せない！これにしよう！」などとみんなで言い合いながらタイトルを決めるあの段階で、スタッフ全員のイベントに対する意識統一がなされていたのだ。みんなが意見を出し合ってそれらについて吟味し、みんなの希望をつなぎ合わせて決めていく。楽しい雰囲気の中で最高のタイトルが決定されていく。とても良いシステムだったと思う。もう時効だから白状するけど、私にはどうしても譲れない、譲りたくない言葉があった。しかし思いのほか票が少なかったために、一人二回挙手というルールを破り三回挙げた。それに決まっておめんなさい。

4. 初体験！

イベントプラザで一年間活動を行ったことで体験することのできた、人生初めての出来事がたくさんあった。これらは社会経験としてとても大切で貴重なことだったように思われる。それらを思い浮かんでくる順に挙げる。

- ①保護者との出会い。これは非常に大きい。今までにない複雑な感情を抱いた。子どもを思う親の気持ちなんて知る由もなかったが、イベントに家族単位でも参加していただいたことから保護者の方との関わりを持つことができ、家庭による子どもに対する親の関わり方の違いをはっきりと感じた。
- ②回覧板についてお話を聞きに城山公民館へおじゃましたこと。公民館の方は皆さん親切で丁寧にお話をしていただいた上、必要な資料を訪問した人数分のコピーまでしていただいた。私にとって公民館とは身近なようで遠い存在だったので、実際に足を運んだことで身近に感じることができ、どのような役割があるのかを多少知ることができた。
- ③裾花川の使用許可をいただきに県庁へ出向いたこと。結局、河川の使用許可というのは県庁ではなく合同庁舎というところで取得するものだった。ここでも、何も分からずに戸惑っていた私たちに詳しく話を下さり、名刺や大きな地図までいただき親切にいただいた。当然であるが川は公共の場であるということを改めて感じる機会となり、社会の仕組みや決まりごとに触れた気がした。
- ④裾花ダム管理事務所に裾花川の放流日についての相談へ行ったこと。ここでもまた親切な方々ばかりにお会いすることができ、御協力いただいた。夏イベントの前日まで連携をとらせていただいて放流が決まるとすぐに連絡をいただいたりした。自然が相手なので大変な仕事だと思った。

- ⑤大学付近の店（モンマートやまださんとスーパーコバヤシさん）へ参加者募集のポスターを貼らせていただくお願いをしに行ったこと。ここでも快く同意していただいて嬉しい気持ちになったことを覚えている。地域の方の理解があるからこそ私たちは活動ができる。受け継いでいくべき大切でありがたいことであると感じた。
- ⑥裾花小学校へ夏イベントの際のお願いと参加者の募集をさせてもらいに行ったこと。夏イベントは裾花小学校の協力を得られなかったら成功していなかっただろう。駐車場やトイレなど、わざわざ係の方に出向いてもらい鍵を開けていただいた。感謝の気持ちでいっぱいだ。
- ⑦パドマ幼稚園へ参加者の募集をお願いしに行ったこと。近くにある幼稚園なのに今まで一度も足を踏み入れたことがなく、かなり緊張して出向いた。先生は私の話をお忙しい中真剣に聞いて下さった。おかげでパドマ幼稚園からの参加者も募ることができた。パドマ幼稚園では先生方が保護者の方の立場に立って考えておられることを強く感じた。

どれもこれも、使い慣れない敬語を話し着慣れないスーツを着ての経験で、大人の世界を直に感じることができた。地域との連携が大切であるというようなことを多くの場で耳にするが、その実践を少し体験してみたという感じである。あのときの緊張感から多くを学べたと思う。それと共に、こちらの思いが通じたときや親身になって話に耳を傾けて下さったとき、また予想以上に協力的に振舞って下さったときの嬉しさも、感動的だった。

5. 得たこと

得たモノは素晴らしい仲間。これが何よりである。こう感じているのは私だけなのかもしれないが…。最高の仲間にも恵まれすぎた。幸せすぎた。嬉しすぎた。強烈に頑固な私、大切どころが抜けている私、ワガママ勝手な私、よく食べる私、大事な日に寝坊する私、そんな情けないありのままの私をイベントプラザのみんなは温かく（冷ややかに!?) 受け入れてくれていた。中でもやはりプラザ長タカシ、もう一人の副プラザ長マミンコの二人には多大なる迷惑をふりかけてしまった。歴史に名を残す名トリオだ。そして多くの愉快で頼もしい個性溢れる仲間たち。いつもみんなに支えられ助けられていたように思う。

その他に得たコトとしては、「2.」でも触れた企画運営のノウハウ。と言いたいところだが、企画運営を行う能力を得たというよりは、企画運営という本があったとするとその目次に目を通したというレベルだと思う。一通りを体験したけれど、まだまだ上澄み液である。今は、その大変さや達成感などをとりあえず知ることができた段階である。今後、いつかこの本を読破したい！奥底まで潜ってみたい！というような気持ちがしている。近い!?!将来私が先生になれる日が来るのなら、ぜひとも追究したい課題とも言えるだろう。

さらに私の欲張りな性格上、これからの人生において生かされると思うことを学んだと思う。それは、物事には優先順位があるということである。私はこのYOU遊広場の他にバレーボール部にも所属しており、また専攻は保健体育で体育科の一員でもある。このことが私を深く大きく悩ませ、これが原因で幾度となく憂鬱な気持ちにさせられた。全部を（自分の中で）完璧にこなそうとして、結局全部が中途半端になるという悪循環である。この大問題を克服できたのはつい最近のことだと思う。全部に良い顔をしようとしても、いつかは限界がくる。時間的にも体力的にも精神的にも無理が生じてしまうのだ。今は、欲張ろうとして失敗した結果、みんなに迷惑をかけたり不愉快な思いをさせたりしたことからやっと身にしみて、物事を割り切って捉えて考えていくことができるようになったと

思う。決断することとは捨てることだと教わった。捨ててしまわないまでも、他の人にきちんと任せたり、前もって欠席することを知らせたり、初めから力になれないことを伝えたりすることで、お互いにもどかしい嫌な思いをすることは回避できる。今自分にとって一番大切なことは何であるか、その重要性和緊急性の度合いをよく考えて行動すれば、どんなに忙しいときでも自分を見失わずに過ごすことができる。その判断を下す私なりの基準や価値意識といったようなことが身についてきたと思われる。基本はやはり、人に迷惑をかけないこと。これである。人に迷惑をかけると言うことは、結果的には自分にそのツケが回ってくることにもなり、困るのは自分である。自覚を持って、そうならないようにきちんとした見通しを持って計画的に行動することができればスーパーマンだ。このことも、これからの生活においていつまでも追求していくべき重要な課題である。

6. 思い出★

寝坊魔。しかも本番当日、一番大切な日に限って寝坊をしていた最低な私。二つの目覚まし時計にも気付かずにグウスカ眠っている私の神経を見たい。けれど得意の言い訳にしかならないが、朝起きられない時には決まって同じ理由があった。イベント本番を控えた前日の夜になってから恥ずかしながらもやっぱり不安で眠れずに、一人せつせとカンペ作りに励んでいたのだ。アイスブレイクや説明などの時に言う言葉を一字一句メモしておかなければ気がすまなかった。本番ではそれを読み上げるわけにはいかないので結局はフィーリングやその場の雰囲気で行うことになるのだけれど。それに加え当日の流れをもう一度頭に入れようとタイムスケジュールを眺めたり、色んなことを考えたりし出すと辺りは薄暗くなってきて、気付いた頃にはチュンチュンと朝方。それから焦って高ぶった神経を必死で沈ませ、寝入った二～三時間後には集合時刻がきてしまう。案の定→遅刻●遅刻をしてしまったという嫌悪感でショボンとなりながらも、気持ちを入れ替えて頑張るしかない！試練だ！などとマミンコやタカシからの密かな冷たい視線!?をひしひしと感じつつも自分に言い聞かせてやる気を出していたことを鮮明に覚えている。ごめんなさい。

このことから言えるのは、自分の性格がそういう性分なのだから、前日までにカンペ作りを終え、万全にしておいて前夜はゆっくりと落ち着いて寝ることを心がける必要があるということだ。もしくは、カンペを作らずにイメージトレーニングだけくらいにしておいて、ぶっつけ本番で体当たり作戦を行う度胸を持つことができればよいと思った。また、突然全体の話になるが、万全にしておくという観点からすると最高なのは、前日は何もしないという状態にしておくことだ。前日、最終確認や天気予報をチェックするなど、全く何もしないと言うわけにはいかないまでも、前日にしかできないこと以外の全て（心も）の準備を前日までに終わらせておくことが望ましい。これが遂行できたなら、かなり余裕を持って本番に挑めるであろう。また、緊急事態にも迅速に対応できるだろう。けれどこれは本当にハイレベルだと感じる。いつの日か、そんなスーパーな企画を進めたい。

7. ごめんなさい●

先にも言ったけれど私は欲張りな性格なので、当初はイベントプラザだけにとどまらず他のプラザにも参加したいと思っていた。けれどそれがたたって、結果としては中途半端に参加したことで迷惑だけをかけて終わってしまったということになる。このことを勝手にプラス思考に捉えさせてもらうならば、初めだけでも他のプラザに参加させてもらったことで、知らなかった世界を垣間見ることができてよかった。ナスちゃんの田んぼのこと、

ミワの畑のこと、ミキの不登校のこと、またアッコプウのふれあいプラザ、二年生のときに経験した養護学校へ通う子どもたちのことなど少ない機会ではあったけれど、自分の目で見て肌で感じ、得るものはかなり大きかったといえる。ただ、やはり途中から、他のプラザとの掛け持ちに無理が生じて他プラザの活動に参加ができなくなり、せっかくやらせてもらっていた系の仕事や、せっかく入れてもらっていた班の活動を中途半端なままに辞めてしまうことになった。申し訳ありませんでした。この場をお借りして謝罪させていただきます。本当に本当にごめんなさい。またプラスに考えると、プラザは違うといっても同じYOU遊広場の仲間の考えていることや頑張っている姿などを知ることができたので、それが返ってプレッシャーでもあったけれど、頑張れる素にもなっていたと思う。

8. 最後に☆

私が今までYOU遊広場という活動をやってきて一番強く思うことは『気持ち』である。竹の部屋を行き来しこの活動に参加する人というのは、何かしら自分なりの目標をきちんと持っており、やる気のある人たちばかりなのである。だからこそ、プラザに関わっている人ならば違う活動をやっている人でもお互いの気持ちを通わせることが容易であったと思う。また、何かをするにつけても意欲的・積極的で自主性があり、温かみのある気持ちを感じるが多々あった。私はそれに何度も甘え、救われた。

そしてもう一つ大きなものがうっすらと見えた。それは『資質』である。それぞれの人が持っている資質。色んなことを経験し体感し考える。その中で自分にとっての向き不向きを感じるがあった。理想は自分がやりたい係について頑張るということかもしれないが、一度もやったことのない係をやってみたり、むしろやりたくないと感じる係に挑戦したりしてみることでその大変さが分かったり、自分への向き不向きを再確認することができると思う。ここで一番いいたいのは、自分がどんな人間なのかを知ることの大切さ。自分の持っている資質を知ると言うこと。これからの生活では、無理かなと思われるような困難に立ち向かう勇気ややる気ももちろん必要だが、それ以上に自分の適性や資質をわきまえた上で判断して取り組む姿勢が大切なのではないかと考える。そうすることで自分を最大限に活かせ、また専門性が備わってきて自信へとつながっていくのではないと思う。私の目標である教師になるということ。これに必要な条件としてある先生がおっしゃった言葉…教師には情熱と資質が必要だ。今まで私は情熱(『気持ち』)さえあれば何とかなると思っていたが、『気持ちと資質』の両方が揃っていてこそだということを実感した。現時点でこれまでの経験を踏まえて考え、私が捉えている私の持ち合わせている資質とは何か。恥ずかしいが書いてみる。基本的にいつも明るく元気である。身体を動かすことが好きであり億劫でない。よく笑う、笑っていることが多い。人と接することが好きである。動植物や自然が好きである。プラスの要素としてはこのくらいだ。マイナス要素…時間を守れない。我が強い。お節介。甘え上手。人任せ。面倒くさがり。これらのマイナス要素は資質とは違うのではないか。つまり、マイナス要素が良い資質の邪魔をしているのだろうか。せっかくみえてきた良いトコロを活かすために、マイナス要素を取り除く努力をしなければならぬ。そうすれば、プラスの要素は私のより良い資質として定着していくのではないだろうか。イベントプラザ、YOU遊広場を通して以上のような様々なことを感じた。これらを糧とし財産として、これからの自分の原動力としていきたい。子どもが大好きな私。けれど「好き」という気持ちだけではやっていけないことを知った。もっともっと多くを経験し蓄積し学んでいきたい。

興譲館の活動を振り返って

— 興譲館の精神と具体的な学びの成果について —

小林則雄 地域スポーツ専攻 4年

It Looks Back Upon Activity of Koujoukan

About the Soul of Koujoukan,
and the Result of Concrete Learning

KOBAYASHI Norio : Major : Lifetime Sports, junior

1. 興譲館の活動を振り返って

より具体的な活動報告は別途まとめられるので、個人的な見解を含めて活動を振り返ってみたい。

興譲館発足以来、およそ一年。①導入期、②方向の確認期、③実践期の三期に大きく分けて振り返る。

2. 興譲館の精神

興譲館の活動を行うにあたり、何を念頭において活動したか。興譲館という組織での活動であるから、組織全体の考え方をある程度統一して行動することが必要となる。このため随分と多くの時間をさいて論議を重ねた。個人的な意見に固執したばかりに、多大な時間をかけてしまった反省がある。しかしながら、興譲館をすすめていく上で、基本的にどうしてもしっかり据え付けておく必要があると考えた事項については、時間をかけて論議した。強力な原動力となるモーターは、しっかりした基礎に据え付けモーターの軸の中心を定めて初めてその力が発揮できるという事実を基に考えた。

①興譲館は、21世紀の日本を背負ってたつ人材の教育機関である。

②興譲館は、理想を掲げた組織である。

③興譲館は、実践する組織である。

3. 具体的な取り組み

委細な実践記録は、別項（別の担当）に譲る。ここでは主として基本的な考え方の具体的な取り組みについて述べる。

多くの論議を経て活動したというのが、実感である。子供との活動時間よりむしろ論議の時間の方が長かったかもしれない。

①導入期：興譲館発足から子供の参加まで

興譲館の進め方について多くの時間をついやした。教育に対する経験・考え方のばらつきをどれだけ揃えていくか、の時間でもあった。机上にばら撒かれたカードを、一ヶ所に集

めて積み上げる作業も一部にあったかもしれないが、むしろカードを前に、どんなゲームをしようかといった相談に似ていたかもしれない。

興讓館は、教育機関である。不登校、引きこもりという衣服をまとった子供らと、我々がどんなゲームを行うかが焦点であった。(当時は、なかなかそれが見えなかった。)

ここで一番主張したのは、興讓館は、教育する場、あるいは道場。真剣勝負の戦い、戦場であるという認識であった。

子供に対して、譲れないものが確実に存在しているという認識を、共通認識する作業といっても良い。だから長い論議が必要であった。一人ひとりが、教育とはなにか、自分が具体的にどんな得物をもって戦うかを考えさせられた時期でもあった。「得物がはっきりしないけど、戦闘意欲だけはあるぞ」という認識を持った人もいただろう。(だから教育の場・実践の場でもある)

原山館長は、よく皆をリードした。昔の各藩校であった興讓館もかくありなんと想像しただけで楽しかった。(事実、徳山藩(私のふるさと)の藩校は、「鳳鳴館(ほうめいかん)」という名称であったが、激動の時代を前に、その名前が時代にあっているかと喧喧諤々の論議があって興讓館に改めたという歴史がある。)

②方向の確認期：子供の受け入れから夏休みまで

具体的に子供を受入れて活動が始まった。理想は理想として、現実には子供を前にどのように行動すればよいか大いに悩み考えたのがこの時期である。導入期に描いた姿との違いや、杞憂を思い知らされもした。理想を掲げた若さは素晴らしい。

初夏の太陽という大きく偉大な教師と共にスタート出来たのは、非常によかった。キャンパスというフィールドと行動する熱意が子供らの背を押した。

一気呵成に子供達の中に入り込めた。これは事実である。これがその後の実践期につながった。

「興讓館は、教育機関である」ことを念頭に、どう実践するか作戦を考えた。少しづつ具現化していった。その一つが、朝の挨拶、靴の整理、音読などであった。

③実践期：夏休み前くらいから現在まで

教育の場をどう具現化するか、一番の論議のテーマでもあった。曰く「学校みたいじゃないか」「字や絵を強制させないでと、親から言われている」云々。子供は、大人の、親のおもちゃか?という疑問が強い。限られた子供という時間になにをして、社会に巣立って欲しいかという願いから、「音読」「100マス計算」あるいは「漢字ドリル」が具体化した。

これらが十分にその役割を果たしたか考えると、忸怩たるものがある。ただその方向性と方法は間違いではなかったという、確信はある。

個人的な希望を言えば、「音読」ではなく「素読」を試みたかったが、残念ながらその素養がなかった。後輩に譲りたい。学校の教育、もっといえば「学習指導要領」が絶対的な教育方法ではない。もっと教育は、幅ひろいものである。これらは学校という組織で実施する場合に、最低必要な水準を示した規格である。興讓館は、それにとられるより、その中から必要なものを取捨選択して行けばよいのではないか。

4. 興譲館の学びとその成果

興譲館の一日は、基本的に出席してくる子供の自由裁量に任されているが、興譲館としてのけじめや趣旨から幾つかの決め事を設けた。主として、私が担当したものについて報告する。

①朝の挨拶

興譲館の一日の初めを示すものとして国旗の掲揚を考えていた。国旗に対する認識を新たにしたいこと、国立大学のキャンパスであり国の施設だからということからである。残念ながら適当な掲揚すべきポールがなかったことと、場所が見つからなかったことから、国旗はあきらめた。

かわりに、興譲館の近くにある大きな胡桃の木の枝にロープを架けて、ブルーピーター旗（国際信号旗でアルファベットのPを示す）を掲げることにした。このP旗は、「我、出港準備中、総員ただちに帰艦せよ」という意味であり、ヨットレースでは準備信号旗と呼ばれるものである。もじって「全員集合」とも解されることもある。

子供達には、この旗が掲揚されている時は、興譲館が開講されているときだと徹底した。当初はものめずらしさもあって子供達によって掲揚されていたが、その内に忘れられてしまった。

興譲館の部屋に集合すると、全員揃ったところで、正座して「おはようございます」と大きな声で挨拶を行うこととした。これは最後まで行われた。

②音読：声に出して詩や文を読む

古来、日本では素読と称して四書五経を声に出して読むことが一般的に行われていた。個人的にも好きで、時々「五輪書」などを一人音読していた。

朝夕、一日のけじめとして正座して音読をすることを提案した際、皆から大きな反対を受けた。

「学校みたい」「不登校にはなじまない。学校を想定させる」等々が主な理由であった。一日のけじめをはっきりさせ、興譲館の精神を伝えるには、ほかにどんな方法があるか考えられない、最悪、途中で止めると強行させてもらった。

幸い、ベストセラーになった「声に出して読みたい日本語」（齋藤 孝著・草思社）があったことから、その中の論語を選んで読むことにした。

最初は私が一区切り読む、そのあと全員が唱和する。読み終わったら、隣のひとがリード役となって読み、続いて唱和するという方法で、全員がリード役を行う。参加者が5名いれば、都合10回読むことになる。

「ここで大事なことは、引っかかってもいい。意味が理解できなくてもいい。大きな声を出して読むとどんな気持ちになるか、きつといい気持ちになるだろうからそれを味わって欲しい」と、繰り返し伝えたことだ。短文からはじめたこともあって、混乱はまったくなかった。素直に取組めた。

何回か行う内に、もう覚えちゃったという声も出るようになった。そんな時は、「素晴らしいな」「凄いな」と寸刻おらずに褒めた。

音読している時、子供の様子を注意深く観察する。まだ緊張している。だいたい慣れてきた。健康はどうか等々である。それを参考に、当日の接し方を考えていった。

「敦盛（幸若舞）」が意外に好評で、暫く読んでいたようである。

日経ビジネス、新聞などの記事で、元気の出そうなものがあれば、それをコピーして同様に音読した。長さによって必ずしも全員が音読したとは限らなかったが、その記事の背景などを説明しながら話をするように心がけた。

習慣として定着することが出来た。

③100マス計算

学ぶということをどのように導入すべきか悩んでいた頃、読売新聞（平成14年6月3日）朝刊の家庭欄に「読書き計算」反復徹底」と陰山先生の取り組みが紹介された。新聞記事を手掛かりにインターネットや関連書籍を取り寄せ調べてみると、とても興味を引く内容のものであった。

興譲館の学びの趣旨にも合致することから、導入することにした。

一桁の足し算の100マス計算からスタートした。それでも抵抗をもつ子供がいた。「これは試験ではない、あくまでも自分への挑戦である」ことを何度も説明した上で実施した。九九の段になってくると、涙を流して一層抵抗する子供もいた。「分からないところはパスしてもよい。後でゆっくり考えるなり教えてあげるから・・・」と全員で実施することを強制した。少しずつでも出来るようになってくれば、あまり強い抵抗は見えなくなった。

H児童保護施設でのお手伝いの際、補習のお手伝いをしたが、教科書や参考書が十分に読めない子供がいることを知り愕然とした。まず読む力をつけることが全てに先行すると、読書きを志向することとした。

幸い、陰山先生の著書にコピーして使用することが示された国語のドリルがあった。これをベースに興譲館スタイルにして、漢字の書取練習を始めた。

やはり冒頭に「これは試験ではない。あくまでも自分への挑戦だ」と説明した上で実施した。全員が同じものを用いて行うこととし、音読の要領で、まず私が例文を読む、全員が唱和する。隣の人がリードし全員が唱和すると、書取を行う前に、何度も声に出して読んだ。その後、書取用紙を配り、漢字の書取を行った。

合わせは、先生役の学生が当初は行ったが、途中から各自が最初に読んだ例文と比較し答を確認することにした。更に進んで分からない漢字は、各自が持参した辞書を引いて確認することとした。例文が結構楽しく読めるように書かれていることもあって、笑いながら読んでいくことも多くあった。

「字を書け、絵を描けと言わないで欲しい。それが理由で不登校になった」と、保護者から言われていた子供も辞書を引くまでになった。積極的にこの漢字ドリルに取り組む子供も増えていった。

この学びを通じて、学習に対する自信と意欲を子供達自身が再発見したのではないか。レベルの違いのある中で同一の課題に取り組む難しさを痛感した。小学校で覚えるべき漢字全てのドリルを作成したが、全て消化できなかった。

このような取り組みを通じて、子供への個別学習や取り組み方法のヒントを多く得ることが出来た。今回その全てを実践できなかったが、この体験は次の場で大いに生かされると考えている。

5. 今後に向けて

一年の反省を踏まえて、今後どうあるべきかを考えたい。

多くの子供が興譲館に参加した。年末には、5名の子供が学校へ戻ると自らが決断し戻っていった。教室にどれだけ戻って行ったかは、今後の報告を待たなければいけないが、少なくとも学校の門をくぐり胸をはって、「相談室」に戻っていったことは確かである。まだ興譲館へ来ている子供達も、見違えるような姿になった。驚くような体格に成長し自分の意見もはっきりと発言できるようになった。興譲館に関わった者としてこんな喜びはない。

「一源三流」の言葉のうち「汝、友のために汗をながせ。汝、自らに涙をながせ」は、十分に体験できた。参加してくれた子供達に感謝を捧げたい。

基本的に、現在の興譲館の進め方は、間違えていない。むしろ進むべき道を見つけたと自信をもって良い。

①興譲館の理想（基本的な考え方参照）を忘れない。

②興譲館の肉付けを行う。

この二つに尽きる。あくまでも実践の場、それも真剣勝負の戦闘の場であることを肝に銘じておくことが大事である。子供も私達も、時間はもどってはこない。いまが今でしかないのである。

興譲館一年を振り返り、取捨選択しながらバージョンアップして行って欲しい。がしかし、興譲館の理想は忘れずにいて欲しい。

*子供の表記は、間違えても「子ども」にしないこと。「子ども」表記は、子供にたいする差別語であり日本文化の冒瀆である。



完全学校週5日制における地域教育のあり方

—「信大YOU遊広場」の持つ可能性—

町田竜太 社会科学教育専攻 4年

The State of the Local Education in a Perfect Five-Day

Week School System

—A Possibility that Shin-dai YOU-Yu Plaza Has—

MACHIDA Ryuta : Major : Social Science, senior

【キーワード】 地域教育力、少年野球、ゆとり、生きる力、学校週5日制

1. はじめに

昨年筆者は第1期の運営委員長を務め、今年度の活動はその経験を生かし1歩下がった立場で後輩の活動を見守り、共に活動してきた。実際に運営の立場にいる時には日々の活動をこなしていくことに精一杯であり、立ち止まって周りを見るという余裕はなかったが、今年度は距離を置いた状態で「信大YOU遊広場」とは何かを考えることができた。

そこで本論文では、運営と研究主任という両方の立場を経験することで見えてきた「信大YOU遊広場」の姿をまとめ、筆者が卒業論文で扱った少年野球の持つ地域教育力を事例として、これからの地域教育、そして「信大YOU遊広場」の持つ可能性について考察していく。

2. 視点を変えて見る「信大YOU遊広場」の姿

「サタデーとの1番の違いは年間を通して活動すること、そして学生のやりたいという思いを実現できる場にしました。」

この言葉は筆者が第1期運営委員長を務めた時に報道関係の方や他大学の人にサタデーとプラザの違いは何ですかと質問された時に答えたものである。「信大YOU遊広場」の1つ目の姿は、中心となって活動する学生が何を目指してこの活動をするかということである。学生の意識に合わせた活動内容にすることは、1年間という長い期間継続的に活動していくためには必要不可欠なことであるといえる。この1つ目の姿を失うことがなければ、これから名称が変わることがあっても、教師を目指す学生がいなくならなければ「信大YOU遊広場」のような活動は途絶えることがないと筆者は考える。

しかし、学生の思いを実現できる場だけを形にしていってはこの活動は成り立たない。現在「社会体験実習」という授業の単位にもなっているし、信州大学教育学部のフレンドシップ事業にも教育参加と並んでこの「信大YOU遊広場」の活動が位置付けられている。これが「信大YOU遊広場」の持つもう1つの姿であるといえる。大学として、研究機関

として地域に発信する役割を同時に持ち合わせているこの活動では、学生の思いと大学の求められていることの両方を満たすことで初めてその活動の評価ができる」と筆者は考える。

では、実際に活動している学生や、現在第3期を立ち上げようとしている学生に、もう1つの姿が見えているのかといえば、それは無理な注文である。活動の中心となって動く学生にはやりたいという思いを大事にしてもらい、土井先生を始め、活動の中心から離れた4年生や大学院生が活動を側面から支え、2つの役割を満たすことができる活動にしていけばいいと考えられる。

3. 少年野球からみる地域教育のあり方

先ほど「信大YOU遊広場」の持つ役割の中で、研究機関として地域に発信する役割があると述べたが、何を地域に発信する必要があるのか。筆者の卒業論文から考察していく。

(1) 完全学校週5日制のねらいと「生きる力」

平成8年度中央教育審議会答申には、「子どもたちに「ゆとり」を確保する中で学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、子どもたちに生活体験、社会体験や自然体験などの様々な活動を経験させ、自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの「生きる力」を育むため、完全学校週5日制の実施を提言する。⁽¹⁾』とある。

つまり完全学校週5日制下における地域教育は子どもたちに「生きる力」を身につけさせるような活動をしていかなければならないことが分かる。そこで筆者は、中央教育審議会答申が定義した、子どもたちが身に付けるべき「生きる力」＝自分で課題を見付け、自ら学び自ら考える力、正義感や倫理観等の豊かな人間性、健康や体力⁽²⁾を以下のように解釈し、4つの定義にした。

① 自ら課題を見付ける＝自分のできること、できないことを知ろう

今の子どもたちはできることは進んでやるが、できないことに対してあきらめが早く途中でも投げ出してしまう子が多くなってきたように思われる。休日に行われる活動などに参加することで、子どもたちにチャレンジ精神を持ってもらいたいと考える。最初は出来なくて誰かに教えてもらってもいいが、そこでできるようになったことをまだできていない人に教えてあげたり、自分自身もできないと思っていたことができるようになる喜びを味わうことができるはずだ。できないことをたくさん経験させることで、次はできるようになりたいなど次に向けての自分の目標や課題を見つけることができるはずである。

② 自ら学び、自ら考える力＝向上心を持つ

自らが行動を起こすということは、自分をもっと伸ばしたいという向上心がなければ始まらない。学校の授業でも子どもたちが先生から与えられるだけでなく、自分たちが考えるような内容が増えてきているが、必ずしも自分の興味のあることをできるわけではない。そこで休日には、自分の興味のある活動をし、その中で自己を高めていくことが重要であると考えられる。

③ 正義感や倫理観等の豊かな人間性＝言いたいことを言える友達関係を作ろう

教室の中だけではその子の持つよさを十分に発揮できないこともあるであろうが、場所が変われば友達の新しい一面を見つけたり、逆に友達から見直されることもあるものであ

る。教室とはまた別の人間関係が生まれることによって、お互いの信頼関係を高めて、なんでも言い合える友達を見つけていくことが重要であると考え。

④ 健康や体力＝外に出て活動する時間を増やそう

家の中に閉じこもっていてもは新たな知的発見をするどころか、体力がなくなり健康的な生活が送れなくなる。小さいうちから外にたくさん出て、大人になったときに自分の体力に自信が持てるようになってもらいたいと筆者は考える。頭だけ人間の成長を考えるのではなく、体全体を使って成長をとらえていくことが重要である。

(2) 少年野球をすることで子どもに身についた「生きる力」

- ① 自分のできること、できないことを知ろう→目標を持つことができるようになった
- ② 向上心を持とう→今の自分よりもうまくなりたいと思うようになった
- ③ 言いたいことを言える友達関係を作ろう→野球の友達とはなんでも言い合える
- ④ 外に出て活動する時間を増やそう→休日が野球中心になった

以上が筆者が取ったアンケート調査結果から、それぞれ4つの項目に該当する力が身についたことである。少年野球を通して子どもたちや保護者が身についたと感じている力、それは「生きる力」であったのだ。意識的に身につけさせる力ではなく、子どもたちが自らを高めようとしてついた力こそが真の「生きる力」といえると筆者は考える。

(3) 地域の教育は地域で

筆者は卒業論文の中で、長野市、千葉市の完全学校週5日制の基本方針や施策をまとめたが、プランは立ってはいるものの、具体的にたくさん子どもたちの現状にあった活動がなされているかといえは不十分であった。これからの5日制時代は、地域の子どもは地域で育てていくスタイルを筆者は提案したい。少年野球のようにたくさんの保護者の協力で運営していく形態をとることができれば、1人ひとりの負担も減り、同時に地域の子どもたちの現状をこの目で見るができる。これこそが本当の地域教育のあるべき姿であると筆者は考える。

完全学校週5日制が始まった今、5日制にしたねらいの1つである「生きる力」を子どもたちに身につけさせる活動を地域ですていくことが重要であることが分かる。「信大YOU遊広場」も地域の中に入り活動をしてきたが、大学が中心となってこのような活動をしていては、大学の周りの地域教育力は向上するが、日本全体で考えれば大学が近くにない地域のほうが圧倒的多数を占める。しかし、少年野球のような活動は全国的に行われており、その少年野球の持つ教育力は先で挙げた通りである。地方行政や大学などが行う活動に呼びかけてもらうまでじっとしているのではなく、少年野球のように地域の子どもたちは地域で育てる意識を持つことがこれからの時代に求められる地域教育のあり方であるといえる。よって、地域教育力を向上させることが重要であることを大学が地域に伝える必要があると筆者は考える。

4. 「信大YOU遊広場」の持つ可能性

(1) 単発的なイベントから継続的なイベントへ

—親子ふれあいプラザと信大YOUフェスティバル—

「第1期信大YOU遊広場」の5プラザに「里山ふれあいキャンプ」というものがあったが、「第2期信大YOU遊広場」では、その活動を発展させて「親子ふれあいプラザ」というものができた。「里山ふれあいキャンプ」では、年2回の単発的なキャンプの活動であ

ったのに対し、「親子ふれあいプラザ」は月に2回金曜日の夜に体育館などで体を動かす企画をしていき、その参加者から夏のキャンプの参加者を募集した。

また、「信大YOU遊サタデー」が年に数回の単発的なイベントで、参加者をその都度募集していたのに対し、平成13年度と平成14年度の12月に開催した「信大YOU遊フェスティバル」では、1年間「信大YOU遊広場」に関わってくれた子どもたちを中心に募集をかけた。

この2つの活動はともに単発的なイベントから継続的なイベントに変わったと考えられる。継続性を持たせることについて筆者は以下のように考察する。

① 人間関係を構築できる

この意味は、一度きりの活動よりも継続的に活動することの方が、個人の性格や考え方を知ることができ、より親密になれるということである。人との付き合いがうまくできない子どもが増えてきているといわれている今日においては、長い期間接することで子どもたちの人間性をお互いに認めてあげることができるであろうし、何よりも子どもたちに新しい人間関係をつくっていくことへの自信ができると考えられる。

② 自分の居場所が保証される

子どもだけに限らず、人間は1人では生きていけないものである。そんな時に自分の参加できる場所があり、そこでは自分を受け入れてくれるという事実があったらどんなにうれしいことであろうか。特に親子ふれあいプラザには2人のお年寄りの方も参加してくれた。なかなか外に出る機会がないが、この活動はいつも楽しみにしているというような話をされていたので、自分の居場所があることが生活を充実させる上でいかに大切なものであるか思い知らされた。

③ 生活にリズムが生まれる＝ゆとりができる

一見何かを始めると忙しくなるのが当然のこのように思われるが、筆者は何か予定が入っている時の方が時間を上手に使うことができ、むしろ心にゆとりができると考えている。学校にも時間割があるように、生活にも予定がある方が生活にもリズムが生まれ、充実した生活が送れるのだと筆者は考える。忙しい中に真のゆとりが生まれるのである。

④ 家族の会話が生まれる

参加者は継続的な活動になるといわゆる「お客さん」ではなくなる。時には参加者に企画してもらったこともあった。企画するためには参加してくる子どもと保護者の会話が必要になる。今の子どもの状況を見つめ、できることは何か、みんなに楽しんでもらうためには何をしたらよいかなど真剣に話し合ったと思われる。親が共働きの家庭が増えてきている中、家庭での会話はこれまで以上に子どもの成長を知る上で必要なものになると考えられる。

(2) 継続そして地域へ

『参加者は継続的な活動になるといわゆる「お客さん」ではなくなる。』と述べたが、参加者が活動にただ参加するだけでなく、自分たちから何かできることはないかと動きだしたことがきっかけとなり、今まで大学が中心となり運営してきたものを地域の人たちが受け継ぐ形を取ることができれば、地域の人たちによる地域教育がスタートするわけである。「信大YOU遊サタデー」そして「信大YOU遊広場」を活動していく中でたくさんの地域の人に参加していただいた。今こそ地域に人に、今まで築き上げたものを渡す時が来

たのだと筆者は考える。少年野球のように地域の子どもたちを地域で育てていけるようにこれからサポートに回っていくべきであろう。

しかし、「信大YOU遊広場」の役割はこれで終わったわけではない。これから学校・家庭・地域が連携しあって子どもたちを育てていける環境が整うまで、共に活動していく必要がある。そしてその役割を果たした時には、新たに出てくる問題の解決に向かってまた活動に取り組んでいただきたい。この飽くなき挑戦する心を持ち続け、「信大YOU遊広場」の持つ可能性が無限に広がることを筆者は後輩に期待したい。

5. おわりに

現場に出て、大学で何を勉強してきたかと問われれば、迷わずこの「信大YOU遊広場」での実践を答える。それだけの充実感と確かな自信がこの活動をすることによって身についたと感じている。そして「信大YOU遊広場」の卒業生としてこれから全力で教師という仕事にぶつかっていくつもりだ。

大学を、そして「信大YOU遊広場」を卒業するにあたり、筆者をここまで育ててくれた「信大YOU遊広場」に関わったすべてのみなさん今までありがとうございました。

(1) (2) 『中央教育審議会答申』文部省 1996年 より引用

引用・参考文献

尾木直樹『週休2日で子どもの頭が悪くなる！？』主婦と生活社 2002年

『子どもの体験活動等に関するアンケート調査』文部省 1996年

『中央教育審議会答申』文部省 1996年

『第1期「信大YOU遊広場」の実践－臨床の知を求めて－』 2002年

他



農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力

—「信大茂菅ふるさと農場」の実践の分析—

鹿子木愛 教育実践科学専攻 4年

A Practice of the Effect of Agricultural Experience for the Growth of Children

—Analysis of Practice at Shinshu University Farm “Mosuge-Furusato”—

KANAKOGI Ai : Major : Educational Science, senior

【キーワード】 農作業体験 自然体験活動 信大茂菅ふるさと農場

1. 目的と方法

子どもたちの自然体験が不足していると言われている今日、子どもたちに自然を感じてもらおうとあらゆるところで自然体験活動が行われている。そして、自然体験活動の1つである農作業体験も注目を集めている。子どもたちは地域で行われている農作業体験を通して、何を感じ、何を学んでいるのであろうか。「信大茂菅ふるさと農場」の実践から、農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力を明らかにしていく。

平成14年度の「信大茂菅ふるさと農場」に参加している子のうち、小学生44人を対象とした。平成14年度は、田植えとどろんこ遊び・田の草取りとフナを放す・かかし作り・稲刈り・脱穀を行い、年間を通してお米作りに取り組んできた。子どもたちの活動の様子を観察し、思い出しゃしん⁽¹⁾とアンケートを分析し、考察する。

2. 農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力

子どもたちが農作業体験を通して学んでいることは一人ひとり違うことが分かった。これは、同じ活動をして、思い出しゃしんに表われてくるものが違うこと、家に帰ってから家族に話している内容が違うことなどから明らかである。この点を踏まえて、農作業体験が子どもの人間形成に及ぼす影響力として次の7点が挙げられる。

(1) 多様な人とのふれあいの中から学ぶ

農場には、同年齢の友達はもちろん、異年齢の友達や大学生、地域の方やJAの方が参加している。このような環境の中で農作業体験をすることを通して、子どもたちはたくさんのかことを学んでいる。

6月2日には、田植えが行われた。手作業による田植えが終わった後、田植えを終えた田を見ながらお昼ごはんを食べようということで、坂を登り、田全体が見渡せる場所での昼食となった。きれいに植えられた田を見ながらの昼食は本当に気持ち良かった。この時の様子について、思い出しゃしんには次のように書かれていた。「田植えではなえを植える

のが大変でした。おべんとうを食べるため、上にのぼった。田植えを終えた田んぼを見ると、とてもうれしかった。上から見るときていにそろってよかったです。」(5年生I・Aさん)。田植えをすることは、I・Aさんにとって大変なことだったけど、大勢で1つのことをやり遂げた後の達成感は大きく、お昼ごはんを食べながら満喫したのだ。また、稲刈りの時のI・Aさんの思い出しゃしんには、「今日はいねかりをしました。なん回もやったことがあるけどこんなに大ぜいでやるのははじめてでした。手でやったのにとっても早く終わりました」と書かれている。I・Aさんは、今までにカマを使って稲刈りをしたことがあるけど、今回は大勢でやったので予想以上に早く終わったと感じている。みんなで協力しながら、この田んぼの稲を刈ったのだという達成感が表われている文である。

2年生のK・Nさんは、草取りの時の思い出しゃしんに、「今日、草とりをした。みんなと草とりをしてたのしかった。足がきもちわるかった。あめんほとかいっぱいいてきもちわるかった。でもみんなでやってたのしかった」と書かれている。K・Nさんは、土の感触や田んぼにいるアメンボを気持ち悪いと感じているが、みんなで草取りをすることで今回の活動が楽しくなったと感じている。また、一緒に活動をした友達や大学生や先生の絵が名前入りで描かれていた。このことから、K・Nさんは友達や大学生と一緒に活動をすれば、どんな活動でも楽しくなることを感じていることが分かる。

脱穀は千歯こきと足踏み脱穀機を使って行った。子ども6人、大学生3人で1つの班を作り、各班に1つずつ千歯こきがあった。1年生のO・Tくんは、待っている時も友達のやっている様子をじっと見つめており、自分の番になるととても嬉しそうにやっていた。そして、自分の番が終わると次の自分の番をととても楽しみに待っていた。O・Tくんは千歯こきでの脱穀が楽しくて仕方なかったのだ。でもその気持ちを抑えて、きちんと順番を守ることができていた。O・Tくんの様子から、子どもの人数に合わせて千歯こきを増やすのではなく、数は少なくとも、何人かで1つの千歯こきを使うことで、子どもたちは我慢すること、譲り合うことの必要性を感じてくれていると思った。

どの活動でも、年下の子の面倒を見る姿や、年上の子の真似をしてみようとする姿が見られた。異年齢の子と一緒に活動することで、子どもたちは異年齢の子との関わり方を学んでいる。

私たちは人と関わらずには生きていけないし、良い人間関係は人生を楽しくも豊かにもしてくれる。農作業体験を通して、良い人間関係を築いていく方法を子どもたちは自然に学んでいるのである。

(2) お米ができるまでの過程を知り、食べ物を大切にできるようになる

子どもたちへのアンケートから明らかになったことを述べる。活動に参加する前、お米の作り方を知っていましたかという質問に対しては、「とてもよく知っている」「少しだけ知っている」と答えた子は38%だった。そして、田植え・草取り・かかし作り・稲刈り・脱穀という一連の流れを経験した後、「とてもよく知っている」「少しだけ知っている」と答えた子は83%になった。この結果から、「信大茂菅ふるさと農場」での活動を通して、子どもたちはお米ができるまでの過程を知ることができたことが分かる。また、活動への参加回数別に見てみると、5回参加した子の75%、4回参加した子の57%、3回参加した子の20%、2回参加した子の25%、1回参加した子の0%が、活動後に「とてもよく知っている」と答えている。このことから、継続的な活動の意義も明らかとなった。

保護者の方に、「活動に参加する前と後では、お子さんのお米に対する意識は変わりましたか」という質問をした。その結果、「ごはんの時、白いお米だけの味を味わうようになった。ふりかけなどをかけずにおいしそうに食べるのです」「ちゃわんに残ったごはん粒を、じいちゃんばあちゃんが作った米だから残すなと言われると、一粒残さず食べるようになった。自分たちも作業体験したからこそと思う」「お米作るのって大変なことなんだね。ご飯大事にしなきゃ。とつぶやいていました」「新聞に載っていた脱穀を見て、私もやったんだよなー。大変だったよな。お米を大切にしよう。と言っていました」などの回答が得られた。このことから、子どもたちが食べ物を大切にしようとしていることが明らかとなった。

5年生のY・Tくんの思い出しゃしんには、「今日は最後の仕事のだっこくをしました。あしぶみだっこく機はやったことはあったけど、少しむずかしかったです。でも、せんばこきは力があるので、むずかしかったです。でも、米になってうれしいです。よかったなあと思いました。ありがとうございます」と書かれていた。この文から、Y・Tくんはお米作りの大変さと喜びを感じていることが分かる。

これらのことから、子どもたちは実際にお米作りを体験していく中で、お米が作られるまでの過程や苦勞を身体で覚えたり、農家の人の偉大さに気付いたりして、それが食べ物を大切にしようという気持ちにつながっていくのではないかと思う。食べ物は私たちが生きていく上で欠かせないものであり、食べ物を大切にできるようになることは、豊かな心を育む上で重要である。

(3) 自然とのふれあいの中から学ぶ

自然は自分の体で実感としてとらえるもので、自然から学ぶことは一人ひとり違う。ゆったりとした気持ちになれたり、心が落ち着いたり、自然というのは確実に何かを感じさせてくれる存在である。五感を使って土とふれあい、生き物とふれあい、田んぼの風景を感じることで感性が磨かれていく。自然とのふれあいは、豊かな心を育てるために欠かせない。

田植えとどろんこ遊びの日、子どもたちの思い出しゃしんには、太陽や空や土のように自然に関する描写がたくさん見られた。この日の活動は土とのかかわりをたくさんした活動だったので、土を描いている子がどの学年も多かった。また、太陽や空を描きたくなるような天気の良いさでもあった。思い出しゃしんに自然のものが表われてくるということは、子どもたちも自然を感じているからだと思う。

(4) 体験することで、自分に自信が持てる

脱穀の日に使った千歯こきは、実際にやってみると思ったより難しいことが分かる。刃のところに稲穂をひっかけて引くのだが、かなりの力がある。「せんばこきは力があるので、むずかしかったです」(5年生Y・Tくん)、「せんばこきでもちからがなきゃできなかったです」(2年生H・Yくん)、「いねをひっぱるとき、力がいりました」(2年生M・Sさん)。このように、思い出しゃしんを見ても、子どもたちの多くが難しかったと感じていることが明らかである。実際に千歯こきを使っている子どもたちの様子を見ても、「かたーい」「難しーい」と言いながら、かなり苦勞していた。しかし、ほとんどの子が諦めず、束を減らして少しずつやってみるなどと学生にアドバイスされながら取り組んでいた。また、「千ばこきをやる時、とっってもお米がとれるかんしょくがしました。全部とれるととっ

ても気持ちがよかったです」(5年生I・Aさん)、「せんばこきでだっこするととても時間がかかったけど、しっかりお米がとれました」(4年生S・Aくん)のように、難しかったけどその分お米が取れた時には嬉しかったという気持ちが表われている。苦勞の分だけ喜びも大きいし、自信にもつながる。

このように、子どもたちは「信大茂菅ふるさと農場」で、今まで経験したことのないことを体験している。初めは戸惑いながら不安気にやっている子も多いが、友達の姿を見たり、大学生からの励ましの言葉をもらいながら、田植え・草取り・かかし作り・稲刈り・脱穀を経験し、自分にもできることが分かる。このような体験が、子どもたちの自信へとつながっていくのだと思う。

(5) 地域を知り、郷土愛を育む

自分の住んでいる地域で農作業体験をすることで、この地域に適している作物を知ることができる。また、地域にはどんな人が住んでいるのかを知り、自分の存在を地域の人に知ってもらう機会にもなる。地域で思い出に残るような楽しい経験を積んでおくことが、郷土愛を育むことにつながると思う。

(6) 自分の気持ちや活動の様子を表現できる力がつく

思い出しゃしんには、「きょう草とりたのしかったよ。きょう食べたじゃがいもがおいしかったよ。きょう一日たのしかったよ」(2年生M・Sくん)、「ぼくは、かかしを作りました。ぼくは、図工がとくいです。思ったよりは、かんたんでした！うまくつくれてよかったです」(4年生K・Yくん)などのように、活動を終えて自分がどんな気持ちであるのかを表現している記述が多く見られる。また、アンケート結果からは、今日の活動の様子や感想を親に話している子どもがたくさんいることが明らかになった。自分の気持ちや活動の様子を表現することは大切なことである。これは生活科が目指している目標でもある。

『小学校学習指導要領解説生活科編』には、学年の目標の主旨として、「活動や体験したことを表現できるようになること」⁽²⁾と書かれている。

(7) 夢中になれる体験ができる

活動をしている子どもたちの表情を見ると、ほとんどの子がその活動に夢中になっていることが分かる。また、アンケートからも子どもたちがお米作りに対して夢中になっていたことが明らかになった。何かに夢中になれることで、さらなる探求心が子どもたちの心の中に芽生えることとなる。今の自分に満足せず、常に向上心をもつことにもつながり、これは生きていく上でも大切なことである。また、「信大茂菅ふるさと農場」に参加している幼稚園の子から小学生の子まで、全ての子が何かに夢中になっている姿から、田んぼにはどの学年の子も夢中になれるものが存在しているとも言える。

3. 終わりに

最後に、思い出しゃしんの分析・考察を行なって気付いたことを述べる。

(1) 低学年と高学年の違い

全体的な傾向として、1・2年生の子の思い出しゃしんには、「きょう、〇〇をしたのしかった」、「〇〇をしました。△△もしました。おもしろかったです」というような表現が多く見られる。一方、5・6年生くらいになってくると、「今日〇〇をして、△△だったので楽しかったです」のように、楽しかった理由も書けるようになる。また、5・6年生は

このような感想だけでなく、田んぼで発見したことや、次回への期待なども書いている子が多いという印象を受けた。

(2) 文字には表われてこない子どもの気持ちを考える

今回、119枚の思い出しゃしんの分析・考察を行なって、絵や文に表わされたことだけを見ていても、子どもたちの思いを理解することは難しいことを実感した。特に低学年の子に関しては、思い出しゃしんに書かれた文を何度も何度も読み返したり、絵をじっくりと見ることを通して、文字にはなっていない子どもの気持ちを考えることが必要である。その時に、子どもたちが活動の時に見せた表情やつぶやきなども考慮できると、より深く子どもたちの気持ちを理解することができる。一面だけで子どもを判断するのではなく、様々な見方をしてみるという姿勢が必要だと感じた。

(3) 田んぼには子どもたちの興味・関心を導き出す題材がいっぱい

思い出しゃしんには、子どもたちの心に残ったことが素直に表われてくる。私は、思い出しゃしんの分析・考察を通して、同じ活動をしていても、子どもたちの心に残ったことはそれぞれ違うことに気付いた。言い方を変えれば、田んぼには子どもたちの興味や関心を導き出す題材がいっぱいだとも言える。

4. 参考文献

- ・今西祐行『土ってあったかいね』岩崎書店 1994年
- ・宇根豊『「田んぼの学校」入門編』農山漁村文化協会 2000年
- ・海沼正典・土井進「学校や地域社会における農作業体験学習の意義」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究』第2号 2001年
- ・門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書 1999年
- ・志村昌之・土井進「農作業における子どもの「体験」と「学び」を結ぶ支援」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究』第3号 2002年
- ・土井進「信大茂菅ふるさと農場と信大牟礼ふるさと農場の創設」『信州大学教育学部・附属共同研究報告書』2001年
- ・豊島安明『子供たちに感動体験を』信山社サイテック 2001年
- ・中島克己『小さな田んぼから生まれた大きな夢と感動』文芸社 2000年

他 20冊

5. 引用文献

- (1) 思い出しゃしんとは、その日の活動が終わった後、参加した子どもたちが今日の活動の様子や感想を絵と文に表わしたものである。形式にはこだわらず、子どもたちに自由に描いてもらっている。活動の最後に描くので、毎回十分な時間が取れず、子どもたちは10分くらいで描いている。しかし、考え方を変えてみると、短時間で描くからこそ、本当に子どもたちの心に残ったことが絵や文に表われてくるのではないかと私は考える。
- (2) 文部省『小学校学習指導要領解説生活科編』平成11年5月、18頁。

キャンパスプレーパークにおける刃物の使用の意義

—子どもは刃物を使うことから何を得るのか—

小黒あかり 教育実践科学専攻 4年

Meaning of Using Edge Tool at Campus Playpark

—What does Using Edge Tool Make Children?—

OGURO Akari : Major : Educational Science, senior

1. 目的

筆者は、大学に入学してから幾多のキャンプにスタッフとして参加し、一昨年(2010年)の4月からは大学のグラウンドにおいて「キャンパスプレーパーク」という子どもの遊び場づくりの活動を行ってきた。その中で、子どもの刃物に対する興味の強さに何度も驚かされた。筆者が何かを作ろうと木を切っていると決まって「私もやりたい!」とやってくる子どもたち、小刀を「使っているの?」と恐る恐る尋ね、「いいよ」というと目を輝かせて何かを作り続ける子、何を作るでもなく、のこぎりでひたすら木を切り続ける子…。しかし、このような子どもの刃物への欲求に反し、子どもを取り巻く環境には刃物が驚くほど少ないように感じる。

卒業論文では、子どもが刃物を使える環境づくりはどのように行っていけばよいのかを追究した。その中からキャンパスプレーパークにおける刃物の使用の意義を中心に取り上げることにする。

2. アンケート調査

アンケートは長野市立K小学校3年から6年全員、長野市立S中学校1年から3年の各学年1クラスにおいて実施させていただき、回収率100%、285の回答が得られた。

3. 子どもの刃物の使用に対する欲求と実際の使用状況のギャップ(結果は次ページ)

図1からは、子どもの刃物への興味が強いことが分かる。中でも、包丁のように身近な刃物ほど、その興味が強い。また、刃物への興味は学年が低いほど強い。図2からは、興味の強さに対し、実際の使用頻度は少ないといえる。刃物を使用できる環境が少ないことが予想される。

4. 刃物を使用する子にみられる特長

①分析方法

質問「次の刃物をどのくらい使いますか。」に対する答えにより、それぞれの刃物について使うグループ(よく+たまに使う)と使わないグループ(あまり+全然使わない、どのようなものか知らない)を作った。この2つのグループに以下の質問の結果をクロ

■使ってみたい(使うのが好き)

■使ってみたくない(使うのが嫌い)

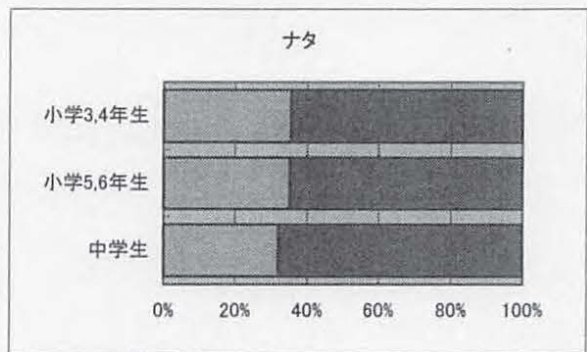
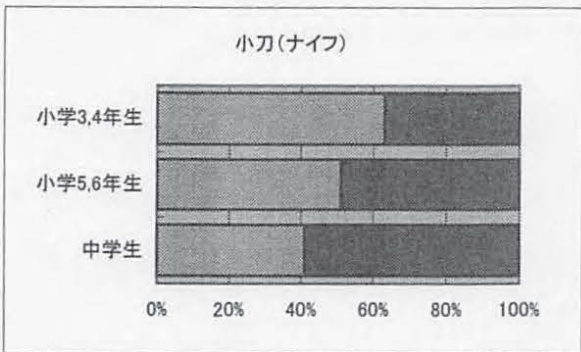
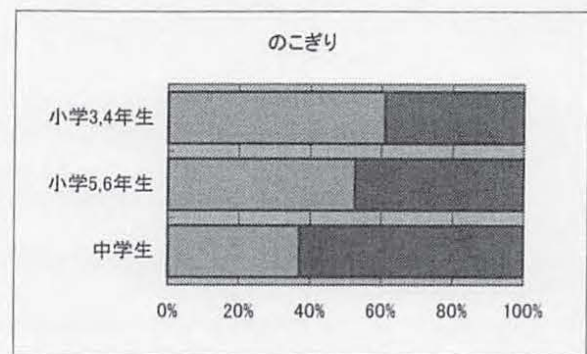
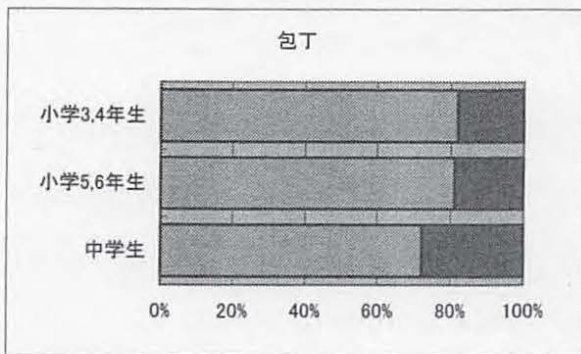


図1 刃物に対する子どもの興味(種類別)

■よく使う

■たまに使う

□あまり使わない

□全然使わない

■どのようなものか知らない

■未回答

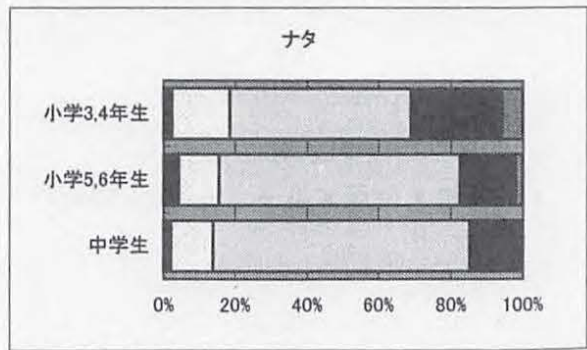
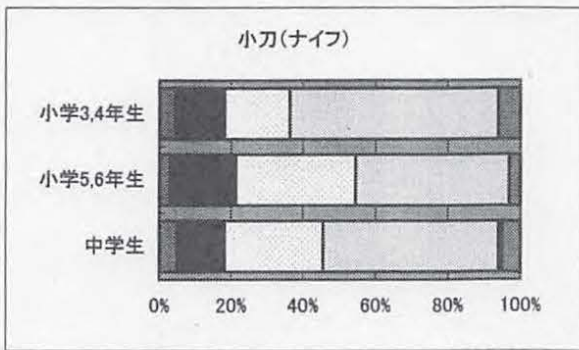
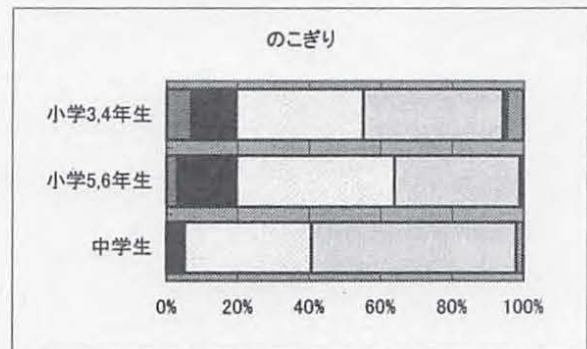
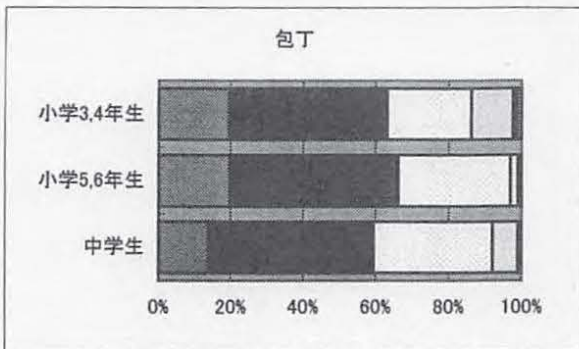


図2 子どもの刃物の使用頻度(種類別)

ス集計し、カイ二乗検定を施した。

- ・ 質問「包丁、のこぎり、小刀（ナイフ）、ナタなどの刃物を使ってみたいですか。」
- ・ 質問「「ナイフ」と聞いてどのようなことを思い浮かべますか。(3つまで)」

②分析結果

- (ア)「包丁の使用頻度」と「包丁への興味」についてのクロス表を作り、カイ二乗検定を施した。その結果、有意確率が 0.000 となり、1%水準で有意な差がみられた。
- (イ)「のこぎりの使用頻度」と「のこぎりへの興味」についてのクロス表を作り、カイ二乗検定を施した。その結果、有意確率が 0.000 となり 1%水準で有意な差がみられた。
- (ウ)「小刀（ナイフ）の使用頻度」と「小刀（ナイフ）への興味」についてのクロス表を作り、カイ二乗検定を施した。その結果、有意確率が 0.000 となり、1%水準で有意な差がみられた。
- (エ)「ナタの使用頻度」と「ナタへの興味」についてのクロス表を作り、カイ二乗検定を施した。その結果、有意確率が 0.106 となり、5%水準で有意な差はみられなかった。
- (オ)「小刀（ナイフ）の使用頻度」と「「ナイフ」と聞いて「危ない」と思い浮かべるか」についてのクロス表を作り、カイ二乗検定を施した。その結果、有意確率が 0.040 となり、5%水準で有意な差がみられた。
- (カ)「小刀（ナイフ）の使用頻度」と「「ナイフ」と聞いて「野外での生活」と思い浮かべるか」についてのクロス表を作り、カイ二乗検定を施した。その結果、有意確率が 0.002 となり、1%水準で有意な差がみられた。
- (キ)「小刀（ナイフ）の使用頻度」と「「ナイフ」と聞いて「工作」と思い浮かべるか」についてのクロス表を作り、カイ二乗検定を施した。その結果、有意確率が 0.077 となり、有意傾向がみられた。

③考察

<刃物を使うグループにみられる特長>

刃物を「使ってみたい（使うのがすき）」と感じている

分析結果(ア)(イ)(ウ)から、包丁、のこぎり、小刀（ナイフ）を使うグループには、その刃物を「使ってみたい（使うのがすき）」と感じている子が、使わないグループと比較すると多いと言えらる。有意確率が3つの刃物すべてについて 0.000 であることから、その差は顕著であると言えらる。分析結果(エ)では、ナタに関しては有意な差はみられなかった。しかし、それはナタを使うグループが7人と極端に少ないことが原因と考えらる。有意確率 0.106 であり、若干、有意傾向がみらる。

「ナイフ」が危ないものであると認識している

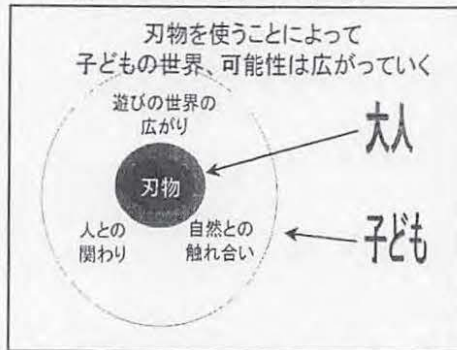
分析結果(オ)から、小刀（ナイフ）を使うグループは、「ナイフ」と聞いて「危ない」ということを思い浮かべる人が、使わないグループと比較すると多いと言えらる。

「ナイフ」を道具として認識している

分析結果(カ)(キ)から、小刀（ナイフ）を使うグループは、「ナイフ」と聞いて「野外での生活」「工作」ということを思い浮かべる人が、使わないグループと比較すると多

いと言える。

5. 刃物によって広がる世界



数十年ほど前まで、ほとんど全ての子どもが、鉛筆を削るために筆箱の中に“肥後の守”という小刀をもっていた。その“肥後の守”を持って山に出かけると、子どもの遊びはどんどん広がっていく。竹馬、竹とんぼ、紙・杉鉄砲、チャンバラの刀、下駄、山菜採り、糸巻き戦車、独楽、凧…。その中には人との関わりや自然とのふれあいが多くあった。

前述したように、近年、子どもの周りには刃物が非常に少ない。確かに、刃物の周りには危険が存在する。大人はその危険だけを見て、子どもから刃物を遠ざけようとする。しかし、さらにその周りには遊びの広がり、人との関わり、自然との触れ合いなどが無限に存在している。子どもはその想像力の豊かさからか、このような世界の広がりを感じとり、刃物に惹かれているのではないか。刃物を使うことによって、子どもの世界、可能性は広がっていくのだ。

6. 木の上にひみつ基地作りをした事例（小学3年生 女の子たち）

Y子「あの板を上にあげようよ！」

木の上で基地作りをしていた小学3年生のY子が提案した。一緒に木に上っていたH子とR子と筆者もその提案にのった。

（略：板をまっすぐに乗せるため、古くなった枝を切ることになる。）

Y子「①じゃあのこぎりとかとってくる！何がいるかなあ。のこぎりとかなづちとロープと…H子ちゃん取りにいこ！ぴっぴ（筆者）はここ（ひみつ基地）を守ってて！」

（略：持ってきたのこぎりを使って、Y子はどんどん枝を切っていく。）

しばらくすると、②のこぎりをやりたくてうずうずしてきたH子とR子が「私にもやらせてよ。」と言い始めた。Y子もまだやりたいようで代ろうとしない。最後までやりたそうなY子だが次第に喧嘩口調になってきたH子に交代した。

③Y子は切り始めたH子にアドバイスをする。

（略：H子はY子の言うことをそう簡単に聞き入れようとはしない。）

しかし、④今の位置からは切り辛かったようで、結局H子はY子のアドバイスに従った。

（略：切り終わると、焼いもを持ってきて木の上で食べた。）

板をのせると、まっすぐとは決して言えないが木の上にちょっとしたイスのようなものができた。子どもたちは、木の上でできた自分たちのひみつ基地にさらにひと工夫。⑤枝から下にロープをたらし、ひみつ基地作りはどんどん広がる。

子どもたちは、出来上がっていくひみつ基地を見にやってきた他の子やブレンジャーを、⑥「私たちの基地だから入れてやんない！」と追い返した。

<考察>

身近な大工道具

Y子の①の発言は、身近に大工道具があるというキャンパスプレーパークならではの発言である。「木を切っても良い、切った方が良い」となったところで、小学3年生女の子が、のこぎりや金づちをすぐに思いつき、すぐに使えるというのは現代ではほとんどないだろう。身近に大工道具があることにより、子どもたちの発想は広がり、思いついたことをすぐに実際の行動に移すことのできる環境ができています。

体験から学ぶ

はじめにのこぎりを使ったY子は、自らの体験から、どのように切ると切りやすいかを感じとっていること、またそれをH子にアドバイスしていることが③から分かる。また、H子も使ううちに④のように自らの体験から気付く。子どもたちは、実際に使う中でのこぎりの使い方を身に付けていっているのである。

ひみつ基地作り

子どもにとってひみつ基地作りは非常に魅力的なものである。⑥からも分かるように3人の女の子も自分たちのひみつ基地に強い執着を持っている。ひみつ基地作りには子どもを夢中にしてしまう何かがあり、夢中で何かをやり遂げていく。

また、ひみつ基地作りには、友だちとの関わりがある。その中では、②のように場を読みとること、気を使うことが自然と行なわれ、③のようなアドバイスの他、協力、けんか、それでも一緒に作っていることによって生じる仲間意識…。挙げていくときりがないが、人と人との関わりの土台となるものが、多く存在している。

のこぎりで枝を切り落とした後は、⑤のようにひみつ基地作りはさらに広がっていく。子どもたちにとってのこぎりを使うこと自体が目的ではなかった。あくまでも目的はひみつ基地作りであり、のこぎりはその可能性を大きくしてくれる便利な道具だったのだ。

今回のひみつ基地作りの中でのこぎりは大きな役割を果たした。もし、のこぎりが身近になかったとすると、子どもたちがここまでひみつ基地づくりに夢中になることも、ここまでの広がりをみせることもなかったと考えられる。

7. 私にとってのキャンパスプレーパークの魅力

とにかく楽しい！普通の生活ではできないことができる。思い切り遊べる。そして、地域の中だからこそ見ることのできる子どもたちの自然な真の姿、地域の方々とふれあうことの楽しさを身をもって感じることができる。キャンパスプレーパークの活動を始めたことにより、子どもだけでなく、様々な年代の知り合いが地域の中に急増した。そのことにより、地域を歩くのが楽しくなったと同時に、「地域の中に生きている」という実感が私の中に生まれた。私は、キャンパスプレーパークのような場所がなくても、人と人が自然とあいさつを交わし、地域の人によって刃物の使い方や魅力が伝わっていくような地域を目指したい。キャンパスプレーパークはそんな地域の火付け役となるだろう。

キャンパスプレーパークがこれまで2年間続けてこられたのは、土井進先生を始めとする諸先生方、長野市内で以前からプレーパークを作ってこられた遠藤正裕さん、「明るく・楽しく・仲良く」を合言葉と一緒に活動してきたみんな、けんかもたくさんしたけど一緒に遊んでたくさんの元気をくれた子どもたち、様々な形で協力してくださり、地域のすばらしさを教えてくださった地域の方々…。本当にたくさんの方々のおかげです。本当にありがとうございました。

保護者の視点で捉えるキャンパスプレーパーク

—子どもの放課後遊びに関するアンケート調査 自由記述の分析から—

岡部桂子 教育実践科学専攻 4年

Campus Play Park Caught with a Guardian's Viewpoint

—From Analysis of the Questionnaire About After School Play of a Child—

OKABE Keiko : Major : Educational Science, Senior

【キーワード】 キャンパスプレーパーク プレンジャー 保護者 人とのつながり

1. はじめに

筆者は、2年間キャンパスプレーパーク（以下プレパとする）で活動する中で、地域に根ざした活動をしていくためには保護者との連携が必要であると感じ、子どもの放課後遊びに関するアンケート調査（大人用）によって、保護者の意識を調査した。

本論文では、その自由記述から、プレパに来ている子どもの保護者がどのようにプレパを捉えているかを明らかにした。アンケート調査の配布数は28名、回答数17名、回収率60.7%であった。自由記述に関しては、17名全員から回答を得ることができた。300字を越えた回答も多数みられ、本調査、さらにはプレパに対する期待が大きいものであることがうかがえる。以下、各質問項目に分けて分析を行う。

2. 保護者の捉えるキャンパスプレーパークのよさ

プレパのよさに関する記述は、回答数16名回答率94.1%であった。記述内容は以下の4つに分類される。

- ① 大学生(プレンジャー)について 31回答中9
- ② 自由に遊べること 31回答中8
- ③ 交流の場となっていること 31回答中8
- ④ 施設としてのよさ 31回答中6

①には、「大学生は大人と違って、子どもの自主性に任せてくれる」「大学生がいることで節度のある縦・横の関係が作りやすい」「大学生がいてくれるので、安心できる」「大学生が責任を持って迎え入れてくれる」という記述があった。

保護者は子どもの遊びに対して、汚れるからやめなさい、危ないからやめなさい、とつい口を出してしまう。プレパで親子が遊ぶ中でも、そんなことはしてはいけない、と子どもが叱られる光景を目にすることがある。しかし、プレンジャーがここでは思う存分遊んでいいという姿勢で子どもたちを迎え入れ、プレンジャー自身も存分に遊ぶ様子を見て、保護者もプレパでは寛大になれるようだ。「大学生がいることで節度のある縦・横の関係が作りやすい」という記述があったが、子どもたちは日常の放課後には、あまり異年齢の

友達と関わる機会がない。子どもの遊びは、普段は知っている友達との中で行われるもので、同じ公園内で他学年の子どもが遊んでいても、あまり気にとめない。しかし、プレバでは、子どもはプレンジャーを交えて遊ぶ。プレンジャーは、プレバで活動する子どもたち全ての友達である。そのため、プレンジャーと遊ぼうとすると、知らない子どもとも一緒に遊ぶことになる。プレンジャーを仲介として、子どもたちもが自然と一緒に遊ぶのだ。知り合いでなかった子どもたちは、そのうちに子どもだけでも一緒に遊ぶようになる。

「大学生がいてくれるので、安心できる」という保護者の記述からは、プレンジャーが、子どもの安全に気を配ってしてくれるだろうという、プレンジャーを信頼する様子がうかがえる。筆者らは、「自分の責任で自由に遊ぶ」ということをモットーとして活動を行っている。全ての子どもたちの安全に常に気を配って、責任を負っている訳ではない。火や刃物などの危険なものがあり、多数の子どもがそれぞれのことをして遊んでおり、プレンジャーは、その見張りをするのではなく、一緒に遊んでいるのであるから、当然目が行き届かない。それにも関わらず、保護者は「大学生が責任を持って迎え入れてくれる」と捉えているのは意見の食い違いなのであろうか。しかし、実際の活動の様子を考えると、「自分の責任で自由に遊ぶ」という理念のもとで遊ぶ中で、プレンジャーが危険を発見すれば、声をかけて子どもがそれに気付くように促している。責任とは、小学館国語辞典によれば、「なすべきことをする」とある。プレンジャーが遊ぶ中で、危険に対して子ども自身がそれを回避できるように促すのは、その場で「なすべきことをした」のであるから、責任を果たしたことになる。保護者は、プレバに足を運び、プレンジャーの状況に応じた対応を見て、「責任を持って」やっていると捉えたのである。

②には、「何もないところ」「広いところ」「学校よりも自由なところ」「自由に好きなことができる場所」がよいという記述があった。「人工的な遊具や設備が何もない中で何をして遊ぼうか、自分で楽しみや遊びを見つけることも大事である」と考える保護者が多い。子どもの日常の放課後によく行われる遊びは、テレビゲームなどの与えられたものをこなす遊びが多い。その中でプレバのように遊びを自分たちで作り出していくのは、貴重な経験であると保護者は捉えている。「広さ」を求めるのは、近隣の加茂小学校の学区内には、子どもたちが走りまわったり、ボール遊びをすることのできるような公園が少ないことが背景である。また、学校とは違い、廃材が置いてあり、火や刃物の使用もでき、子どもの遊びたいという要求を満たすことができる。プレバに来る子どもの保護者はこれらの危険の伴う遊びを禁止せず、柔軟に認めている。「自由に好きなことができる」ということに関しては、上にあげたような遊び内容の自由さだけでなく、もう一つ理由がある。過去7年間信大YOU遊サタデーが子どもに提供してきた活動は、科学講座や農作業体験、キャンプ等、どれも事前に予約申し込みが必要であった。また、子どもは学生が決めたプログラムに従って動くものが多かった。プレバでは予約はならず、来たいときに来て、帰りたいときに帰ることができる。そして遊びも学生が決めるのではなく、子ども自身がやりたいことがやれる。それが魅力だと保護者は考えている。

③には、「異年齢で遊び、学べる場所」「友達がたくさんできる場所」「地域の人と関われる」などの記述がみられ、プレバの魅力が人に由来していることを裏付ける結果となった。人が集まり、交流できるのは、遊び場として魅力があることと、プレンジャーが人と人をつなげていることによる。

④には、「廃品物で遊べるのがよい」「基地みたいなものがよい」という遊び道具に関する記述と、「危険なものがない」「車の心配がない」という安全性に関する記述がみられた。

3. 保護者の捉えるキャンパスプレーパークの改善点

プレパのあまりよくない点の自由記述は17名中14名、回答率82.5%であった。記述内容は以下のように分類される。

- ① プレンジャーの対応について 19回答中6
- ② 設備が悪い 19回答中4
- ③ 来る人が固定されている 19回答中3
- ④ あまり知られていない 19回答中2
- ⑤ 開催日が少ない 19回答中2
- ⑥ 自己責任について 19回答中2

①には、「叱り方が甘い」「よいことと悪いことをしっかり教えているのか疑問」「大学生が特定の子どもと遊んでいる」という記述があった。②には、「仮設トイレがあればよい」「水道の確保をしてほしい」「資材がとほしい」という記述があった。③には、「来る子どもが固定されている」「初めての人は入りにくい仲間意識の高さがある」「プレンジャーがいつも同じ人である」という記述があった。④には、「あまり知られていない」「不登校児の行くところだと思っている人がいる」という記述がみられた。⑤には、「開催日・曜日が少ない」という要望が記述された。⑥には、「帰ってくるのが遅い」「遊ぶ時の安全面を家庭の責任としていること」との記述があった。「自己責任」とは、自分の身は自分で守ってほしい、保護者も積極的に子どもの遊びに参加してほしいというプレンジャーの考えから出たものである。しかし、なかなか保護者にはその意思が通じにくい。これから、いかに地域の方にプレンジャーの考えを伝えていくかが課題となる。

4. キャンパスプレーパークに対する意見・感想

「キャンパスプレーパークに対する意見・感想」では、回答は17名、24回答、回答率100%という高い結果を得た。記述内容を分類すると、以下のつに分けられる。

- ① キャンパスプレーパークへの感謝 24回答中15
- ② キャンパスプレーパークへの要望 24回答中6
- ③ キャンパスプレーパークへの批判 24回答中3

①としては、「いつも遊んでくれる学生に感謝」「自由に遊べる環境がよい」「今後も発展してほしい」「これからもお互い信頼できる場であってほしい」という記述がみられた。

②には、「もっと近所の父母に理解してもらったほうがよい」「他地域の人にも来れるようになったらよい」「大人にとっての居場所になればよい」という、プレパがもっとたくさんの人が広まる場になってほしいという提案や、「叱るときはびしっと叱ってほしい」というプレンジャーに対する提案、「道路に飛び出す子どもがいるので注意してほしい」という安全面の注意を促す記述が見られた。

③には、「雨や雪の時は中止してほしい。」「友達をさそってみるが、続かない。どうしてだと思いますか?」「大学生を呼び捨てにする、子どもと学生が対等の立場で遊ぶということについて、周囲の人に理解してもらえない」という記述があった。「雨や雪の時は中止し

てほしい。」という記述に関しては、雨や雪の時は閉めると決めていたが、少しの雨や雪では遊びを中断するのがもったいなくて、つい遊びを続けてしまうことがあった。しかし、遊んでいる間は楽しくても、悪環境の中で遊ぶことは子どもの体調にも負担になる。この保護者の意見を取り入れ、雨や雪が降り出したら、すぐに中止するようにした。

「友達をさそってみるが、続かない」という記述に対し、筆者は3つの理由を考えた。第1に、プレパで行われている遊び内容が、理解できないことである。泥遊びをすることや、刃物や火を使って遊ぶことに抵抗を持っている家庭がある。第2に、プレパを、大学生が遊んでくれる場所、面倒をみてくれる場所と期待してくる家族は、プレパの自由な遊びにギャップを感じることである。プレパは、遊んでもらうのではなく、自分で遊ぶ場所である。そのように頭を切り替えなくてはならない。第3は、「初めていった人はあまりその雰囲気になじめないような仲間意識の強さがあると言っていた」という記述があったように、常連の活動者がプレンジャーと親しく遊ぶことによって、初めて来た人は入りにくいと感じることだ。プレンジャーは初めて来た人が遊びに入りやすいように、プレパの説明をする、遊びに誘うなどの配慮をすることを心がけなくてはならない。

「大学生を呼び捨てにする」ことに関しては、筆者は何も疑問を持っていなかった。しかし、「私自身の抵抗感からか、部活時代を今でもひきずっているためか、年のせいか、大学生を呼び捨てにするのは気になります」という意見があったように、礼儀がなくなっていると捉える保護者もいるようだ。このような保護者が持つプレパへの疑問は、今後のプレンジャーと保護者のコミュニケーションによって解決していくべき課題である。

5. 人と人をつなげ、遊び場を作るプレンジャー

保護者の自由記述を分類していて、プレパの中での保護者の一番の関心はプレンジャーの存在や、対応であることが明らかとなった。プレパは、いつでも遊ぶ人が存在し、新たな交流ができる場となっている。それには、プレンジャーの存在が欠かせない。

プレンジャーは、人と人をつなげる役割を果たしている。異年齢の子どもが仲良くなるのは、プレンジャーがいることの効果である。プレンジャーを通して知らない子どもとも一緒に遊ぶようになり、互いの存在を認め合う。仲良くなった子どもたちは、プレンジャーの仲介がなくても子どもだけで遊ぶようになった。

プレパを運営するプレンジャーが大学生であることで、子ども、家庭、地域をつなげることができた。大学生は、年齢的には二十歳を超えている場合もあり、大人であるが、学生という身分であるので、社会的に子どもとしても考えられている。子どもたちはプレンジャーを大人として捉えているのではなく、お兄さん、お姉さんと捉えている。大人よりも親しみやすく、共に遊びやすい存在であることが、子どもたちにとって魅力であり、プレパに活動しに来るきっかけとなる。大学生は、大人でも子どもでもなく、価値観が固まっていない。その柔軟な対応が子どもたちに親しみを与えている。

保護者もプレパを運営するのが大学生であることに、肯定的な期待を持っている。価値観が固まっていないからといって、中学生や高校生であったなら、子どもが遊ぶのには適しているが、保護者は、子どもを共に見守る存在として捉えることができない。大学生ならば安心という信頼感が保護者の中に存在している。保護者にとってプレンジャーは、共に子どもの成長を見守る存在であり、年下の友人ともなる。地域の大人や先生が運営をし

ているのならば、保護者はプレパのあり方について本研究のアンケート調査のように率直な意見を言うことはできないだろう。大学生が運営していることで、親しみを持って話すことができ、保護者は意見を出す、協力するなどが可能になる。共に作っていこうという意思が生まれてきた。このような相互信頼関係ができるには、長期的な関わりと、対話が重要であった。保護者の信頼や協力を得て、プレパはさらに子どもたちにとって、楽しい遊びの可能となる場所となった。

プレパは、大学生が運営することで、子ども、地域、家庭にとって親しみやすい、開かれた冒険遊び場となり、現代の子どもたちによい外遊びの機会を提供しているということが、調査より明らかになった。

6. キャンパスプレーパークの実践から学んだこと

筆者にとって、プレパでの2年間の実践はとても実のあるものであった。まず第1に、筆者自身が、遊ぶということを謳歌できた。何もない中から遊びを作り出すことや、子どもたちと時を忘れて夢中になって遊ぶことは、かけがえのない貴重な経験となった。

第2に、2年間毎週2回という長期にわたって子どもたちと出会えることで、子どもの成長過程を見ることができた。今まで上れなかった場所に上れるようになった子どもの姿や、今まで一緒に遊ぶことのなかった子どもが仲良く遊んでいる姿を見るのは、とても嬉しかった。また、筆者自身が子どもの成長を望み、助ける、見守る、叱るなど試行錯誤しながら、子どもたちと関わっていくことができた。

第3に、保護者や地域の人との出会いがあった。今までさまざまな活動に参加してきたが、保護者や地域の方とは関わる機会がなく、遠い存在であった。しかし、プレパで火を囲みながら話をしたり、一緒に食事を作ったりする中で、筆者自身の大人への抵抗感は消えていった。子育てや人生の先輩としてアドバイスを頂き、たくさんのことを学ばせていただいた。また、保護者や地域の方がいつも笑顔で協力して下さることがとてもありがたかった。大学生という半分子どものような筆者らにとって、心強い支えとなっていた。

本論文は、プレパにプレンジャーがいることで、地域の遊び場としてよい影響を与えたという結論を出したが、本当によい経験をさせていただいたのは、筆者らの方であると思う。アンケート調査では、子どもたちや保護者の方から、たくさん意見をいただいた。プレパで活動している子どもや保護者にとって、プレパが大切な場所になっていることが分かり、嬉しく思った。また、筆者らの気付いていない問題点についての指摘もあった。今後これらについてプレパの活動者と相談しながら、答えを見つけ出していきたい。子ども、家庭、地域、大学生にとって、さらによい冒険遊び場を共に追求していきたいと思う。

<参考文献>

- (1) 仙田満『子どもとあそび—環境建築家の眼—』岩波新書 1992
- (2) 平野吉直『「子どもの生活実態等に関する保護者と子どもの調査」報告書』子どもの体験活動研究会 2001
- (3) 深谷和子「最近の友だち関係をめぐる病理」『モノグラフ小学生ナウ 友だち関係 vol.18-2』ベネッセ教育研究所 1998
- (4) 門脇厚司「地域の教育力が育てる子どもの社会力」『社会教育』全日本社会教育連合 2002.5, pp.10-12

「信大YOU遊サタデー」から 「信大YOU遊広場」への進化

那須良寛 信州大学大学院 学校教育専攻 2年

The Evolution from Shin-dai YOU-Yu Saturday to Shin-dai YOU-Yu Plaza

NASU Yoshihiro : Educational Science, Graduate School of Education

「信大YOU遊サタデー」、「信大YOU遊広場」を通して9年間の月日が流れたが、今回、「信州大学教育学部における体験的カリキュラムの創設による学生の経験幅の拡大—『教育参加』『信大YOU遊サタデー』を实践した学生の追跡調査—」と題した修士論文により、これらの成果を明らかにしてきた。

ここではこの修士論文の概要とともに、体験的カリキュラムである「信大YOU遊サタデー」から「信大YOU遊広場」への進化を、今後の指針として記す。

1. 研究の目的

本研究は、「教育参加」「信大YOU遊サタデー」を实践した学生の実践記録や活動レポートの記述分析および卒業後の追跡調査に基づいて、信州大学教育学部における体験的カリキュラムが学生の経験幅の拡大にどのように寄与したのかを究明することを目的とする。

「体験」と「経験」の位置づけは、次のように捉えている。すなわち、体験とは、活動を通して学生が得た、主観的な事実や意識である。それらの体験をより客観的に整理し昇華することによって、経験となる。経験が積み重なり、教師として、人間としての様々な力が備わり活用できるようになっていくことが、「経験幅の拡大」であり、実践的指導力の基礎であると捉えた。

2. 論文の概要

(1) 各章の概要

第1章では、教育における「体験・経験」の重要性を論じ、教員養成における体験的カリキュラムである、フレンドシップ事業の創設について論じた。

信州大学教育学部では、教育実習以外で「子ども達に関わる実践の場」として、平成6年に「信大YOU遊サタデー」が開設された。また、実践的指導力養成の場を設けることを目的として、平成8年に「教育参加」が開設された。

平成9年度文部省は、教員養成学部フレンドシップ事業を政策化した。この事業の趣旨は「学生が種々の体験活動等を通して、子ども達とふれあい、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につける」ことであるが、これに関する活動による学生と子どもの学び合いは効果的なものであると捉えている。全国39大学が工夫を凝らしたフ

フレンドシップ事業を実施しはじめたが、これは「信大YOU遊サタデー」と「教育参加」という信州大学教育学部の取り組みが評価されたことからつながっているものである。

第2章では、「教育参加」の実践について、国立信州高遠少年自然の家での活動を中心に、活動を行った学生のレポートをもとに記述分析を行った。「教育参加」を通じた経験幅の拡大の内実は、A「経験することが重要であることへの認識」、B「自己・他者を理解する契機」、C「体験的な子どもの理解の場」、D「時処位に応じた行動のあり方への反省」、E「初体験後における自己や他者、受け入れ先に対する思い」、F「障害者への受け止め方」の6類型にまとめられることが明らかになった。また、筆者の国立信州高遠少年自然の家主催事業への継続的な参加による考察と関連させることによって、「教育参加」は、教員養成初期段階において、学生の学びや育ちに重要な契機を与える場となり、視野の拡大に大きく貢献しているということを論述した。

第3章では、「信大YOU遊サタデー」を実践することによる経験幅の拡大の様相を明らかにするために、7年間にわたり27事例の実践記録の記述分析をすると共に、その学生の卒業後の追跡調査を行った。その結果、「信大YOU遊サタデー」での体験は、座学中心の授業科目のみでは容易に身につけられない教材研究力、企画・運営力、子ども理解力、コミュニケーション能力等の実践的指導力の基礎を培い、さらに教師の道へ踏み出す第一歩に大きくはずみをもたらす活動であることが今回初めて明らかになった。

このように、7年間の実践記録の分析により、「信大YOU遊サタデー」の成果として、□7年間で約4300人の子ども達と関わりを持つ場を作り上げたこと、□学生が、教官や地域と連携して優れた教育力を発揮して土曜日の過ごし方を提示し地域社会に貢献できたこと、□学生が主体的に子ども達とふれあうことで、学生生活が充実し教師となるための実践的指導力の基礎を養う場となったこと、□「フレンドシップ事業」の先駆けとなり、他大学との交流が深まり今日に継続していること、の4点にあることが導出された。

第4章では、「信大YOU遊サタデー」を実践した本学部卒業生を対象とした追跡調査を行った。各設問で挙げられた内容は、次のように類型化することができる。

「『信大YOU遊サタデー』の活動の中で得たこと」では、企画・運営力、子どもとの関わり方、コミュニケーション能力（スタッフ・仲間）が得られた。「『信大YOU遊サタデー』での経験は学校現場にどのように生かされているか」では、教材開発力（特に総合的な学習・生活科等に関わる）、授業研究の視点、授業における子ども理解に生かされている。「『信大YOU遊サタデー』でどんなことをしておけばよかったか」では、実際の授業を見通した教材研究・授業開発、多様な経験とその深まり（失敗や壁にぶつかって成長すること等）、学生同士の学び合い・交流をもっと深めておきたかったということが明らかになった。「『信大YOU遊サタデー』の実行委員長・実行委員会執行部の経験は、教育活動にどのように生かされているか」については、教員間の連携（チーム・ティーチング、相互理解、意識の浸透）、現場における学校全体を見通した企画・運営力、リーダーシップ・先導する力に生かされている。

このように「信大YOU遊サタデー」の活動経験が、今の教育活動でも実践的な分野において大変役立っていることが分かる。意識付けという面でも十分な効果を上げている。

また、この調査では、「信大YOU遊サタデー」により得られる学びについて「近年、教員養成課程において実践的指導力を培うことが強く求められていますが、あなたは教育現場を経験された立場から、『信大YOU遊サタデー』を通して、どのようなことを学びましたか。」という質問をした。その結果は図1のとおりである。

肯定的回答が多かった項目として「信大YOU遊サタデー」の実践により、機能した学びとして判断できるのは、B、C、D、F、J、K、L、Mである。これら8点は「5よく学んだ」と「4学んだ」をあわせた数値で、低いもので全体の58%、高いもので全体の93%を示している。これにはYOUサタで保証される力の多様さ、大きさに驚かされる。

肯定的回答が少なかった項目として「信大YOU遊サタデー」の実践により、機能しなかった学びとして判断できるのは、A、H、Iである。Aにおいては、「5よく学んだ」を選択した者が全くなく、「4学んだ」で全体の31%である。Hにおいては、「5よく学んだ」があるものの「4学んだ」と合わせて31%である。Iにおいては、学んだという回答が17%で、「2学んでいない」、「1全く学んでいない」の回答が65%を占めている。

このような極端な結果が表れた理由としては、Hのような内容を含めた講座がほとんど開かれておらず、全く開講されなかった期もあり、むしろYOUサタ以外の場で学ばれているといえる。また、AやIといった技能は講座の種類によって違いが現れてしまうこと、このような深いねらいまでは持ち合わせていないことなどが考えられる。また、教員の経験年数の多い被験者ほど、YOUサタの活動では当てはまらないというように捉えている。

課題としては実際の専門教育の技能、教育に関わる技術は、まだまだである。実のところ学びが保証できる過程に行き着くまでの講座の準備やねらい等が短絡的であり、身につかないという事実もある。この点を切り口にして、自己の能力や可能性を引き出していく一助としてより意識することが重要である。

しかし、「信大YOU遊サタデー」は、あくまで上記13項目全ての学びを保証する方向性を持った活動ではないということを了承いただきたい。ひいては、13項目全てを保証できる活動など皆無であるといえる現在、「信大YOU遊サタデー」は、8項目を保証できるというすばらしい点がある。

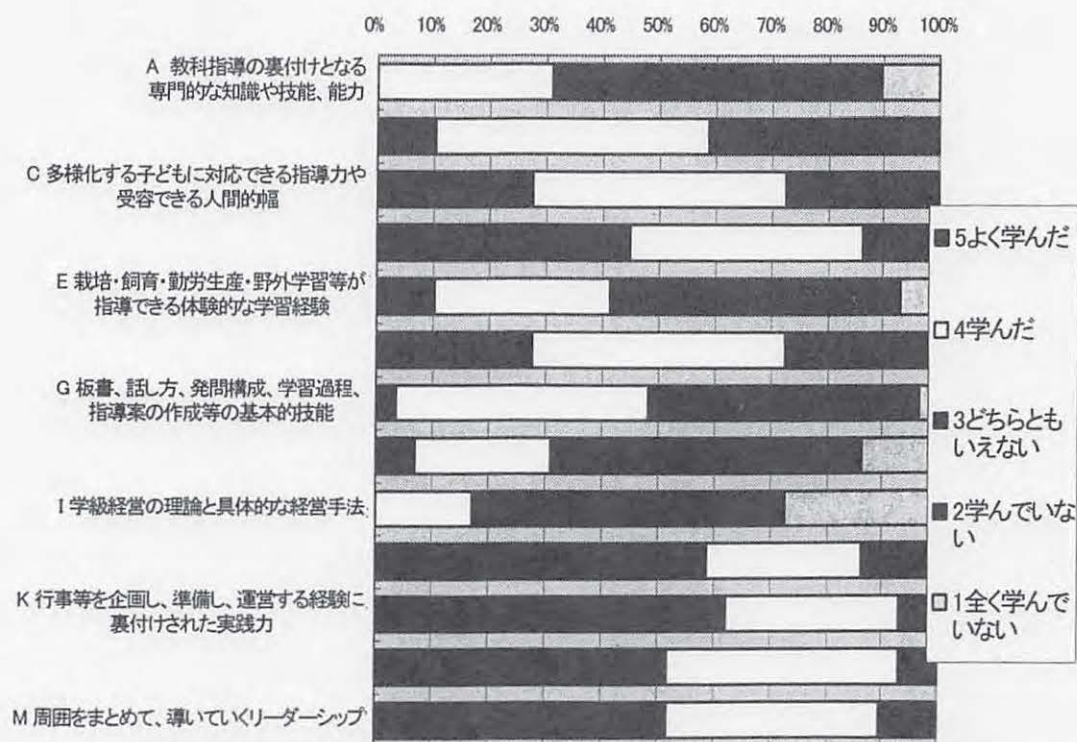


図1 実践的指導力として学生時代に学んだもの

(2) 学生の経験幅の拡大

これまでの教員養成カリキュラムは、教員養成に不可欠の学びの場であったが、受身的な授業が圧倒的に多く、教員養成の授業であっても、実際に臨床経験を用いることはなかなかなかった。これは、教科専門科目と、教職科目・教科教育法科目を対立的に捉えていることも一因にあった。これに対して、教育実習という臨床経験の現場が与えられていたが、この限られた期間では、子ども達と生活をともにしてふれあいながら相互理解を深めていく場として、また教員志望の学生達にとって確かな学びを確保できる場として、決して十分ではなかった。これらをバランスよく併せ持つ環境作りをする必要があった。

それに対して「信大YOU遊サタデー」は、教員養成カリキュラムの成果を実践に生かす場、自己表現の場であり、達成感を得る場である。学生達の自主的・主体的な活動により、これまで満たされなかった臨床経験を存分に行う場でもある。これにより、図2に示すように、教員養成カリキュラムと教育実習がともに昇華された型が体験的カリキュラムとして位置づけられ、信州大学教育学部はその代表格が「信大YOU遊サタデー」であるといえる。



図2 教員養成カリキュラムが充実する型

「信大YOU遊サタデー」の成果と、実践による学生の成長を論じてきたが、これからの教員養成カリキュラムを編成する際に「信大YOU遊サタデー」のような体験的カリキュラムを重要視していくべきである。

すでに周知のように、全国教員養成系大学・学部のフレンドシップ事業の旗上げ（政策化）からはや6年が過ぎた。様々なフレンドシップ事業が展開されているが、真によいカリキュラム作りを行っていくには、学生が授業の縛りにだけ翻弄されるのではなく、自己を改革し、あるべき自分を創造していける場を提供してほしい。これは、大学側と学生側の心の通い合い、「フレンドシップ」によってのみしか実現できないものだからである。

本研究では、経験幅の拡大というキーワードをもとに分析を行ってきた。これは、「人間力」、「教材開発力」、「授業組織力」につながる種々の力の養成である。

子どもに寄り添う「人間力」は、活動の中で、子どもとどのように関わっていくかを試行錯誤しながら学び、考えていくことで身につけていく力であると捉える。

子どもの学びを引き出す「教材開発力」は、「教育実習」のみでは、一度きりの挑戦であった教材研究を、自己を充実させる「信大YOU遊サタデー」等の活動を通して練磨される力であると捉える。

子どもと教材を結んで学びを成立させる「授業組織力」は、子どもと学びをつなげる、実際に「人間力」と「教材開発力」をつなげて、どのような場を作っていくかという大変重要なこと、それが「授業組織力」であると捉える。

体験的カリキュラム（特に「信大YOU遊サタデー」）には、これら3点を養成するための要素が多く含まれる。

学生が、自主的・主体的に取り組むことを前提とした体験的カリキュラムは、実践的指導力の養成に役立つといえる。

また、経験幅の拡大は自己という器の成長であり、そこから溢れ出す力であり、そこに蓄積した体験が昇華され経験となり、積み重なって力を生み出すということで、実践的指導力の基礎を養う段階で重要なひとつの成長の形でもあるといえる。

経験幅の拡大に作用しているものは「きっかけ」であり、体験的カリキュラムを学生が実践することにより、多くの学びが得られ、成長していくきっかけとなるといえる。

3. 「信大YOU遊広場」への進化

「信大YOU遊広場」は、体験的カリキュラムの趣旨を継承した活動である。「社会体験実習」という授業科目に生まれ変わり、「信大YOU遊サタデー」の1日みの講座制の活動とは一線を画した、長期的・継続的な活動を行うことを通して、地域との連携を高めながら、学生たちの手により変貌を遂げてきた。だが、学生たちが何を思い、何を考えて活動に望むのかという姿勢は変わらずに息づいている。

あくまで、先人の作り上げてきた安定した道を走ろうとせず、日々挑戦を重ねながら突き進んでいく彼らは、「進化」し続けているといえる。

活動の中での自己実現、子ども達とのふれあう姿、地域との連携を大事にして、「信大YOU遊広場」を充実したものにしていていただきたい。

4. 主要参考文献

- 上島清文『「生きる力」支援プログラムによる共育という学び方』、『子どもの生活力がつく「体験的な学習」のすすめ方』山口満 編著 学事出版 1999年 138-157
- 小林辰至「体験の教育的意義及び体験活動の類型化」, 宮崎大学教育文化学部『「体験的学習」をどのように実践するか』 2000年 53-60
- 小林輝行・土井進「授業科目『教育参加』の開設について」, 『信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要』5 1997年 143-149
- 土井進「教員養成カリキュラムにおけるフレンドシップ事業の役割」, 『平成10年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書 地元教育機関と連携した「教育参加」の実践』（第3集）信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター 1999年 105-107
- 土井進「教育実習による学生の成長」, 『講座教師教育学Ⅱ 教師をめざす 教員養成・採用の道筋をさぐる』学文社 2002年 65-78
- 那須良寛・土井進・谷塚光典『「教育参加」における学生の体験内容の分析—国立信州高遠少年自然の家での活動レポートから—』, 『教育実践研究』（信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要）3 2002年 117-126
- 濁川明男「現職にある卒業生は、教員養成課程カリキュラムをどう振り返っているか」第61回国立大学教育実践研究関連センター協議会教育実践・教師教育部門資料 2002年
- 谷塚光典・土井進・東原義訓「臨床経験科目『教育参加』における学生の体験内容」, 『信州大学教育学部紀要』104 2001年 23-34

「ものづくり」で拓くフレンドシップ事業の実践

— 「小学生のための技術教室」1999～2002の取り組みを振り返って—

森山潤 信州大学教育学部生活科学教育講座

1. はじめに

筆者の研究室(技術教育研究室, 以下 本研究室)は, 中学校技術科の学習指導を中心に, 「技術とものづくり」, 「情報とコンピュータ」に関わる教育方法について教育・研究を行っている。本研究室に所属する学生は, 中学校技術科の教員や, ものづくりや情報の教育に強い小学校の教員を目指している者が多い。彼らの「学び」は, 技術科の教員免許の取得に関わる授業科目の履修が中心とはなっているが, それらの学習経験だけでは生きた教材研究, 子ども理解の場としては不十分である。そこで本研究室では信大 YOU 遊サタデーやYOU遊広場の場を借りて小学生を対象とした「ものづくり」の講座を開催し, 社会的な活動の中で, 生身の子ども達と関わりながら, 教師としての実践的指導力を形成する実践を試みている。本報告では, 本研究室が1999年から2002年までの4年間に取り組んだ「ものづくり」を中心とするフレンドシップ事業の実践を振り返り, 教員養成における臨床体験の意義について若干の考察を試みることにする。

2. 「小学生のための技術教室」における題材と実践

2-1 「作ろう!遊ぼう!電流イライラ輪!」 1999/5/22

「電流イライラ輪」は, 使い捨てカメラのコンデンサを利用し, 針金のコースにはめ込んだワッカを動かし, ワッカが針金に接触するとフラッシュが光るおもちゃである。原理は単純であるが, フラッシュやコンデンサの仕組み, 簡単な電気回路の構成, のこぎり, きり, げんのう等の木工具の使用方法などを学ぶことができる。まず, 市内のカメラ屋を巡り, 中古の使い捨てカメラを回収してまわった。教材研究ではカメラを解体し, コンデンサに繋がる配線の位置を確認し, 安全にその端子をカメラの外に引っ張り出す方法を工夫する必要がある。また, 土台となる部分の加工を途中までしておくことで, 時間の短縮と基礎的な工具体験とを両立させることにした。当日, 子ども達は, 針金の形やワッカの自由に工夫し, 短時間の講座の中で作品を完成させることができた。本実践はその後, 岡谷市青少年育成会・岡谷市教育委員会が主催する「子どもフェスタ in OKAYA "遊び・仲間・未来"」からの依頼も受け, 出張YOUサタとしても参加した(写真1)。



写真1 「電流イライラ輪」

2-2 「昔の楽器、うなり木をつくろう！」 1999/5/22

「うなり木」は世界各地の遺跡から発見されている最古の楽器の一つである。構造は単純で、木や骨から成形した一枚の板と紐からできており、もともとは、先祖との交信や、悪霊退散、邪気払いなどに、使用されていたと考えられている。教材として見ると「うなり木」は、製作が簡単な割に、大きな音が出て、意外性がある。また、小刀などの使い方を習得することができると共に、様々な形や装飾を工夫することができる。教材研究では、適切な小刀の使い方をどのように指導するかに焦点を当て、持ち方、材料の保持の仕方、指の使い方などの指導方法を検討した。当日は、松本キャンパスの屋外で子ども達はめいめいにオリジナリティ溢れるデザインに挑戦していた(写真2)。

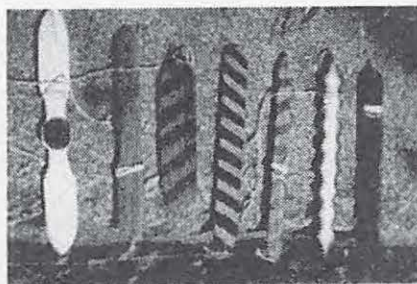


写真2 「うなり木」

2-3 「工作名人！親子でゲタ作り！」 1999/11/7

「ゲタづくり」は、ブロック状の木材をノミ、ノコギリ等を用いて切り落とし、鼻緒を取り付けてゲタを製作する題材である。しかし、ゲタの大きさにかなうブロック状の材料を入手するとなるとコストの問題がある。そこで本実践では、安価なキリの集成材をはぎ合わせたブロック材を準備した。また、教材研究では鼻緒の取り付け方法に苦慮し、市内のゲタ職人を尋ね、直接指導を受けた。本題材のもう一つの特徴は「親子」でものづくりに取り組む点である。2つの下駄を親子で協力して製作することではじめて、1足の下駄が完成する。写真3のように、父親が子どもに工具の使い方を指導する場面や、二人で作業を分担する場面、協力して鼻緒を取り付ける場面など、微笑ましい光景を数多く目にする事ができた。この光景が目にとまり、本実践の写真は日本経済新聞長野版にも掲載された。

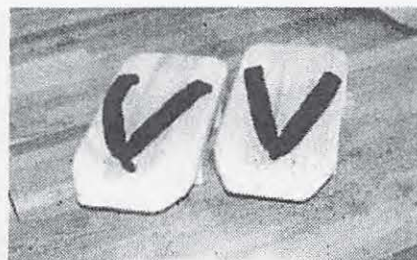


写真3 「親子でゲタ作り」

2-4 「竹とんぼ作り」 2000/5/27

竹とんぼは昔ながらの工作であり、子ども達にとっても馴染みのある題材である。竹とんぼの製作には大きく分けて、竹材から羽を切り出す方法、竹材以外の羽状の材料を準備する方法がある。竹材からの削りだしでは、翼の角度を強くしたり、調整することが必ずしも容易ではない。そこで本実践では、竹材から翼を削り出した後、翼の中央部分をローソクで熱し、柔らかくなったところで角度を付ける方法を選択した(写真4)。当日の実践では、小刀の使い方を中心に子ども達に指導し、時間の許す限り、試作を繰り返させた。また、体育館で実践し

たこともあり、子ども達の製作した竹とんぼはめいめいに「天井」高く飛び上がっていった。

2-5 「溶かして作る合金キーホルダー」

2000/5/27

「溶かして作る合金キーホルダー」の題材は、中学校技術科の金属加工に関する実習教材として広く用いられている。融点が100度前後という極めて低温で液状に変化する低融合金を用いた簡易鋳造を行うものである。融点が低いので、カセットコンロとアルミナベの組み合わせで簡単に溶かすことができる。材料は、減摩合金のインゴットで5000円程である。鋳型は、厚めのコルクにカッターで切り抜いて製作する。その後、切り抜いたコルクをベニヤ板に挟み、溶けた合金を流し込めば、様々な形状のキーホルダーを製作することができる。この時、空気の抜け道を上手く切り込んでおくことが重要である。当日は、親子で製作に取り組んでもらったところ、お父さんやお母さんの方が必死になって、子ども達と競うように作品に取り組んでいた。造形の余地が大きいいため、非常にバラエティに富んだ作品が仕上がった。また、はじめて金属が溶ける様子を見た子ども達には、驚きを持って鋳込み作業に取り組んでいた(写真5)。



写真4 竹とんぼづくり

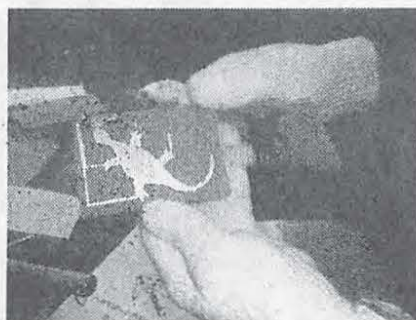


写真5 溶かして作る合金キーホルダー

2-6 「簡単チョコマカ・ロボットコンテスト！」 2000/11/11

「簡単チョコマカ・ロボットコンテスト」も、中学校技術科では「ザリガニ・ロボット」の名で知られる教材を改良したものである。コンテストのルールは、コートに設置された相手ゴールに、ボールに見立てたフィルムケースを時間内にたくさん押し込んだものの勝ちとした。フィルムケースにはおもりが入っており、重いものほど、1回のシュートで高得点が得られる。製作したロボットは、紙コップに模型用のモーターを2つ、下向きに貼り付け、押しボタン式のコントローラーを接続したものである。紙コップに取り付けたモーターの軸を正・反転させることでロボットが前進・後退・左右に回転する。紙コップには、厚紙で「腕」を取り付け、相撲取りのような格好で、フィルムケースを押しながら進む。本実践では、午前中に製作2時間、午後に2リーグの総当たり戦と、両リーグ優勝チームによる決勝戦、3位決定戦等からなるコンテスト(ゲーム)を実施した。製作では、紙コッ

プへのモーターの取り付け、回路の半田付け、「腕」のデザインと取り付けなどを 2 時間でこなした。半田づけの場面では、お父さんやお母さんが活躍するものの、「もう一本、手が足りない」という時に、子ども達の出番となった。子ども達は、コントローラーで動くロボットの製作だけでも十分満足していたが、午後のゲームではさらに、時間内におもりの入ったフィルムケースを何個も相手ゴールまで運ぶなど、大変な盛り上がりを見せた(写真 6)。



写真 6 簡単チョコマカ・ロボットコンテスト

2-7 「ほんとに聞こえる!? 簡単手作りラジオ」 2001/12/8

「ほんとに聞こえる!?簡単手作りラジオ」も、中学校技術科の電気に関する学習に時々用いられる題材である。本題材は、乾電池等の電源やトランジスタ等の増幅回路を持たない「クモの巣コイル」を用いたシンプルなラジオである。そのため、アンテナ線には 10m 近いコードが必要となる。本体は「クモの巣コイル」と検波用ダイオード、周波数を調整するためのバリコン等を配線し、ラグ盤に半田付けしていく。これらの部品を 100 円ショップで購入したプラスチックケースに配置し、完成である。多くの子ども達が始めて半田付けを体験したが、右手に半田ごて、左手に半田を持って、「右・左・左・右」の順で簡単な練習を数回行ったところ、比較的スムーズにスキルをマスターしていった。ラグ盤への細かい接合作業では、学生のアシスタントに素子の固定を手伝ってもらいながら作業を進め、最終的には全員が「ほんとに聞こえる」手作りラジオを完成させることができた。校舎 5F からアンテナ線を垂らし、無事に放送が受信できた時には、多くの子ども達が歓声の声を挙げていた(写真 7)。



写真 7 ほんとに聞こえる!?簡単手作りラジオ

2-8 「溶かして作るペットボトルキーホルダー」 2002/12/7

「溶かして作るペットボトルキーホルダー」は、環境教育や高校の化学等で取り扱われることのある題材である。まず、ペットボトルを細かく刻みなべに入れる。この樹脂をコンロにかけ、攪拌しながら熱を加えると、しだいに溶解していく。溶解した樹脂をクッキー等の型に流し込むと成型することができる。この時、樹脂と同程度に熱したクリップを入れ込むことでキーの取り付け部分ができる。その後、ポスターカラー等で色をつけ、油性ニスで仕上げると完成である。もう一つの方法として、細かく切った樹脂をホットプレートを用いて低温で熱すると平板状だった樹脂が収縮し、小さく丸まっていく。この丸まった樹脂を様々な形の針金に通していくことでも、簡単にキーホルダーを作ることができる。本実践では、木工室に2種類のブースを設置し、子ども達が2種類のキーホルダーを作ることができるようにした。本実践はYOU遊広場の1週間前に、長野県技術・家庭科研究会下高井・飯水地区主催「創造ものづくり教育フェア・親子ものづくり教室」でも実践したことにより、当日は極めてスムーズに講座を展開することができた。子ども達は、カラーリングや針金の形を工夫する等して、個性的な作品を仕上げていった(写真8)。本実践では最後に、完成した作品をデジタルカメラ付携帯電話で撮影し、画像を研究室に配信し、印刷した作品画像を修了証書に添付するという作業も始めて取り入れた。



写真8 溶かして作るペットボトルキーホルダー

3. 本実践を通じた学生の「学び」

以上のように、本実践に用いた題材は、紙や木材、金属やプラスチックなどの材料加工を中心にロボットやラジオなどの回路構成まで、多種多様な「ものづくり」の形態が取り上げられている。しかし、いずれの講座にも共通するのは、講座の準備から開催に至る周

的な教材研究と材料・道具の準備をチームワークで乗り越えていく一連のプロセスである。逆に言えば、このようなプロセスの中にこそ、「臨床的な学び」の体験が埋め込まれているといえる。そこで本節では、各講座の開催までのプロセスを追いながら、学生のオーセンティックな「学び」を振り返ってみよう。

3-1 題材との出会い

講座の準備は、まず題材を選定することから始まる。「過去に取り上げた題材は利用しないこと」を前提に、学生は主体的にインターネットや研究室に蓄積されている書籍、雑誌等に目を通し、「面白そう」な題材の候補を見つけ出す。「面白そう」な題材がいくつか見つかり、リーダーとなるスタッフを中心に、題材の絞り込みを行う。この時、スタッフは①子どもの発達段階、②子どもの生活経験、③製作に必要な材料、工具等の準備、④製作に必要な時間と作品の完成度との兼ね合い、⑤個性や工夫が生かせる余地、⑥子どもの意欲や関心、⑦子どもにとっての新しさ、学びの要素などの観点から議論する。このような題材選定の手続きや視点は、教育現場においても大変重要な問題であり、ここに第一の「学び」を見ることが出来る。

3-2 失敗だらけの試作

題材選定の次の段階は、題材の試作である。まず最低限の材料や道具をそろえ、試作を開始する。この段階での学生は、教材情報として手に入れた資料通りに作業すれば、難なく製作ができると考えている。しかし、ほとんどの場合、試作は大失敗に終わる。光らないイライラ輪、コントロールの聞かないロボット、黒こげのペットボトルキーホルダーなど、失敗品が研究室に溢れていく。喜んでいるのは教官だけで、学生の間には暗い雰囲気漂っていく。多くの学生はここで一端、くじけそうになるが、試作を繰り返していくうちに、だんだんとコツが飲み込めてくる。2週間ほどかけて失敗を続けていくと、ついに最初の成功例が生み出される。「資料の通りだと思っていたけど、やってみないと何事もわからない」、「もし試作していなかったら、これと同じ失敗を当日の講座で子ども達にさせてしまうことになる。そう考えるとゾッとする」といった感想が聞かれる。授業する前に教師が題材を試作することは、教育現場では当たり前のことではあるが、その重要性を身をもって、もがきながら体験することに、貴重な第二の「学び」がある。

3-3 子どもの目線に立った教材研究

度重なる試作の失敗の中、講座の開催自体あきらめかけていた学生が、一つの試作を成功させると、突如として子どもの視点に立つことができるようになる。学生自身が苦勞して、失敗を繰り返したことで、子どものつまづきを予想することができるのである。「この部分は加工の難易度が高すぎるので、ここまで事前に加工しておいてあげて、残りの作業を楽しんでもらうことにしよう」、「この部分は間違えやすいので、スタッフが必ず子ども達全員のサポートに付こう」といった難易度の調整に関わる支援の方策を考える。一方で、「この部分はきっと子ども達も楽しめるだろうし、新しい材料(工具)体験だから、加工する量を減らして体験してもらうことにしよう」や「多少難しくても、せっかくだから親子で協力して取り組む場面を設定しよう」などのように、子ども達の体験や興味を広げる場面も検討されていく。こうした議論を蓄積し、講座の「テキスト」として編集していく(図1)。「テキストさえあれば、子ども達が自宅でも材料と工具をそろえれば製作ができるようにしよう」という目標を掲げ、周到な作業が続いていくのである。このようなプロセスを

通して学生は、「この場面では、子ども達はきっとこのように反応するはず」という考え方を自然と身に付け、「子どもの目線」に立った生きた教材研究を展開するようになる。ここに第三の「学び」の姿を見ることが出来る。

しょうがやい
小学生のための技術教室 1

つく あそ
作ろう! 遊ぼう!
でんりゆう わ
電流 イライラ輪



1999年6月22日 (土)

信州大学松本キャンパス
信州大学教育学部技術教育研究室編

2、フラッシュのひかるしくみ
—電気をとめる魔法のバケツ「コンデンサ」—

フラッシュはなぜ光るのでしょ
うか?
それは、みなさんのいつも使
っている、はけいこうとうと同
じように、フラッシュにも、電
気が流れているからです。





カメラのなかには、小さな電流
が入っています。その電流から、
電気をもらって、フラッシュは、
「ピカッ」と光ります。

でも、小さな電流の方だけ
では、あんなにまぶしく、「ピカッ」
とフラッシュは光りません。
フラッシュを「ピカッ」とまぶ
しく光らせるために、左がわの
部分のように、いろいろな部品が
使われています。

小さな電流の方を、大きな力
で出すように、力をためる
部品があります。

それが、このバケツの部品です。
これを「コンデンサ」といいます。
コンデンサは、電気をためるは
たらきをします。そして、いつ
かある 部品といっしょに使うこ
とで、大きなときに、電気の力を
とることができるのです。

コンデンサは、電気をためておくバケツのようなものです。水は、ホウロウはとあ

が流れていてもその力は小さいでしょう。
でも、それを、電圧がたまって押し流せば、大きな力を生み出すことができるので
す。そして、ためて、それを一気に押し流すことで大きな力を出すことができました。



電気をためるバケツ。コンデンサが、バケツのくちけをしめます。コンデンサとい
うのはバケツのなかに、電気をためる部品があります。その電気をいっしょに出す
ことで、フラッシュを「ピカッ」とまぶしく光らせることができるのです。
電気をためることを「充電」で、ためた電気を流すことを「放電」といいます。



カメラのフラッシュは、コンデンサにじゅうでんでんをため、いっしょに放電すること
によって光ります。

そして、イライラ輪は電流と電圧を利用したおもちゃです。

4、作り方

危険のしるし
必ず電線を断つときや電線をはきかきするとき、十分注意し、
安全を確保してください。

用意の道具

1. 紙、接着剤、カッター
2. 電池
3. 電線とワイヤレス

1. 紙、接着剤、カッターで
穴をあけよう。



ボックスのフタの裏にワイヤレスの穴をあ
け、紙を貼る。穴をあけるときは、紙を
貼る。穴をあけるときは、紙を貼る。

2. 紙、電池とワイヤレスをくっつけて、シ
ートを作ろう。



紙を貼った紙、紙と電池をくっ
つける。

このとき、コンデンサははまっています。電
気は、電池の電流が流れるように、ワイ
ヤレスの穴から紙の裏に流れて、ワイ
ヤレスの穴から紙の裏に流れて、ワイ

4. 電池ボックスの一面に紙を貼り
付けよう。



電池ボックスの一面に紙を貼るため
に、紙を貼る。

5. 土台のための紙を貼ろう。



紙を貼るために、紙を貼る。紙を貼る
ために、紙を貼る。

6. 紙を貼った紙と電池の穴を全部で
まっつけよう。



紙を貼った紙と電池の穴を全部で
まっつける。

7. 土台を紙でくっつけよう。



土台を紙でくっつける。

5、遊び方

電圧が低いと電流が流れる。電圧が高くなると電流が流れる。電圧が高くなると電流が流れる。
電圧が高くなると電流が流れる。電圧が高くなると電流が流れる。電圧が高くなると電流が流れる。



6、やってみよう

もっとも楽しい電流イライラ輪は作れないから、みんながそれぞれで、自分
だけの電流イライラ輪を作ろう。
例えば、電池の電流を流して、電圧が高くなると電流が流れる。電圧が高くなると電流が流れる。
電圧が高くなると電流が流れる。電圧が高くなると電流が流れる。電圧が高くなると電流が流れる。



図1 教材研究によるテキストの製作(電流イライラ輪の例)

3-4 分業と協業による講座づくり

講座の開催は、一人のリーダーのみによって成し遂げられるものではない。最初は中心となる学生1, 2名で試作が始まるものの、研究室で失敗を繰り返していく中で、自然と他のメンバーが集まり、議論が行われる。課題が明確になると、「じゃあ、ちょっと道具をホームセンターで買ってくるね」、「家に使えそうな材料があるから明日もって来るね」といった会話が生まれてくる。講座が近づいてくると、テキスト作成、材料準備、事前加工、掲示物作成など、作業を分担したり、協力したりしながら、準備が進められていく。スタッフの意識には、多少の温度差(特に、学年の壁による遠慮)があることも事実だが、リーダーのがんばりにメンバーが応え、メンバーの協力にリーダーが奮い立つという繰り返し

の中で、しだいに気持ちが一つにまとまっていくのである。教育現場では、時として学級王国といわれ、教師間の連携が問題にされることがある。しかし、実際には、全ての教職員がそれぞれの個性を生かしながら、生徒を見守り、高めていくよう教育活動を協力して展開することが重要である。本実践での「一人ではできないことも、みんなで協力すればできる」という学生の実感は、このような教師間のチームワークの大切をリアルに「学び」取ったことを物語っている。

3-5 「ものづくり」とコミュニケーション

講座の当日、いよいよ子ども達を向かえ、これまでの準備の成果の全てを発揮する。この段階での学生の意識は、いかにして子ども達とコミュニケーションを図り、より共感的に体験を共有できるかに向く。この時、子ども達と学生の間「ものづくり」の題材が介在することで、自然とコミュニケーションの機会が成立する。「ここはどうするの?」、「先生、ちょっと押さえて…」といった子ども達からの言葉。「今、学校でどんなこと、はやってるの?」と、手を動かしながらの会話。同じ場所で同じ素材に向かいながら、同じものを見つめ、時として協力しながらの作業は、一種のアイスブレイキングとして機能する。また、練習を重ねてきた学生がその成果を子ども達の前で披露する時、ちょっとしたアドバイスで子ども達が難しい作業をやり遂げた時、両者の間にはお互いへの尊敬と愛着が増していく。「ものづくり」という題材の良さは、このようなプロセスにおける「人と人との関わり」に見ることができる。このような子ども達との関わり方は、教育現場での授業スキルに直接、結びついているものである。

3-5 「ものづくり」の喜び

もう一つ、「ものづくり」の題材の良さは、作品が完成した時の喜びや達成感にある。ものづくりでは、その作業を子ども達が一緒に楽しむことと同時に、完成した時の喜びや達成感を共有することができる。これは感動の共有でもある。「やったー!」、「できた!」、「動いた!」、「聞こえた!」。これらの子ども達の言葉に、学生はそれまでの準備の苦労を忘れ、共に心から喜び、次なる講座への新たな意欲が沸き起こってくる。そもそも、こうした「感動」が共有できるかどうか、教師としての最も大切な資質が隠されている。また、子ども達の達成感に触れることによって、次の講座の準備に違いが生じてくる。簡単すぎる題材では子どもは感動しない。難しすぎる題材では自力で達成したという気持ちは沸き起こらない。作品が子どもにとって価値あるものでなければ当然感動も生じない。学生達は、「子どもが欲しいと思うものを、苦労の末、完成させること」に、感動の最低条件があることを見出していく。こうした体験から学生は、感動する主人公は子ども達であって、教師はそれを演出し、支援する役割を担うものであることに気づくのである。



写真9 感動の共有

(失敗の末、難しいデザインの合金キーホルダーの鑄込みに成功したところ)

4. まとめと今後の課題

以上のように、「ものづくり」で拓くフレンドシップ事業の実践は、学生に教材研究、テ

イームワーク、コミュニケーション、感動の共有、そして支援者・コーディネータとしての教師の役割といった点で臨床的な「学び」の場を提供している。実際、卒業生からは、新任時代に本実践での経験が大変役立ったとする感想をよく耳にする。中には、その学生が本実践で取り扱った題材全てを中学校での実践に採用したケースも少なくない。

教師の実践的指導力には複雑に絡み合う多くの側面が含まれているが、土井ら(2002)¹⁾の考え方に基づけばそれは、①子どもに寄り添う「人間力」、②子どもの学びを引き出す「教材開発力」、③子どもと教材を結んで学びを成立させる「授業組織力」と捉えることができる。このいずれの能力の形成に対しても、本実践、あるいは本学におけるフレンドシップ事業での取り組みは大きく貢献するものである。そしてまた、これらの活動そのものが本学の理念である「臨床の知」を実現する重要な方策として位置づけられる。まさに、「地域社会に主体的にコミットし、他者や事物とのいきいきとした関係や交流を保つ」場としてのフレンドシップ事業の意義は大きいといえよう。

しかし、少なくとも本実践には今後の展開に向けて以下のような課題が考えられる。第一に、研究室の活動としての位置づけの検討である。本実践では、研究室以外のスタッフも積極的に参加してもらえよう配慮していたものの、他の有志による講座からは、若干毛色の違う集団であるように理解されがちであった。また、本研究室でも、ゼミ活動という意識が強すぎる学生の場合、フレンドシップ事業本体の運営に消極的な場面が少なからずあったのではないかと想像される。研究室というフレームワークを持って取り組む場合、その研究室の教育・研究内容が反映されることで、より教科性の強い講座を開催することになる。研究室を中心とした講座がある程度増加することは、フレンドシップ事業本体にとっても、特色ある講座を開講する上で、有益である。しかし、全てがそのような講座になってしまうと学生の主体性、積極性、創造性の危機を招きかねない。研究室として取り組む場合でも、学生の主体性や積極性を大切にしながら、その他のゼミ生を「巻き込んでいく」雰囲気醸成が重要であろう。

第二に、学生が本実践での取り組みを、学部授業や教育実習等での「学び」と関連付け、総合化する方策の検討である。講座の終了直後には、体験から学び取った様々な「教訓」が学生の口から止め処なく語られる。しかし、こうした「学び」の成果は、カリキュラムとして必ずしも学部の他の授業と関連づけられているわけではない。現段階では、学生の内面においてそれらが総合化され、「臨床の知」が構成されていくことを期待しているにすぎない。学部での講義、実験・実習で獲得した知識・技能と、教育実習や学校教育臨床基礎で培った臨床経験と、フレンドシップ事業での取り組みが相互に有機的に連携しうる方策を検討する必要がある。例えば、学部4年間の「学び」の成果をポートフォリオ等に蓄積し、各指導教官が学生のポートフォリオを軸に、多様なカリキュラム内の関連付けを促す指導を展開すること等、教員養成カリキュラムの全体的な構造の中で、「理論」と「実践」の統合を図ることが重要であろう。

これらの問題について今後の課題として、経験を積み重ねながらより良い実践の構築を目指していきたい。

付 記

本実践の様子については、本研究室の Web ページ「信州大学教育学部技術教育研究室」

の「教育実践のページ」にて紹介している。参考にされたい。

URL: <http://gikyou08.shinshu-u.ac.jp/>

謝 辞

最後になりましたが、本実践をはじめ、フレンドシップ事業の実施・活動に主体的・積極的に取り組んだ全ての学生諸君，並びに懇切なるご指導と心温まるご支援を賜りました本学教育実践科学講座教授 土井 進先生に，ここに記して厚く御礼申し上げます。

文 献

1)土井進・谷塚光典(2002)「教科専門科目」と「教職専門科目」を結ぶ「臨床経験科目」の体系的構築による教員養成カリキュラムの活性化,信州大学教育学部 学部長裁量経費による研究プロジェクト報告書「実践的指導力の育成を目指す教員養成カリキュラムのあり方」,信州大学教育学部, pp.1-9

「臨床の知」と「臨床経験」

—「臨床経験」を「知」にまで高めるには—

山口恒夫 信州大学教育学部教育科学講座

はじめに

「信大YOU遊サタデー」から発展した「信大YOU遊広場」も2年目を迎えた。数年前に学生の自主的な活動としてスタートした「信大YOU遊サタデー」は、現在では文部省（現 文部科学省）も推奨する「フレンドシップ事業」として学部の教員養成プログラムにしっかりと位置づけられるようになった。「フレンドシップ事業」とは、周知のとおり、教員養成系大学・学部の「学生が子どもたちと触れ合い、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身に付けられるよう、宿泊触れ合い活動や理科実験教室などの機会を設ける等の取り組み¹⁾」を指し、全国の教員養成系大学・学部に広がっている活動である。強い「教員志向」を持って入学してくる多くの教育学部学生にとって、早い段階から子どもと触れ合い、教員の職務に参加したいという希望と、大学・学部側の「実践的指導力の基礎」の育成の期待が合わさった結果ともいえよう。

地域社会やそこに生活する子どもやその親と関わる活動を学生のボランティアな活動として行うことと、大学に認知された学修活動の一部として実施することの差はどこにあるのだろうか。教員の資質能力の形成において、実際の教育現場に関わり、生きた子どもと触れ合うことはどのような意味を持つのだろうか。近年、教員養成プログラムにおいて、「実践的指導力の基礎」を養う各種の体験的学修の場が提供されるようになってきた。本学部でも、「教育参加」「学校教育臨床演習」「教育実習」等の科目が用意され、教育実践への観察参加や臨床経験の機会は格段に増えている。

ところで筆者も、かれこれ十数年前、学生の誘いに乗って、「教育周辺問題探検隊 ひつじ雲」という妙な名前の自主的活動グループの活動に参加した（「指導教官」という立場ではなく、一人の「隊員」として）ことがある。このグループは、その名称が示すとおり、学校教育の“周辺”に位置する場で生きている子どもたちと触れ合い、そこから見える「教育」や「子ども」の姿を語り合うことを意図していた。長野県精神保健センターで行われていた「不登校」の子どもの会（「ありんこの会」）や「不登校」児童・生徒の親の会に定期的に参加したり、病院の小児科に入院している子どもへのボランティア活動を行ったり、東京の夜間中学、教護院（現在では、児童自立支援施設と呼ばれる）、少年院、院内学級、インターナショナル・スクールなどを訪問したこともあった²⁾。

当時は筆者も若かったこともあって、時間の許す限り、学生とともに議論し、活動に参加した。そこには懐かしい貴重な体験もあれば、苦い思い出もある。どの体験も自分の教育学研究や教育思想形成の基底に沈澱し、かけがえのない経験となっている。少年院を訪

¹文部省『平成9年度 我が国の文教政策』1997年。

²「教育周辺問題探検隊 ひつじ雲」の活動については、同グループが編集発行した『りえぞん』Vol.1（1988年）、Vol.2（1989年）に掲載されている。また、活動の一部については、

問した帰りの電車のなかで、少年院に収容されている少年たちが黙々と作業に取り組んでいる姿を「外部」の人間として見ることはできなかつた自分たちを振り返って語ることは持ち得ないもどかしさから、皆が疲れはて押し黙っていたのをいまでも鮮明に思い出すことができる。

ちなみに、このグループに当初参加していた学生の中で現在教員になっているものは一人もいない。卒業後、大学院に進学し、現在は情緒障害児短期収容施設でカウンセラー（臨床心理士）として働いている者、言語療法士（ST）を養成する専門コースに進学し、現在病院の言語療法士として働いている者、卒業後看護専門学校に入学し、看護師になった者など、多様な道をそれぞれ歩んでいる。教員にはならなかつたとはいえ、誰もが「人間のケア」という仕事に携わっていることはたしかである。ただ、どの「隊員」にも共通していたのは、教育学部での学修になにかしらの違和感を抱いていたということかもしれない。学校の教室の中だけの事柄に焦点づけられた学部の講義や授業、「健全」で「健康」な子どもだけを想定している教育研究に飽き足らなかつたということもできよう。彼らは、既成の学校の授業や指導の方法・技術、学習指導要領を前提としてその内容をいかに子どもたちの興味・関心に即して教えるかといったことに焦点づけられた教員養成学部特有の「息苦しさ」に辟易し、大学生活に多かれ少なかれ不適応を起こしていたこともたしかである。

「子どもは学校以外の多様な場で生きている。」—学校教育の周辺に生きる子どもの姿から、「教育」という営みの「中心と周縁」を浮かび上がらせる活動は、教育学研究者のひとりとしての筆者にとっても魅力的であった。

本稿では、そのような経験をも想起しつつ、本学部の理念である「臨床の知」と体験的な学修の関係について二つの視点から若干の考察を加えてみたい。

第1は、「フレンドシップ事業」に象徴される体験型のプログラムをどのように語るかという問題である。「体験」や「経験」が「知」になるためには、「体験を語りうるもの」にすることと、ワインをおいしくするためにはにコクと風味を与えるための熟成が必要なように、「体験」を「熟成させること」が必要である。そこには、相反するベクトルを持った力が働く。「体験」はそれが生成する場でのみ感じ取られる「鮮度」がいのちであるのに、それは「語る」こと、「語られる」ことによって現場に立ち会ったものにしか分からない「鮮度」が失われてしまうということである。「体験」を蓄積可能なものにするには、それをどのように語ればよいのだろうか。

第2は、体験型の学修が教員養成プログラムの中に位置づくものであるとすれば、「目的」と「結果」をどのように区別するかという問題である。「フレンドシップ事業」が学生の自主的な活動であれば問題はない。そこでの「体験」がいつ、どのように結実するかについて自覚的である必要は、学生にとっても教官にとっても、それほど大きくはないからである。しかし、それが学部の教育プログラムのなかに正規に位置づけられるとすれば、そのプログラムを提供する側は、何を目的とし、体験的学修が教員としての資質能力の育成とどのように結びついているかに自覚的である必要がある。この問題は他の「臨床経験」についても同様にあてはまる。

日垣 隆『信州教育解体新書』（信濃毎日新聞社）1991年にも紹介されている。

1. 「教育」を語ることの難しさ

子どもたちと触れ合うことは掛け値なしに楽しい。そこには前もって用意できない「出会い」がある。大人にはなかなか見られない独創的な発想や「あっ」と思わせる子どもらしい視点から学ぶものも多い。子どもならではの素朴な質問に自分の理解の浅さに気づかされもする。

しかし、「子どもと触れ合う」ことはただちに「子どもの気持ちや行動を理解する」と繋がるわけではない。どんなに経験豊富で技術的にも優れている医師が、よき患者の理解者であるとは限らないのと同じである。臨床教育学を提唱した河合隼雄も「ある個人(子ども)に対して接近してゆくと、いろいろ思いがけないことが起こるが、いわゆるベタベタの関係になってしまうと危険が生じる。と言って距離をとって離れていると何事も起こらない」と述べているように、教育の専門家は子どもと適切な関係(距離感)を持てるように訓練していなくてはならない³。まして、子どもとの触れあいという現場に立ち会う臨場感に埋没して満足してしまえば、「フレンドシップ事業」の目的でもある「実践的指導力の基礎」も身に付くはずがない。

平成11年度にスタートした学部改革の理念は「臨床の知」である。「臨床の知」の特徴は、「客観的観察者」の立場をとらず、物事が生起する固有の状況に主体的にコミットしつつ、一般的・普遍的な原理に還元されない「原則」を導き出すことを目指すところにある。それは、「一般性・普遍性」に対する「個別性・具体性」、「物事や人間を分析的に距離をとって対象化する“冷ややかなまなざし”」に対して「相手との相互作用(interaction, transaction)による“関係性”の構築」を本旨とする理念である。この「臨床の知」の理念は、学部の教員養成プログラムに大幅に取り入れられることとなった「臨床経験」(「教育参加」「学校教育臨床演習」等)や「フレンドシップ事業」の一環としての「信大YOU遊広場」と一見重なるところが大きいように見える。しかし、小林輝行元教育学部長も指摘しているように、これらの経験重視の諸々のプログラムや科目群が単なる体験に終わってしまえば、それは20世紀の初頭に展開されデューイによって痛烈に批判された進歩主義教育運動と同根との誹りを免れない⁴。子どもの興味にのみ依拠した単なる体験や作業活動は、我が国の戦後教育改革運動の中でも「はいまわる経験主義」と揶揄されたように「知」に高まることはない。

では、「臨床経験」や体験的プログラムが「知」への転換を果たすには何が必要なのだろうか。「体験主義」にも陥らず、かといって「科学主義」の呪縛にも縛られない第3の道はどのように切り拓かれるのだろうか。その答えを探す糸口は、「教育を語ることば」にあるように思われる。なぜなら、体験や経験から何かが学ばれることは確かだとしても、それが各個人のなかでことばにならない感動や満足感に終始してしまえば、それは「大学」という知的活動を本来的使命とする場では不十分だからである。体験はそれ自体「私的」なものである。それは文字どおり体験の場に居合わせた者だけが共有できる「閉じたこと

³ 河合隼雄『臨床教育学入門』(岩波書店)1995年 18ページ。

⁴ 小林輝行「教育における臨床経験・作業活動」「信大YOU遊広場」実践記録編集委員会編『第1期「信大YOU遊広場(プラザ)」の実践—“臨床の知”を求めて—』(2002年)所収。デューイによる「進歩主義教育批判」については、杉浦 宏編『アメリカ教育哲学の展望』(清水弘文堂)1981年を参照。

ば」である。この「閉じたことば」を「劈(ひら)かれたことば⁵⁾」にしてはじめて他者にまで届き、他者と共有しうる「公共的な知」として蓄積され、理解されるものとなる。

だが、「教育」を語ることばは固有の困難性につきまといわれている。社会学者の見田宗介は「教育のことばの困難」について次のように書いている。少し長いが、そのまま引用しよう。

「青物」の魚、サバやイワシは、都会では「大衆魚」として「高級魚」から区別されたりしているけれども、漁師たちはこの「青物」こそをとりわけ美味の魚としているという話をきいたことがある。ただ、青物は「足が早く」て、流通の過程であまりに急速にその生鮮度をおとしてしまうと。(中略)

伊東(信夫)の報告(雑誌『ひと』(1986年4月号)所収:引用者註)は、ダイちゃんという「自閉症児」が「伊東先生のツルッパゲ!!」「伊東先生シンジマエ!!」という大音声、大悪態を突破口として、言語能力と関係能力を一気に拡大してゆくというてんまつである。ダイちゃんは班作りの時、はじめは、やさしくしてくれる女の子の多いグループを選んで入ったが、だんだん渡りあるいて、結局クラスのいちばんの悪ガキ連のグループに安住した。あの解放への突破口を入れ知恵したのは、その悪ガキ連である。「ツルッパゲ」「シンジマエ」という言葉自体に、よい言葉もわるい言葉もありはしない。この時のこの悪態は、「わくわくした心に裏打ちされたことば」だから、最高のことばなのだ、伊東はいう。

「子どもってほんとにすばらしい」「先生ありがとう!」といった、ことばだけをとりだしてみると気恥ずかしくなるようなことばも、このような記録の中では生きている。これらのことばは、それが思わず生みおとされるその固有の場所の中では、それぞれに一回かぎりの、真実のことばなのである(そうでないことももちろんあるが、そうであることも一生に一度はあるのだ)。同時にこのような鮮度の高いことばは、言葉がその中で生きている<関係の海>の中から言葉として釣り上げられたとき、たとえば「子どもはすばらしいのです」という観念の一般性として抽出され、流通するとき、それは「教育くさい」言説として、あのわたしたちをへきえきさせる特有のにおいを発散しはじめる。魚が魚でなくなる時に「魚くさく」なるのとおなじに。

教育にかぎったことではないが、教育の現場でことばが輝いたり踊ったりするとき、その輝きや躍動は、その時その場に立ち会った子どもたち、大人たちの中でだけ新鮮に生きつづけられる。それが他人に伝えられ、後世に残されようとするとき、過酷な変質を開始するのだ。大事なことばだからしまっておいた方がいいのだよ、とでもいうように。

子どもをめぐることばは愛のことばとおなじに、とりわけ足が早いのだ。

『世界』の特集の巻頭で高史明が、「大きな命の優しさを信じて欲しい」という題で、思いをのべている。このことばは高史明が、高史明に固有の生きられた苦痛の中で、たしかにつかみとってきたことばである。このように人がことばをたしかにつかみとる、という事実にたいして、わたしは素直でありたいと思う。一けれどこの言葉が高史明という存在をはなれて持ち回られるなら、たちまち歯の浮く美辞にすぎなくなる。まして「教育」という場などで、固有の存在の裏打ちもなしに大人がこれを説教したりするなら、どんな善意でされようとそれは、「やさしさ」とか「命」とか「信じる」という言葉にたいして、シラケルことしかできない世代を増殖させるだけである。教育のことばの困難が、ここにあると思う。

「教育」をめぐる言説の、避けがたい退屈さともいべきものが、一方にある。けれど現場の記録の中には、ほんとうに心魅(ひ)かれるものがある。この落差は、「教育」という関係の様相^{アツ}は(「の」の誤植と思われる:引用者註)なにか固有の原質に根ざすものなのか。それともこの落差をふみこえる思想の文体を、わたしたちが、まだ見いだしていないだけなのか。

(見田宗介「言説の鮮度について」朝日新聞「論壇時評」(1986年3月28日付)より)

ここに引用した見田宗介の文章は17年経った現在でもその「鮮度」を落としていない。そして、見田が最後に投げかけている問いに対する答えを、最新の教育研究も見出したとはいえないと思われる。しかし、「教育のことば」がいかに困難性を持っているからといって、教育研究者や教育実践に携わる者が恣意的なことばに頼ってしまっている授業研究においても児童・生徒理解においても合理的な知見は得られないままであろう。

ここで「鮮度」を保った「教育のことば」について詳述する余裕はないので、そこへ接近する手がかりをひとつだけ示唆することにとどめる。それは、教育関係の生成する場に立ち会う者が相手との相互交流を反省的に想起する方法としての「プロセス・レコード (process record)」の活用である。「プロセス・レコード」は、看護教育において広範に用いられている臨床教育の方法である。看護学生は、病態や看護についての基本的学修を終えてから実際の患者のベッドサイドにつく看護実習にはいる。この初期の看護実習で看護学生はどのようにしたら患者と関わりを持てるかということに戸惑ったり、大きな壁を感じる人が多い。患者をケアするという事について「頭」では理解したつもりでも、実際のベッドサイドでは「患者さんに受け入れられた」とか「ケアできた」と実感できることはほとんどない。そのような場合、指導者が用いるのが「プロセス・レコード」である。「プロセス・レコード」では、患者に実際に関わったのちに「関わりの過程」を想起し、記録する。記録される内容は、看護者としての自分の発言や行動、患者の発言や行動、様子、そして自分自身の発言や行動がどのような根拠で行われたのか等々であるが、それらを時間系列にしたがって記録したものが「プロセス・レコード」である。「プロセス・レコード」を作成する際重要なのは、「ケア」の内容を事後的に想起するという事であり、自分の言動の根拠を細部にわたって記述することである。「プロセス・レコード」を見ると、初めは何も見えず、何も関われなかった看護学生がしだいに患者さんとの関係が持ち得るようになっていく過程が浮かび上がる。「経験」は流れ去る。この流れ去ろうとする「関係」を押しとどめ、言語化することによって、状況にコミットしつつ、行為の中で反省 (reflection in action) できる「反省的実践者」に向かって歩み出すことができるのである。

「教育」に関わる者、どんなに経験を豊富に積んだ教師でも、「信大YOU遊広場」での子どもとの触れ合いに悩む教師の卵も、この自らの「言動の根拠」への問いかけを忘れてはならないと思う。

2. 教育の「目的」と「結果」を区別すること

最近の大学改革の動向を見ていると、「教師の教えたがり」が目につく。大学は研究機関であると同時に、教育機関でもあることを忘れてはならないということは事実である。とりわけ、マーチン・トロウの分類を用いて⁶、「ユニバーサル・アクセス段階」に入った高等教育では、大学における教育の質が大学評価の重要な指標となるということも一般的には妥当性をもつ。しかし、学生の授業評価とともに授業のシラバスを詳細に書き、ホームページ上に公表することを奨励するような動きを見ると、大学も初等・中等教育と同質の

⁶ マーチン・A・トロウ、天野郁夫訳『高学歴社会の大学』（東京大学出版会）1983年、及びトロウ、喜多村和之編訳『高度情報社会の大学—マスからユニバーサルへ—』（玉川大学出版部）2000年を参照。

教育機関になってしまったのかと思わざるをえない。ここでは、大学における教育の質の向上について詳述することは避けるが、大学の講義型の授業において一ましてゼミナールや演習において一、小中学校の授業のように、目標をあらかじめ設定しておいて、15週の授業期間にその目標がどのくらい達成されたか否かを評価するのは、教師と学生による「新たな知を生み出す共同作業」という大学における研究教育の原点を見失っているように思えてならない（とは言いながら、「新書」を難しいという学生には、「専門書」は別世界の存在のように思えるのも頷けるところではあるが）。いずれにせよ、大学の教師の「教えたがり」志向は、「教える」という行為と「学ぶ」という営みが因果関係的につながるものだという思いこみがあるのではないか。教育学部では、「教えた」という事態がどのようなことなのかを根源的に問う姿勢が教師の側にあってほしいと思うのだが。

かつて、作家の阿刀田 高が興味深いエッセイを書いていた。その一節を紹介しよう。

中学1年のとき英語の先生から、「ブラザーに相当する日本語はないんだよ」と教えられた。

日本語では兄か弟である。英語のブラザーは、そういう区分をしない概念であり、必要があればエルダーとかヤングとか形容詞をつける。言語は世界を切り取る作業であり、その切り方はそれぞれの言語によって異なる、という教えだったろう。（中略）

が、同級会で、この話をしても、往年の悪がきどもはだれ一人として覚えていない。（中略）そう、あの先生は結果としては、

—私一人にだけ教えたことになるんだな—という視点についてである。聞いたのはクラス全員であったが、受け止めたのは私一人であり、それが私にとってとても有益な、切実な教えになった、ということである。

授業であれ講演であれ（ラジオやテレビにもありうることだが）多数を相手にメッセージを送るとき、その見せかけとはうらはらに、結果としてたった一人が対象であったというケースは、思いのほか多く実在しているのではあるまいか。（中略）

送り手がすばらしい見解を発信し、多数の受け手がそれを受信する、それがよいコミュニケーションであることは論をまたないけれど、そればかりではあるまい。大勢の中のたった一人にだけ届くようなメッセージが、特殊であるがゆえに、かけがえのない価値を持つことがある。その受け取りかたは、送り手も考えていないレベルにまで飛躍したり、ときには誤解をともなってさえあるのだが、受け取る側の事情もプラスされて、大きな効果をもたらすわけである。（以下略）

（阿刀田 高「たった一人の聴衆」朝日新聞「夜の風見鶏」（1995年11月26日付）より）

ここに語られていることは、コミュニケーションの関係や教育関係における「出会い」の契機についてであり、そのような予見できない偶然の「出会い」を伴う「細くて見えにくいコミュニケーション」の重要性である。ボルノーが指摘しているとおり、「出会い」は準備できない。が、目的的で、意識的な教授よりも一層大きな変化を学び手にもたらすのである。

「教育」という行為がコミュニケーションの様式であるとする、阿刀田の言うように、メッセージの送り手としての教師が前もって用意したプログラムにしたがって展開するだけの講義や授業は、何の「出会い」も知的飛躍も生じさせることはない。100人以上の受講者をかかえる大講義に「たった一人の聴衆」が生まれる余地があることを忘れては

ならないと思う。筆者も、大学1年のときに受講した「憲法学」の講義中、日本国憲法第9条について話していたとき、H教授が突然「これ以上は勘弁して下さい！」と言って講義を終えてしまった姿に、学問に対する「誠実さ」を感じたという経験がある。このような経験は誰にもあるだろう。大学の講義でいちばんよく覚えているのは、教官の「脱線」だったということ。

このような「出会い」が大学での知的交流には不可欠である一方、教育の「目的」と「結果」の区別もまた重要である。デューイは、『民主主義と教育』の中で、教育の「目的」について、「単なる結果 (results)」と「目的 (ends)」とを区別することの重要性を述べている。「砂漠で風が砂粒を吹き飛ばす。ここにはある結果あるいは効果は存在するが、目的 (ends) はない。というのは、その結果の中には、それに先立つものを完成させたり、成就させたりするものが何もないからである。そこにあるのは、単なる空間的配置換え (spatial redistribution) があるだけである。」⁷ さらに、デューイは次のようにも記している。「目的 (aims) はつねに結果に関係するのだから、目的が問題になっているときに先ず注意すべきことは、課せられた仕事が内的連続性 (intrinsic continuity) をもっているかどうかということである。・・・生徒のほとんど一つ一つの行為が教師によって命令される場合、また、生徒の一連の行為の唯一の秩序が、授業 (lessons) の割り当てや他人の指図から来るものである場合に、教育の目的について論ずることは無意味である。また、自発的な自己表現という名目で、気まぐれな、すなわち、ばらばらな行動を許すことも、同様に、目的を駄目にしてしまう。目的とは、整然と順序づけられた活動、ある過程を次第に完成していくという秩序をもった活動を意味する。一定の時間を要し、その時間の経過の中で累積的に成長していくような活動があるとすれば、目的は、結末 (ends)、すなわち起こりうる終結を前もって予見することを意味するのである。」⁸

デューイが強調しているのは、「目的を持った行動」とは、「行為の終着点を予見」すること、すなわち「対象とわれわれ自身の能力とを、観察し、選択し、配列するための基準をもつ」ことである⁹。

ここには、「臨床の知」は単なる「体験」からは生まれえないという根拠が示唆されている。「体験」や「経験」は何らかの結果を生むにちがいない。それは、阿刀田が言うように、かけがえのない「出会い」をもたらすかもしれない。しかし、それはいわば偶然の「衝突」のようなものである。

「臨床経験」や「信大YOU遊広場」、「フレンドシップ事業」を「知」にまで高めることは、「出会い」と「理知的活動」の間に張られたタイトロープを渡るような、危険な営みであるのかもしれない。

⁷ John Dewey, *Democracy and Education*. 1916. p. 101. ジョン・デューイ、松野安男訳『民主主義と教育(上)』(岩波文庫) 1975年 163ページ。

⁸ Dewey, *Democracy and Education*. pp.101-102.

⁹ Dewey, *Democracy and Education*. p. 103.

第2期信大YOU遊広場スタッフ名簿

No	名前	学年	専攻	所属プラザ							YOU遊フェスティバル		
				0	1	2	3	4	5	6	7	午後講座	係
1	那須 良寛	院2年	学校教育	○	○	○				○			
2	安里 勝人	院2年	心理	○									
3	岩田 哲也	院1年	技術									ペットボトル	会場
4	佐藤 祐輔	院1年	技術									ペットボトル	会場
5	小池 瑞恵	4年	教育実践						○				
6	岡部 桂子	4年	教育実践	○					○			○	
7	小黑 あかり	4年	教育実践	○		○			○			パクパクん	会場
8	鹿子木 愛	4年	教育実践	○	○	○	○						
9	林 美智子	4年	教育実践	○		○					○	○	
10	清水 美香	4年	教育実践	○	○	○			○	○		○	本部
11	上田 暁子	4年	言語	○									
12	町田 竜太	4年	社会	○	○	○			○	○	○	○	本部
13	白井 克典	4年	社会									お米	案内・駐車場
14	西澤 俊輔	4年	理数	○	○	○			○	○		○	会場
15	野口 亮一	4年	理数			○							
16	大原 央之	4年	理数									花火	会場
17	堀内 育恵	4年	理数			○							
18	加藤 信博	4年	生活科学									ペットボトル	会場
19	井上 将宏	4年	生活科学									ペットボトル	会場
20	小林 則雄	4年	地域スポ	○									
21	小島 真知子	4年	地域スポ	○		○			○	○			
22	富山 裕子	4年	障害児	○	○	○	○						
23	永井 小百合	4年	心理臨床	○									
24	山口 真史	3年	教育実践	○					副			新聞気球	受付
25	山本 真望	3年	教育実践	○	○	○			○	○		○	本部
26	篠原 真美	3年	教育実践		○							○	本部
27	西村 崇	3年	教育実践								長	○	本部
28	原 耕平	3年	教育実践								○	○	会場
29	山本 公三	3年	教育実践		○	○			○	○	○	○	本部
30	宮川 幸浩	3年	教育実践							○			
31	西 絢平	3年	教育実践						○	副		新聞気球	案内・駐車場
32	石井 里佳	3年	教育実践	副	○		○			○		新聞気球	会場
33	今村 杏子	3年	教育実践									○	
34	塩崎 淳子	3年	教育実践									運動会	案内・駐車場
35	幸阪 創平	3年	教育実践									新聞気球	案内・駐車場
36	岡山 早春	3年	教育実践									新聞気球	案内・駐車場
37	高橋 由夏里	3年	言語									花火	案内・駐車場
38	塩川 順子	3年	社会	○			○					花火	会場
39	坪野 さやか	3年	社会	○								紙すき	会場
40	島田 綾香	3年	社会	○			○					紙すき	会場
41	山本 恵里子	3年	社会	○		○	○			○		紙すき	会場
42	高橋 和之	3年	理数		副	副						お米	案内・駐車場
43	小川 敦嗣	3年	理数	○			○					さんすう	受付
44	花村 江里子	3年	理数									お米	案内・駐車場
45	花村 尚美	3年	理数	○	○	○			○			花火	受付
46	山崎 哲	3年	理数									さんすう	会場
47	伊澤 貴幸	3年	理数									さんすう	会場
48	門井 誠	3年	理数									さんすう	会場
49	岩脇 悟子	3年	理数									花火	会場

50	田中 千穂	3年	理数										花火	会場
51	野口 陽子	3年	理数										新聞気球	会場
52	萩原 瑞恵	3年	芸術										海の牧場	会場
53	原山 美樹	3年	生活科学	長	○	○		○	○	○	○		運動会	会場
54	田中 慶子	3年	生活科学					○	○	○	○		パクパクん	受付
55	藤岡 恵美	3年	生活科学								長		紙すき	案内・駐車場
56	那須 紋子	3年	生活科学	○		長				○			お米	案内・駐車場
57	中西 千草	3年	生活科学					○						
58	蓼沼 夏子	3年	生活科学					長			○		パクパクん	案内・駐車場
59	谷口 智香	3年	生活科学							○				
60	三浦 康典	3年	生活科学					○	○				ペットボトル	会場
61	吉田 祐紀	3年	生活科学					○	○					
62	藤森 美紀	3年	生活科学										ペットボトル	会場
63	宮尾 さやか	3年	生活科学										ペットボトル	会場
64	出沢 綾子	3年	生活科学										ペットボトル	会場
65	土田 達信	3年	生活科学										新聞気球	会場
66	松田 博美	3年	生活科学	○									新聞気球	会場
67	佐藤 陸恵	3年	生活科学				○							
68	横井 秀太郎	3年	生活科学				○							
69	藤本 晃子	3年	地域スポ		○	○		○	長				運動会	案内・駐車場
70	森田 美保	3年	保体	○	○	○		○	○			副		本部
71	小島 澄	3年	障害児	○	○			副						
72	増田 美和	3年	障害児	○	長	○		長	○	○			紙すき	受付
73	三浦 摩梨伊	3年	障害児										運動会	会場
74	小山 奈多美	3年	障害児										ダンス	案内・駐車場
75	西川 茉希	3年	障害児										ダンス	会場
76	榎葉 美沙登	3年	障害児										ダンス	会場
77	山本 昌美	3年	障害児										ダンス	会場
78	江崎 さやか	3年	障害児					○					ダンス	会場
79	割田 節行	3年	障害児				○							
80	南波 朋美	3年	心理臨床	○				○						
81	平山 司	3年	心理臨床	○				○					さんすう	会場
82	佐々木 美緒	3年	心理臨床				○							
83	米田 尚代	3年	心理臨床				○							
84	三浦 知子	2年	教育実践					○	○			○		
85	前崎 伸周	2年	教育実践					○	○			○	ドッジ	会場
86	高橋 朋子	2年	教育実践		○								花火	会場
87	原 かつ江	2年	教育実践					○	○			○		
88	松土 智美	2年	教育実践									○	ドッジ	会場
89	笠原 千絵	2年	教育実践									○	ドッジ	会場
90	佐志田 英和	2年	教育実践										ドッジ	受付
91	北村 萌	2年	教育実践		○								花火	会場
92	田中 千尋	2年	教育実践		○								紙すき	会場
93	張 薇	2年	教育実践		○								紙すき	会場
94	木村 友香	2年	教育実践	○								○	ドッジ	会場
95	丸山 枝里子	2年	教育実践							○		○		
96	高橋 久恵	2年	教育実践										ドッジ	会場
97	鷺津 智子	2年	教育実践										ドッジ	会場
98	原山 いずみ	2年	言語							○		○	ダンス	受付
99	萩原 美樹	2年	言語							○		○	お米	案内・駐車場
100	菊地 こずえ	2年	言語							○		○		
101	天保 奈津子	2年	言語							○		○	紙すき	会場
102	福田 翠	2年	言語							○		○	ダンス	会場
103	駒村 亜弥	2年	言語							○				

104	芳川 由紀	2年	言語									ダンス	会場
105	加藤 雅也	2年	言語									ダンス	会場
106	田中 裕次郎	2年	言語									ダンス	会場
107	池田 明子	2年	社会							○		宝物	会場
108	石関 千絵	2年	社会	○				○		○		宝物	案内・駐車場
109	阿部 倂子	2年	社会							○		宝物	会場
110	五味 潤 嘉	2年	社会	○								運動会	会場
111	日吉 景子	2年	社会							○			
112	長濱 愛	2年	社会							○		宝物	会場
113	丸山 大輔	2年	社会	○								運動会	受付
114	小原 洋美	2年	社会							○		宝物	会場
115	真鍋 満佐美	2年	社会							○			
116	渡辺 ゆきえ	2年	社会									宝物	会場
117	宮本 里美	2年	社会									宝物	会場
118	田島 理沙	2年	社会							○		宝物	会場
119	白鳥 茉衣	2年	社会									ドッジ	会場
120	佐藤 桂治	2年	理数									ドッジ	会場
121	小林 直木	2年	理数									ドッジ	会場
122	松瀬 裕昭	2年	理数				○						
123	進士 綾乃	2年	生活科学				○						
124	藤田 優子	2年	生活科学					○	○		○	ペットボトル	受付
125	割田 里子	2年	生活科学				○						
126	沖田 幸子	2年	生活科学					○		○		宝物	会場
127	宇良 知子	2年	生活科学				○		○				
128	和田 健太郎	2年	生活科学									運動会	案内・駐車場
129	斎藤 絢三	2年	生活科学									運動会	会場
130	長野 幸恵	2年	生活科学									花火	会場
131	田畑 清吾	2年	生活科学									ドッジ	会場
132	松田 朝子	2年	生活科学									ペットボトル	会場
133	森田 愛	2年	生活科学									ペットボトル	会場
134	鈴木 綾	2年	生活科学									ペットボトル	会場
135	曲 由里子	2年	地域スポ							○			
136	吉田 理史	2年	野外				○			○			
137	世古 じゅり	2年	野外							○			
138	伊達 暁子	2年	野外							○			
139	岩堀 耕平	2年	野外				○			○		お米	受付
140	宮園 佳恵	2年	野外							○			
141	夏井 一智	2年	野外									海の牧場	受付
142	北川 伸尚	2年	障害児	○			○					運動会	案内・駐車場
143	古田 光	2年	障害児									運動会	会場
144	渡辺 久士	2年	障害児									運動会	会場
145	高寺 敦子	2年	障害児									運動会	案内・駐車場
146	熊田 賢人	2年	障害児									運動会	会場
147	麻生 亜希子	2年	障害児					○					
148	武井 恒	2年	障害児					○				運動会	案内・駐車場
149	濱口 真由美	2年	心理臨床	○								運動会	案内・駐車場
150	勝崎 彩子	2年	心理臨床	○								お米	会場
151	仲島 光比古	2年	心理臨床	○									
152	新谷 雅人	2年	心理臨床	○								運動会	会場
153	三島 宏典	2年	心理臨床	○									
154	中野 孝之	卒	保体		○	○		○	○				
155	松山 博一	1年	教育実践									運動会	案内・駐車場
156	渡辺 彩	1年	教育実践									ダンス	案内・駐車場
157	原 絵理	1年	教育実践									お米	案内・駐車場

158	中山 寛子	1年	言語										ダンス	案内・駐車場
159	小田野 紘子	1年	言語										ダンス	案内・駐車場
160	吉澤 あすか	1年	言語										ダンス	案内・駐車場
161	梅牧 歩美	1年	言語										お米	案内・駐車場
162	田中 佳代	1年	言語										お米	案内・駐車場
163	牛丸 光恵	1年	理数										運動会	案内・駐車場
164	野木村 誠	1年	理数										花火	会場
165	松島 裕	1年	理数										紙すき	案内・駐車場
166	斉藤 愛子	1年	心理										運動会	案内・駐車場
167	竹内 史	1年	生活科学										運動会	案内・駐車場
168	神林 彩井	1年	生活科学										運動会	案内・駐車場
169	前崎 春奈	1年	生活科学										パクパクん	案内・駐車場
170	中河 亜実	1年	生活科学										パクパクん	会場
171	岸本 愛	1年	障害児										お米	案内・駐車場
172	松下 和子	1年	心理										ドッジ	会場
173	新田 香織	1年	心理										運動会	案内・駐車場
174	松澤 栄美	1年	生活科学										運動会	案内・駐車場

あとがき

本報告書は、文部科学省フレンドシップ事業推進経費と学長経費の補助を受けて発行することができました。ここに記して感謝申し上げます。

9年目の「信大YOU遊」の活動は、皆様のお力によって無事、大成功で終了することができました。汗と涙を流してがんばった学生の皆さん、参加してくれた子どもたち、そして、いつも陰で支えてくださった教職員の皆様に心から御礼申し上げます。この1年間に学んだ貴重な体験を、10年目の活動に生かしていきたいと思えます。

私事にわたり恐縮ですが、私は急病の手術のため平成14年12月26日～平成15年1月22日まで入院しておりました。その後も2月14日まで自宅療養させていただき、編集委員の皆様をはじめ多くの皆様に多大なご迷惑をおかけしました。ここに深くおわび申し上げます。

これからは健康の有難さと職場に復帰できましたことに感謝し、微力ではありますが、「信大YOU遊世間」の発展のために精進してまいります。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

土井 進

【編集後記】

今回の実践記録は、大変時間のない中で仕上げました。執筆者による書式の不揃いや用語の不統一等があるとは思いますが、ご容赦くださいますようお願い申し上げます。

1年間の活動のなかで、自分自身に問い返しながらい計画を進め、実行し、やり終えたときに得られる充実感とともに、さらなる発展のための課題を個々で見つけ出していたように思います。また先輩方から受け継ぎながらも、新しいものを取り入れ試行錯誤しながら1年間活動をしてきました。そのことをプラザ長中心に報告書にまとめてくれています。

先輩達の思いを受け継ぎながら、今後ますます信大YOU遊広場が発展していくことを願っています。

最後になりましたが、お忙しい中原稿を書いてくださった皆様方に感謝申し上げます。そして、副委員長の池田明子さんはじめ、ともに編集作業に携わってくれた編集委員会の仲間にも心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

(理数科学教育専攻 3年 花村尚美)

今回の実践記録編集にあたって、先輩方や同輩たちのYOU遊広場に対する考えや思いに触れることができ、大変有意義だったと思います。私は編集副委員長という肩書きになっていますが、今年一年、YOU遊広場の活動にあまり参加できなかったのも、どういう活動してきたのか知りませんでした。この編集作業を通して、それに参加した子どもたちの様子や、それを企画実行し、見てきたスタッフの気持ちが分かり、今年、あまり活動に参加できず、それらを知らなかったことを残念に思いました。

実践記録製作に関わることができて、本当に良かったと思います。ありがとうございました。

(社会科学教育専攻 2年 池田明子)

2003 (平成 15) 年 2 月 26 日

<編集委員会>

◎花村尚美 (理 3) ○池田明子 (社 2) 山本公三 (実 3) 萩原美樹 (言 2) 丸山大輔 (社 2)
五味潤嘉 (社 2) 土井進 (教官) 谷塚光典 (教官)

平成14年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書：授業科目名「社会体験実習」
平成14年度学長裁量経費による研究報告書

第2期「信大YOU遊広場（プラザ）」の実践
—“臨床の知”を求めて—

発行日：2003（平成15）年3月20日

編集：「信大YOU遊広場」実践記録編集委員会

発行責任者：土井進

連絡先：信州大学教育学部 〒380-8544 長野市西長野6-ロ

TEL/FAX：026-238-4260

E-Mail：doisusm@gipnc.shinshu-u.ac.jp

印刷：長野若槻園 コロニー印刷

住所 長野市徳間1443

TEL 026-296-1411

原点はここにあります。

やさしさ、たくましさ

“臨床の知”

信州大学教育学部は、学校、家庭および地域社会の諸問題にコミットし、他者や事物とのいきいきとした関係や交流を保つ「臨床の知」の理念を核とした新しい教育体制に生まれ変わりました。